野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書１

粟田遺跡（第10次調査）
三納アラミヤ遺跡（第１・２次調査）
三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次調査）

2006

石川県野々市町教育委員会
野々市町中南部土地区画整理組合

野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書１

粟田遺跡（第１０次調査）
三納アラミヤ遺跡（第１・２次調査）
三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次調査）

２００６

石川県野々市町教育委員会

野々市町中南部土地区画整理組合

野々市町中南部土地区画整理事業地区遺跡分布(平成12年：北から)

三納トヘイダゴシ遺跡　第1次調査区　(東から)

三納アラミヤ遺跡　第 1 次調査区　（南西から）

三納アラミヤ遺跡　第 2 次調査区　（南から）

粟田遺跡（第10次調査）竪穴建物（竪穴状遺構） AW⑽ 2 ～ 8（南西から）

三納アラミヤ遺跡（第 1 次調査）竪穴建物SA⑴ 9・120・121　検出（北から）

三納アラミヤ遺跡（第 1 次調査）遺物集中区SA(1)224　遺物出土状況

三納アラミヤ遺跡（第 2 次調査）　河道SA(2) 1　（北から）

三納トヘイダゴシ遺跡　第 1 次調査区　（南から）

三納トヘイダゴシ遺跡　第 1 次調査区　（北から）

粟田遺跡　溝AW(10)25出土遺物

粟田遺跡　溝AW(10)61出土遺物

粟田遺跡　溝AW⑽75出土遺物

三納アラミヤ遺跡　竪穴建物SA⑴ 9 出土遺物

三納アラミヤ遺跡　竪穴建物SA⑴121出土遺物

三納アラミヤ遺跡　竪穴建物SA(1)120出土遺物

三納アラミヤ遺跡　遺物集中区SA(1)224出土遺物

例　　言

1　本書は、粟田遺跡(第10次)・三納アラミヤ遺跡(第１次・第２次)・三納トヘイダゴシ遺跡(第１次・第３次)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町粟田・三納地内である。

3　調査原因は野々市町中南部土地区画整理事業にともなうものである。

4　調査にかかる費用は、野々市町中南部土地区画整理組合が負担した。

5　調査は、野々市町中南部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。

6　現地調査は、平成11・12・13・14年度に実施した。遺跡名・面積・期間・担当者は下記のとおりである。

平成11年度　粟田遺跡(第10次)　面　積　2,400㎡
期　間　平成11年９月27日～平成12年１月14日
担当者　布尾和史　野々市町教育委員会文化課　主事
永野勝章　野々市町教育委員会文化課　主事

平成12年度　三納トヘイダゴシ遺跡(第１次)　面　積　3,400㎡
期　間　平成12年５月９日～平成12年８月３日
担当者　布尾和史

平成13年度　三納アラミヤ遺跡(第１次)　面　積　1,150㎡
期　間　平成13年７月９日～平成13年11月16日
担当者　布尾和史

三納トヘイダゴシ遺跡(第３次)　面　積　550㎡
期　間　平成13年７月９日～平成13年11月16日
担当者　布尾和史

平成14年度　三納アラミヤ遺跡(第２次)　面　積　1,800㎡
期　間　平成14年９月20日～平成14年12月26日
担当者　布尾和史

7　出土品整理は平成13年度から平成17年度に野々市町教育委員会が実施した。

8　報告書の刊行は平成17年度に野々市町教育委員会文化振興課が実施した。担当は永野勝章(野々市町教育委員会文化振興課　主事)、編集・執筆は布尾幸恵(野々市町教育委員会　臨時職員)が行った。

9　現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでには地元の方々をはじめとして下記の機関、個人の協力を得た。(五十音順、敬称略)

追川吉生、大橋康二、垣内光次郎、柿田祐司、出越茂和、布尾和史、藤田邦雄、増山　仁、村上伸之、(財)石川県埋蔵文化財センター、野々市町中南部土地区画整理組合、野々市町都市計画課、野々市町史編纂室

10　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1)　方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。

(2)　水平基準は海抜高であり、T. P.(東京湾平均海面標高)による。

(3)　出土遺物番号は、遺跡ごとに本文・観察表・挿図・写真で対応する。

(4)　挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。

(5)　土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人　日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。

11　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　経緯と経過 …… 5
　第１節　調査の経緯 …… 5
　第２節　調査の経過 …… 8
　　⑴試掘調査　⑵発掘調査　⑶整理作業・報告書作成　⑷調査体制
第３章　調査と報告の方針 …… 13
　　⑴遺構　⑵遺物
第４章　粟田遺跡（第10次調査） …… 17
　第１節　遺跡の概要 …… 17
　第２節　遺　構 …… 17
　　⑴縄文時代の遺構　⑵古代の遺構　⑶中世の遺構　⑷近世の遺構
　第３節　遺　物 …… 23
　　⑴縄文時代の遺物　⑵古代の遺物　⑶中世の遺物　⑷近世の遺物　⑸その他遺物
　第４節　小　結 …… 25
　第５節　図面図版　遺構・遺物実測図 …… 32
第５章　三納アラミヤ遺跡（第１・２次調査） …… 65
　第１節　遺跡の概要 …… 65
　第２節　遺　構 …… 65
　　⑴縄文時代の遺構　⑵古代の遺構　⑶中世の遺構　⑷近世の遺構
　第３節　遺　物 …… 71
　　⑴縄文時代の遺物　⑵古代の遺物　⑶中世の遺物　⑷近世以降の遺物　⑸その他遺物
　第４節　小　結 …… 73
　第５節　図面図版　遺構・遺物実測図 …… 83
第６章　三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次調査） …… 137
　第１節　遺跡の概要 …… 137
　第２節　遺　構 …… 137
　　⑴古代以前の遺構　⑵中近世の遺構
　第３節　遺　物 …… 140
　　⑴古代以前の遺物　⑵中近世以降の遺物
　第４節　小　結 …… 140
　第５節　図面図版　遺構・遺物実測図 …… 146

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　野々市町の遺跡（１/30,000) …… 3
第３図　試掘地点位置図 …… 6
第４図　年度別調査区位置図 …… 7
第５図　器種分類図(1)古代・中世（１/６）　……14
第６図　器種分類図(2)近世以降（１/６）　……15

粟田遺跡（第10次調査）
第７図　野々市町の中世竪穴状遺構規模 ……28
第８図　遺構分布図（１/500)　……32
第９図　平面図(1)（１/200)　……33
第10図　平面図(2)（１/200)　……34
第11図　縄文・古代遺構全体図（１/500)　……35
第12図　遺構実測図AW(10)20・26・27・48・49・50・51
78・100（１/40)　……36
第13図　遺構実測図AW(10)平行溝群（１/80)　……37
第14図　中世・近世以降遺構全体図（１/500)　……38
第15図　遺構実測図AW(10)２（１/40)　……39
第16図　遺構実測図AW(10)３（１/40)　……40
第17図　遺構実測図AW(10)４・５（１/40)　……41
第18図　遺構実測図AW(10)６（１/40)　……42
第19図　遺物出土状況AW(10)３・６（１/80)　……43
第20図　遺構実測図AW(10)７（１/40)　……44
第21図　遺構実測図AW(10)８～10（１/40)　……45
第22図　遺構実測図AW(10)18・42・43・60・65・66
（１/80、１/40、１/20)　……46
第23図　遺構実測図AW(10)74・82・97・134（１/40)　…47
第24図　遺構実測図AW(10)46・80・83・98・99・110
（１/40)　……48
第25図　遺構実測図AW(10)28・29・52・58・62
（１/40)　……49
第26図　遺構実測図AW(10)56・57・63（１/40)　……50
第27図　遺構実測図AW(10)72・95・122（１/40)　……51
第28図　遺構実測図AW(10)44・45・127（１/40)　……52
第29図　遺構実測図AW(10)24・25・61・75(1)（１/200)　53
第30図　遺構実測図AW(10)24・25・61・75(2)
（１/80、１/40)　……54
第31図　遺物出土状況AW(10)24・25・61・75（１/200) 55
第32図　遺物実測図(1)（１/３）　……56
第33図　遺物実測図(2)（１/３）　……57
第34図　遺物実測図(3)（１/３）　……58
第35図　遺物実測図(4)（１/３）　……59
第36図　遺物実測図(5)（１/３）　……60
第37図　遺物実測図(6)（１/３）　……61
第38図　遺物実測図(7)（１/３）　……62
第39図　遺物実測図(8)（１/３、１/６）　……63
第40図　遺物実測図(9)（１/３）　……64

三納アラミヤ遺跡（第１・２次調査）
第41図　三納アラミヤ遺跡周辺の古代竪穴住居規模 …75
第42図　三納アラミヤ遺跡周辺の古代掘立柱建物規模 76
第43図　遺構分布図(1)（１/1,200、１/400)　……83
第44図　遺構分布図(2)（１/400)　……84
第45図　平面図(1)（１/200)　……85
第46図　平面図(2)（１/200)　……86
第47図　平面図(3)（１/200)　……87
第48図　平面図(4)（１/200)　……88
第49図　縄文時代遺構全体図(1)（１/1,200、１/400)　…89
第50図　縄文時代遺構全体図(2)（１/400)　……90
第51図　遺構実測図SA(2)325（１/40、１/20)　……91
第52図　古代遺構全体図(1)（１/1,200、１/400)　……92
第53図　古代遺構全体図(2)（１/400)　……93
第54図　遺構実測図SA(1)①（１/80、１/40)　……94
第55図　遺構実測図SA(1)②（１/80、１/40)　……95
第56図　遺構実測図SA(1)③・遺物出土状況図SA(1)９
（１/80、１/40)　……96
第57図　遺構実測図SA(1)９(1)（１/80、１/40)　……97
第58図　遺構実測図SA(1)９(2)（１/40)　……98
第59図　遺構実測図SA(1)120・121（１/80)　……99
第60図　遺物出土状況SA(1)120・121（１/80、１/40) 100
第61図　遺構実測図SA(1)４・５・132（１/40)　……101
第62図　遺構実測図SA(1)14・20・127・138・149・157
（１/40)　……102
第63図　遺構実測図SA(1)２・３・22・25・26・28～31
・70・90（１/80、１/40)　……103
第64図　遺物出土状況SA(1)131（１/200)　……104
第65図　遺構実測図SA(1)131（１/40)　……105
第66図　遺物出土状況SA(1)224（１/80、１/20)　……106
第67図　遺物出土状況SA(2)１（１/200)　……107
第68図　遺構実測図SA(2)１（１/40)　……108
第69図　中世遺構全体図（１/1,200、１/400)　……109
第70図　遺構実測図SA(2)205(1)（１/100)　……110
第71図　遺構実測図SA(2)205(2)（１/40)　……111
第72図　遺構実測図SA(2)119・120（１/100,1/40)　…112
第73図　近世遺構全体図（１/1,200、１/400)　……113
第74図　遺構実測図SA(1)250・251（１/200)　……114
第75図　近代以降遺構全体図(1)（１/1,200、１/400)　…115
第76図　近代以降遺構全体図(2)（１/400)　……116
第77図　遺構実測図SA(1)６（１/80)　……117
第78図　遺構実測図SA(1)225・226（１/100,1/40)　…118
第79図　遺物出土状況SA(1)225・226・242（１/200) 119
第80図　遺物実測図(1)（２/３、１/３)　……120
第81図　遺物実測図(2)（１/３）　……121
第82図　遺物実測図(3)（１/３）　……122
第83図　遺物実測図(4)（１/３）　……123
第84図　遺物実測図(5)（１/３）　……124
第85図　遺物実測図(6)（１/３）　……125
第86図　遺物実測図(7)（１/３）　……126
第87図　遺物実測図(8)（１/３）　……127
第88図　遺物実測図(9)（１/３）　……128
第89図　遺物実測図(10)（１/３）　……129
第90図　遺物実測図(11)（１/３）　……130

第91図　遺物実測図⑿(1/3) ……131
第92図　遺物実測図⒀(1/3) ……132
第93図　遺物実測図⒁(1/3) ……133
第94図　遺物実測図⒂(1/3) ……134
第95図　遺物実測図⒃(1/3) ……135
第96図　遺物実測図⒄(1/3、1/1) ……136

三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)
第97図　地籍図との対比状況 ……143
第98図　遺構分布図(1)(1/1,200、1/400) ……146
第99図　遺構分布図(2)(1/400) ……147
第100図　平面図(1)(1/200) ……148
第101図　平面図(2)(1/200) ……149
第102図　平面図(3)(1/200) ……150
第103図　平面図(4)(1/200) ……151
第104図　古代以前遺構全体図(1)(1/1,200、1/400) 152
第105図　古代以前遺構全体図(2)(1/400) ……153
第106図　遺構実測図ST(1)1・ST(3)29(1/40) ……154
第107図　遺構実測図ST(1)6・30(1/100,1/40) ……155
第108図　遺構実測図ST(1)20(1/100) ……156
第109図　中近世遺構全体図(1)(1/1,200、1/400) …157
第110図　中近世遺構全体図(2)(1/400) ……158
第111図　遺構実測図ST(1)8・9・33・ST(3)1
(1/40) ……159
第112図　遺構実測図ST(1)7・8・11(1/100) ……160
第113図　遺構実測図ST(1)平行溝群(1/100) ……161
第114図　遺物実測図(1)(1/3) ……162
第115図　遺物実測図(2)(1/3) ……163
第116図　遺物実測図(3)(1/3) ……164

表目次

第1表　合併後の町村名対応表 ……1
第2表　野々市町の遺跡 ……2
第3表　野々市町中南部土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財調査一覧表 ……8
第4表　粟田遺跡(第10次調査)遺物観察表 ……30
第5表　野々市町の中世竪穴状遺構一覧表 ……27
第6表　三納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)
遺物観察表 ……79
第7表　三納アラミヤ遺跡周辺の古代遺跡消長表 ……74
第8表　三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)
遺物観察表 ……145

図版目次

粟田遺跡(第10次調査)
図版1　AW⑽2～8検出
図版2　AW⑽2・48～51断面、AW⑽2完掘、
AW⑽2・3遺物出土状況
図版3　AW⑽3～6断面、AW⑽5完掘、作業状況
図版4　AW⑽8～10・18断面、AW⑽5～8完掘、
作業状況
図版5　AW⑽42・134遺物出土状況、AW⑽28・43・60・
74断面、AW⑽60・74完掘
図版6　AW⑽29・52・56・58・62・122断面、AW⑽122
遺物出土状況
図版7　AW⑽24・25・61・72・75断面、AW⑽25・61・
75完掘
図版8　遺物写真(1)
図版9　遺物写真(2)
図版10　遺物写真(3)
図版11　遺物写真(4)
図版12　遺物写真(5)

三納アラミヤ遺跡(第1・2次調査)
図版13　SA(1)調査区北半・南半検出
図版14　SA(2)325遺物出土状況、SA(1)①～③完掘、
SA(1)9検出・遺物出土状況
図版15　SA(1)9・120遺物出土状況・断面、作業状況
図版16　SA(1)120・121完掘、SA(1)120遺物出土状況、
SA(1)4・121・132・138断面、SA(1)4床面
図版17　SA(1)2・131・SA(2)1断面、SA(1)224・SA(2)1
遺物出土状況、SA(1)2・3・131・SA(2)1完掘
図版18　SA(2)119・120検出、SA(2)119・120・205断面、
SA(1)119遺物出土状況、SA(2)119・120・205完掘
図版19　SA(1)6・251・226断面、SA(1)226・SA(2)完掘、
SA(1)226遺物出土状況
図版20　遺物写真(1)
図版21　遺物写真(2)
図版22　遺物写真(3)
図版23　遺物写真(4)
図版24　遺物写真(5)
図版25　遺物写真(6)
図版26　遺物写真(7)
図版27　遺物写真(8)

三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次調査)
図版28　ST(1)検出、ST(3)完掘
図版29　ST(1)1・9・倒木跡群断面、ST(1)6遺物出土状
況、ST(1)6・30完掘、作業状況
図版30　ST(1)33・ST(3)1断面、ST(1)7・8・平行溝群
①・③・ST(3)1検出、ST(1)33完掘、ST(1)8掘
り下げ
図版31　遺物写真(1)
図版32　遺物写真(2)

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

野々市町は、石川県のほぼ中央に位置する。本書で取り上げる粟田遺跡･三納アラミヤ遺跡･三納トヘイダゴシ遺跡は、野々市町の南部にあたる粟田地区、三納地区に所在する。これらは手取扇状地扇央部に立地し、現況は宅地・商業地と水田が広がる平坦な地形であるが、これは近代初頭に行なわれた耕地整理と近現代の土地開発によるもので、それ以前は手取川とその支流によって形成された細長い島状の微高地が点在し、その微高地上に集落が展開してきた。このことは各時代における遺跡の立地からも確認できる。

第２節　歴史的環境

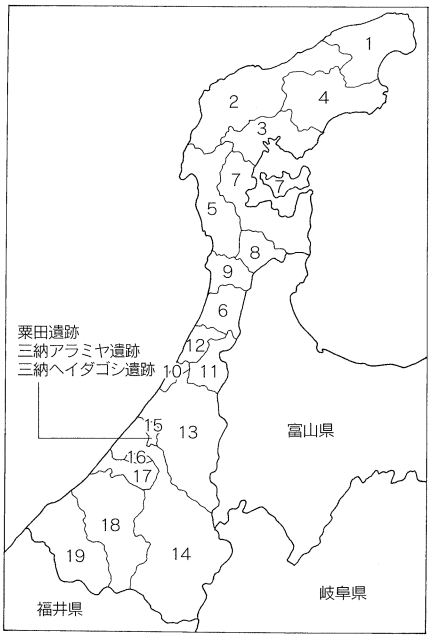
粟田遺跡・三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡は、縄文時代から近世にかけての遺跡群である。周辺は近年、土地区画整理事業等に係る発掘例が増え、諸々の成果が挙がっている。

手取扇状地を形成した手取川は、当初、東接する富樫山地寄りであった流路が徐々に西南方向へ遷移したことが知られる。その動きは時代・時期ごとの遺跡分布の検討からも確認されており、流路の移動後に、人間の活動適地となるまでの時を経た後、人々の生活の舞台となった。そして残された「人間の活動痕跡」＝遺跡は、発掘調査が行われることでわれわれの知るところとなる。

野々市町域における最も古い人間活動の痕跡は、縄文時代後期前葉後半にあたる気屋２式の土器が出土した押野大塚遺跡で確認される。後期中葉前半以降になると、扇状地扇端部の湧水地帯では御経塚遺跡や金沢市チカモリ遺跡、米泉遺跡などの集落遺跡が形成される。一方、扇央部付近では、少量の土器や打製石斧の出土する富樫館跡ノダ地区・清金アガトウ遺跡・上林新庄遺跡などとともに、多量の打製石斧が出土して円礫を母岩とする石斧製作関連資料の確認された粟田遺跡など、明確な居住施設を伴わない、短期的な土地利用の痕跡が確認されている。野々市町中南部地区の各遺跡からも、後期から晩期の土器片や、それに伴うと見られる打製石斧が数点ずつ出土する例が多く見られた。

こうした扇端部の湧水地帯における集落と、その周辺部での短期的な活動痕跡という遺跡群の立地と性格の結びつきは、縄文時代晩期下野式頃まで継続する。

縄文時代晩期末の長竹式期から弥生時代中期前葉は当地域で



第１図　遺跡の位置

旧市町村名		合併後の名称	No.
珠洲市		－	1
輪島市		輪島市	2
鳳至郡	門前町		
	穴水町	鳳珠郡穴水町	3
	能都町	鳳珠郡能登町	4
	柳田村		
珠洲郡	内浦町		
羽咋郡	富来町	志賀町	5
	志賀町		
	志雄町	宝達志水町	6
	押水町		
七尾市		七尾市	7
鹿島郡	能登島町		
	中島町		
	田鶴浜町		
	鳥屋町	中能登町	8
	鹿西町		
	鹿島町		
羽咋市		－	9
河北郡	内灘町	－	10
	津幡町	－	11
	高松町	かほく市	12
	七塚町		
	宇ノ気町		
金沢市		－	13
松任市		白山市	14
石川郡	鶴来町		
	河内村		
	鳥越村		
	吉野谷村		
	尾口村		
	白峰村		
	美川町		
	野々市町	－	15
能美郡	川北町	－	16
	寺井町	能美市	17
	辰口町		
	根上町		
小松市		－	18
加賀市		加賀市	19
江沼郡	山中町		

第１表　合併後の町村名対応表

遺跡数が減少する時期にあたる。晩期の大集落遺跡であった御経塚遺跡も長竹式期にいたると遺構・遺物の量は減少する傾向をみせ、この時期を最後に集落は一旦廃絶されるようである。一方で扇央部付近では遺物量が豊富な白山市乾遺跡が存在するが、継続期間は短く、ほぼ長竹式期の内に廃絶してしまう。

弥生時代前期と中期の柴山出村式期は、野々市町域を含む手取扇状地では、押野大塚遺跡や御経塚シンデン遺跡・御経塚遺跡ツカダ地区・粟田遺跡・上林遺跡など、土器片が少量散布する遺跡が知られるのみとなり、その一方で沖積地の小河川沿いでは白山市八田中遺跡や金沢市矢木ジワリ遺跡など土坑群や定量の遺物が出土する遺跡が見られるようになり、以後の初期農耕社会における遺跡立地の先駆けをなす。

手取扇状地から沖積地にかけては、島状微高地の間の低地部を流れる河川や埋没河川が網の目状に存在する。そうした河川に沿って遺跡群が分布するようになるのが弥生時代中期後半以降であり、当初は沖積地、後期後半にいたると扇状地でも遺跡が分布するようになる。こうした遺跡群の動きは、沖積地や河川沿いの低湿な場所における、初期水稲耕作の開始と展開を反映したものと考えられる。

野々市町域では、中期後半の集落としては押野タチナカ遺跡が知られるのみである。後期に入ると遺跡数は増加の傾向を見せ、高橋川・伏見川流域で、押野ウマワタリ遺跡・押野タチナカ遺跡・横川・本町遺跡・高橋セボネ遺跡・扇が丘ゴショ遺跡、十人川・安原川流域では、御経塚遺跡ツカダ地区・御経塚遺跡デト地区・御経塚オッソ遺跡・二日市イシバチ遺跡・長池ニシタンボ遺跡などが、小河川流域を単位とする遺跡群を形成する。

弥生時代終末期・古墳時代初頭を経て古墳時代前期に入ると、遺跡数は減少する傾向を見せる。手取扇状地周辺では、扇端部付近の標高８メートル付近のラインにほぼ沿うように遺跡が並ぶ傾向にある。御経塚シンデン遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭の集落と古墳時代前期の墓域が検出される遺跡であり、扇端部では該期の中心的な遺跡である。また同時期の集落として扇央部では小規模ながら竪穴建物が検出された上新庄ニシウラ遺跡が知られている。後に、御経塚シンデン遺跡では古墳時代前期の前方後方墳・方墳からなる古墳群の墳丘を破壊して、古墳時代後期の集落が形成されている。一方、扇央

No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期
1	粟田遺跡	縄文・古代・中世・近世	29	堀内館跡	縄文・中世・近世
2	三納アラミヤ遺跡	縄文・古代・中世・近世・近代	30	田中ノダ遺跡	弥生・古墳
3	三納トヘイダゴシ遺跡	縄文・中世・近世	31	菅原キツネヤブ遺跡	中世・近世
4	藤平田ナカシンギジ遺跡	中世	32	富樫館跡	縄文・中世・近世
5	三納ニシヨサ遺跡	中世	33	扇が丘ヤグラダ遺跡	古代・中世
6	下新庄アラチ遺跡	古代	34	扇が丘ハワイゴク遺跡	縄文・弥生・古代・中世
7	下新庄タナカダ遺跡	古代	35	扇が丘ゴショ遺跡	弥生・古代・中世
8	上林古墳	古墳	36	高橋ウバガタ遺跡	弥生
9	上林新庄遺跡	古代・中世	37	山川館跡	縄文・中世
10	上新庄ニシウラ遺跡	弥生・古墳・古代	38	高橋セボネ遺跡	弥生・古代
11	上林テラダ遺跡	古代	39	横川本町遺跡	弥生・中世
12	上林遺跡	弥生・古代	40	押野ウマワタリ遺跡	弥生・中世
13	安養寺遺跡	弥生・古代	41	押野タチナカ遺跡・押野館跡	縄文・弥生・中世
14	清金アガトウ遺跡	縄文・古代・中世	42	押野大塚遺跡	縄文・弥生
15	末松A遺跡	縄文・古代・中世	43	上宮寺跡	中世
16	末松信濃館跡	古代・中世	44	野代遺跡	縄文
17	末松B遺跡	古代	45	三日市ヒガシタンボ遺跡	弥生・古墳・古代・中世
18	末松福正寺遺跡・福正寺跡	古代	46	三日市A遺跡	縄文・弥生・古代・中世・近世
19	末松ダイカン遺跡	古代	47	二日市イシバチ遺跡	縄文・弥生・中世・近世
20	末松廃寺跡	弥生・古代・中世・近世	48	郷クボタ遺跡	古代・中世
21	古元堂館跡	不詳	49	徳用クヤダ遺跡	古代・中世
22	末松C遺跡	古代	50	長池キタノハシ遺跡	弥生・中世・近世
23	末松古墳	古墳	51	長池ニシタンボ遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世
24	末松しりわん遺跡	古代・近世	52	御経塚オッソ遺跡	弥生・中世
25	法福寺跡	不詳	53	御経塚遺跡	縄文･弥生･古墳･古代･中世･近世
26	末松砦跡	不詳	54	御経塚経塚	中近世
27	大館館跡	古代・中世	55	御経塚シンデン遺跡・古墳群	弥生・古墳・中世・近世
28	三林館跡	中世			

第２表　野々市町の遺跡

第２図　野々市町の遺跡　(1/30,000)

部では上林古墳や白山市田地古墳など横穴式石室を伴う後期古墳が点在することが知られているが、築造主体となる集落が確認されておらず、野々市町南部における古墳時代集落の様相は明らかではない。

古代は、粟田遺跡・清金アガトウ遺跡など扇状地扇央部の集落の多くが開始され、扇央部の開発が進んだ時期である。なかでも扇状地開発のモニュメントとも言われる末松廃寺は、法起寺式伽藍配置で７世紀後半に創建、８世紀初頭まで存続したとされる。周辺では末松福正寺遺跡・末松ダイカン遺跡など７世紀前半代の集落跡も確認されているが、遺跡数が増えるのは７世紀後半からであり、８世紀になると粟田遺跡の南に位置する上林・新庄遺跡群で集落が拡大する。三納アラミヤ遺跡はこの時期に相当する。この上林・新庄遺跡群は北と南でその様相を異にし、南は製鉄にかかわる竪穴住居と掘立柱建物から成る手工業生産地区、北は溝に区画された計画的な建物配置やその後９世紀後半にかけて機能する大型建物を有し周辺を掌握する領主層が存在した地区であったことが窺える。

中世は、野々市町東部には扇が丘ハワイゴク遺跡・扇が丘ゴショ遺跡など居館クラスの遺跡が検出されており、有力武士の居宅と考えられている。野々市町住吉町と扇が丘地内には加賀の守護であった富樫氏の屋敷と考えられる富樫館跡が存在する。館の性格を明示できるような成果は上がっていないが、守護城下町の構造に関連づけられる都市構造の一端が判明しつつある。野々市町南部では13世紀から三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡などの集落跡が確認されている。これらは輸入磁器を一定量所持し、溝によって区画された土地に小規模な掘立柱建物を配置するもので、その実態は自作農的な小領主と考えられる。これらの集落は14世紀頃には廃絶し周辺の様相は近世まで明らかでない。

中世後半の集落は三日市A遺跡・長池キタノハシ遺跡など、野々市町北部に展開することが近年の調査で確認されている。

近世には粟田・三納地区は集落・水田となる。特に粟田地区については、『石川郡誌』に、「鎮守神社の西側にあった村を、粟田川の氾濫のため村全部を粟田新保に移した」という伝承が書き留められている。

近代は、大正時代に耕地整理が終了、水田となっている。三納アラミヤ遺跡では水門跡が確認され、調査区に隣接する現在の水門に繋がる変遷を知ることができる。

参考文献

野々市町史編纂専門委員会　2003　『野々市町史資料編１』　石川県野々市町

布尾和史・安　英樹　2005　「縄文晩期から弥生中期の遺跡群の変遷」『第４回考古学研究会東海例会』

安　英樹・布尾和史　2005　「手取扇状地の遺跡動態」『中部弥生時代研究会　第10回例会発表要旨』

第２章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

本書に収録の粟田遺跡第10次調査・三納アラミヤ遺跡第１・２次調査・三納トヘイダゴシ遺跡第１・３次調査は、野々市町粟田地内および三納地内に位置する。当該地区は、近年まで遺跡としては粟田遺跡が発見されていたにとどまり、遺跡分布の実態は不明瞭であった。これは、農地としての土地利用が主であったため開発を契機とする発掘調査などがほとんど行われなかったことに起因する。しかし、周辺地域の都市化に伴い当該地区も市街化区域として指定され、平成11年２月に生活環境の改善と宅地化の促進を目的とした野々市町中南部土地区画整理組合が発足、土地区画整理事業の開始に伴い遺跡の確認と発掘調査が行われることとなった。

野々市町中南部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、平成10年に事業地内の試掘調査を行い、平成11年度からは現地調査を行った。

野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の有無を確認するための分布調査や保護措置の必要性については、平成９年７月30日付けの教文第783号により、石川県教育委員会事務局文化財課長から野々市町教育委員会事務局文化課長と土木部都市計画課課長宛てに通知されている。これを受け、平成10年10月７日の野々市町中南部土地区画整理組合の設立準備委員会では、埋蔵文化財に関する説明を野々市町教育委員会文化課が行った。その後、平成10年10月19日付けで野々市町産業建設部長から野々市町教育長宛てに土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財分布調査についての依頼がなされ、平成10年10月21日付けで野々市町教育長から野々市町産業建設部長宛てに土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、平成10年10月22日～同年11月６日に試掘調査を行った。

方法は、事業区域内に平面１×１mの試掘坑を225箇所設定し、地山面が確認される深度まで掘削、平面および土層断面の観察を行った。これにより、周知の遺跡である粟田遺跡のほか、三納アラミヤ遺跡・三納ニシヨサ遺跡・三納フジタコシ遺跡（のちに三納トヘイダゴシ遺跡と改名）・藤平田ナカシンギジ遺跡の４遺跡が新規で発見された。この試掘調査の結果は平成10年11月12日付けで野々市町教育委員会教育長から野々市町産業建設部長宛てに回答している。この結果に基づいて、中南部地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施方針は、遺跡範囲のうち、道路や貯水池等の建設工事により遺跡が損壊する部分について調査を行うものとし、加えて、都市計画道路沿いに設定される用途区域で高層建築物の建築が予想される部分についても、本発掘調査が必要な部分に含むことが平成10年11月12日付け野々市町教育委員会文化課と野々市町産業建設部都市計画課・野々市町中南部土地区画整理組合との間で協議された。平成11年５月28日には、野々市町中南部土地区画整理事業地区埋蔵文化財に関する協定書が野々市町長と野々市町中南部土地区画整理組合理事長との間でかわされた。

三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡・三納ニシヨサ遺跡・藤平田ナカシンギジ遺跡・粟田遺跡に関する文化財保護法第57条の３に基づく届出は、平成11年６月14日付け第２号により野々市町中南部土地区画整理組合理事長から文化庁長官宛てに行われ、平成11年６月14日付け野教文第77号により野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会教育長宛てに進達した。これを受けて平成11年６月21日付け教文第637号により野々市町教育委員会教育長宛てに石川県教育委員会教育長から埋蔵文化財発掘調査の届出に関する通知がなされた。

粟田遺跡第10次調査は平成11年に2,400㎡を対象として行われた。野々市町と野々市町中南部土地区画整理組合は平成11年９月20日付けで埋蔵文化財発掘調査の委託契約を取り交わしている。発掘調査承諾書は平成11年８月24日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出され、これを受け、埋蔵文化財保護法第98条の２に基づき、平成11年10月20日付け野教文第117号

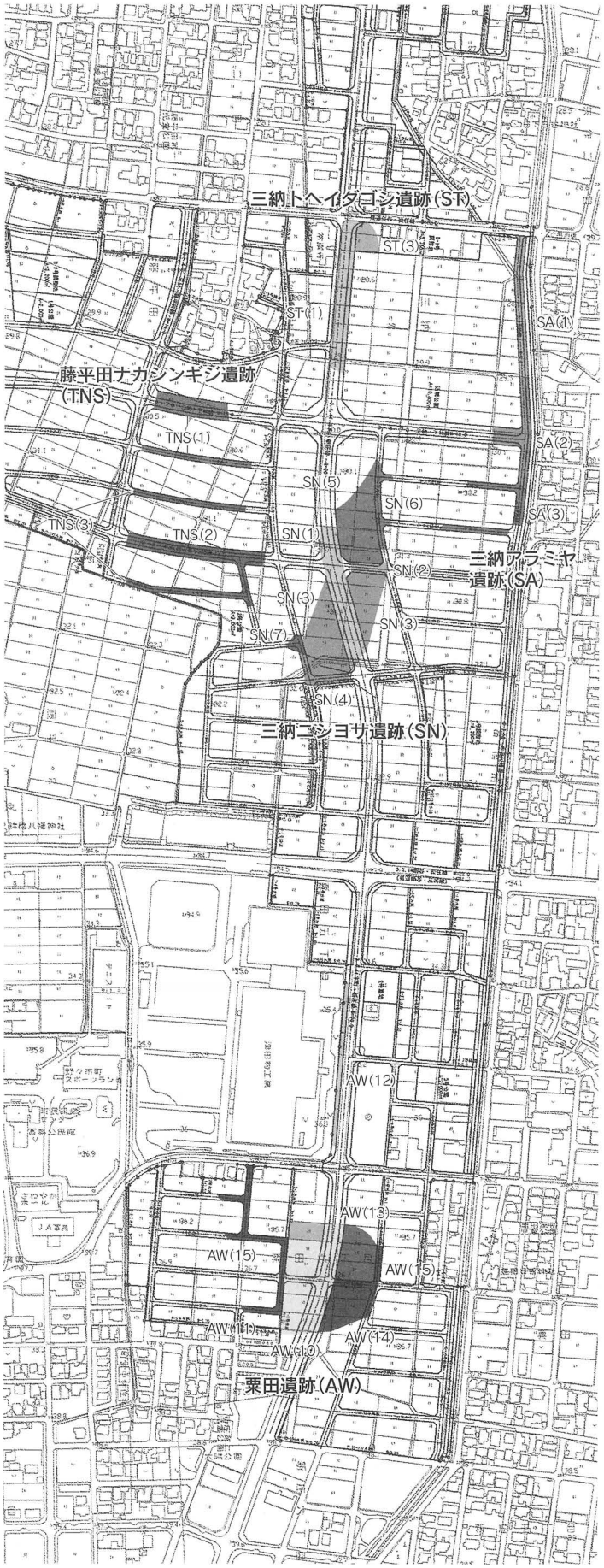
凡例：＊遺物あり、☆遺構あり,＊☆遺構・遺物あり、マークなしはどちらも確認されていない

第３図　試掘地点位置図

により野々市町教育委員会教育長から文化庁長官へ埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。現地調査は平成11年９月27日～平成12年１月14日にかけて実施、中世・近世の集落遺跡を主体とし、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが確認されている。なお、平成11年度の発掘調査によって遺跡の範囲が従来の認識より東側と北側に広がることが確認され、平成12年４月５日付けで粟田遺跡の範囲拡張に関する協議書を野々市町長と野々市町中南部土地区画整理組合理事長との間で取り交わしている。

三納トヘイダゴシ遺跡第１次調査は平成12年度に3,400㎡を対象として行われた。町と組合との埋蔵文化財発掘調査委託契約は平成12年５月２日に締結している。発掘調査承諾書は平成12年５月８日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から提出さた。埋蔵文化財保護法第58条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は、平成12年５月12日付け教文第46号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に報告した。現地調査は平成12年５月９日～同年８月３日にかけて行われ、縄文時代の遺物散布地、中近世の耕作地などが確認されている。

三納アラミヤ遺跡第１次調査は平成13年に1,150㎡を対象として行った。発掘調査の依頼は平成13年４月27日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出され、同５月１日に発掘調査委託契約を締結している。発掘調査承諾書は平成13年７月９日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から提出された。これを受け、文化財保護法第58条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告を平成13年７月９日付け教文第222号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に提出した。現地調査は平成13年７月９日～同年11月16日にかけて実施した。縄文時代



第４図　年次別調査区位置図

から古代の旧河川、古代の集落跡などが確認されている。

三納トヘイダゴシ遺跡第３次調査は平成13年に550㎡を対象として行われた。発掘調査の依頼は平成13年４月27日付で野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出された。

発掘調査承諾書は平成13年７月９日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から提出された。文化財保護法第58条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成13年７月９日付けの教文第223号により野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に提出している。現地調査は平成13年７月９日～同年11月16日にかけて実施した。古代・中世の遺構が確認されている。

年　度	調査地	面積	備　考
平成10年度(1998)	試掘分布調査	45.6ha	本報告書
平成11年度(1999)	粟田遺跡(第10次)	2400㎡	本報告書
	粟田遺跡(第11次)	2100㎡	
平成12年度(2000)	粟田遺跡(第12次)	680㎡	
	三納ニシヨサ遺跡(第１次)	3100㎡	
	三納トヘイダゴシ遺跡(第１次)	3400㎡	本報告書
平成13年度(2001)	三納ニシヨサ遺跡(第２次)	500㎡	
	三納トヘイダゴシ遺跡(第３次)	550㎡	本報告書
	三納アラミヤ遺跡(第１次)	1150㎡	
平成14年度(2002)	三納ニシヨサ遺跡(第３次)	5300㎡	
	三納ニシヨサ遺跡(第４次)	750㎡	
	三納アラミヤ遺跡(第２次)	1800㎡	本報告書
平成15年度(2003)	三納ニシヨサ遺跡(第５次)	1800㎡	
	三納ニシヨサ遺跡(第６次)	900㎡	
	三納アラミヤ遺跡(第３次)	880㎡	
	藤平田ナカシンギジ遺跡(第１次)	2350㎡	
平成16年度(2004)	三納ニシヨサ遺跡(第７次)	147㎡	
	藤平田ナカシンギジ遺跡(第２次)	2181㎡	
	藤平田ナカシンギジ遺跡(第３次)	2274㎡	
	粟田遺跡(第13次)	2170㎡	
平成17年度(2005)	粟田遺跡(第14次)	1409㎡	
	粟田遺跡(第15次)	3339㎡	

第３表　野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財調査一覧表

三納アラミヤ遺跡第２次調査は平成14年に1,800㎡を対象として行った。発掘調査の依頼は平成14年９月12日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長宛てに出され、発掘調査承諾書は平成14年９月12日付で野々市町中南部土地区画整理組合理事長から提出されている。これを受けて、文化財保護法第58条の２第１項に基づく届け出が平成14年９月18日付けの教文第163号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会宛てに提出、同年９月20日には野々市町と野々市町中南部土地区画整理組合との間で埋蔵文化財発掘調査の委託契約が締結されている。

現地調査は平成14年９月20日～同年12月26日にかけて実施した。平成12年度に引き続き、縄文時代から古代の旧河川、古代の集落が確認されている。

第２節　調査の経過

⑴試掘調査　現地調査の経過は、以下の通りである。

10月22日　調査着手。粟田地区から試掘開始。打製石斧と須恵器・土師器が多量に出土する。
10月23日　粟田地区を試掘。近世陶磁器が多数出土。
10月28日　粟田～三納地区を試掘。ピット・土坑が検出され、中世土師器など出土。
11月５日　藤平田地区を試掘。ピット検出。11月６日　調査終了。

⑵発掘調査　現地調査の経過は、以下の通りである。

a)平成11年度

粟田遺跡(第10次調査)

９月27日　南調査区から重機による表土除去開始。
10月４日　作業員による調査開始。
10月８日　表土除去完了。
10月12日　竪穴建物群掘削開始。
10月18日　竪穴建物群掘削終了。
10月21日　溝AW⑽25掘り下げ開始。

試掘調査の様子

10月26日　溝AW⑽25の東側遺構の掘り下げ。
11月25日　北調査区遺構検出。
11月30日　北調査区土坑掘り下げ。
12月５日　土地区画整理組合に対して現地説明会を実施。
12月14日　航測。
12月27日　現場事務所撤去。
１月14日　埋め戻し。

b)平成12年度

三納トヘイダゴシ遺跡(第１次)

５月９～15日　表土除去(一回目)。
５月18日　作業員による調査開始。
５月19日　旧河川ST(1)１土層断面写真撮影。
５月22日　旧河川ST(1)１完掘。
５月26日　倒木跡から打製石斧出土。
６月５日　土偶出土。
６月12～14日　表土除去(二回目)。
６月15・16日　遺構検出。
６月19日　耕作地ST(1)12掘り下げ。
６月29日　耕作地ST(1)８下層遺構掘り下げ。
７月６日　航測(一回目)。
７月10・11日　布水中学校生４名、職場体験。
７月14日　調査区北端遺構検出状況写真撮影。
７月21日　流路ST(1)30掘り下げ。
７月22日　溝ST(1)33掘り下げ。
７月27日　航測(二回目)。
８月３日　現場事務所撤収。

平成13年度

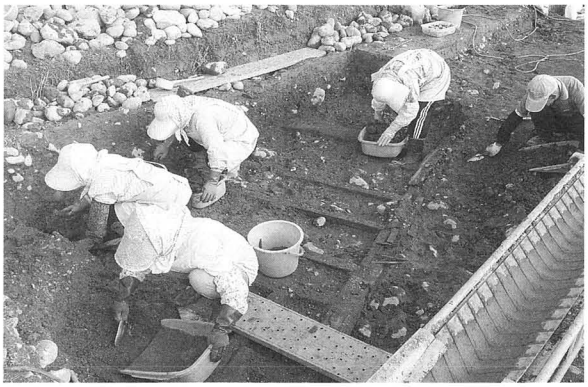
三納アラミヤ遺跡(第１次)

７月12～17日　表土除去。
７月23日　現場事務所建て上げ。
７月25日　作業員による調査開始。
７月30日　W14～16グリッド遺構検出状況写真撮影。
８月２日　竪穴建物SA(1)９・120・121検出。
８月６日　名古屋大学考古学研究室の学部学生が発掘調査参加(～８月31日まで)。
８月７日　土坑SA(1)４掘り下げ。
８月10日　ピット掘り下げ開始。
８月22日　竪穴建物SA(1)９掘り下げ開始。床面と思われる硬化面を確認。
８月24日　竪穴建物SA(1)120を掘り下げ。

AW⑽竪穴群の調査

布水中学校職場体験

旧河川SA(1)131掘削の様子



取水遺構SA(1)226の調査

遺物出土状況図作成。
8月28日　竪穴建物SA(1)121掘り下げ。
焼土検出。
9月4日　旧河川SA(1)131掘り下げ開始。
9月10日　台風接近。このころ雨天多い。
9月18日　竪穴建物SA(1)121遺物取り上げ。
床面精査。
9月27日　遺物集中区SA(1)224遺物取り上げ。
9月28日　取水施設SA(1)226検出。
10月3日　竪穴建物SA(1)120カマド部分完掘。
10月4日　取水施設SA(1)226完掘写真。
10月9日　竪穴建物SA(1)9遺物出土状況図作成。
10月12日　W2～4グリッド遺構検出。
10月16日　水田跡SA(1)250掘り下げ。
10月19日　竪穴建物SA(1)120平面図作成。
10月24日　竪穴建物SA(1)9土層断面図作成。
10月27日　竪穴建物SA(1)9平面図作成。
11月9日　航測。
11月12～15日　補足図面作成。
11月14日　現場事務所撤収。

三納トヘイダゴシ遺跡(第3次)
7月18・19日　表土除去。
10月19日　遺構検出開始。
10月23日　遺構検出状況写真撮影。
10月24日　旧河川ST(3)1掘り下げ開始。
10月29日　旧河川ST(3)1土層断面図作成。
10月30日　完掘写真撮影。
11月9日　航測。
11月14日　現場事務所撤収。

平成14年度
三納アラミヤ遺跡(第2次)
10月1日　現地確認。
10月3日　調査区設定。
10月4～8・16・17日　表土除去。
10月21日　グリッド設定。
10月22日　作業員による調査開始。
10月23日　遺構検出状況写真撮影。
10月24日　旧河川SA(2)2掘削開始。
10月30日　旧河川SA(2)2掘削終了。
10月31日　旧河川SA(2)2土層断面図作成。
11月7日　旧河川SA(2)1北側から掘削開始。

掘立柱建物SA(1)①～③の調査

ST(3)遺構検出の様子

利水遺構SA(2)205掘削の様子

旧河川SA(2)1掘削の様子

11月12日　利水遺構SA(2)120・205掘削開始。
11月21日　旧河川SA(2)１打製石斧出土。
11月22日　利水遺構SA(2)205遺物取り上げ。
11月29日　旧河川SA(2)１のW16～21グリッド完掘写真撮影。
12月２日　旧河川SA(2)１のW24～26グリッド掘削開始。
12月11日　雪が降り積もる。
除雪を試みるも涙の一時撤退。
12月16・17日　SA(2)１のW24～26グリッド完掘写真撮影。
12月18日　航測。
12月24日　現場事務所撤収。

12月11日　雪

調査参加者

⑶整理作業・報告書作成

整理作業は、平成13年度から平成17年度にわたって行った。

平成13年度は粟田遺跡(第10次)・三納トヘイダゴシ遺跡(第１次)・三納アラミヤ遺跡(第１次)出土遺物の洗浄と三納アラミヤ遺跡(第１次)出土遺物の記名・実測、現地調査写真を画像データ化する作業を行った。

平成14年度は三納トヘイダゴシ遺跡(第１次)出土遺物の記名と現地調査写真の画像データ化、粟田遺跡(第10次)出土遺物の実測を行った。

平成15年度は、三納トヘイダゴシ遺跡(第３次)と三納アラミヤ遺跡(第２次)出土遺物の洗浄・記名、三納トヘイダゴシ遺跡(第１・３次)と三納アラミヤ遺跡(第２次)出土遺物の実測を行った。

平成16年度は、現場図面・写真の整理と、発掘調査報告書作成のための図版作成・本文執筆・遺物写真撮影を行った。

平成17年度は、発掘調査報告書作成のための図版作成・本文執筆・遺物写真撮影を行った。

⑷調査体制

a)平成10年度　試掘調査
調査主体　野々市町教育委員会(教育長　田村昌俊)
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課(課長　西本正明)
調査担当　横山貴広(野々市町教育委員会文化課　主査)
布尾和史(野々市町教育委員会文化課　主事　県教育委員会文化財課より派遣)
永野勝章(野々市町教育委員会文化課　主事)
調査期間　平成10年10月22日～同年11月６日
対象面積　45.6ヘクタール

b)平成11年度　発掘調査　粟田遺跡(第10次)
調査主体　野々市町教育委員会(教育長　田村昌俊)
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課(課長　高本　実)

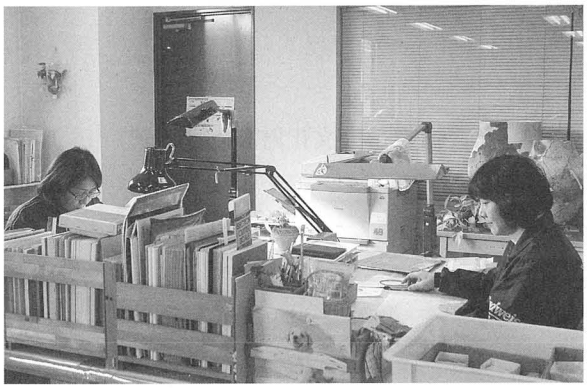
調査期間　平成11年９月27日～平成12年１月14日
対象面積　2,400㎡
調査担当　布尾和史・永野勝章

c) 平成12年度　　発掘調査　三納トヘイダゴシ遺跡（第１次）
調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田村昌俊）
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課（課長　高本　実）
調査期間　平成12年５月９日～同年８月３日
対象面積　3,400㎡
調査担当　布尾和史

d) 平成13年度　　発掘調査　三納アラミヤ遺跡（第１次）、三納トヘイダゴシ遺跡（第３次）
調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田村昌俊）
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課（課長　高本　実）
調査期間　平成13年７月９日～同年11月16日
対象面積　1,150㎡、550㎡
調査担当：布尾和史

e) 平成14年度　　発掘調査　三納アラミヤ遺跡（第２次）
調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田村昌俊）
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課（課長　高本　実）
調査期間　平成14年９月20日～同年12月26日
対象面積　1,800㎡
調査担当　布尾和史

f) 平成13～17年度　　整理・報告書作成作業
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課（平成16年12月まで）
（課長　高本　実：平成15年３月31日まで）
（課長　中川保夫：平成15年４月１日から）
野々市町教育委員会　文化振興課（平成17年１月から）（課長　中川保夫）
担　　当　布尾和史（平成15年３月31日まで）
永野勝章
竹田倫子・野村祥子・増山明美・小松真紀（野々市町教育委員会　臨時職員）
布尾幸恵（平成16年４月１日から　野々市町教育委員会　臨時職員）


整理作業

報告書作成作業

第３章　　調査と報告の方針

⑴遺　　構

個々の遺構の名称は、各遺構番号の前に遺跡と調査年次を示すアルファベット、粟田遺跡（第10次）：AW⑽、三納アラミヤ遺跡（第１次）：SA⑴、（第２次）：SA⑵、三納トヘイダゴシ遺跡（第１次）：ST⑴、（第３次）：ST⑶を付し、時代・種類・グリッドに関係なく遺跡・調査年度ごとに１から通しで調査番号を付けることを基本とした。このため、同一の遺構であっても２つ以上の調査区にまたがって検出された場合は新たな番号を付している。

グリッドは公共座標に基づく10×10mの区画を設定し、北西隅の杭番号でその区画を呼称してこれを大グリッドとした。この際、各グリッド内を５×５mの区画で４つに分け、北西隅から時計回りにa・b・d・cという小グリッドを設定、遺物の取り上げ等に便宜を図った。番号を付していない遺構は、基本的に遺物が確認されなかったもので、現地調査の段階で土層を確認したのみに留めた。その後、報告が必要と判断された場合は新たに番号をつけている。

個々の遺構の説明には本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の種類にはピット・建物跡・溝・土坑・旧河川・流路などがあり、これらについて位置・分類・規模・形状・覆土の堆積状況・出土遺物・重複とその前後関係などを記述した。

建物については、複数のピット（柱穴）で有意に囲まれた部分を掘立柱建物とした。掘立柱建物のうち、総柱建物とは梁行が２間以上あり柱穴が碁盤の目状に並ぶものを差し、側柱建物とは梁行・桁行ともに２間以上あるが外側の柱穴のみで内側が存在しないものを差す。梁･桁については、便宜上、長軸を桁･短軸を梁とする。なお、遺跡内は竪穴建物が確認されているが、この遺構については、床面に柱穴を伴うものを「竪穴建物」、床面に柱穴が確認されないものを「竪穴状遺構」とする。なお、他の報告書を参照した場合は、その報告書の記載に拠った。

⑵遺　　物

遺物の総数は、パンケースで、粟田遺跡（第10次）16箱、三納アラミヤ遺跡（第１次）13箱、三納アラミヤ遺跡（第２次）８箱、三納トヘイダゴシ遺跡（第１次）３箱、三納トヘイダゴシ遺跡（第３次）１箱である。この中から遺構出土のものを中心に、残りの良いものや出土例の少ないものを選択して図化した。

遺物図版作成にあたっては個々の遺物を時代・器種・種別（または法量）毎にレイアウトしており、遺構出土の遺物については各遺構図版にも１／６で添付した。遺物図版の縮尺は原則１／３とし、小型の石器は２/３、大型の石製品は１／６、銭貨は１／１で掲載した。

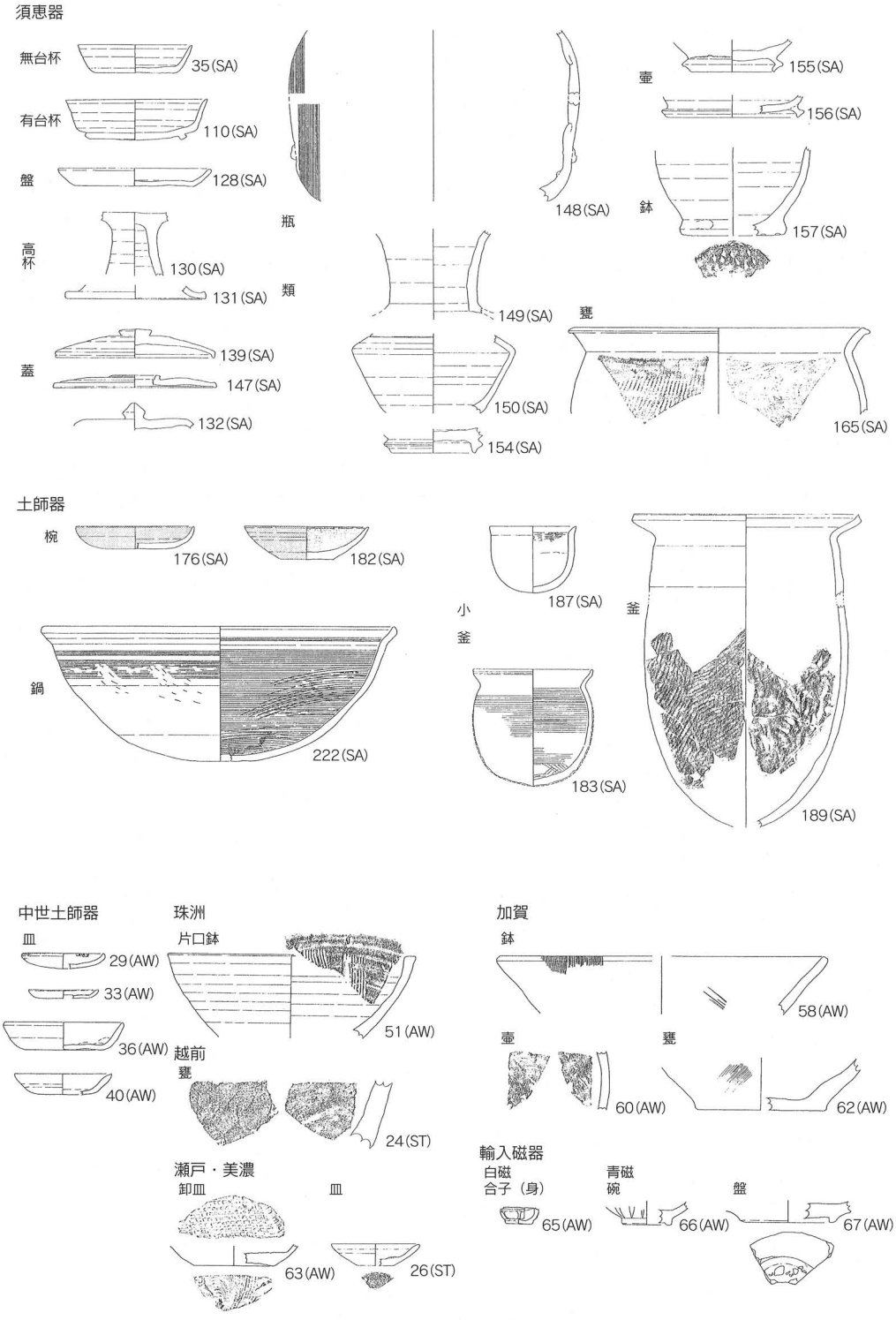
遺物の記述は、本文・観察表・図面図版・写真図版でおこなった。遺物の報告番号は遺跡単位に１から付与し、本文・観察表・図面図版・写真図版で共通する。

観察表は遺物の種類によって観察項目は異なるが、煩雑を避けるため表は統一の形式を取り、そのつど、外面色調：外、内面色調：内、釉色もしくは釉の種類：釉、胎土：胎、と付して区別した。色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人　日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』に拠った。胎土混和物のうち、「シャ」と表記されているものは、「シャモット」である。

縄文土器の型式名は『野々市町史　資料編』［吉田2003］で使用しているものを用いた。

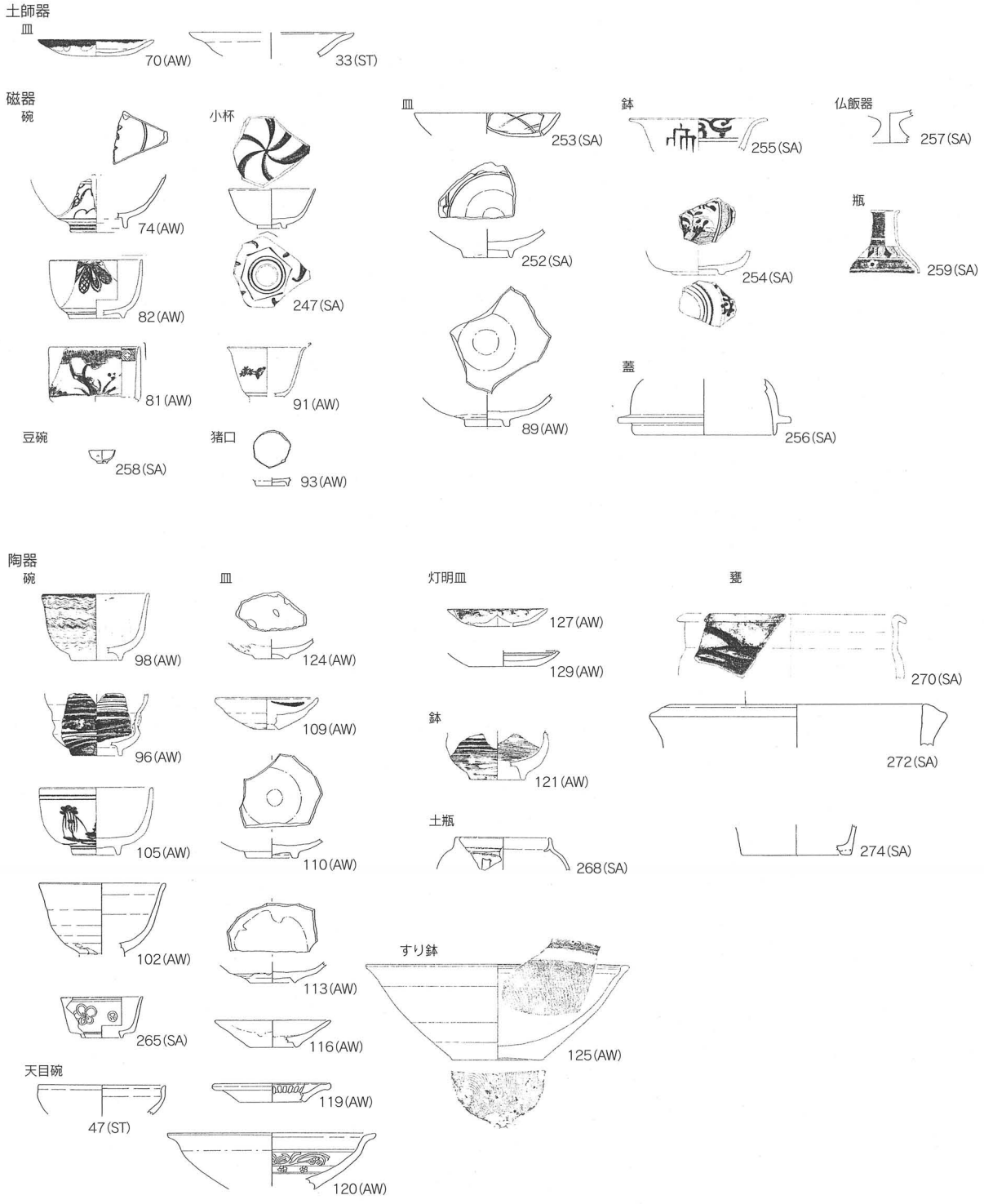
古代における土器の器種名は、須恵器・土師器とともに、基本的には北陸古代土器研究会で使用するものに準じている。なお、煮炊具に関しては従来使用されてきた「甕」は使用せず、煮炊き機能のイメージから「釜」を使用し、小型を小釜、大型の長胴を釜、浅身広口のものを鍋とした［小松市教委2002］。土器編年・年代観は田嶋明人氏の1988年と1997年発表の文献をもとにしている［田嶋1988、1997］。

中世の土器･陶磁器は、名称･時期ともに土師器が藤田邦雄［藤田1997］、珠洲焼が吉岡康暢［吉岡1994］、



（No.は掲載番号、（ ）内は出土した遺跡）

第5図　器種分類図(1)　古代・中世　(1/6)



(No.は掲載番号、（ ）内は出土した遺跡)

第 6 図　器種分類図(2)　近世以降　(1/6)

加賀焼が宮下幸夫[宮下1997]、瀬戸美濃が藤澤良祐[藤澤1991、2001]、輸入白磁は横田健次郎・森田勉[横田・森田1978]、青磁は上田秀夫[上田1982]、青花は小野正敏[小野1982]に準じた。

近世の土器・陶磁器は、名称・時期ともに土師器皿類は増山　仁[増山1997]、肥前陶磁器類は[九州近世陶磁学会2000、2001]、筑前陶磁器類は[大橋1992]、越中瀬戸焼は[宮田1997]に準じた。

参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　1994　『正友ヤチヤマ窯跡』

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988　『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会

大橋康二　1992　「福岡の陶磁」『福岡の陶磁展』　佐賀県九州陶磁文化館

小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会

柿田祐司　1997　「加賀における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』6　北陸古代土器研究会

北野博司　1999　「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』8　北陸古代土器研究会

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』

九州近世陶磁学会　2001　『国内出土の肥前陶磁』

小松市教育委員会　1999　『林タカヤマ窯跡』

小松市教育委員会　2002　『二ツ梨一貫山窯跡』

小松市教育委員会　2004　『八里向山遺跡群』

田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

田嶋明人　1997　「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」
『北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会シンポジウム資料

辰口町教育委員会　2005　『和気後山谷窯跡群』

野々市町史編纂専門委員会　2003　『野々市町史　資料編1』　野々市町

藤澤良祐　1991　「瀬戸古窯址群II－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要X』
瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐　1993　『瀬戸市史陶磁史編四』　瀬戸市史編慕委員会

藤澤良祐　2001　「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』

藤田邦雄　1997　「第2節　中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会　桂書房

増山　仁　1997　「第3節　安江町遺跡出土の土師器皿」『安江町遺跡』金沢市文化財紀要130
金沢市・金沢市教育委員会

宮下幸夫・田嶋正和・藤田邦雄・垣内光次郎　1990　「中世加賀の窯業研究」『石川考古学研究会々誌』第38号
石川考古学研究会

宮下幸夫　1997　「在地窯「加賀窯」」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会　桂書房

宮田進一　1997　「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会　桂書房

横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」
『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

吉田　淳　2003　「第2節(3)　出土遺物」『野々市町史』資料編1　石川県野々市町

第４章　粟田遺跡（第10次調査）

第１節　遺跡の概要（第８図）

粟田遺跡第10次調査区は古代・中世・近世を主体とし、他に縄文時代の遺物が僅かながら出土している。調査区のほぼ全域で遺構が検出されたが、その種類は調査区内で若干異なり、調査区北側は遺構密度が小さく土坑が中心、南側では建物・溝が多く検出された。以下時代ごとにその概要を述べる。

縄文時代はピット、土坑が検出された。遺構・遺物ともに少ないものの、打製石斧の出土がやや目立つ。

古代はピット、溝、土坑が検出された。主体となる時期は田嶋編年Ⅳ２～Ⅴ１期で、釜などの土師器煮炊具は少なく、須恵器杯類が多くを占める。墨書土器は確認されていない。

中世は竪穴建物、ピット、土坑が検出された。竪穴建物は調査区の東南隅に集中して検出され、特徴的な遺構分布を示している。主体となる時期は出土した中世土師器から藤田編年のⅡ～Ⅲ期：13～14世紀であるが、15世紀の遺物も僅かながら出土した。遺物は、中世土師器・珠洲片口鉢が多くを占める。供膳具の皿は中世土師器で占められ、碗は青磁が多い。日常用器としては器種は鉢類が多く、壷・甕類はわずかである。珠洲が70%近くを占め、加賀は少ない。瀬戸美濃は２点出土したに留まる。同時期の加賀の遺跡に比較して壷・甕類が少ないものの、産地では珠洲のものが多く、他と類似した様相を呈している。

近世はピット、土坑、溝が検出された。主体となる時期は17世紀後半～18世紀前半であるが、その前後の遺物も散見される。この時期は、幅の広い溝が矩形に展開することが特徴として挙げられる。遺物は、碗・皿・鉢については肥前陶器より肥前磁器が僅かながら多く出土し、越中瀬戸がそれに次ぐ。この様相は、17世紀後半～18世紀前半の加賀地方の農村部の遺跡である八田中中村遺跡と同様である。

近代以降は居住区でなく水田となったことが、調査区壁土層で確認されている。

第２節　遺　構

(1)縄文時代の遺構（第11・12図）

縄文土器や石器が遺構に伴うものを縄文時代の遺構として報告する。

a)土坑

AW(10)78（第12図）

E11cグリッドに位置する。平面形は略方形で、径167×96cm、深度40cmである。覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物は打製石斧(8)である。

b)ピット

ピットは調査区全体に点在しているが、覆土や形状から所属する時期を特定するのは困難で、建物等を復元するには至っていない。

AW(10)20（第12図）

C16dグリッドに位置し、平面形は略円形で径50×50cm、深度９cmである。覆土は暗褐色土で、出土遺物は縄文土器(1)が１点である。

AW(10)26（第12図）

C15dグリッドに位置し、平面形は楕円形で径70×41cm、深度51cmである。覆土は微量の砂が入る暗灰色土で、出土遺物は打製石斧(7)である。

⑵古代の遺構（第11～13図）

a）ピット

古代に属するピットは南調査区南側に散在する。覆土は褐色土と暗褐色土のものがある。ここでは建物や柵列を構成しないものをまとめた。遺物が出土しないピットは、覆土や分布状況から古代と考えた。

AW⑽27（第12図）

C15bグリッドに位置する、平面形が楕円形を呈するピットで、径90×38cm、深度８cm。遺物はない。

AW⑽48（第12図、図版２）

C16dグリッドに位置し、平面形が略円形を呈する。径33×28cm、深度21cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW⑽49（第12図、図版２）

C16bグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径156×124cm、深度35cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW⑽50（第12図、図版２）

C16dグリッドに位置し、平面形が略円形を呈する。径44×40cm、深度24cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW⑽51（第12図、図版２）

D16aグリッドに位置し、平面形が楕円形を呈する。径116×95cm、深度31cmを測る。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW⑽100（第12図、図版２）

D13dグリッドに位置し、平面形は略円形を呈する。径50×44cm、深度27cmで覆土は暗褐色土である。須恵器無台杯⑽が出土した。

b）溝

AW⑽22（第11図）

AW⑽22は全長25m のC16グリッドからE15グリッドに向かってのびる溝である。軸はE－15°－Nで、幅40～100cm、深度９～37cmを測る。覆土は黒色土をベースに、地山土ブロックが若干混入する。遺物はない。

c）その他の遺構

平行溝群

AW⑽130ほか（第11・13図）

ここでは、一定の間隔・軸を有して展開する小溝状遺構が集中している箇所を平行溝群として取り上げる。この溝群に遺物は無いが、覆土の観察から古代として報告する。これらの溝の共通項として、①ほぼ同一な軸・方向・間隔を有する、②ほぼ直線を呈する、③遺構の深度が浅いことが挙げられる。なお、第10次調査区では一部が確認されただけであり、その多くは第11次調査区で検出された。

平行溝群は、B11グリッド付近（平行溝群A）とB・C17グリッド付近（平行溝群B）に確認された。検出範囲が狭いために明らかではないが、どちらも若干傾きが異なる。深度はいずれも浅い。

⑶中世の遺構（第14～23図）

a）竪穴建物・竪穴状遺構

AW⑽２（第15図、図版１・２）

C17d・D17cグリッドに位置する、平面形が隅丸方形の竪穴建物である。当初、遺構の半分が調査区外であったため、拡張して検出した。径280×200cm、深度９～10cmである。床面はやや平坦で、壁の立ち上がりは緩い。竪穴に伴うピットが２基（P１・P２）確認できた。他に、竪穴建物のプラン外側に６基

のピットが確認されている。北東には幅60cmほどの溝が検出されているが、本竪穴建物に伴うものか否かは判然としない。遺構覆土は黒褐色土を主体とし、東側に地山ブロックが多く混入する。須恵器瓶(24)が竪穴建物の底面近くから出土しており、古代の可能性もあるが、周辺に中世の竪穴建物・竪穴状遺構が集中していることもあり、中世の遺構と判断した。他には鉄製品(147)が出土している。

AW(10)3（第16・19図、図版１～３）

D17aグリッドに位置する。略方形を呈する竪穴建物AW(10)３aと南北にやや長い竪穴建物AW(10)３bの２基が重複している。共に確認面からの深さは浅く、遺構の立ち上がりは明瞭でない。３aは径290×270cm、深度５～20cmである。床面はほぼ平坦でよくしまっており、硬化していた。なお、遺構内南側に土坑状の落ち込みが検出され、黒色土と灰黄褐色土が覆土として確認された。ピットが多数検出されており、いずれも黒褐色土の覆土を持つ。３bは径360×240cm、深度３cmである。中世土師器皿(42)・釘(146)が出土している。

AW(10)4（第17図、図版１・３）

D17bグリッドに位置する竪穴建物である。遺構検出時に確認されたものの、覆土は深いところで５cm程度しか検出できず、遺構の形状を明確にすることはできなかった。検出面において地山である礫層がほぼ露呈しているような状況であったことから、床面が遺構の確認面より高い可能性があり、その場合はある程度土を埋めて床面を作っていたものと考えられる。また、AW(10)４はAW(10)５と切り合っているが、土層の観察からはAW(10)４がAW(10)５より古いことが確認されている。平面形は略方形で径約350×300cm、深度２～５cm程度を測る。遺構内にはピットが散見される。覆土は褐色土である。遺物はない。

AW(10)5（第17図、図版１・３・４）

D16dグリッドに位置し、平面形が隅丸方形を呈する竪穴状遺構である。AW(10)５はAW(10)４と重複しており、土層の観察からはAW(10)５がAW(10)４より新しいことが判明した。調査区内で最も平面形の整った竪穴状遺構で、径390×330cm、深度約30cmである。壁の立ち上がりは明瞭で、地山である礫層を掘り込んで作られる。底面は平坦であり、北側には出入り口状の２段のテラスが付属する。ピットは見られなかった。覆土は褐灰色土を主とする。遺物は覆土から須恵器有台杯(19)が出土しているが、混入である。この他、砕片であるが中世土師器が出土した。

AW(10)6（第18・19図、図版１・３・４）

D16c～dグリッドに位置し、平面形が隅丸方形を呈する。調査区内で最も大きな竪穴建物で、径390×360cm、深度20～64cmを測る。壁の立ち上がりは明瞭で、底面は平坦である。底面にピットは確認されなかった。竪穴の周囲にはテラス状の段が形成される部分や、土坑、ピットが掘り込まれている。土層断面で見ると竪穴とほぼ同時に埋まっている部分がほとんどで、それらは竪穴に伴う可能性が高い。

遺構検出面では、覆土中に礫が多量に確認された。周辺の地山が礫層であることから、他の竪穴建物・竪穴状遺構などを掘削した際の礫が、廃絶後埋没中の本遺構に投棄された可能性がある。覆土は褐灰色土で、レンズ状に堆積していた。東側には炭化物・灰層も確認されている。遺物は多く、混入とみられる須恵器有台杯(17)・杯蓋(21)・甕(25・27)の他、中世土師器皿(33・37・39・40)、珠洲片口鉢(46・47・50・51・53・54・55)、加賀甕(61・62)、鉄製品(143・148)、炉石(136・137)が出土している。遺物の出土レベルを見ると、多くが覆土２a・b層からの出土で、21・51が床面から出土している。

AW(10)7（第20図、図版４）

D16a・bグリッドに位置し、近世の溝AW(10)24に切られる。平面形が隅丸方形を呈する竪穴建物で、径320×290cm、深度２～３cmを測る。遺構は浅く、覆土はほとんど残っていなかった。底面からはピットと土坑が検出された。遺物は出土していないが、周辺の状況と覆土から中世と判断するものである。

AW(10)8（第21図、図版１・４）

E16aグリッドに位置する平面形が不整形の竪穴状遺構で、径350×290cm、深度33～42cmを測る。礫層

の地山を掘り込んでおり、覆土は褐灰色土である。砕片のため図示し得ないが、中世土師器と須恵器が出土している。

b)土坑

土坑は、竪穴建物の分布する付近と南調査区東側の2か所の分布域が見られる。竪穴建物付近にはAW⑽9・10・18・43・97・134、南調査区東側にはAW⑽60・74・82・98・110が検出された。

AW⑽9（第21図、図版4）

D15cグリッドに位置する平面形が不整形の土坑。近世のピットと重複している。径250×230cm、深度53cmを測る。覆土は褐灰色土を主とする。中世土師器皿(34・38)と珠洲片口鉢(44)のほか、越前甕の砕片が出土している。

AW⑽10（第21図、図版4）

D15dグリッドに位置する平面形が略方形の土坑で、南辺が古代の溝AW⑽22を切る。径190×160cm、深度25cmを測る。覆土は黄褐色土を主とする。中世土師器の破片が出土した。

AW⑽18（第22図、図版4）

C17aグリッドに位置する。平面形は不整円形で、径180×148cm、深度4cmを測る。覆土は微量の砂を含む褐灰色土で、中世土師器皿(35)が出土している。

AW⑽43（第22図、図版5）

D15bグリッドに位置する。平面形は略円形で、径98×90cm、深度28cmを測る。礫層を掘り込んで構築され、覆土は黒褐色土を中心とする。加賀鉢(58)が出土した。

AW⑽60（第22図、図版5）

E12dグリッドに位置する。東側が攪乱で削平され、本来の形状・規模は不明。遺存径112×100cm、深度30cmを測る。覆土は黒褐色土を主とする。中世土師器皿(29)が出土した。

AW⑽74（第23図、図版5）

D13cグリッドに位置する。西側を近世の溝AW⑽25によって削平され、本来の形状・規模は分からない。遺存径245×176cm、深度24cmを測る。覆土は褐灰色土を主とする。珠洲片口鉢(52)、加賀鉢(56)が出土した。

AW⑽82（第23図）

E12bグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径140×80cm、深度46cm、覆土は黒褐色粘質土である。遺物はない。

AW⑽97（第23図）

D16aグリッドに位置する、平面形が不整形の土坑である。径295×194cm、深度2～36cm。遺構の立ち上がりは明確でない。遺物はない。

AW⑽98（第24図）

E15aグリッドに位置する。南辺を近世の溝AW⑽25、北辺を近世の土坑AW⑽28と重複しており、本来の形状・規模は不明。調査区東壁の観察(第30図)では遺構の壁の立ち上がりが見られず、あるいはAW⑽25に伴う落ち込みと考えられる。珠洲片口鉢(45・49)が出土している。

AW⑽110（第24図）

E10cグリッドに位置する。調査区壁の観察からこの遺構の南側が農道下に伸びていることが確認された。確認できた径は324×230cm、深度11～15cmである。覆土は黒褐色土を主とする。須恵器無台杯(11)と中世土師器皿(31)が出土した。

AW⑽134（第23図、図版5）

C15cグリッドに位置する、略円形の土坑である。径112×80cm、深度10cmを測り、覆土は黒褐色土を主とする。瀬戸美濃卸皿(63)が出土した。

c)ピット

中世のピットは、南調査区東側に散見される。いずれも建物として認識するには至らなかった。覆土はいずれも黒褐色土を主とする。

AW⑽46（第24図）

D16bグリッドに位置し、平面形が不整円形を呈する。径48×40cm、深度８cmを測る。砥石(135)が出土した。

AW⑽80（第24図）

E12cグリッドに位置する、平面形が略円形のピット。径50×38cm、深度９cmを測る。輸入青磁碗(66)が出土している。

AW⑽83（第24図）

E12bグリッドに位置する、平面形が楕円形のピット。径46×28cm、深度16cmを測る。砕片のため図示し得ないが、中世土師器が出土した。

AW⑽99（第24図）

E15aグリッドに位置する、平面形が楕円形のピット。径54×38cm、深度28cmを測る。砕片のため図示し得ないが、油煙痕のある中世土師器が出土した。

d)溝

AW⑽65・66（第22図）

AW⑽24などによって途切れるが、本来同一の溝であった可能性がある。南西～北東にかけてやや屈曲しながら伸びる溝で、D17bグリッドからD16bグリッドにかけて検出されたが、遺構の立ち上がりが明瞭でない部分も多い。AW⑽65は幅55～68cm、深度６～10cmを測る。混入品として須恵器杯(20)・杯蓋(23)が出土した。AW⑽66は、幅42～100cm、深度６～12cmを測る。遺物はない。共に中世の遺物は出土していないが、中世の竪穴建物・竪穴状遺構群の間を抜けており、軸も概ねそろうので中世の遺構と理解した。

e)その他の遺構

埋納遺構

AW⑽42（第22図、図版５）

D15cグリッドに位置する、平面形が略円形の土坑である。径64×60cm、深度27cmで覆土は褐灰色土を主とする。覆土の上面～中層にかけて中世土師器が多数出土した。そのうち、図示できるものが30･32･41である。

⑷近世の遺構（第14・23～31図）

a)土坑

近世の土坑は、AW⑽25の東側と北調査区東側に分布が見られる。

AW⑽28（第25図、図版５）

E14cグリッドに位置し、平面形が略方形を呈する。礫層の地山に掘り込まれた土坑で径165×130cm、深度35cmを測り、覆土は暗灰褐色を呈する。遺物はなく、覆土の観察とAW⑽25との位置関係から近世の所産と判断した。

AW⑽29（第25図、図版６）

E14cグリッドに位置する。AW⑽98と重複しており、本来の形状・規模は不明。遺存する径179×40cm、深度34cmを測る。覆土は礫が多く詰まり、ブロック状に入る土も見られることから、埋め戻しと思われる。肥前磁器小杯(92)と越中瀬戸皿(117・118)が出土している。

AW⑽52（第25図、図版６）

D14cグリッドに位置し、平面形は不整円形を呈する。径144×125cm、深度35cmを測り、覆土は褐灰色土を主とし、上層は粘質を帯びるが下層は砂質である。遺物はなく、土層の観察から近世と判断した。

AW(10)56（第26図、図版６）

D13bグリッドに位置し、平面形は隅丸方形を呈する。礫層内に掘り込まれた土坑で径214×176cm、深度43cmを測り、覆土は褐灰色粘質土である。遺物は多く、土師器皿(71)、肥前磁器碗(74・87)・皿(89)、肥前陶器碗(95・101)・皿(110)、肥前擂鉢(122)のほか、中国青磁盤(67)が出土した。

AW(10)57（第26図）

D13aグリッドに位置し、平面形は隅丸方形を呈する。径250×165cm、深度58cmを測り、覆土は青灰色粘質土が水平に堆積しており、水成堆積であろう。遺物はない。

AW(10)58（第25図、図版６）

D13dグリッドに位置し、平面形は楕円形を呈する。径192×115cm、深度35cmを測る。土師器皿(72)、肥前磁器小杯(91)が出土している。倒木跡の可能性が考えられる。

AW(10)62（第25図、図版６）

E13cグリッドに位置し、平面形が不整円形を呈する。東側が攪乱と重複しており、本来の形状は不明であるが、遺存径236×210cm、深度62cmを測る。覆土は、下層に粘質土が溜まる。下層が埋没したのちしばらく開口していたものか、上層には礫が多数混入していた。肥前磁器碗(75)が出土した。

AW(10)63（第26図）

E13cグリッドに位置する、平面形が不整形を呈する土坑である。径360×250cm、深度20cmを測る。瀬戸美濃陶器皿(64)が出土した。

AW(10)72（第27図、図版７）

E14cグリッドに位置する、平面形が略円形の土坑である。径130×118cm、深度90cmを測り、覆土は、上層は褐灰色粘質土で、底面近くににぶい黄褐色粘質土が見られた。肥前陶器と近世土師器皿が出土しているが、砕片のため実測し得なかった。

AW(10)95（第27図）

D16cグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径156×85cm、深度36cmを測る。肥前陶器碗(104)、瀬戸美濃皿(119)が出土した。

AW(10)122（第27図、図版６）

D９b～E９bグリッドに位置し、全長478cmを測る土坑である。東側の楕円形部分と西側の略円形部分から成り、３基の土坑が連続したものであろう。東側は径315×206cm、深度65cmを測り、この場所から桶についていたものと思われる竹の箍が出土した。箍の径は約120cmで１段のみ遺存していた。西側の土坑は径185×163cm、深度47cmを測る。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前磁器碗(76・79)、肥前陶器皿(112)、下駄(139・140)が出土した。桶が設置されていたことから、肥溜と思われる。

AW(10)127（第28図）

Ｂ７b～dグリッドに位置し、全長456cmを測る土坑である。東側の不整形部分と西側の略方形部分から成り、東側は径371×200cm、深度30cmを測り、覆土は灰褐色粘質土を主とする。西側は径190×185cm、深度69cmを測る。肥前陶器碗(96)が出土した。

b)ピット

近世の遺物が出土したピットについて述べる。

AW(10)44（第28図）

D15dグリッドに位置し、平面形が略円形を呈する。径48×44cm、深度25cmを測る。土師器皿(69)が出土した。

AW(10)45（第28図）

D16bグリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径104×60cm、深度31cmを測る。図示し得ないが、漆被膜が確認された。覆土から近世と判断した。

c)溝

AW(10)24（第29～31図、図版７）

C14～16・D～E16グリッドに位置する。C14グリッドでAW(10)25より分岐して調査区外に伸び、C15グリッドで再び検出される。ここからE16グリッドまで直線に伸びて調査区外に出る。幅40～100cm、深度約35cmを測る。覆土は褐灰色土を主とし、上層がより粘質が強い。礫は混入していない。肥前磁器碗(78・83)、肥前陶器碗(103・106)が出土している。

AW(10)25（第29～31図、図版７）

C14・D11・13～15・E15グリッドに位置する。分割して検出されているがその間は第11次調査区に存在する。E15グリッド調査区壁からC14グリッドまでやや北に振れながら直線に伸びたあとほぼ直角に屈曲し、屈曲部分でAW(10)24と合流する。その後は若干東に振れて調査区外に出、D11グリッドで調査区壁にぶつかる。幅150～240cm、深度34～48cmを測る。覆土は褐灰色土を主とし、上層により粘性の高く灰色味の強い土が検出された。この溝は３回の掘削が行なわれていることが、調査区北壁の観察から判明した(第30図)。１回目は北壁断面(第30図a断面)第23層・東壁断面(第30図e断面)第11層、２回目は北壁断面第15・16層・東壁断面第７層、３回目には北壁断面第13層・東壁断面第６層がそれぞれ相当するものと考えられる。２回目は１回目の幅をほぼ踏襲し、深度を若干浅くして掘り返しているのに対して、３回目は幅・深度ともに小規模となる。この傾向はAW(10)25に並行するAW(10)75にも見て取れる。掘削時期については、混入した遺物も多く明確でないが、下層で17世紀前の擂鉢(123)が出土していることから、１回目の掘削はその時期を下限と考えることができる。また、３回目の掘削は、２回目の溝が第14層で埋没してから掘削されていること、覆土が１・２回目の褐灰色土とは若干色調を異にすることや、礫を含まないことが特徴的で、土層断面からは、近代の耕地整理前に掘削された可能性が高い。

出土遺物は、近世の土師器皿(70)、肥前磁器碗(73)、肥前陶器碗(94・102)・擂鉢(123)、越中瀬戸皿(113)のほか、縄文時代の打製石斧(４～６)、古代の須恵器有台杯(15)、中世土師器皿(43)、加賀壺(60)・鉢(57・59)、中国青磁盤(68)、石製行火(132・133)、砥石(134)を図示した。

AW(10)61（第29～31図、図版７）

D13～14グリッドで検出された、全長13.6mの溝である。AW(10)25とほぼ並行して検出され、AW(10)25を意識して掘削されたものと考えられる。幅60～70cm、深度10～26cmを測り、覆土は黒褐色土または灰褐色土である。礫を多数含む。肥前磁器碗(85・86)・皿(88)・鉢(90)・猪口(93)、肥前陶器碗(97・100・108)、越中瀬戸皿(114)、火鉢(130)のほか、古代の須恵器無台杯(12)を図示した。

AW(10)75（第29～31図、図版７）

C11グリッドで検出された。主体は第11次調査区にあると考えられる。確認された部分では幅80～120cm、深度30～50cmを測り、覆土は灰褐色土を主とする。第30図a断面の観察では３回の掘削が認められ、２回目の掘削は１回目とほぼ同規模で掘り返されているが、３回目は幅も狭く、浅くなる。２回目の底面には大き目の礫が多数混入しているのが見られた。近世の肥前磁器碗(80)、肥前陶器碗(107)・皿(111)・擂鉢(124)、土師器灯明皿(127・128)のほか、中世の珠洲片口鉢(48)、鉄製品(141)を図示した。

第３節　遺　物(第４表)

遺物の記述には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。当調査区では、縄文～近代までの遺物が出土している。種類と器種による分類は第３章に示した。

⑴縄文時代の遺物（第32図、図版８）

土　器（１・２）　縄文土器は２点を図示した。１は眼鏡状突帯の施文される浅鉢の破片で、時期は下野式である。２は深鉢の底部である。他はすべて砕片である。

石　器（３～８）　磨製石斧が１点、打製石斧が５点出土した。３は小型の定角式磨製石斧で石材は流紋岩である。遺構検出面である黄褐色土上面で出土した。４～８は打製石斧で一部欠損するものもあるが、おおむね完形に近い。７のみ縄文時代の遺構から出土したが、ほかは他時期の遺構出土である。

⑵古代の遺物（第33図、図版８）

須恵器（９～27）　21点を図化した。このうち16点が供膳具である。時期は田嶋編年のⅣ２～Ⅴ１期が多い。産地は南加賀窯が大半を占めると思われる。10が古代のピットAW⑽100から出土したほかは、他時期の遺構や遺物包含層からの出土であった。９～12は須恵器無台杯で、13～19は須恵器有台杯、20は須恵器杯である。21～23は須恵器蓋、24は須恵器瓶類、25～27は須恵器甕である。

土師器（28）　包含層から出土した釜を１点図化した。

⑶中世の遺物（第34・35図、図版９・10）

土　器（29～43）　中世土師器の皿は15点図化した。29～35は小皿、36～43は大皿である。すべて在地産の手づくねで、時期は藤田編年Ⅱ～Ⅴ期にわたるが、最も多いのはⅢ期である。29～35は体部の調整によって２種類に分けられる。36～43も、体部に段をもち口縁部まで急角度で立ち上がる36・37と、体部の段がほとんどなく口縁部までゆるく立ち上がる38～43がある。29・43は口縁部に油煙痕が見られた。これらのうち、竪穴建物AW⑽３から42、AW⑽６から33・37・39・40が出土した。中世の土坑からは29～32・34・35・38・41、ピットからは36が出土し、ほかは他時期の遺構から出土した。

陶磁器（44～68）　珠洲片口鉢（44～55）、加賀鉢（56～59）・壺（60）・甕（61・62）、瀬戸美濃卸皿（63）・皿（64）、輸入品の青磁碗（66）・盤（67・68）と白磁合子（65）が出土している。

珠洲の片口鉢は12点図化した。時期は吉岡編年Ⅰ～Ⅴ期である。44・45は卸目がなく、46～55は卸目が施されている。47は横方向の卸目を施したあとに縦方向の卸目を施している。51～53は使用による磨耗が激しく卸目がかなり消えているが、他はさほど使用痕跡が顕著ではない。55は底部外面に静止糸切り痕が明瞭に残る。竪穴建物AW⑽６から46・47・50・51・53～55が、土坑から44・45・48・52が出土し、ほかは他時期の遺構から出土した。

加賀は鉢類を４点、甕を２点、壺を１点図化した。時期は宮下編年のⅡ～Ⅳ期に属する。56・57は口縁部まで卸目が施され、58は体部中程に一部残るのみである。59には卸目が確認できない。60は壺の胴部片である。61・62は甕肩部と底部である。61は体部内面にナデツケの痕が見られた。竪穴状遺構AW⑽６から61・62が出土、土坑から56・58が出土したが、ほかは他時期の遺構から出土した。瀬戸美濃２点の内、卸皿の63は漆継の痕跡が確認された。時期は藤澤編年古瀬戸中Ⅲ期であり、中世の遺構から出土した。

輸入磁器は白磁と青磁の２種類である。白磁は65を１点図化した。合子の身部分である。66は青磁碗で、鎬蓮弁文が施された底部片、67・68は青磁盤の底部片である。66のみ中世の遺構出土である。

⑷近世の遺物（第36～38図、図版10・11）

土　器（69～72・127・128・130）　土師器皿（69～72）・灯明皿（127・128）・火鉢（130）が出土した。皿は増山編年の16世紀後半～18世紀と時期は幅広いが４点しか出土せず、組成の多くを占めるほどには至っていない。灯明皿は19世紀前半である。すべて近世の遺構から出土した。

陶磁器（73～126・129・131）　磁器は碗（73～87）・皿（88・89）・鉢（90）・小杯（91・92）・猪口（93）、陶器

は碗(94～108)・皿(109～120)・鉢(121)・擂鉢(122～126)・灯明皿(129)が出土した。産地は肥前(波佐見)・越中瀬戸・瀬戸・美濃・在地のほか、輸入磁器が確認されている。

肥前の碗は大橋編年の16～17世紀後半では陶器製が多く、17世紀中～18世紀中は磁器製のものが増える。86は18世紀に出現するとされる、いわゆる「コンニャク印判」の施される染付碗である。他には波佐見の陶胎染付(104・105)、美濃(119)のものが確認されている。皿の多くは越中瀬戸であるが、1点のみ景徳鎮の民窯(131)のものが確認された。

擂鉢は肥前が多い。遺物は、近世の遺構と、近世の遺構が集中する地点から出土している。

(5)その他遺物(第38～40図、図版12)

石　器(132～137)　行火(132・133)・砥石(134・135)・炉石(136・137)が出土した。行火は垣内光次郎氏の分類によればII種b類[垣内1990]で、煤がつき、赤化した被熱痕跡が見られる。132は加賀市水田丸産の軽石凝灰岩で、133は小松市滝ヶ原産の凝灰岩である。いずれも15世紀後半以降もので、近世の溝AW(10)25から出土した。砥石は凝灰岩製の中砥石である。134は近世の溝AW(10)25、135は中世のピットAW(10)46から出土している。炉石はいずれもAW(10)6から出土したもので、煤が付着し被熱の痕跡が見られる。

土製品(138)　土錘1点を図示した。

木　器(139・140)　露卯下駄が2点出土した。近世の土坑AW(10)122から出土している。

鉄製品(141～148)　刀子・鎌などが出土した。143・146～148は中世の竪穴建物・竪穴状遺構から、141は近世の溝から出土した。141・142は木製の柄部分が遺存している。

第4節　小　結

(1)竪穴建物・竪穴状遺構(第7図、第5表)

当遺跡では竪穴建物・竪穴状遺構が多数検出された。報告では古代の遺物が出土したAW(10)2・8や遺物が出土しなかったAW(10)4・5・7も、覆土や遺構の規模が類似したAW(10)3・6で中世土師器・珠洲・加賀などが主体的に出土したことから中世の遺構と判断した。時期は、出土遺物から13～14世紀と考えられる。当遺跡の特徴としては、①密集して検出された②同一地点での建て替えが少ない③13～14世紀に集中して構築されたことが挙げられる。まずは以下で、野々市町域を中心に竪穴建物・竪穴状遺構の動向をまとめてみたい。

野々市町では、扇が丘ゴショ遺跡SK302(14世紀前半)[石川県立埋蔵文化財センター1998]、扇が丘ハワイゴク遺跡SI03～05・11～14(中世前期・後期)[野々市町教委2003a]、長池キタノハシ遺跡(14世紀後半～16世紀)[野々市町教委2000a]、富樫館跡鬼ケ窪地区SI1・SK1とナガドイ地区SI1(14世紀前半～15世紀前半)[野々市町教委2003b]、押野館跡SI1・2・竪穴状遺構2(14世紀)[野々市町史編纂専門委員会2003]、堀内館跡SK06～08(13世紀末～14世紀初頭)[野々市町教委2003c]で中世の竪穴建物・竪穴状遺構(竪穴状土坑)が検出されている。なお、扇が丘ハワイゴク遺跡では、土坑として抽出されている1区SK06・12・13・15もSI03と同一規模であり、集合して検出されている状況も当遺跡と類似することから、これを竪穴状遺構に含める。また、5区SK33・39～43・47は掘立柱建物と重複していることから、これも掘立柱建物に付属する竪穴状遺構と考えることとする。また、富樫館跡ジョウカク地区SK1も竪穴建物である可能性がある。

各遺構の規模をグラフ化したものが第7図である。大きいものは押野館跡SI1・2(14世紀)の650×650cm、もっとも小さなもので堀内館跡SK06(13世紀末～14世紀初頭)の120×100cmである。ただし、扇が丘ハワイゴク遺跡と長池キタノハシ遺跡を見ると長軸約4m程度を境に分布が異なっており、長軸4m以下をAタイプ、長軸4mより上をBタイプとした。扇が丘ハワイゴク遺跡ではAタイプで占められ、長

池キタノハシ遺跡ではAタイプも若干存在するが多くはBタイプである。よって、まず第一に、時期や集落の性格により規模に差が生じることが考えられる。

竪穴建物から出土する遺物は中世土師器のほか、珠洲・加賀・越前、瀬戸美濃天目・皿、石製品(炉縁・石臼・石鉢)などバラエティに富む。いずれも加賀地域の中世集落に通常見られる遺物であり、竪穴建物に関して特徴的に出土するものはない。

内部施設は、石積が長池キタノハシ遺跡SX07・28・36・44・46、貼床が長池キタノハシ遺跡SX36と上林新庄遺跡SK9322、柱穴が押野館跡SI１・２と当遺跡、テラス状の段差が扇が丘ハワイゴク遺跡SI12と当遺跡に見られた。

遺跡内での他遺構との位置関係については、扇が丘ハワイゴク遺跡SI２ ・SK33・39～43・47は５区掘立柱建物群に付属した施設と考えられ、さらに１区では掘立柱建物には付属しないものの、SK06・12・13・15・SI03が柵列の東側に列状に集中して検出されている。それぞれは一辺が重なり合う程度に重複し、まったく同じ場所に重複して作られることはない。押野館跡SI１・２は掘立柱建物群の北側に列状に並び、切り合いはない。堀内館跡SK06～08は館内を区画する溝SD08に沿って並び、それぞれ切り合いはない。長池キタノハシ遺跡では、溝に区画された敷地内に小規模な掘立柱建物・竪穴状遺構がセットとして構築され、同一地点で多数重複している。

以上、野々市町で検出された竪穴建物について見てきた。出土する遺物はいずれの遺跡も内容に差はなく、時期や遺跡の性格による違いも見られない。また、立地についても、扇状地扇央部の遺跡と扇側部の遺跡でともに確認されることや、どちらかに規模の大きなもののみが検出される、または内部構造が異なる、というような状況にはないため、今回確認した事例では扇状地における立地の違いは規模や内部施設を決定する要因とは考えられない。平面形は円形・隅丸方形・隅丸長方形が多く、平面的な規模はA･Bの２タイプが存在する。この規模の組成については、遺跡によって差があり、長池キタノハシ遺跡では２タイプ確認されるが、扇が丘ハワイゴク遺跡や当遺跡ではAタイプしかない。内部施設は、中世後期の長池キタノハシ遺跡で貼床や石積が確認されるが、他の遺跡では柱穴やテラス状の段差のみである。この内部施設については、中世後半の遺跡である長池キタノハシ遺跡でBタイプの竪穴建物があり、なおかつ貼床や石積が顕著である点を考えると、中世前半よりも後半で規模の拡大や内部施設の工夫がなされる傾向にあることが伺える。ただし、この内部施設については、同じ15世紀～16世紀の長池キタノハシ遺跡と富樫館跡ナガドイ地区でも違いがあることから、中世後半においても規模や内部施設の選択は個々の集落内で行われていたと見るべきであろう。

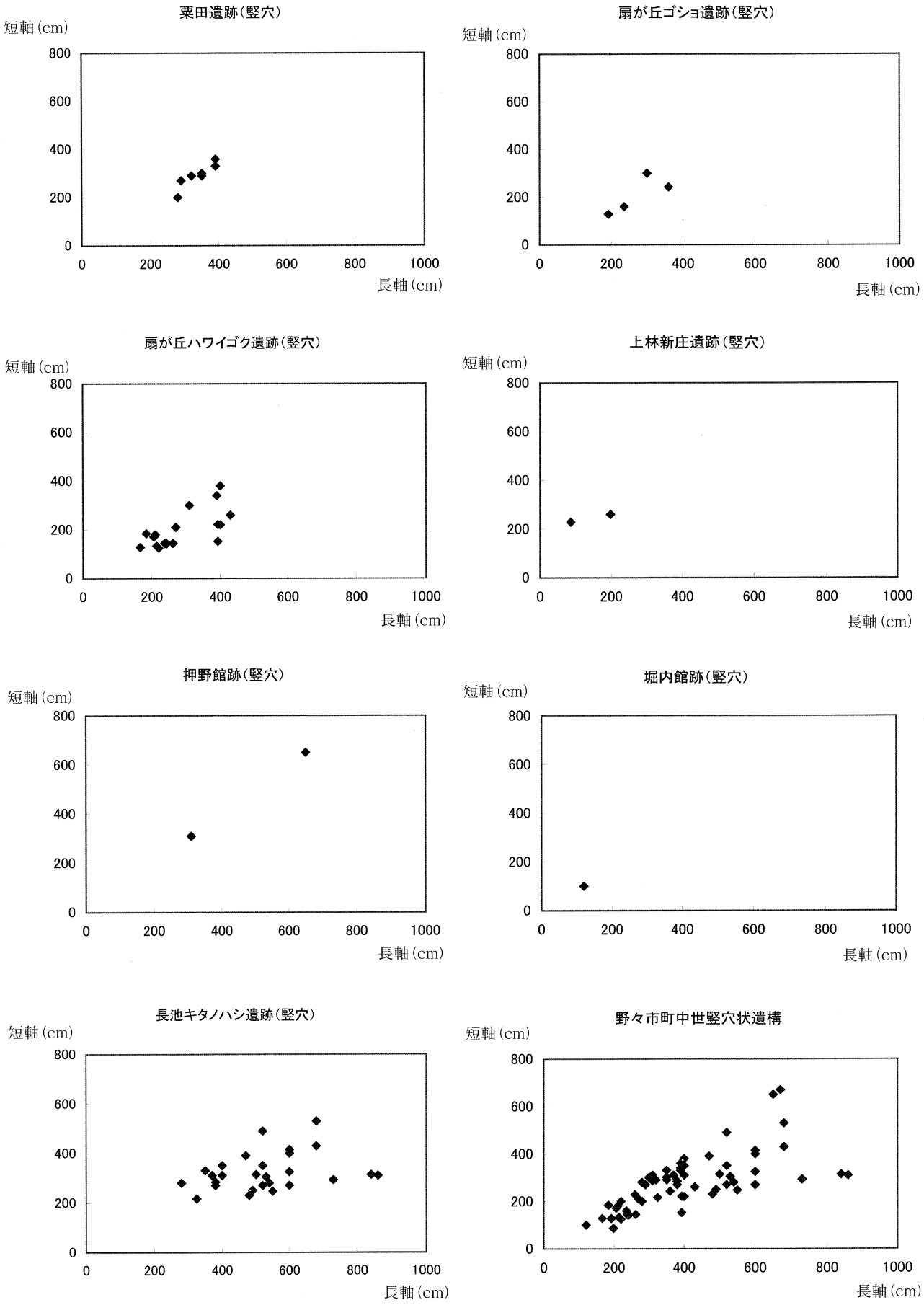
これらの竪穴建物の多くは掘立柱建物のある集落に検出される場合が多い。しかし、当遺跡では竪穴建物のみがまとまって検出されている。調査範囲の制約や、掘立柱建物として認識し得なかったピットも考慮しなければならないが、竪穴建物のみで構成される中世の集落遺跡は加賀では未検出であり、扇が丘ハワイゴク遺跡１区で見られるような、掘立柱建物と重複しない部分に竪穴状遺構が集中して構築された状況を粟田遺跡についても想定すべきであろう。小松市佐々木アサバタケ遺跡[石川県立埋蔵文化財センター 1988a・b]でも、竪穴状遺構が掘立柱建物と重複しない南側の低地部分に集中して検出されていることから、この状況は粟田遺跡の立地する手取扇状地に限らず、中世の加賀地域において、普遍的に見られる状況と考えられる。

野々市町で検出される竪穴建物・竪穴状遺構については、中世を通じて(1)平面形は円形・隅丸方形・隅丸長方形が多い(2)出土する遺物に特別な意味合いが窺われない(3)扇央部・扇端部の遺跡で確認され、それぞれの立地の違いでの規模や出土遺物・時期的な特徴の違いも見られない、という状況にある。ただその中でも、中世後半の富樫館跡ナガドイ地区のように中世前半と似た状況を示す遺跡が見られるとともに、同じく後半の長池キタノハシ遺跡では内部施設に貼床や石積が確認され、竪穴建物の規模もBタイプが多くを占めるようになっている。このことは、当地において、竪穴建物と竪穴状遺構に関する

遺跡名	遺構名	長軸	短軸	深度	建物構造	遺　物	時　期	立　地
粟田遺跡(第10次)	AW(10)2	280	200	10	内部に柱穴	須恵器、鉄製品		
	AW(10)3	290	270	20	内部に土坑	中世土師器、釘		
	AW(10)4	350	300	5	内部に柱穴	なし		
	AW(10)5	390	330	22	テラス			扇状地扇央部
	AW(10)6	390	360	64	テラス	須恵器、中世土師器、珠洲鉢、加賀甕、鉄製品、炉石		
	AW(10)7	320	290	3	内部に柱穴			
	AW(10)8	350	290	42				
扇が丘ゴショ遺跡	SK302	360	242	63		炉縁	14C前or15C前	
	SK203	300	300	41				
	SK204	236	160					扇状地扇側部
	SK205	152						
	SK220	192	128					
扇が丘ハワイゴク遺跡	SI03	270	210	11	なし	なし		
	SI04	210	180	11	なし	中世土師器		
	SI05	400	220	21	なし	須恵器、中世土師器、珠洲鉢、加賀鉢、青磁碗		
	SI11	310	300	20		中世土師器、珠洲甕	SI12より前	
	SI12	390	340	42	テラス	中世土師器、珠洲壺・甕・鉢、青磁碗、白磁碗、青白磁皿、土錘		
	SI13	430	260	15		中世土師器、加賀甕、青磁碗、石鉢	中世初頭？	
	SI14	400	380	23		中世土師器	中世初頭？	
	SK06	220	125	10				扇状地扇側部
	SK12	238	144	14				
	SK13	262	145	16				
	SK15	184	184	44				
	SK33	166	128	64				
	SK39	243	143	36		中世土師器、青磁碗		
	SK40	393	152	11		須恵器、中世土師器、加賀甕、白磁碗、青磁碗		
	SK41	393	221	12		須恵器、中世土師器、珠洲壺		
	SK42	214	133	30				
	SK43		167	15		中世土師器		
	SK47	206	171	58				
上林新庄遺跡	SK9322	198	86	31	貼り床	中世土師器	13C	
	SK9501	260	228	43		柱状高台をもつ土師器皿	11C	扇状地扇央部
	SK9510	220	200	39		土師器	10C	
末松A遺跡							中世墓？	扇状地扇央部
富樫館跡(鬼ケ窪地区)	SI1	670	670				14C前～15C前？	扇状地
富樫館跡(ナガドイ地区)	SI1	310	286	15	内部に柱穴	なし	15C前～16C前？	扇状地
押野館跡	SI1	650	650	35	内部・外周に柱穴	鉄釘、珠洲甕	14C	
	SI2	650	650	40	内部・外周に柱穴	鉄釘、珠洲甕	14C	扇状地
	竪2	310	310	25			14C	
堀内館跡	SK06	120	100	50		なし(覆土は中世)	13C末～14C初	
	SK07	120	100	45		なし(覆土は中世)	13C末～14C初	扇状地
	SK08	120	100	105		なし(覆土は中世)	13C末～14C初	
長池キタノハシ遺跡	N2-SX01	680	530	25		中世土師器、砥石、瀬戸天目、石臼	15C後～16C前	
	N2-SX02	680	430	28		中世土師器、越前壷・擂鉢、珠洲壷、石臼	15C後～16C前	
	N2-SX03	520	270	28		石鉢		
	N2-SX04	350	330	28		中世土師器、砥石、青磁碗		
	N2-SX05	460		24		中世土師器、越前擂鉢	15C後～16C前	
	N2-SX06	520	490	34		越前擂鉢、石鉢	15C後～16C前	
	N2-SX07	600	325	24	土留め礫	中世土師器、越前擂鉢	15C後～16C前	
	N1-SX08	650		40		越前甕、珠洲擂鉢		
	N1-SX09	400	350	25			14C後～15C中	
	N1-SX10	860	310	38		瀬戸天目	15C後～16C前	
	N1-SX11			28			15C後～16C前	
	N1-SX12	500	314	40			15C後～16C前	
	N1-SX13	370	310	18			14C後～15C中	
	N1-SX14	470	390	33		行火、五輪塔、緑石	15C後～16C前	
	N1-SX15			13				
	N1-SX16	600	415	37		中世土師器、石臼、石鉢、緑石、鉄鍋	15C後～16C前	
	N1-SX17	480	230	40			14C後～15C中	
	N1-SX18	460		28			15C後～16C前	
	N1-SX19		280	24			15C後～16C前	
	N1-SX20			22			15C後～16C前	
	S1-SX21	490	250	32		中世土師器、珠洲擂鉢、石鉢	15C後～16C前	
	S1-SX22	280	280	25			15C後～16C前	
	S1-SX23	380	284	38		中世土師器	15C後～16C前	扇状地扇側部
	S1-SX24	325	216	24		中世土師器	14C後～15C中	
	S1-SX25	550	247	28		中世土師器、瀬戸皿		
	S1-SX26	540	280	22		越前甕	14C後～15C中	
	S2-SX27		225	19		青磁碗、鉄釘	15C後～16C前	
	S2-SX28	530	305	30	石積	中世土師器、青磁碗、瀬戸卸皿、珠洲擂鉢	15C後～16C前	
	S2-SX29			30		中世土師器、緑石	15C後～16C前	
	S2-SX30	400	310	28				
	S2-SX31		135	37				
	S2-SX32		160	40				
	S2-SX33		240	42		中世土師器、坩堝、白磁皿、珠洲甕、越前擂鉢		
	S2-SX34	390		24		行火		
	S2-SX35	390		40			14C後～15C中	
	S2-SX36	600	270	36	貼床・石積	中世土師器、砥石、石臼、緑石		
	S2-SX37			23				
	S2-SX38			36				
	S2-SX39		230	25			15C後～16C前	
	S2-SX40	410		26			15C後～16C前	
	S2-SX41			18			15C後～16C前	
	S2-SX42			18			15C後～16C前	
	S2-SX43	520	350	30		中世土師器、砥石	15C後～16C前	
	S2-SX44	600	400	30	石積	天目、珠洲擂鉢、行火、砥石、緑石	15C後～16C前	
	S2-SX45			30			15C後～16C前	
	S2-SX46			30	石積？	石臼	15C後～16C前	
	S3-SX47		310	30		中世土師器、青磁盤、珠洲擂鉢、緑石	15C後～16C前	
	S3-SX48			28				
	S3-SX49	380	270	34		中世土師器	14C後～15C中	
	S3-SX50			30				
	S3-SX51			26				
	耕-SX52	482		5				
	耕-SX53	444		10				
	耕-SX54	730	293	20				
	耕-SX55	840	314	20		中世土師器	15C後～16C前	
	耕-SX56	840		18				

（空欄は記載なし）

第5表　野々市町の中世竪穴状遺構一覧表



第７図　野々市町の中世竪穴状遺構規模

中世前半と後半の違いを示す可能性がある要素として、今後留意していく必要があろう。

⑵土師器埋納遺構

当遺跡では、中世土師器を埋納した土坑AW⑽42が検出された。このような遺構は、野々市町では扇が丘ゴショ遺跡SX201（13世紀後半）［石川県立埋蔵文化財センター 1998］、押野館跡94号土坑（14世紀後半～末）、末松A遺跡24区A６埋納ピット（14世紀後半～末）［㈶石川県埋蔵文化財センター 2005］で検出されている。これらは他種類の遺物の混入がほとんど無く、時期がまとまっているもので、大型の掘立柱建物を伴うことが多いため、遺構の性格は建物建設の際に行なわれた地鎮祭祀と関連があるものと考えられている。当遺跡では、AW⑽42の周辺にピットが点在しているものの掘立柱建物として認識するには至らなかったので、建物に付随しないものも存在することが今回確認された。その性格については今後検討していきたい。

参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　1988a　『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』

石川県立埋蔵文化財センター　1988b　『佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ』

石川県立埋蔵文化財センター　1998　『扇が丘ゴショ遺跡』

垣内光次郎　1990　「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』33　石川考古学研究会

㈶石川県埋蔵文化財センター　2005　『末松遺跡』

東北中世考古学研究会　2001　『掘立と竪穴』　高志書院

野々市町教育委員会　1998　『冨樫館跡Ⅰ』

野々市町教育委員会　1999　『冨樫館跡Ⅱ』

野々市町教育委員会　2000a　『長池キタノハシ遺跡』

野々市町教育委員会　2000b　『上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡・下新庄タナカダ遺跡』

野々市町教育委員会　2002　『扇が丘ヤグラダ遺跡』

野々市町教育委員会　2003a　『扇が丘ハワイゴク遺跡』

野々市町教育委員会　2003b　『富樫館跡Ⅲ』

野々市町教育委員会　2003c　『堀内館跡』

野々市町史編纂専門委員会　2003　『野々市町史　資料編１』　石川県野々市町

北陸中世考古学研究会　2004　『掘立柱建物から礎石建物へ』

三浦ゆかり　1995　「石川県内出土の下駄について」『石川考古学研究会々誌』38　石川考古学研究会

第４表　粟田遺跡（第10次）遺物観察表

縄　文

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
1	200	AW(10)20		縄文土器					少片	外：黒褐	内：灰黄褐	石英	下野式
2	209	AW(10)		縄文土器				68	底部１/12	外：灰褐	内：明褐	石英、黒色粒	
掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	残存率	石　材	重量(g)		備　考
3	207	AW(10)	D16グリッド	石器	磨製石斧	56	34	9.5	完形	流紋岩	27		
4	217	AW(10)25		石器	打製石斧	153	85	30	完形	凝灰岩	361		
5	追４	AW(10)25		石器	打製石斧	184	90	36	完形		546		２点接合
6	追５	AW(10)25	3	石器	打製石斧	142	85	35	完形	凝灰岩	382		
7	追６	AW(10)26	PIT	石器	打製石斧	154	97	27	完形				
8	追７	AW(10)78		石器	打製石斧	128	76	20	完形		187		

古　代

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
9	179	AW(10)	廃土	須恵器	無台杯	129	34	95	全体１/４	外：浅黄橙	内：鈍い黄橙		田嶋Ⅳ２新～Ⅴ１期
10	163	AW(10)100		須恵器	無台杯	122	32	80	口縁１/12	外：灰	内：灰		田嶋Ⅳ２新～Ⅴ１期
11	165	AW(10)110	2	須恵器	無台杯			86	底部２/９	外：灰	内：灰	砂礫	田嶋Ⅴ期
12	72	AW(10)61	1	須恵器	無台杯			90	底部１/４	外：灰白	内：灰白		
13	175	AW(10)	表土剥ぎ	須恵器	有台杯	111	40	72	全体１/３	外：灰	内：灰		田嶋Ⅳ２新～Ⅴ１期
14	180	AW(10)	Ｄ９ｄグリッド	須恵器	有台杯	110	40	76	全体１/４	外：灰	内：灰白		田嶋Ⅳ２新～Ⅴ１期
15	35	AW(10)25	E15aグリッド	須恵器	有台杯			92	全体１/８	外：灰	内：灰		
16	177	AW(10)	南調査区北壁	須恵器	有台杯			95	底部１/４	外：灰黄	内：灰黄		
17	9	AW(10)６	12、礫集中層	須恵器	有台杯			98	底部１/12	外：灰褐	内：鈍い褐	長石粒	
18	178	AW(10)	遺構検出	須恵器	有台杯			64	底部１/４	外：灰	内：灰白		
19	4	AW(10)５	c	須恵器	有台杯			76	底部１/６	外：灰	内：灰	砂礫	
20	70	AW(10)65	３、床から４cm上	須恵器	杯	119			口縁１/５	外：灰	内：灰オリーブ	海綿骨針、石英	
21	24	AW(10)６	24	須恵器	杯蓋	188			口縁１/６	外：灰白	内：灰白	砂礫	
22	125	AW(10)87		須恵器	杯蓋	140			口縁１/12	外：黄灰	内：灰黄	砂礫	
23	71	AW(10)65	２、床から５cm上	須恵器	杯蓋	117			全体１/５	外：灰	内：灰オリーブ		
24	1	AW(10)2･3		須恵器	瓶類				頸部１/４	外：灰	内：灰	砂礫	
25	10	AW(10)６	10	須恵器	甕			147	底部１/７	外：黄灰	内：灰白	長石粒	
26	183	AW(10)	北調査区包含層	須恵器	甕				少片	外：灰	内：灰		
27	15	AW(10)６	18、礫集中層	須恵器	甕				少片	外：灰	内：灰白	砂礫	
28	182	AW(10)	北調査区包含層	土師器	釜	203			口縁１/12	外：浅黄橙	内：浅黄橙		

中　世

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
29	79	AW(10)60		中世土師器	Ⅲ	85	16		全体１/２	外：橙	内：橙		藤田Ⅱ期
30	55	AW(10)42	11	中世土師器	Ⅲ	75			完形	外：鈍い黄橙	内：鈍い黄橙	黒色粒、砂礫	藤田Ⅱ期
31	166	AW(10)110		中世土師器	Ⅲ	74			口縁１/４	外：明褐灰	内：明褐灰	砂礫	藤田Ⅲ期
32	57	AW(10)42	2	中世土師器	Ⅲ				少片	外：浅黄橙	内：浅黄橙	石英、黒色粒	藤田Ⅲ期
33	19	AW(10)６	A-A'ベルト	中世土師器	Ⅲ	74	9		全体１/７	外：鈍い黄橙	内：鈍い黄橙	赤色粒、砂礫	藤田Ⅲ期
34	3	AW(10)９		中世土師器	Ⅲ	74	16	34	口縁１/９	外：橙	内：橙	砂礫	藤田Ⅳ期
35	128	AW(10)18		中世土師器	Ⅲ	72	15	30	全体１/６	外：浅黄橙	内：浅黄橙	赤色粒、石英	藤田Ⅴ期
36	81	AW(10)135	2	中世土師器	Ⅲ	124	29		全体２/５	外：浅黄橙	内：浅黄橙	赤色粒、石英	藤田Ⅱ期
37	22	AW(10)６	7	中世土師器	Ⅲ				全体１/４	外：鈍い黄橙	内：鈍い黄橙	赤色粒、砂礫	藤田Ⅱ期
38	5	AW(10)９	東	中世土師器	Ⅲ	122	20		口縁５/36	外：浅黄橙	内：浅黄橙	砂礫	藤田Ⅲ期
39	8	AW(10)６	2	中世土師器	Ⅲ	134			口縁１/12	外：鈍い黄橙	内：鈍い橙	赤色粒、砂礫	藤田Ⅳ期
40	23	AW(10)６	17、床面	中世土師器	Ⅲ				全体１/６	外：鈍い橙	内：鈍い橙	赤色粒、石英	藤田Ⅲ期
41	58	AW(10)42	13	中世土師器	Ⅲ	100			全体１/４	外：鈍い黄橙	内：鈍い黄橙	黒色粒、砂礫	藤田Ⅲ期
42	2	AW(10)３	床面SP	中世土師器	Ⅲ				少片	外：鈍い黄橙	内：鈍い黄橙	砂礫、海綿骨針	藤田Ⅳ～Ⅴ期
43	38	AW(10)25	西端	中世土師器	Ⅲ	108			全体１/７	外：浅黄橙	内：浅黄橙	砂礫	藤田Ⅳ～Ⅴ期
44	7	AW(10)９	南	珠洲	片口鉢	270			口縁１/18	外：灰	内：灰	砂礫	吉岡Ⅰ期
45	123	AW(10)98		珠洲	片口鉢	260			口縁１/18	外：黄灰	内：黄灰	赤色粒、砂礫	吉岡Ⅱ期
46	14	AW(10)６	14、礫集中層	珠洲	片口鉢				少片	外：灰白	内：灰白	砂礫	吉岡Ⅱ期
47	13	AW(10)６	3	珠洲	片口鉢				少片	外：黄灰	内：黄灰	砂礫	吉岡Ⅱ期
48	121	AW(10)75	5	珠洲	片口鉢	379			口縁１/12	外：灰	内：灰	海綿骨針、石英	吉岡Ⅲ期
49	122	AW(10)98		珠洲	片口鉢				少片	外：灰	内：灰	砂礫	吉岡Ⅲ～Ⅳ期
50	16	AW(10)６	d	珠洲	片口鉢				全体１/36	外：灰	内：灰	砂礫	吉岡Ⅳ期
51	12	AW(10)６	23、床面	珠洲	片口鉢	260			口縁１/９	外：灰	内：灰	石英粒	吉岡Ⅳ期
52	95	AW(10)74	3	珠洲	片口鉢				底部１/４	外：灰	内：灰	砂礫、石英	吉岡Ⅳ期
53	17	AW(10)６	d	珠洲	片口鉢				底部１/12	外：灰白	内：灰白	砂礫、海綿骨針	吉岡Ⅳ期
54	21	AW(10)６	1	珠洲	片口鉢				底部１/９	外：灰	内：灰	砂礫	吉岡Ⅴ期
55	18	AW(10)６	19	珠洲	片口鉢				底部１/２	外：灰	内：灰白	砂礫、海綿骨針	吉岡Ⅳ期
56	98	AW(10)74	4	加賀	鉢				少片	外：灰	内：灰白		
57	39	AW(10)25	西端	加賀	鉢				少片	外：黄灰	内：黄灰		
58	56	AW(10)43		加賀	鉢	348			口縁１/18	外：灰黄褐	内：灰黄褐	砂礫	宮下Ⅱ期
59	40	AW(10)25	西端	加賀	鉢	320			少片	外：鈍い黄褐	内：鈍い黄褐		宮下Ⅲ期
60	29	AW(10)25	22	加賀	壷				少片	外：灰	内：灰		
61	20	AW(10)６	13、礫集中層	加賀	甕				少片	外：浅黄	内：黄灰	砂礫	
62	11	AW(10)６	13、礫集中層	加賀	甕			138	底部１/４	外：鈍い褐	内：鈍い橙	長石粒	宮下Ⅲ～Ⅳ期
63	120	AW(10)134	1	陶器	卸Ⅲ			84	底部１/３	外：灰釉	内：灰白		藤澤古瀬戸中Ⅲ期、漆継
64	73	AW(10)63		陶器	Ⅲ				少片	釉：灰釉	胎：灰白		瀬戸、中世
65	119	AW(10)87	1	中国白磁	合子(身)	34	17	28	完形	釉：透明釉	胎：灰白		12C後～13C前
66	126	AW(10)80		中国青磁	碗			55	底部２/９	釉：青磁釉	胎：灰白		鎬蓮弁文、14C
67	47	AW(10)56	5、確認面	中国青磁	盤			90	底部１/４	釉：青磁釉	胎：灰白		15C
68	42	AW(10)25		中国青磁	盤			102	底部１/４	釉：青磁釉	胎：鈍い橙		15C

近　世

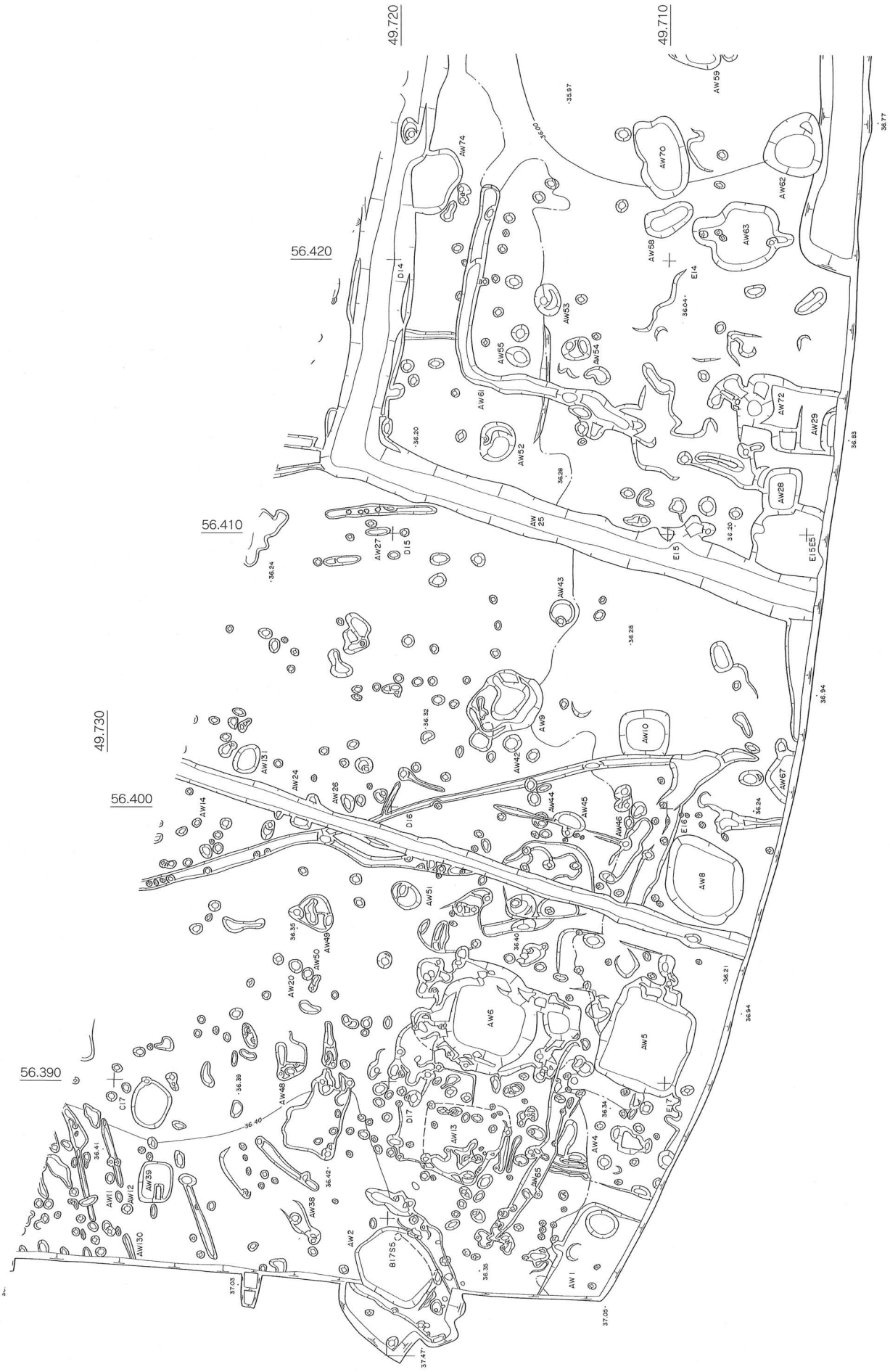
掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
69	59	AW(10)44		土師器	Ⅲ	106			口縁１/５	外：鈍い黄橙	内：鈍い黄橙	黒色粒、砂礫	16C後（増山編年による）
70	41	AW(10)25	溝	土師器	Ⅲ	110	16	40	完形	外：鈍い黄橙	内：鈍い橙		17C後（増山編年による）
71	50	AW(10)56	１、確認面	土師器	Ⅲ	104	15		口縁１/４	外：橙	内：橙		18C（増山編年による）
72	60	AW(10)58		土師器	Ⅲ	122	19		口縁１/12	外：浅黄橙	内：浅黄橙	シャ、砂礫	18C（増山編年による）

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
73	45	AW(10)25		磁器	碗	106			口縁1/5	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C（大橋Ⅰ～Ⅲ期）
74	54	AW(10)56	6、確認面	磁器	碗			50	底部1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C中～後（大橋Ⅲ期）
75	124	AW(10)62		磁器	碗			48	底部1/3	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
76	161	AW(10)122		磁器	碗			50	底部5/9	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
77	212	AW(10)		磁器	碗	114			口縁1/2	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後～18C前（大橋Ⅲ～Ⅳ期）
78	65	AW(10)24		磁器	碗			47	全体1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後～18C前（大橋Ⅲ～Ⅳ期）
79	160	AW(10)122		磁器	碗			60	底部2/9	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後～18C前（大橋Ⅲ～Ⅳ期）
80	99	AW(10)75	7	磁器	碗	83			口縁1/5	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C末～18C前（大橋Ⅳ期）
81	192	AW(10)	E8dグリッド	磁器	碗	88			全体1/5	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、18C末（大橋Ⅴ期）
82	187	AW(10)	E14cグリッド	磁器	碗	89	57	52	全体1/3	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、コンニャク印判、17C後（大橋Ⅲ期）
83	64	AW(10)24		磁器	碗			52	全体1/5	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、コンニャク印判、17C後～18C前（大橋Ⅲ～Ⅳ期）
84	193	AW(10)	D9グリッド	磁器	碗	86			全体1/6	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、コンニャク印判、18C前（大橋Ⅳ期）
85	86	AW(10)61	1-b	磁器	碗			53	底部1/2	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、コンニャク印判、18C前（大橋Ⅳ期）
86	76	AW(10)61	5	磁器	碗	88			全体1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、コンニャク印判、18C（大橋Ⅳ期）
87	52	AW(10)56	2、確認面	磁器	碗	94	60	54	全体1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前（波佐見）、18C前（大橋Ⅳ期）
88	77	AW(10)61	5	磁器	皿			42	底部1/3	釉：青磁釉	胎：灰白		肥前（波佐見）、17C後（大橋Ⅲ期）
89	49	AW(10)56	4、確認面	磁器	皿			44	全体1/2	釉：青磁釉	胎：灰白		肥前、18C前（大橋Ⅳ期）
90	74	AW(10)61	1	磁器	鉢			71	底部1/3	釉：青磁釉	胎：灰白		肥前（波佐見）
91	62	AW(10)58		磁器	小杯	74			口縁1/6	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後～18C前（大橋Ⅲ～Ⅳ期）
92	67	AW(10)29		磁器	小杯	69			口縁1/3	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C前（大橋Ⅱ期）
93	82	AW(10)61	1-j	磁器	猪口？			32	底部完形	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C前（大橋Ⅲ期）
94	44	AW(10)25	20	陶器	碗			40	底部1/3	釉：土灰釉	胎：灰赤		肥前、17C初（大橋Ⅰ期）
95	48	AW(10)56	検出面	陶器	碗			42	底部完形	釉：鉄釉	胎：灰白		肥前、17C前（大橋Ⅱ期）
96	159	AW(10)127		陶器	碗			50	底部2/9	釉：白泥	胎：黄橙		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
97	85	AW(10)61	e・h	陶器	碗	86			全体1/5	釉：白泥	胎：鈍い黄橙		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
98	184	AW(10)	E13c・E14aグリッド	陶器	碗	103	64	48	全体1/3	釉：白泥	胎：灰赤		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
99	189	AW(10)	E9グリッド	陶器	碗			50	底部1/4	釉：白泥	胎：灰赤		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
100	219	AW(10)61	4	陶器	碗			56	底部1/2	釉：白泥	胎：浅黄橙		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
101	51	AW(10)56	8、覆土中層	陶器	碗	106			口縁1/12	釉：白泥	胎：暗赤灰		肥前、17C後～18C（大橋Ⅲ～Ⅳ期）
102	27	AW(10)25		陶器	碗	122			口縁1/4	釉：鉄釉	胎：鈍い橙		肥前
103	63	AW(10)24・表土剥ぎ		陶器	碗	104	67	47	全体1/4	釉：白泥	胎：赤灰		産地不明、17C後～18C前
104	97	AW(10)95	8	陶器	碗			49	底部1/3	釉：透明釉	胎：灰白		肥前（波佐見）、陶胎染付、18C前（大橋Ⅳ期）
105	211	AW(10)		陶器	碗	110	65	26	全体1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前（波佐見）、陶胎染付、18C後（大橋Ⅳ期）
106	214	AW(10)24		陶器	碗	114			口縁1/8	釉：透明釉	胎：浅黄橙		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
107	100	AW(10)75	4	陶器	碗	97			口縁1/8	釉：灰釉	胎：灰白		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
108	84	AW(10)61	a・b・溝	陶器	碗	93	61	51	全体1/3	釉：透明釉	胎：淡黄		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
109	210	AW(10)		陶器	皿	100			口縁1/6	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、16C末（大橋Ⅰ期）
110	53	AW(10)56	3、確認面	陶器	皿			52	底部完形	釉：銅緑釉	胎：灰白		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
111	105	AW(10)75	6	陶器	皿	118			口縁1/6	釉：白泥	胎：黄橙		肥前、18C（大橋Ⅳ期）
112	162	AW(10)122		陶器	皿	110			口縁1/6	釉：灰釉	胎：灰白	砂礫	肥前
113	32	AW(10)25		陶器	皿			45	底部1/2	釉：鉄釉	胎：灰白		越中瀬戸、17C前（宮田Ⅰ期）
114	83	AW(10)61	1-j	陶器	皿			45	全体2/3	釉：鉄釉	胎：橙		越中瀬戸、17C前（宮田Ⅰ期）
115	188	AW(10)	E14cグリッド	陶器	皿	116			全体1/10	釉：鉄釉	胎：鈍い橙		越中瀬戸、17C前（宮田Ⅰ期）
116	215	AW(10)	E14cグリッド	陶器	皿	112	26	43	全体1/5	釉：鉄釉	胎：鈍い黄橙		越中瀬戸、17C前（宮田Ⅰ期）
117	68	AW(10)29	中層	陶器	皿			52	底部2/5	釉：鉄釉	胎：鈍い橙		越中瀬戸、17C前（宮田Ⅰ期）
118	66	AW(10)29		陶器	皿			46	底部1/2	釉：鉄釉	胎：橙		越中瀬戸、17C前～中（宮田Ⅰ～Ⅱ期）
119	115	AW(10)95		陶器	皿	114	18	62	全体1/8	釉：緑釉	胎：鈍い黄橙		瀬戸、16C後（藤澤大窯3期）
120	213	AW(10)		陶器	皿	200			口縁1/18	釉：灰釉	胎：灰白		肥前、18C前（大橋Ⅳ期）
121	191	AW(10)	D9グリッド	陶器	鉢			53	底部1/5	釉：白泥	胎：鈍い橙		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
122	61	AW(10)56		陶器	擂鉢	256			口縁1/18	釉：鉄釉	胎：赤灰	砂礫	肥前、17C（大橋Ⅰ～Ⅲ期）
123	34	AW(10)25	下層	陶器	擂鉢				少片	釉：鉄釉	胎：鈍い赤褐		肥前、17C前（大橋Ⅱ期）
124	110	AW(10)75	6	陶器	擂鉢				少片	外：灰赤	内：灰褐		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
125	185	AW(10)	E13aグリッド	陶器	擂鉢	254	92	90	全体1/3	外：赤灰	内：赤灰		肥前、17C後（大橋Ⅲ期）
126	186	AW(10)	表土剥ぎ	陶器	擂鉢	293			口縁1/10	外：鈍い橙	内：鈍い橙		
127	106	AW(10)75	1	土器	灯明皿	97	17		全体1/8	外：浅黄橙	内：浅黄橙		在地、19C前
128	107	AW(10)75	1	土器	灯明皿	73			全体1/6	外：鈍い黄褐	内：明黄褐	海綿骨針	在地、19C前
129	194	AW(10)	北調査区東溝	陶器	灯明皿			66	底部1/3	釉：透明釉	胎：灰黄褐		在地
130	78	AW61・表土剥ぎ	7・溝	土器	火鉢	133	80		全体2/5	外：褐灰	内：褐灰		在地
131	S1	AW(10)	E14cグリッド	中国磁器	皿	200			口縁1/12	釉：透明釉	胎：灰白		景徳鎮（民窯）、17C後

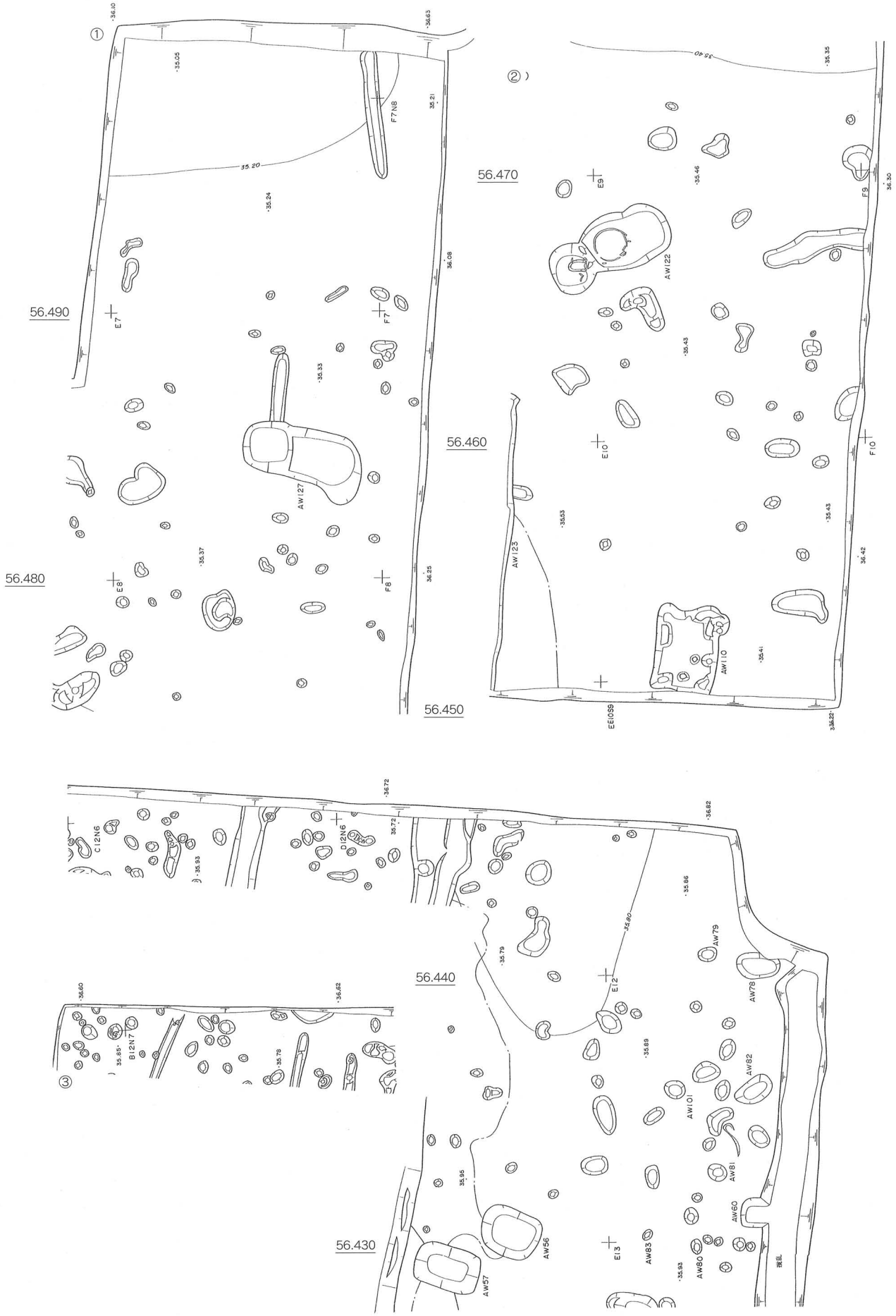
その他

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	残存率	色　調（石器石質）	色　調	胎土混和物	備　考
132	25	AW(10)25	5	石製品	行火				欠損	軽石凝灰岩			重215g、水田丸産
133	37	AW(10)25		石製品	行火				欠損	凝灰岩			重270g、滝ヶ原産
134	43	AW(10)25		石製品	砥石	49	37	8	欠損	凝灰岩			重13g
135	46	AW(10)46		石製品	砥石	66	46	17	欠損	凝灰岩			重73g
136	石1	AW(10)6	16、礫集中層	石	炉石	237							
137	石2	AW(10)6	20	石	炉石	296	158	110		火山礫凝灰岩			
138	208	AW(10)		土製品	土錘	38	44	33	完形	外：橙	内：橙	砂礫	内径最大15mm、最小10mm、37g
139	221	AW(10)122		木製品	下駄	665	71	17	全体1/2				下駄の歯
140	220	AW(10)122		木製品	下駄	240	87	46	全体1/2				露卯下駄、近世
141	鉄1	AW(10)75	5	鉄製品	刀子？								重115g、木製柄付
142	鉄2	AW(10)		鉄製品	鎌								重575g
143	鉄3	AW(10)6	20	鉄製品	釘								重6g
144	鉄4a	AW(10)		鉄製品									重100.7g
145	鉄4b	AW(10)		鉄製品									重100.7g
146	鉄5	AW(10)3	P3	鉄製品	釘								重10g
147	鉄6	AW(10)2	④	鉄製品	刀子？								重50g
148	鉄7	AW(10)6	4	鉄製品	刀子？								重90g

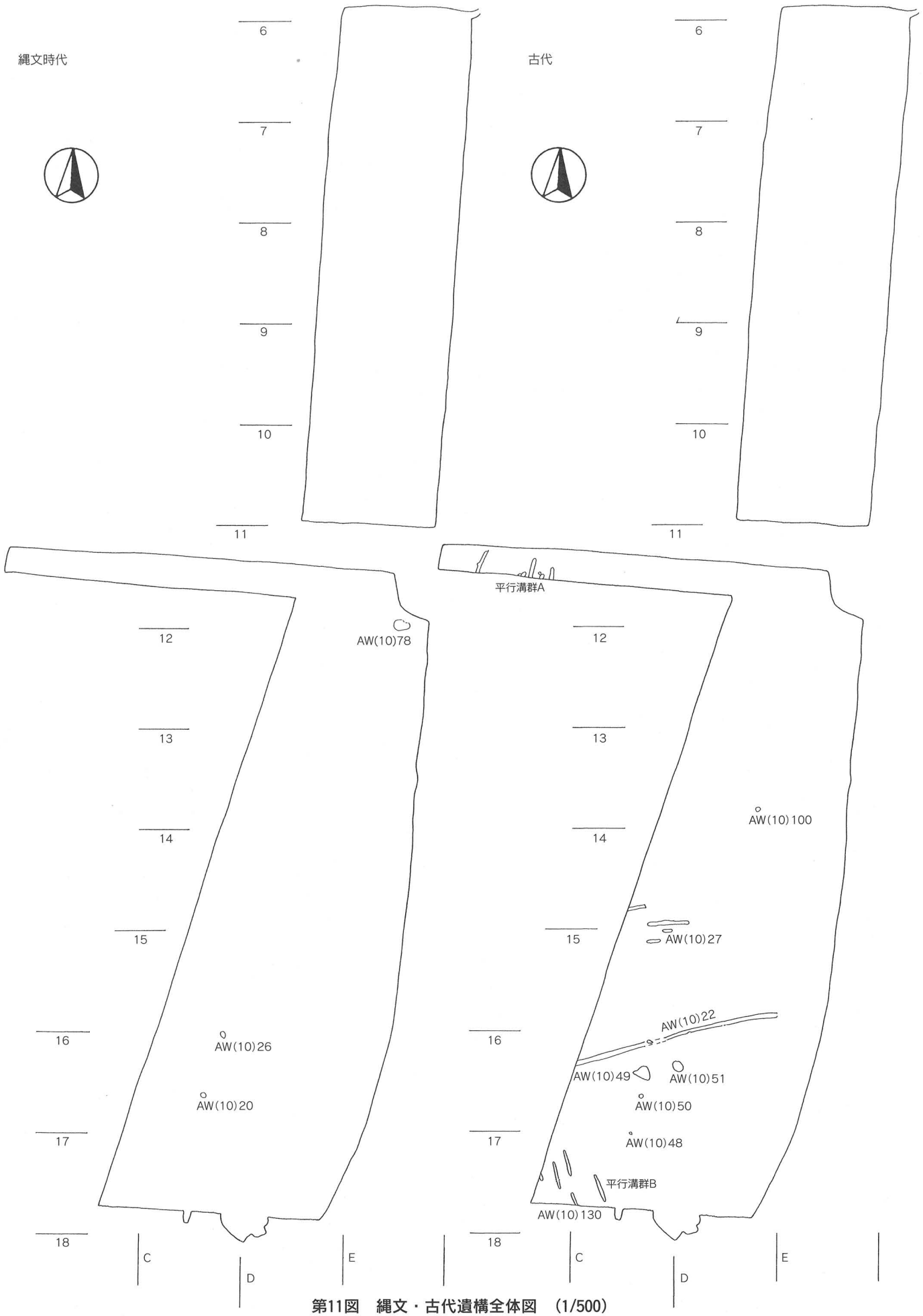
第 8 図　粟田遺跡（第10次）遺構分布図　（1／500）



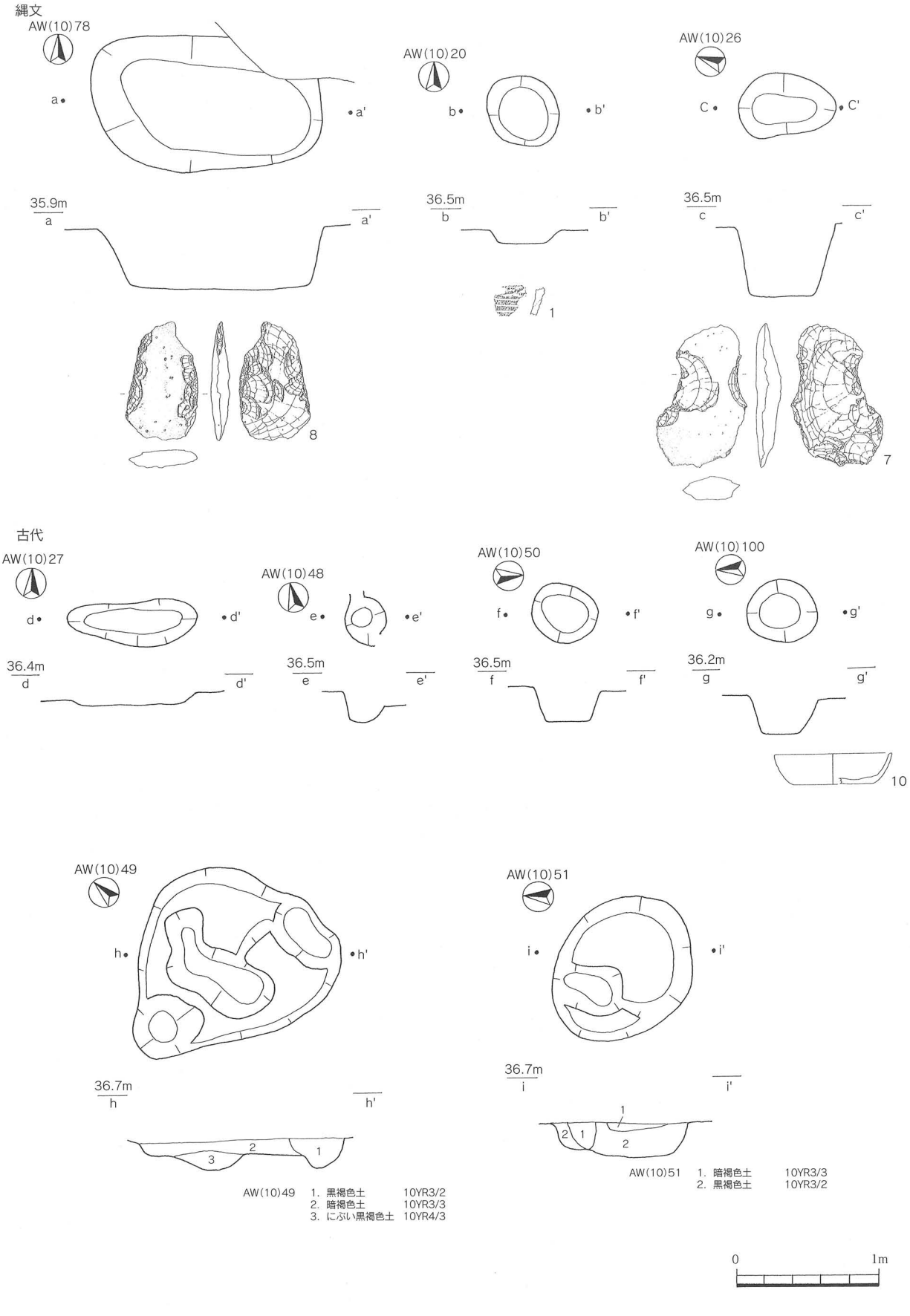
第 9 図　粟田遺跡（第10次）平面図(1)　(1/200)



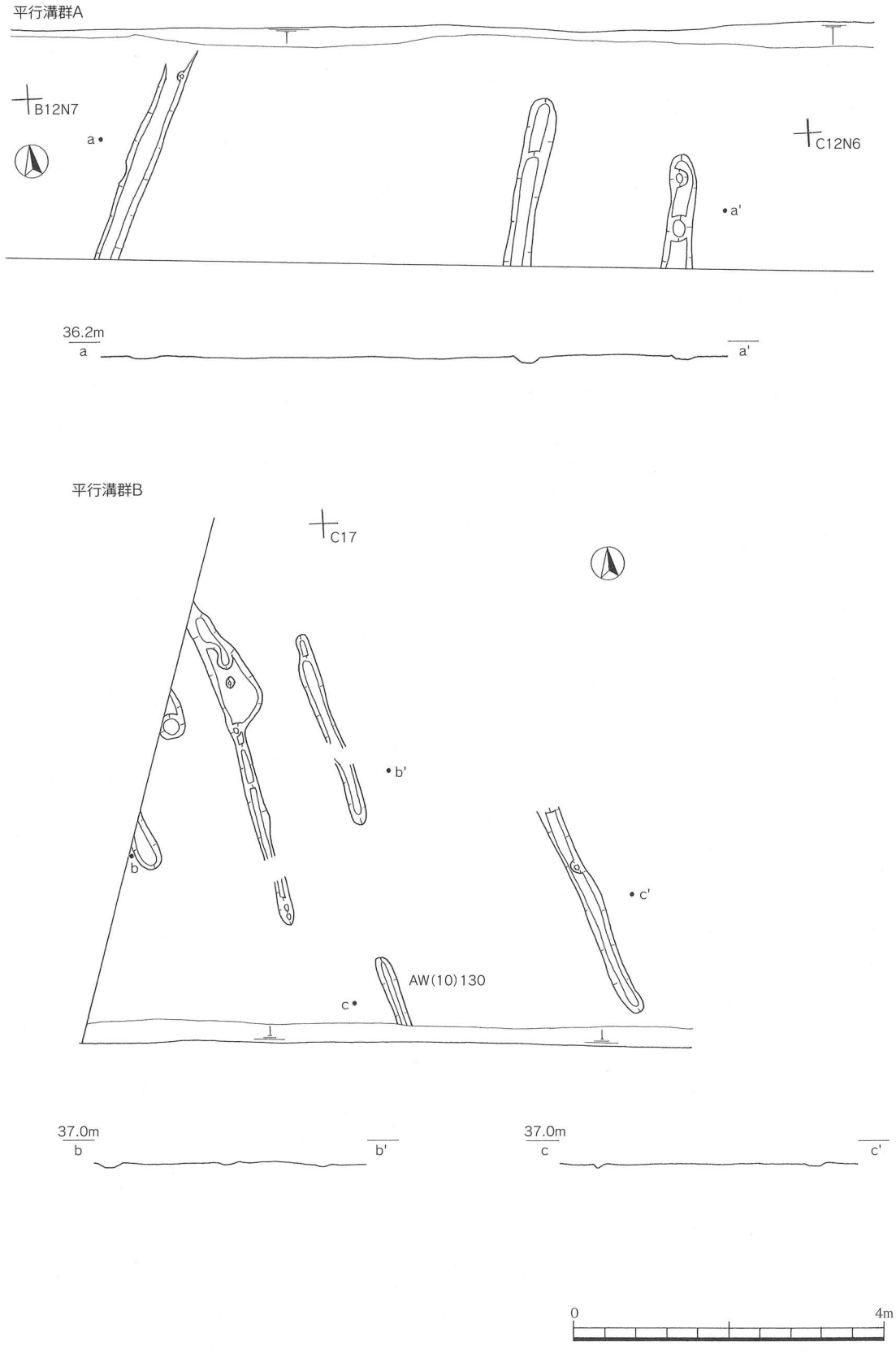
第10図　粟田遺跡(第10次)平面図(2)　(1/200)



第11図　縄文・古代遺構全体図　(1/500)

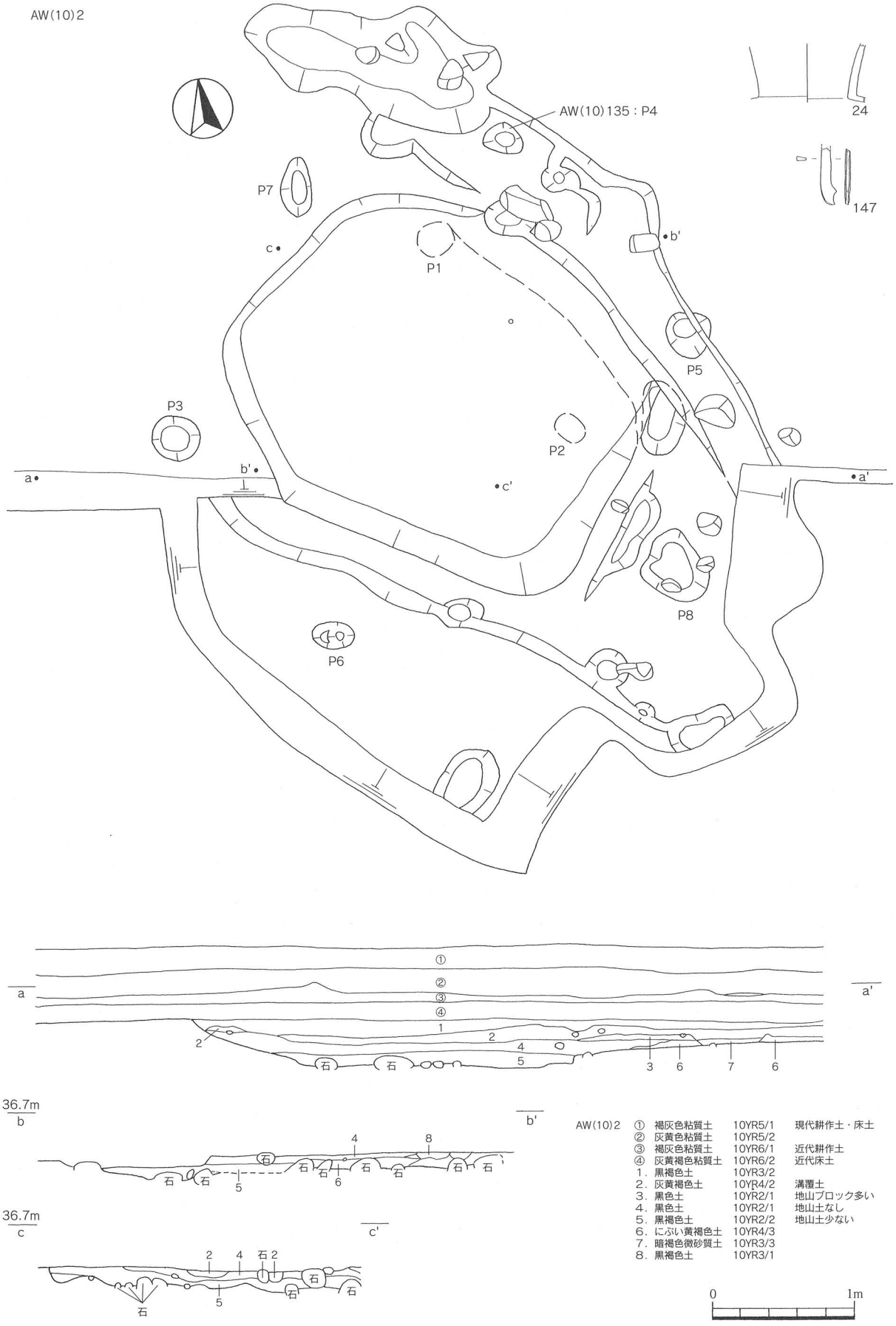


第12図　遺構実測図　ピットAW⑽20・26・27・48・49・50・51・100、土 坑AW⑽78　(1/40)

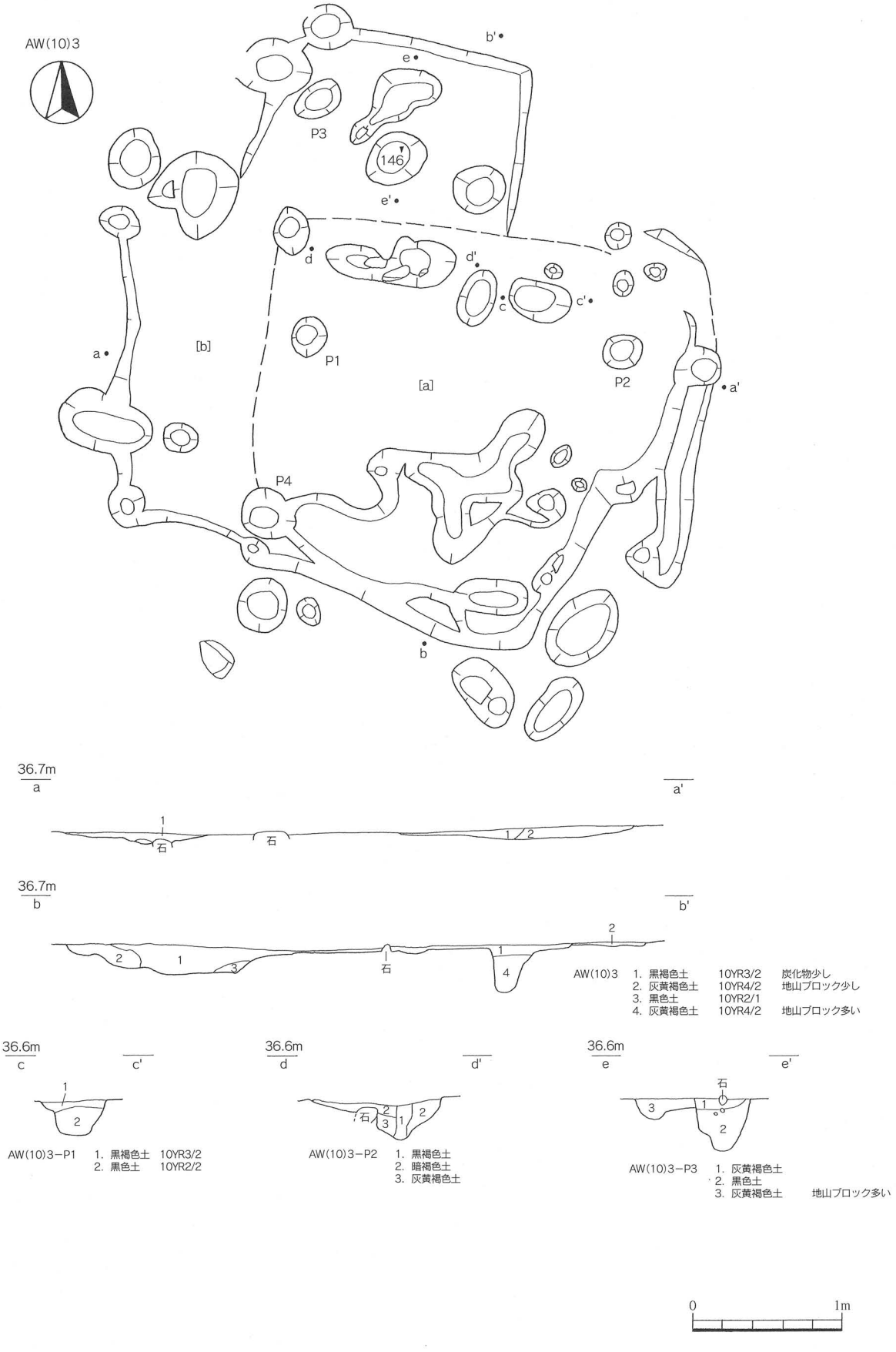


第13図　遺構実測図　AW⑽平行溝群　(1/80)

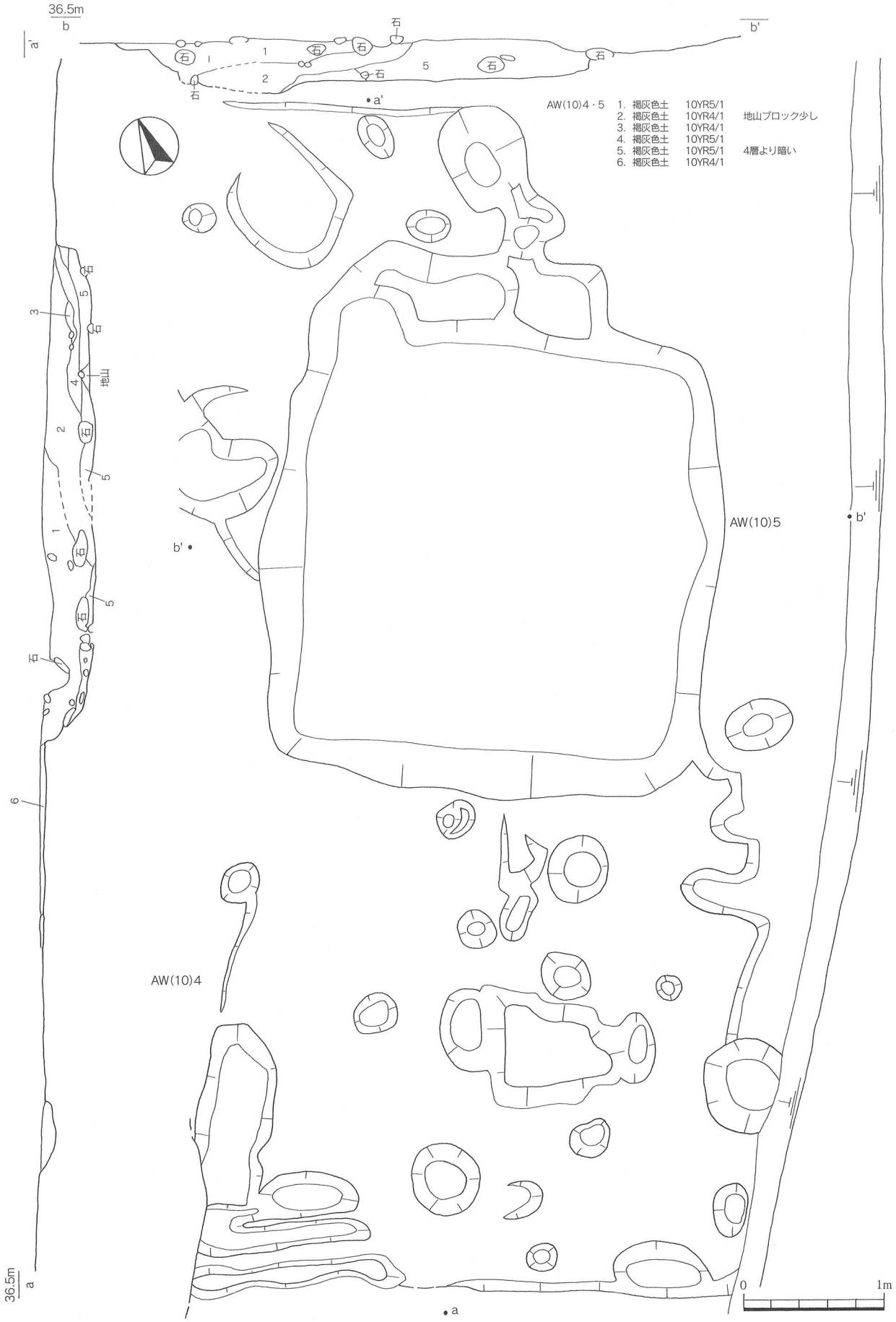
第14図　中世・近世以降遺構全体図　(1/500)



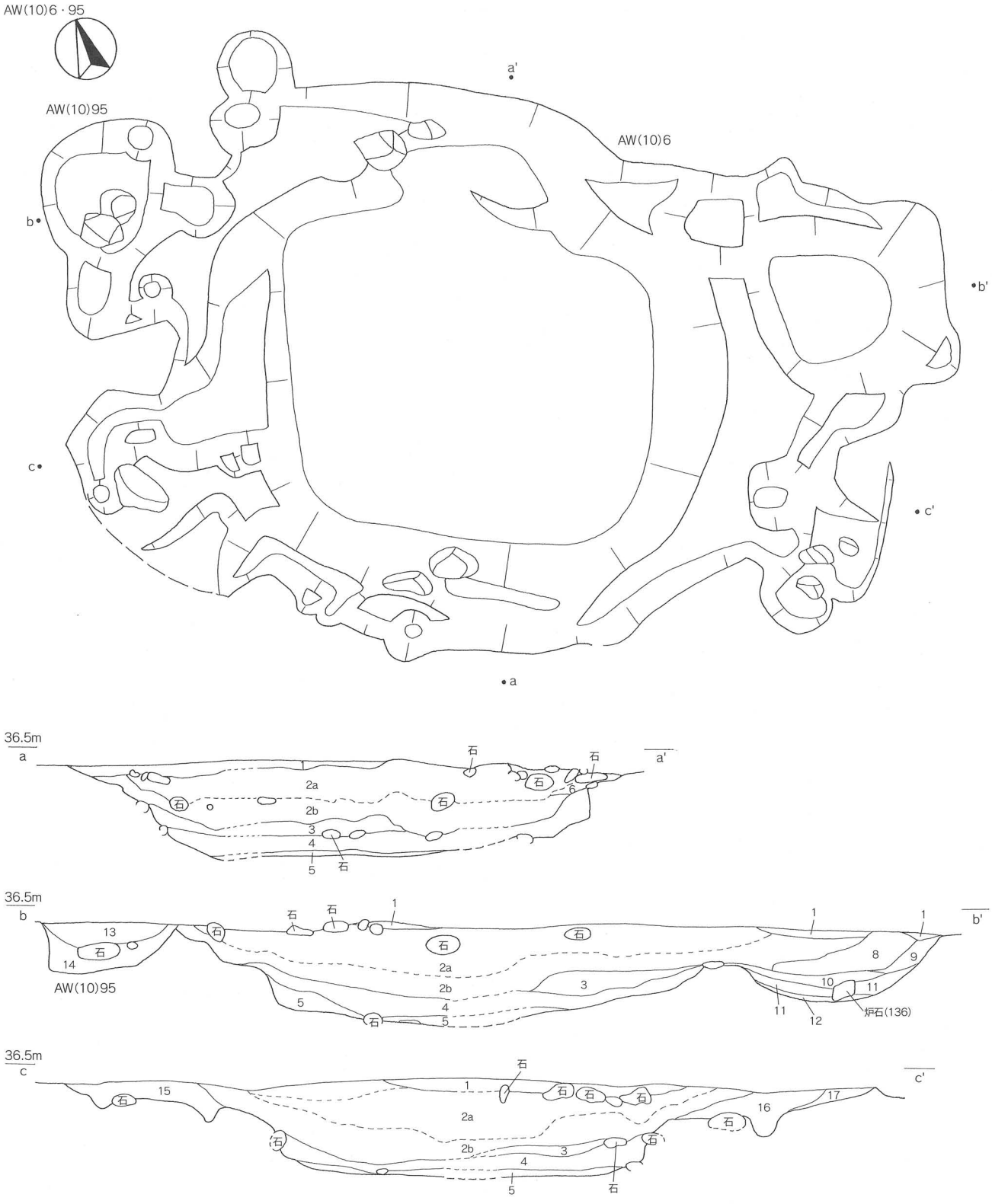
第15図　遺構実測図　竪穴建物AW⑽２　(1/40)



第16図　遺構実測図　竪穴建物AW⑽3　(1/40)



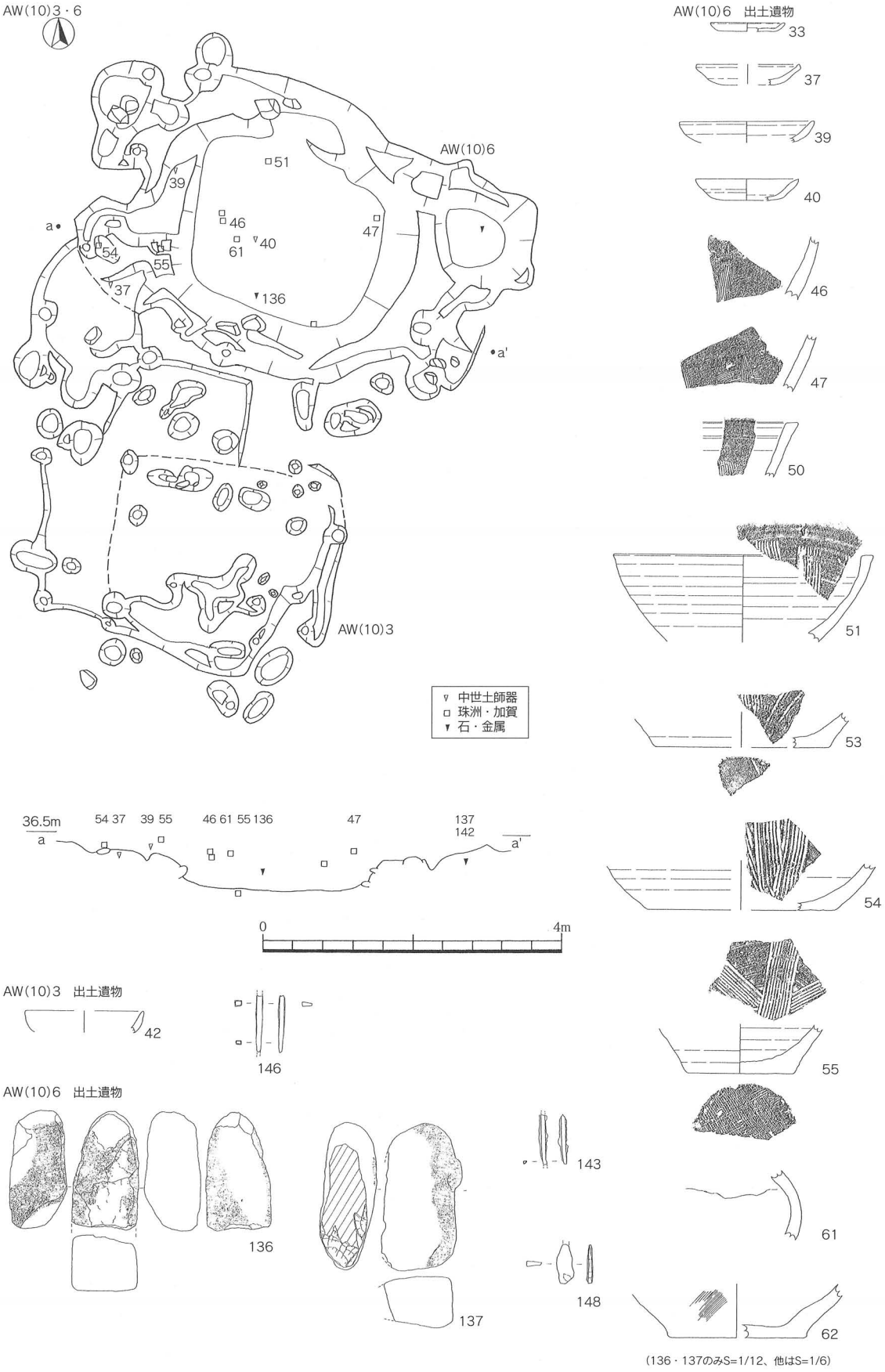
第17図　遺構実測図　竪穴建物AW⑽４・竪穴状遺構AW⑽５　(1/40)



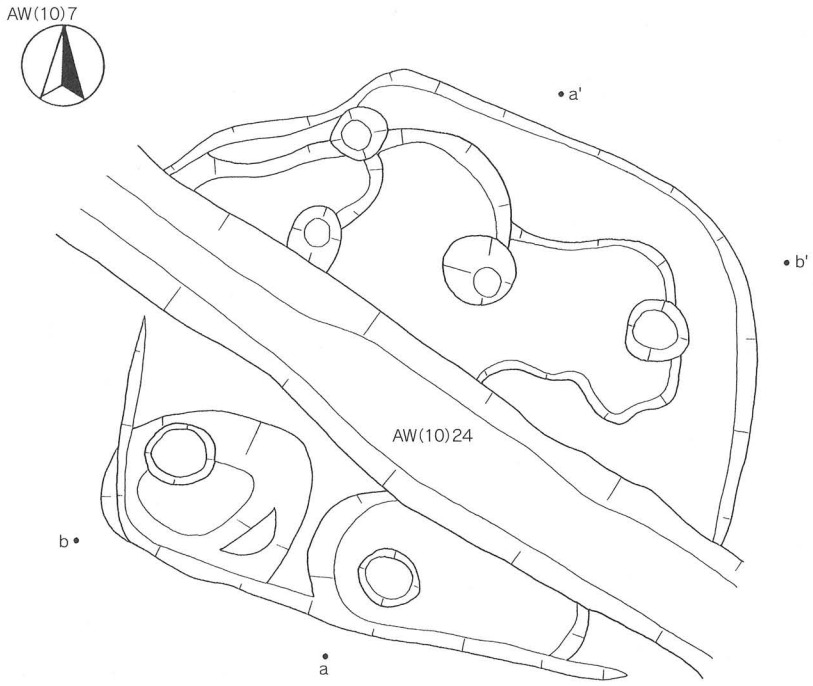
AW(10)6	1.	褐灰色土	10YR4/1		9.	褐灰色土	10YR5/1	8層より明るい
	2a.	褐灰色土	10YR5/1	礫集中	10.	褐灰色土	10YR6/1	炭化物・焼土多い
	2b.	褐灰色土	10YR5/1	礫なし	11.	褐灰色土	10YR4/1	炭化物多い
	3.	褐灰色土	10YR5/1	地山粒多い	12.	褐灰色土	10YR4/1	
	4.	褐灰色土	10YR5/1	微砂質	13.	褐灰色土	10YR4/1	} AW(10)95
	5.	褐灰色土	10YR5/1		14.	褐灰色土	10YR4/1	微砂質
	6.	褐灰色土	10YR5/1		15.	褐灰色土	10YR4/1	炭化物少し
	7.	褐灰色土	10YR5/1		16.	褐灰色土	10YR4/1	
	8.	褐灰色土	10YR5/1	3層に似る	17.	黄褐色土		地山質

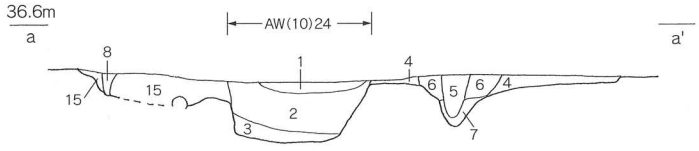
0 1m

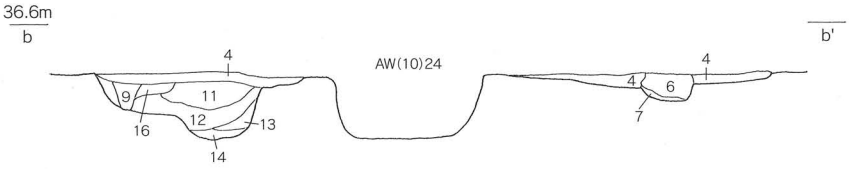
第18図　遺構実測図　竪穴状遺構AW(10)6　(1/40)



第19図　遺物出土状況　竪穴建物AW(10)3・6　(1/80)

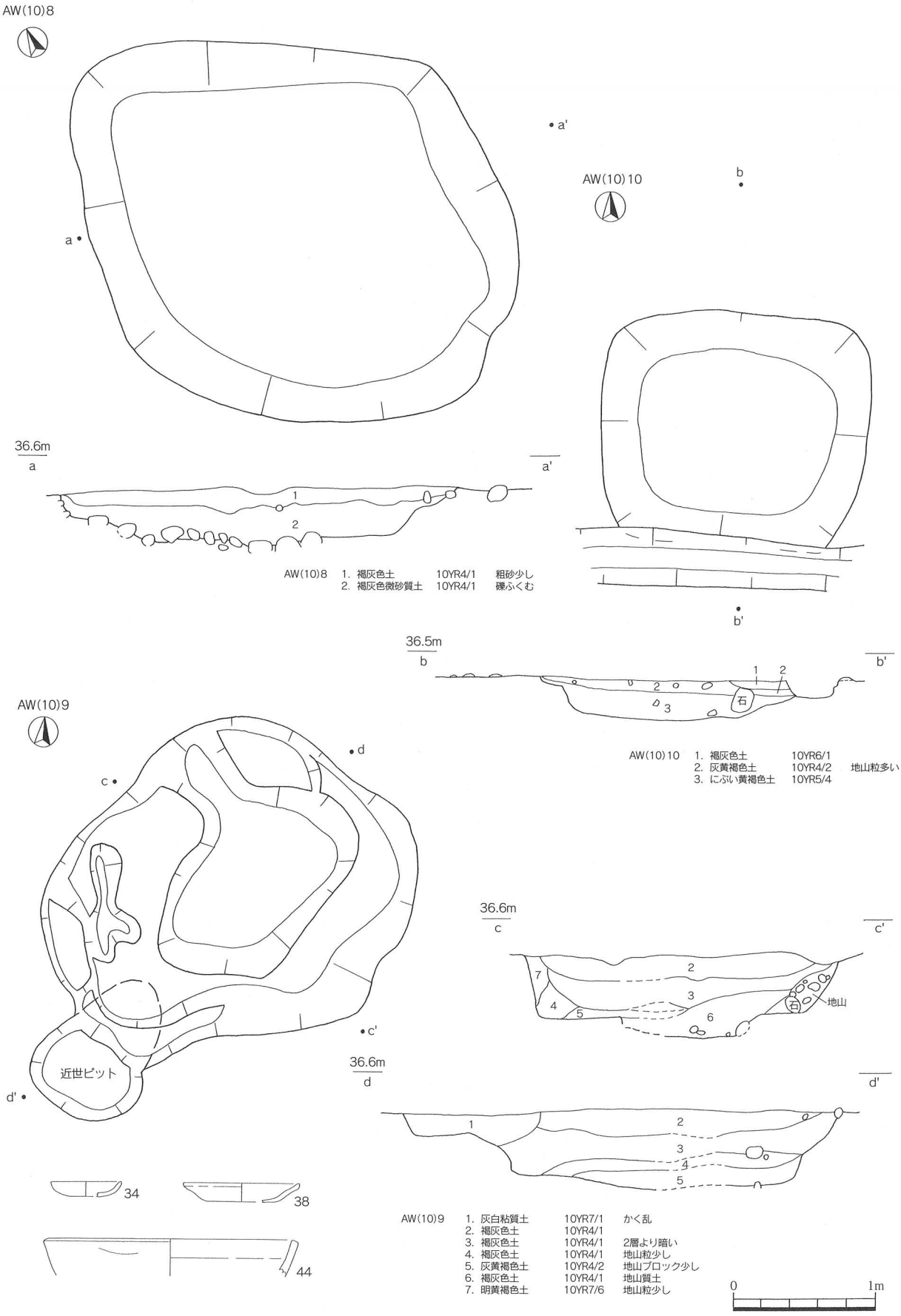




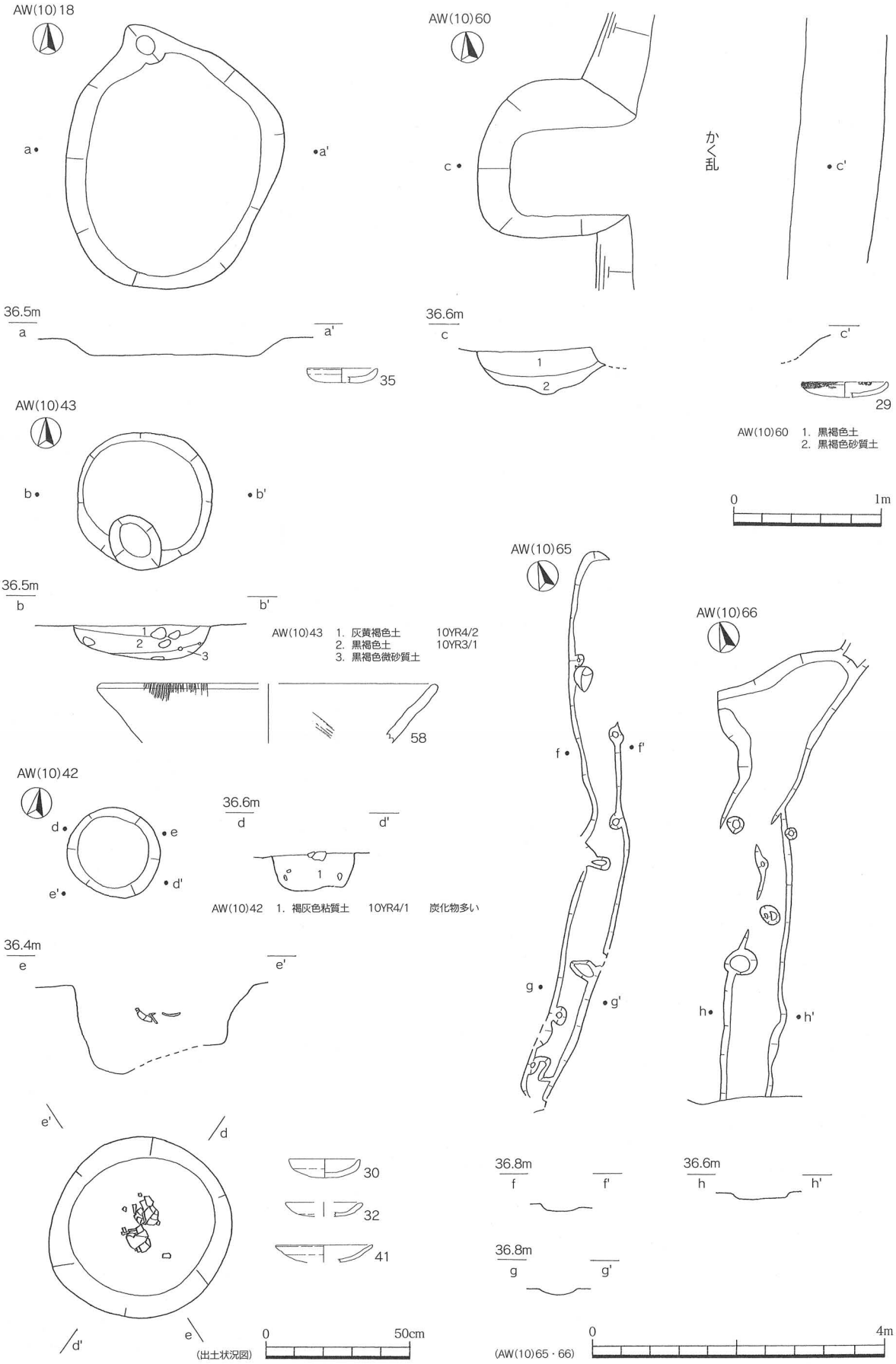


AW(10)7	1. 褐灰色粘質土	10YR5/1	AW(10)24
	2. 褐灰色シルト質土	10YR5/1	
	3. 褐灰色粘質土	10YR5/1	
	4. 褐灰色土	10YR4/1	
	5. 暗赤灰色土	2.5YR3/1	
	6. 褐灰色土	10YR4/1	地山ブロック少し
	7. 灰黄褐色土	10YR6/2	
	8. 黒褐色土	10YR3/1	
	9. 黒褐色土	10YR3/1	
	10. 黒褐色土	10YR3/2	
	11. 黒褐色土	10YR3/2	
	12. 黒褐色土	10YR3/1	
	13. 黒褐色土	10YR3/1	地山ブロック多い
	14. 黒褐色土	10YR3/3	地山粒多い
	15. 暗褐色土	10YR3/3	

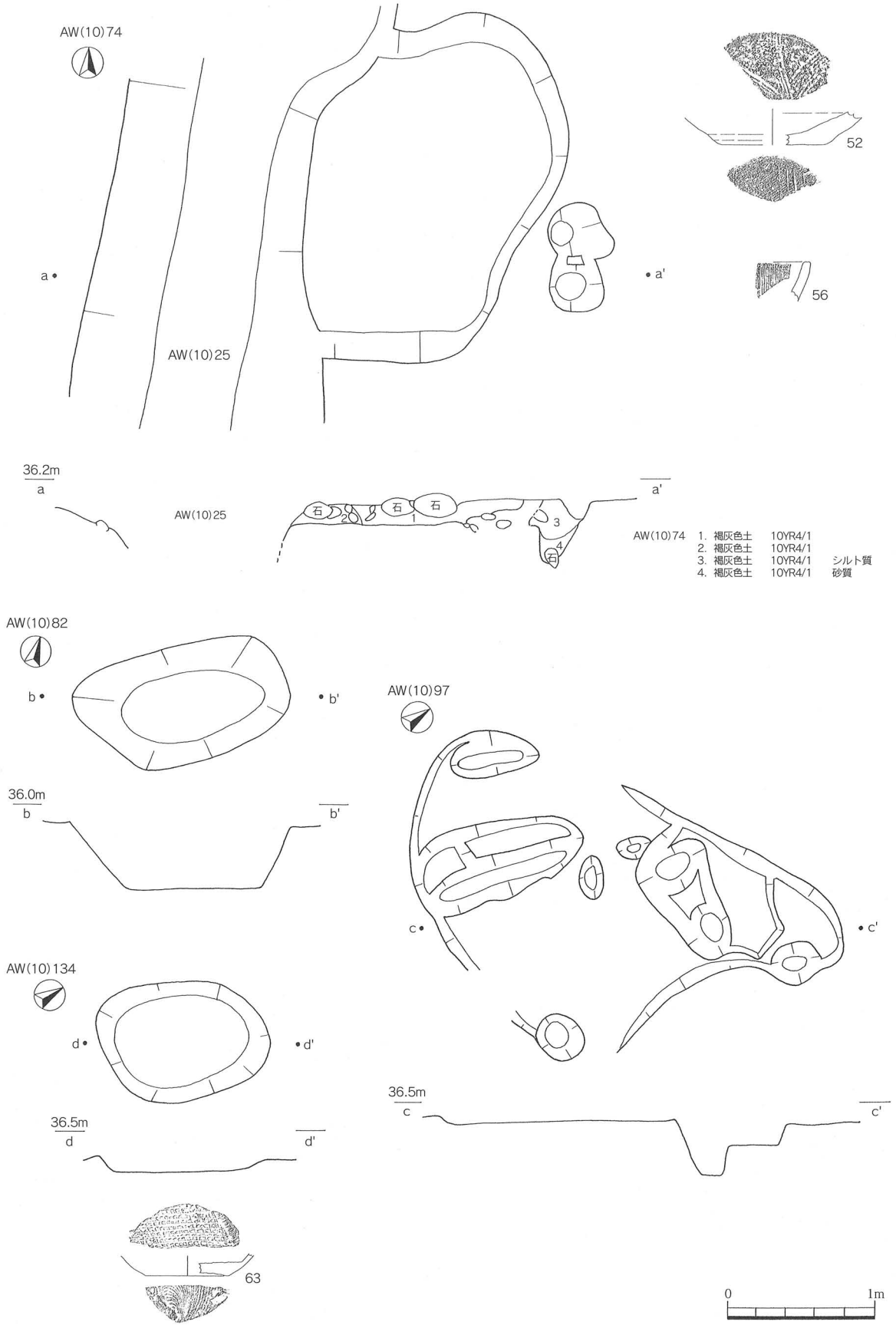
第20図　遺構実測図　竪穴建物AW⑽7　(1/40)



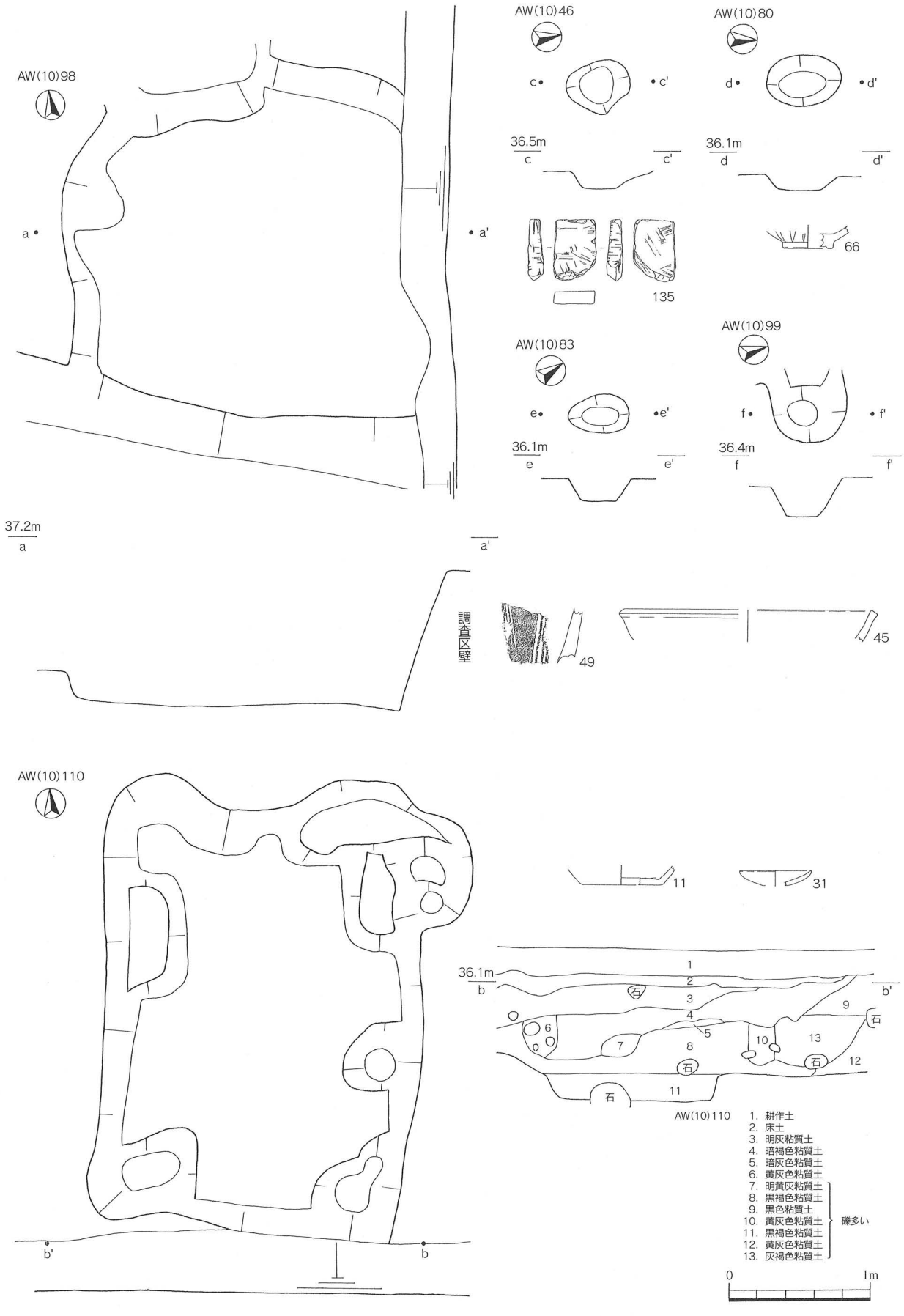
第21図　遺構実測図　竪穴状遺構AW⑽8、土坑AW⑽9・10　(1/40)



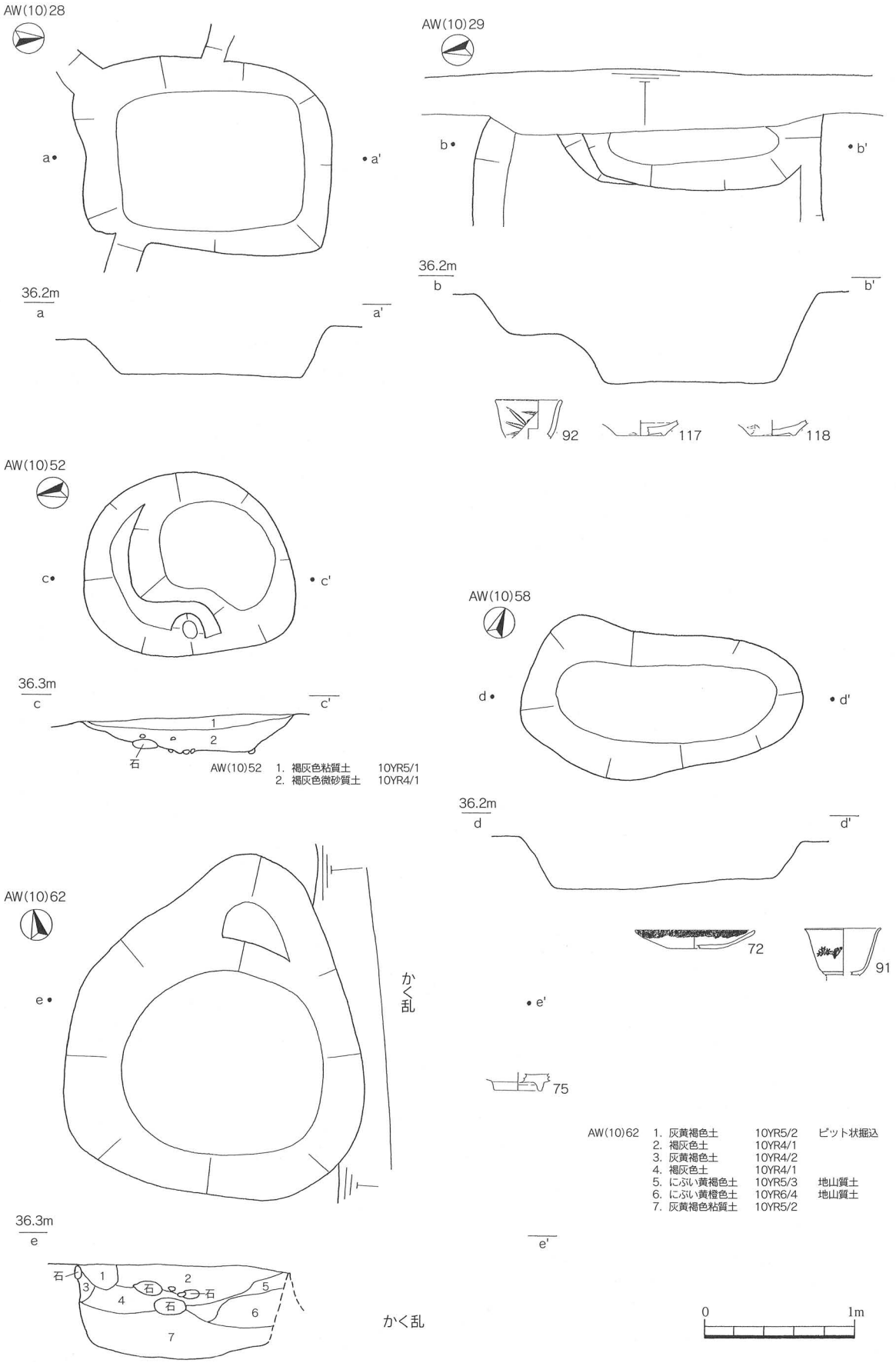
第22図　遺構実測図　土坑AW⑽18・43・60、溝AW⑽65・66、埋納遺構AW⑽42　(1/80、1/40、1/20)



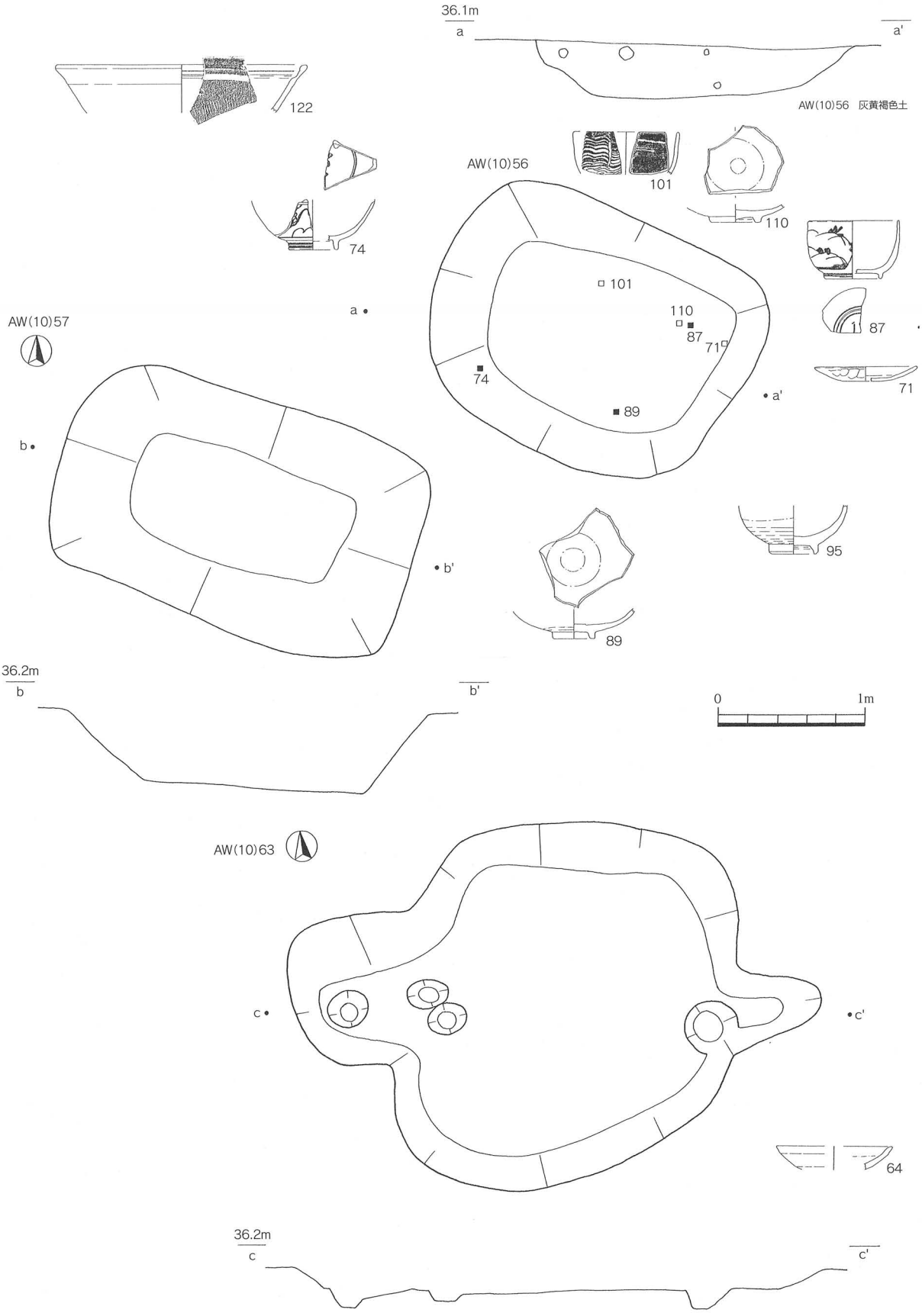
第23図　遺構実測図　土坑AW⑽74・82・97・134　(1/40)



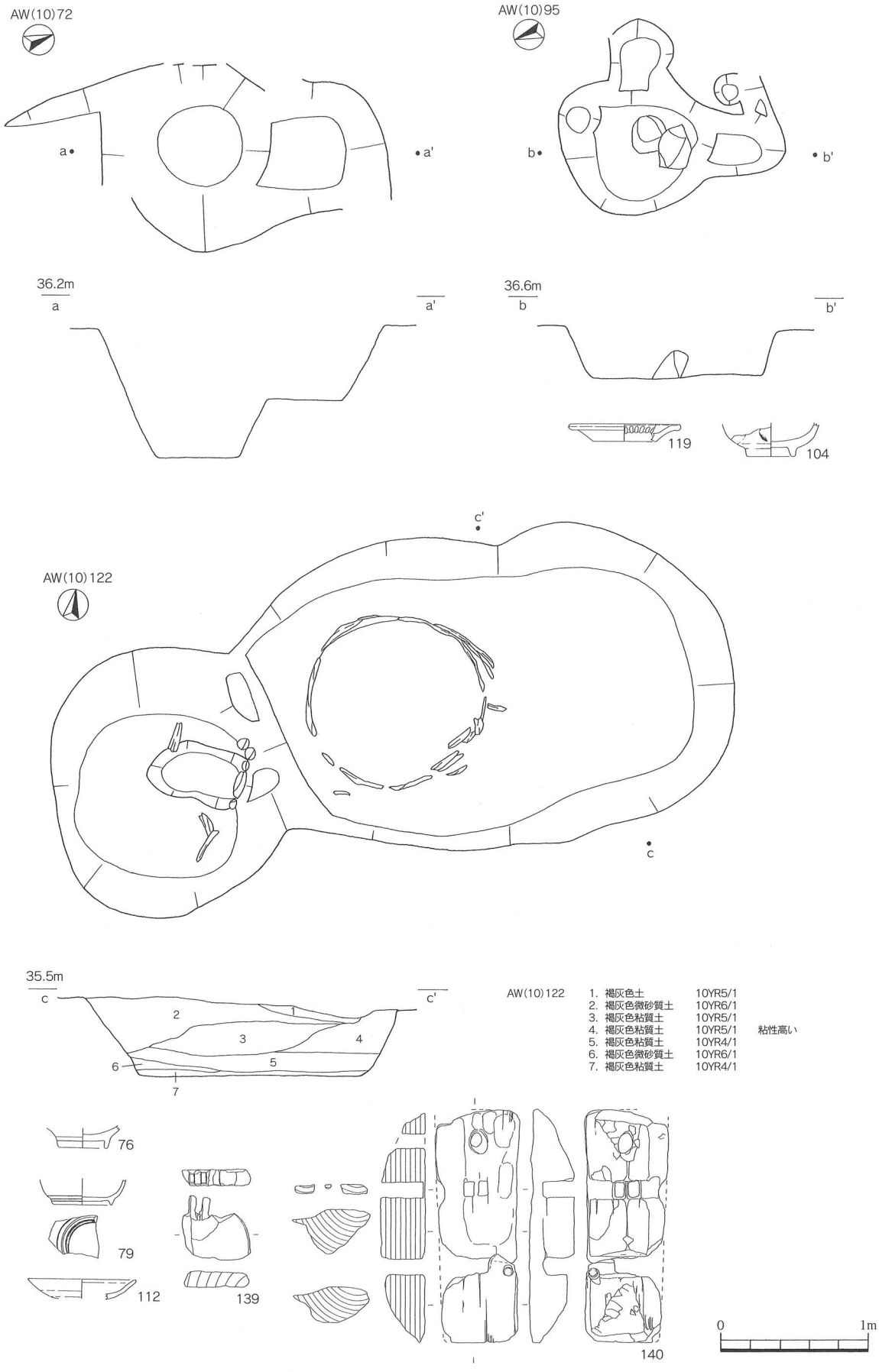
第24図　遺構実測図　土坑AW⑽98・110、ピットAW⑽46・80・83・99　(1/40)



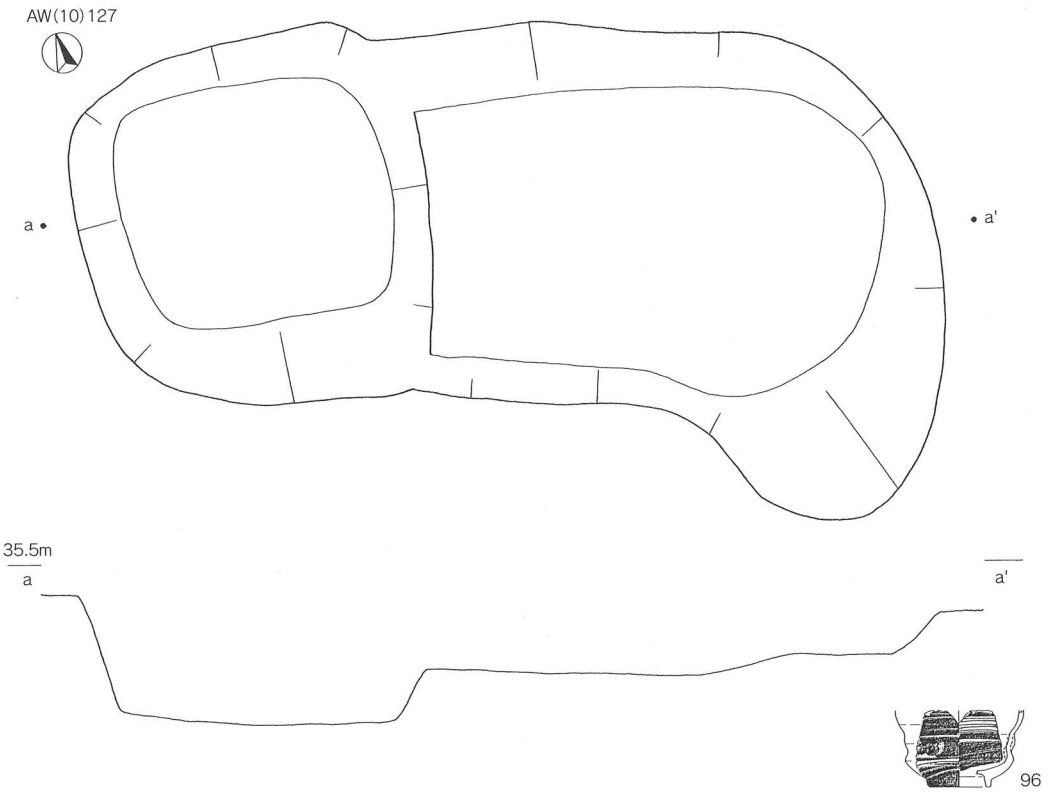
第25図　遺構実測図　土坑AW⑽28・29・52・58・62　(1/40)

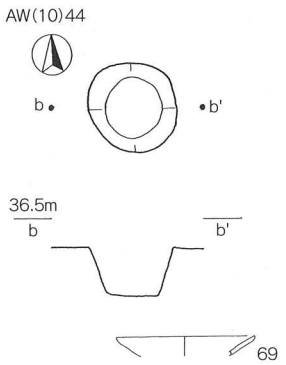


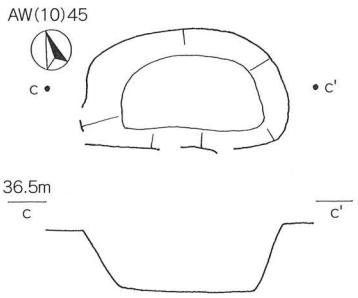
第26図　遺構実測図　土坑AW⑽56・57・63　(1/40)

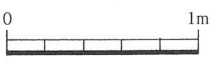


第27図　遺構実測図　土坑AW(10)72・95・122　(1/40)

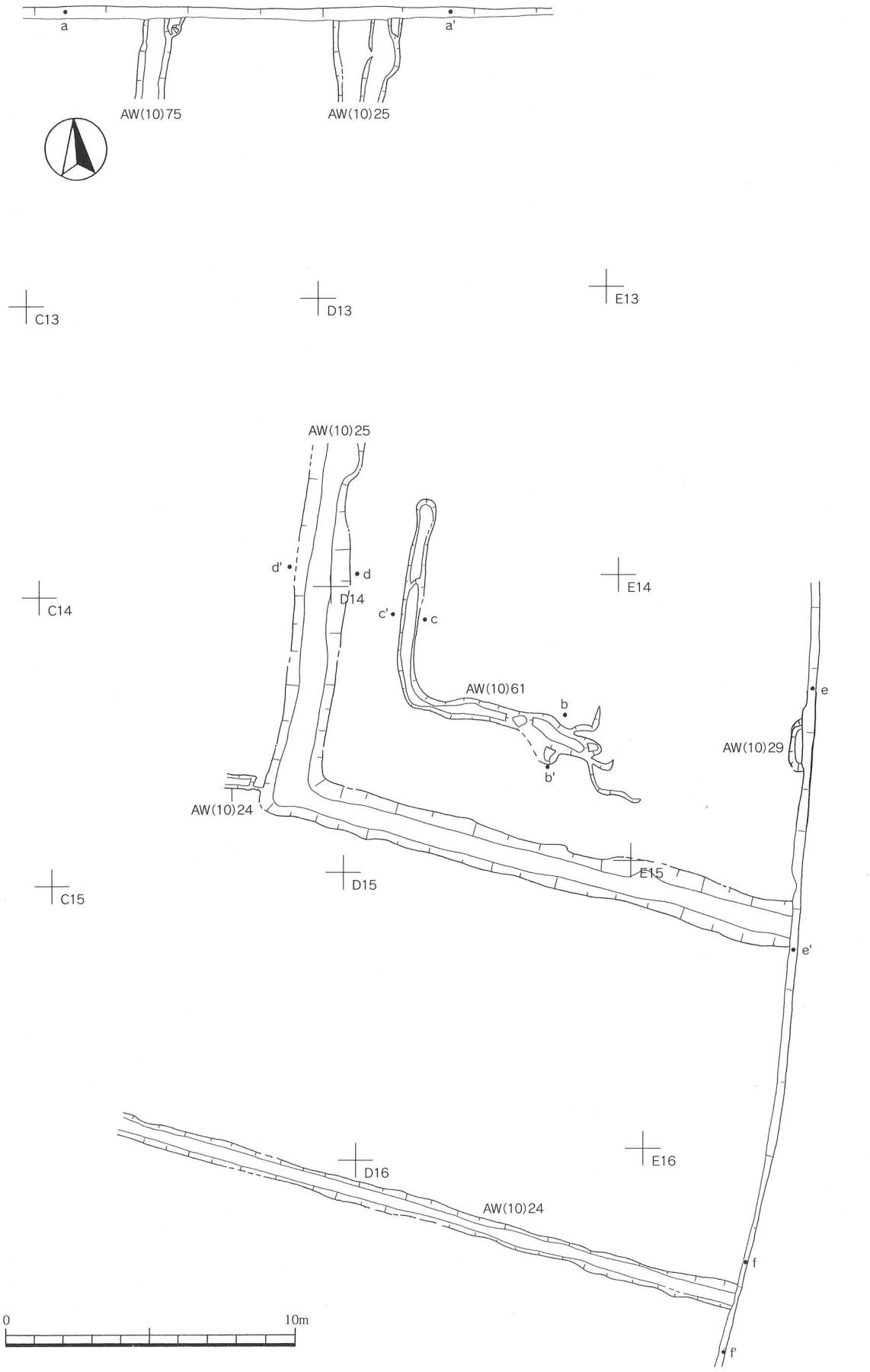




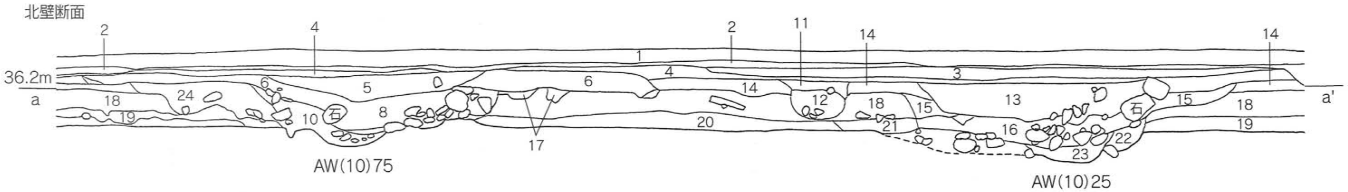




第28図　遺構実測図　土坑AW(10)127、ピットAW(10)44・45　(1/40)

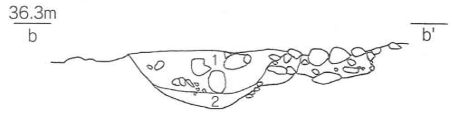


第29図　遺構実測図　溝AW⑽24・25・61・75(1)　(1/200)



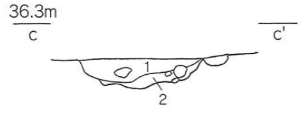
南調査区北壁

1.	10YR4/1	粘質土	
2.	10YR5/1	粘質土	
3.	10YR5/2	粘質土	
4.	10YR6/6	粘質土	
5.	10YR4/2	粘質土	AW(10)75覆土
6.	10YR5/2	粘質土	
7.	10YR5/1	粘質土	
8.	10YR6/4	粘質土	AW(10)75覆土
9.	10YR5/2	微砂質土	
10.	10YR5/2	粘質土	AW(10)75覆土
11.	10YR4/2	粘質土	
12.	10YR5/2	粘質土	
13.	10YR4/2		AW(10)25覆土
14.	10YR3/1		AW(10)25覆土
15.	10YR4/1		AW(10)25覆土
16.	10YR6/3	シルト質	AW(10)25覆土
17.	10YR4/2		
18.	10YR3/1		AW(10)25覆土
19.	10YR2/1		
20.	10YR5/3		
21.	10YR4/1		AW(10)25覆土
22.	10YR5/1		AW(10)25覆土
23.	10YR5/1	粘質土	AW(10)25覆土
24.	10YR4/1	粘質土	



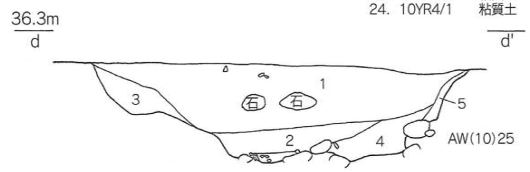
AW(10)61 b断面

1.	黒褐色土	10YR3/1
2.	黒褐色微砂質土	10YR3/1

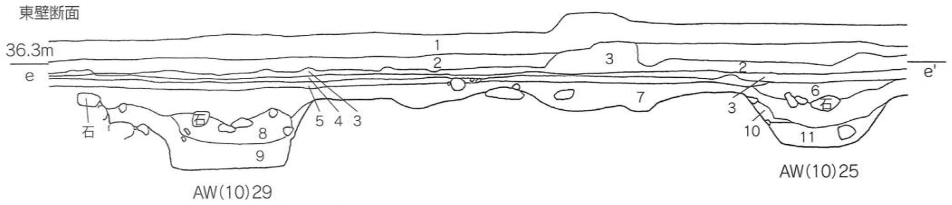


AW(10)61 c断面

1.	褐灰色土	10YR4/1
2.	褐灰色土	10YR4/1

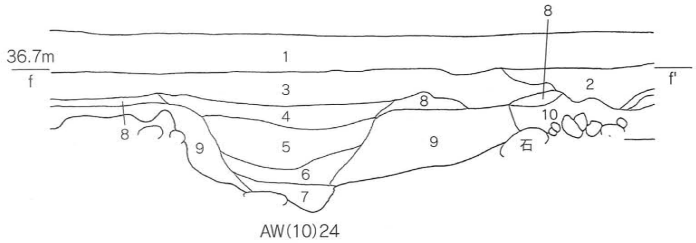


1.	褐灰色土	
2.	褐灰色土	
3.	褐灰色土	
4.	褐灰色土	



AW(10)25・29

1.	青褐灰色土		現代耕作土・床土
2.	青褐灰色土		近代(新)耕作土
3.	青褐灰色土		近代(新)床土
4.	褐灰色土	10YR5/1	近代(旧)耕作土
5.	青褐灰色土		近代(旧)床土
6.	褐灰色土	10YR5/1	AW(10)25覆土
7.	褐灰色土	10YR4/1	
8.	褐灰色土	10YR4/1	AW(10)29覆土
9.	褐灰色土	10YR4/1	AW(10)29覆土
10.	褐灰色土	10YR4/1	
11.	褐灰色砂質土	10YR4/1	AW(10)25覆土



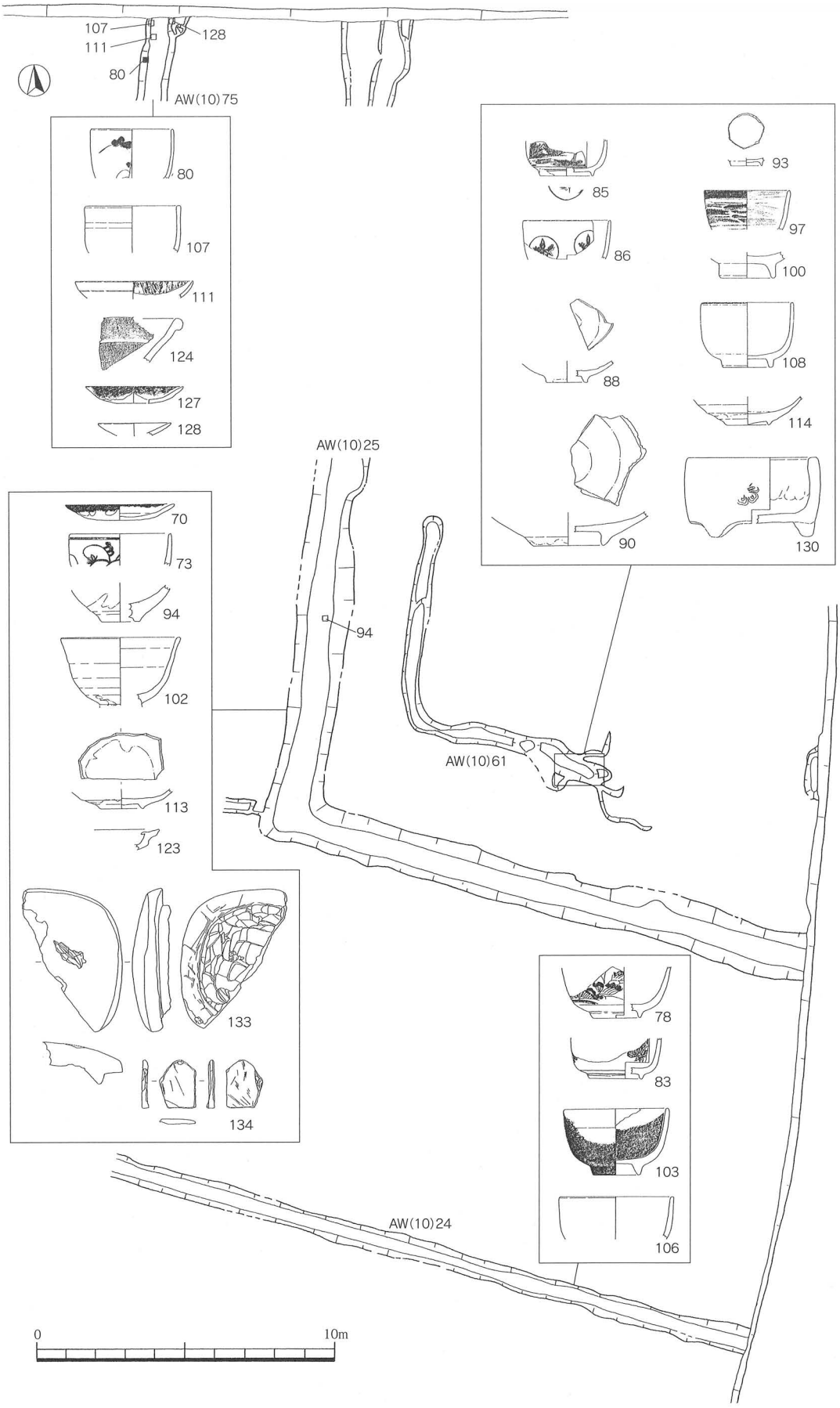
AW(10)24

1.	青灰色粘質土	
2.	青灰色粘質土	
3.	黄青灰色粘質土	
4.	褐灰色土	10YR6/1
5.	褐灰色粘質土	10YR6/1
6.	灰色粘質土	
7.	灰色粘質土	
8.	錆沈着層	
9.	褐灰色土	10YR4/1

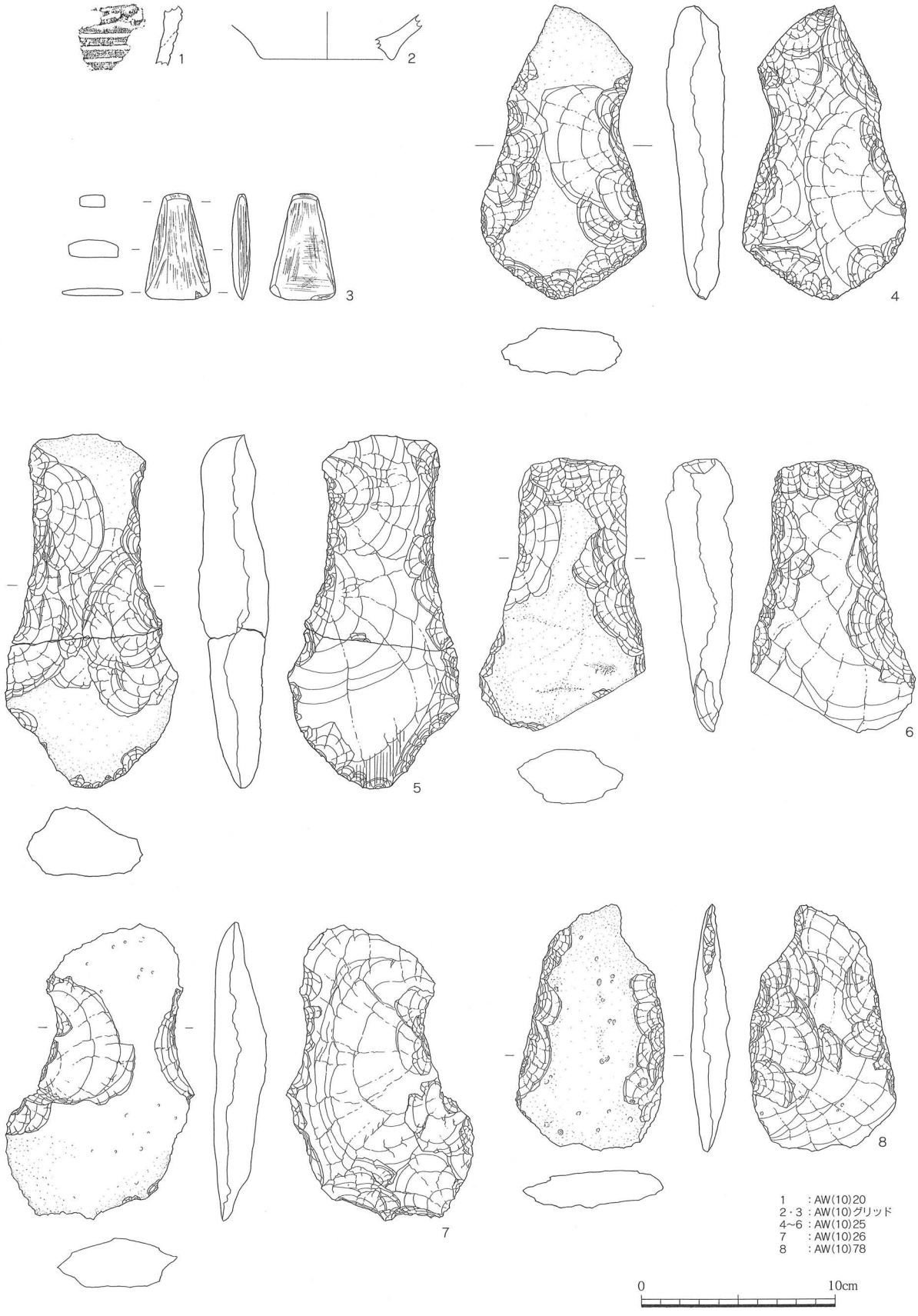
(b～d・f断面) 0 (1：40) 1m

(a・e断面) 0 (1：80) 4m

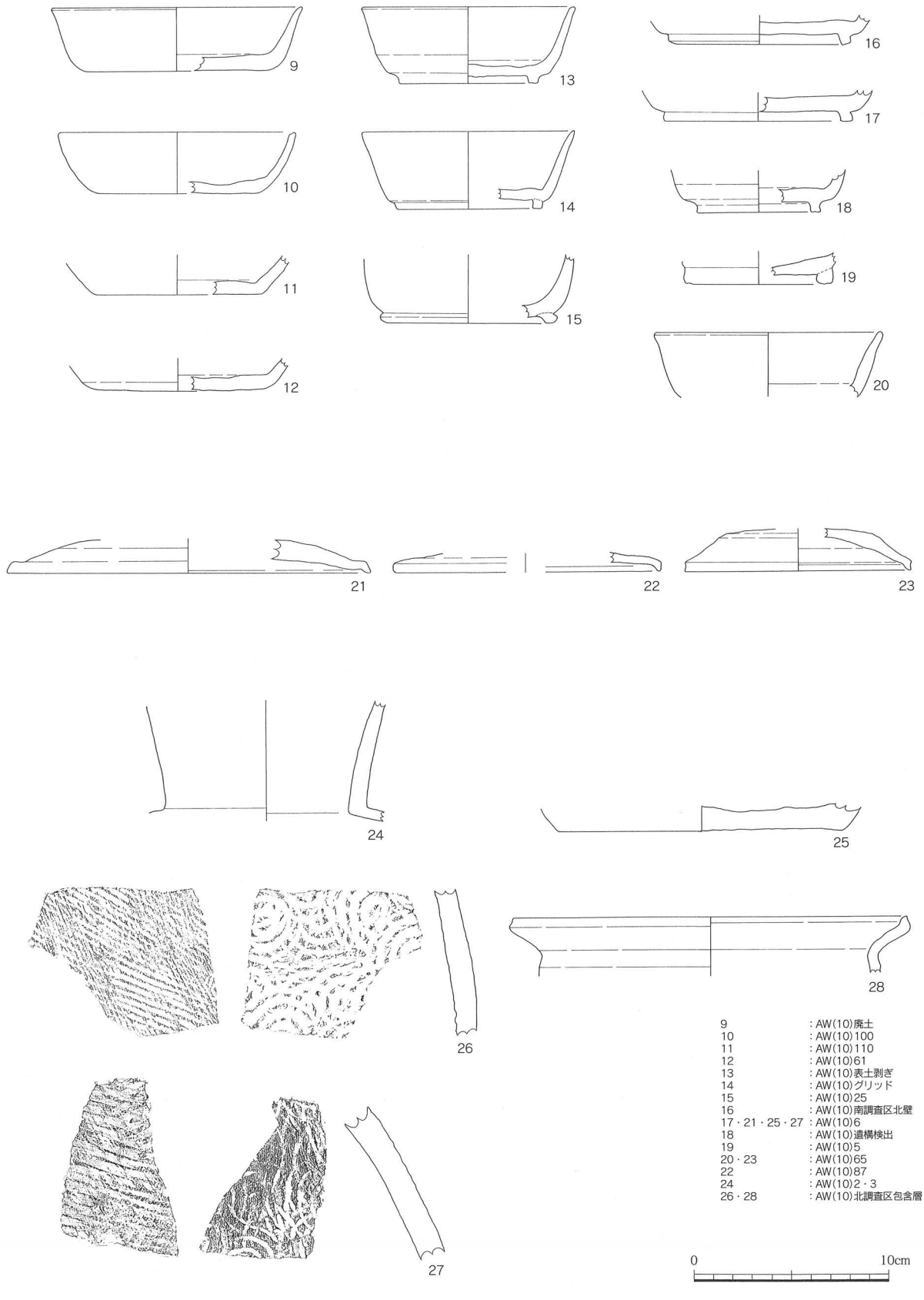
第30図　遺構実測図　溝AW(10)24・25・61・75(2)　(1/80、1/40)



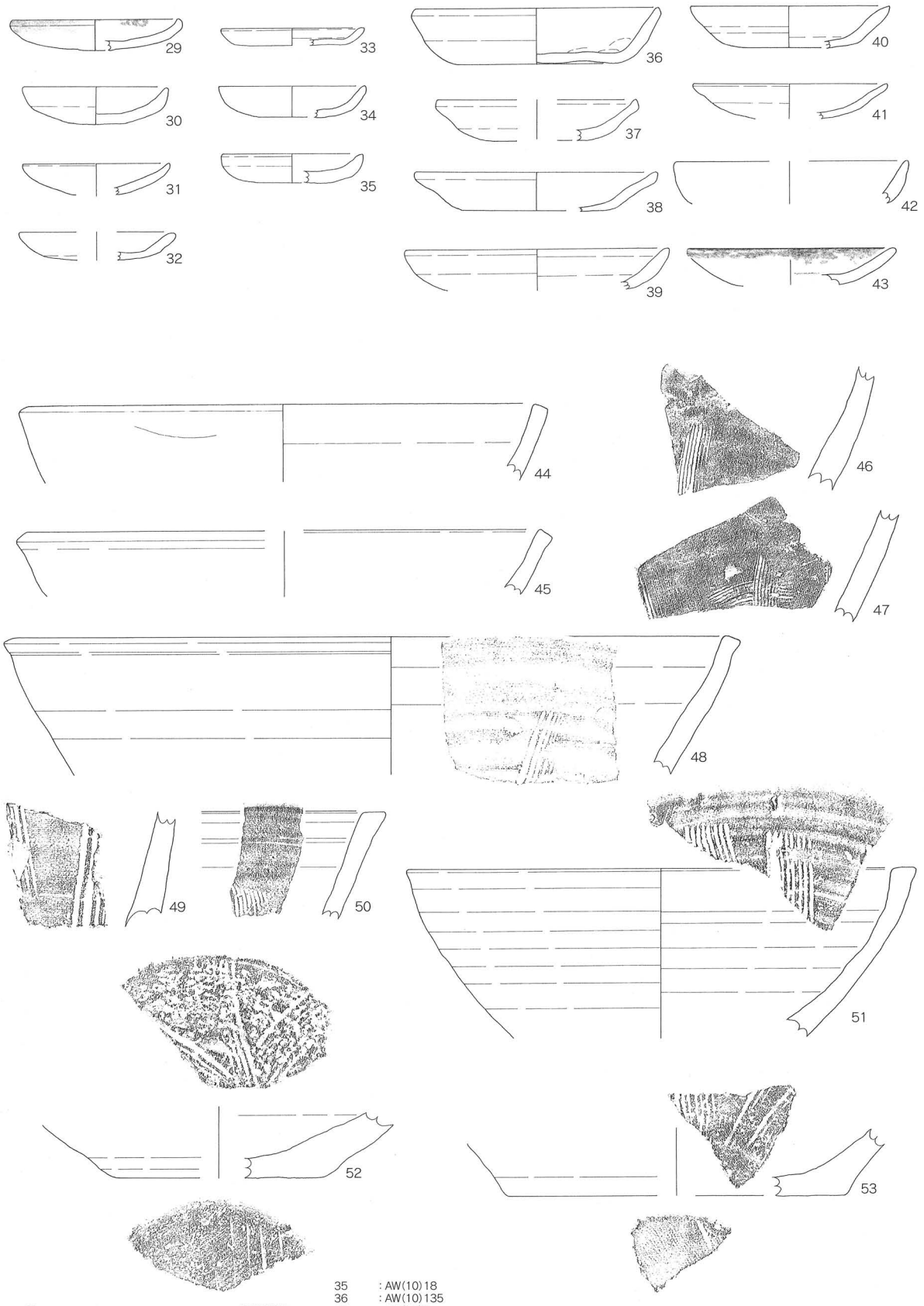
第31図　遺物出土状況　溝AW⑽24・25・61・75　(1/200)



第32図　粟田遺跡(第10次)　遺物実測図(1)　(1/3)

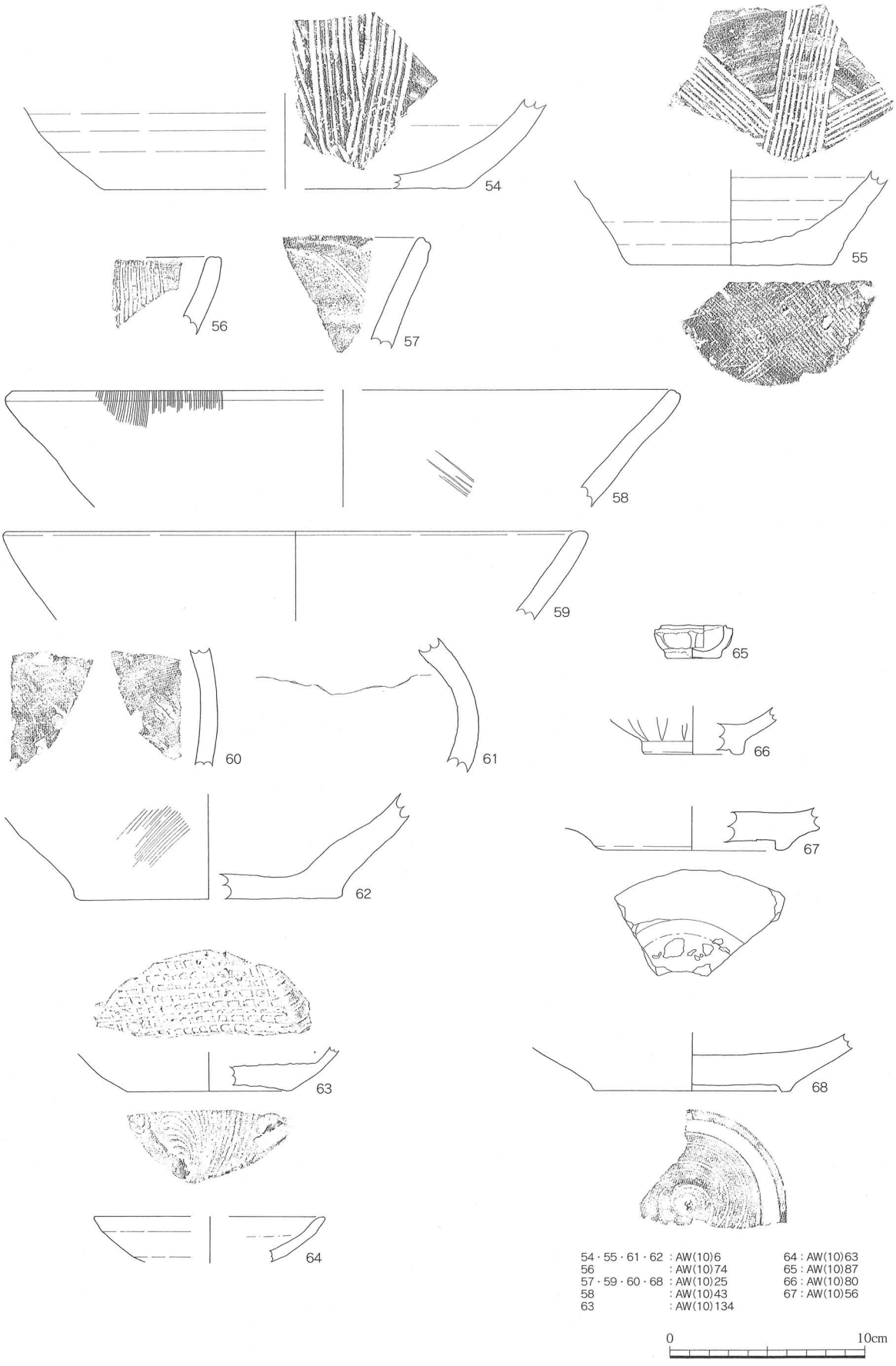


第33図　粟田遺跡(第10次)　遺物実測図(2)　(1/3)

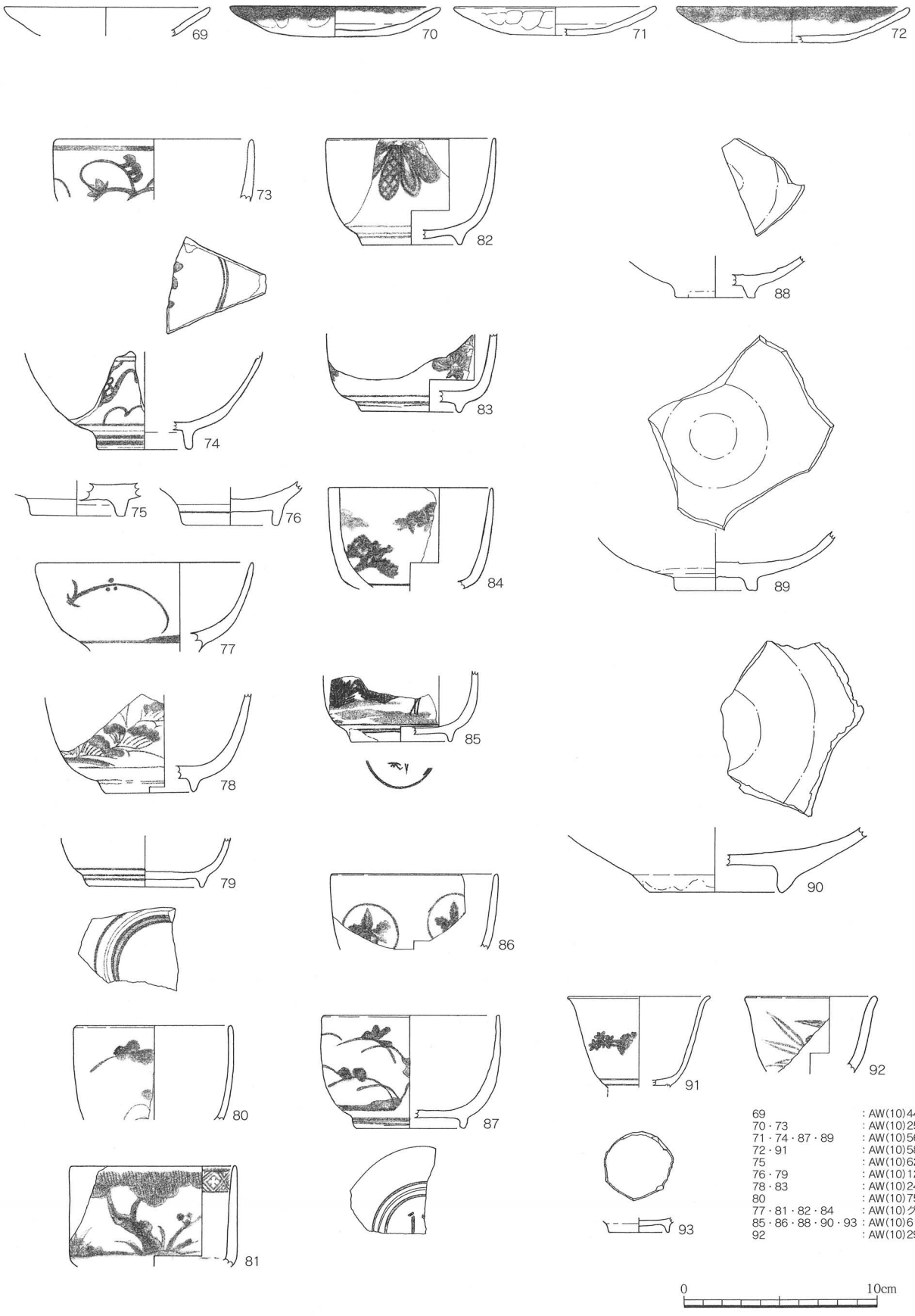


29	: AW(10)60	35	: AW(10)18
30・32・41	: AW(10)42	36	: AW(10)135
31	: AW(10)110	42	: AW(10)3
33・37・39・40・46・47・50・51・53	: AW(10)6	43	: AW(10)25
34・38・44	: AW(10)9	45・49	: AW(10)98
		48	: AW(10)75
		52	: AW(10)74

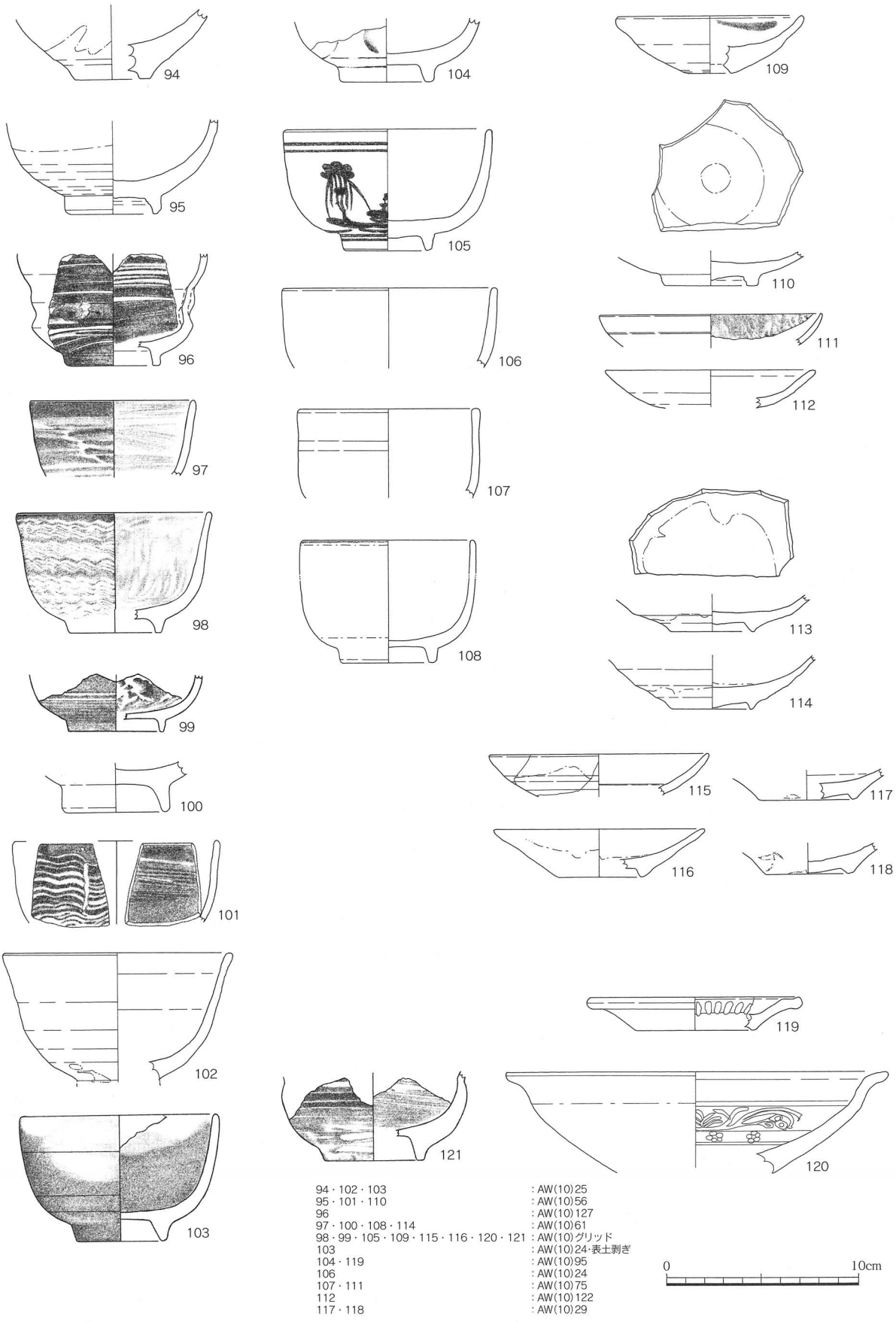
第34図　粟田遺跡（第10次）　遺物実測図(3)　(1/3)



第35図　粟田遺跡(第10次)　遺物実測図(4)　(1/3)

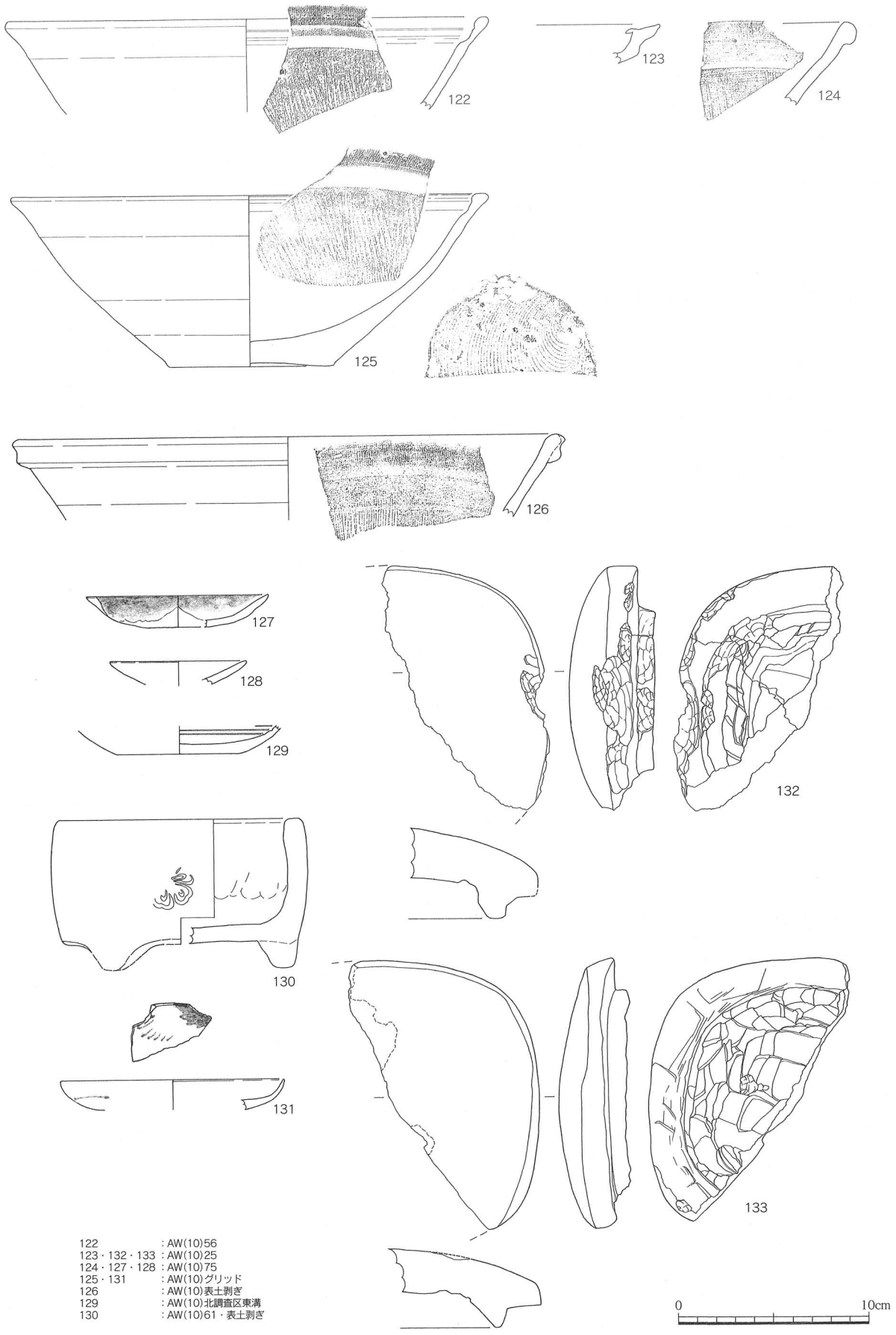


第36図　栗田遺跡（第10次）　遺物実測図(5)　(1/3)



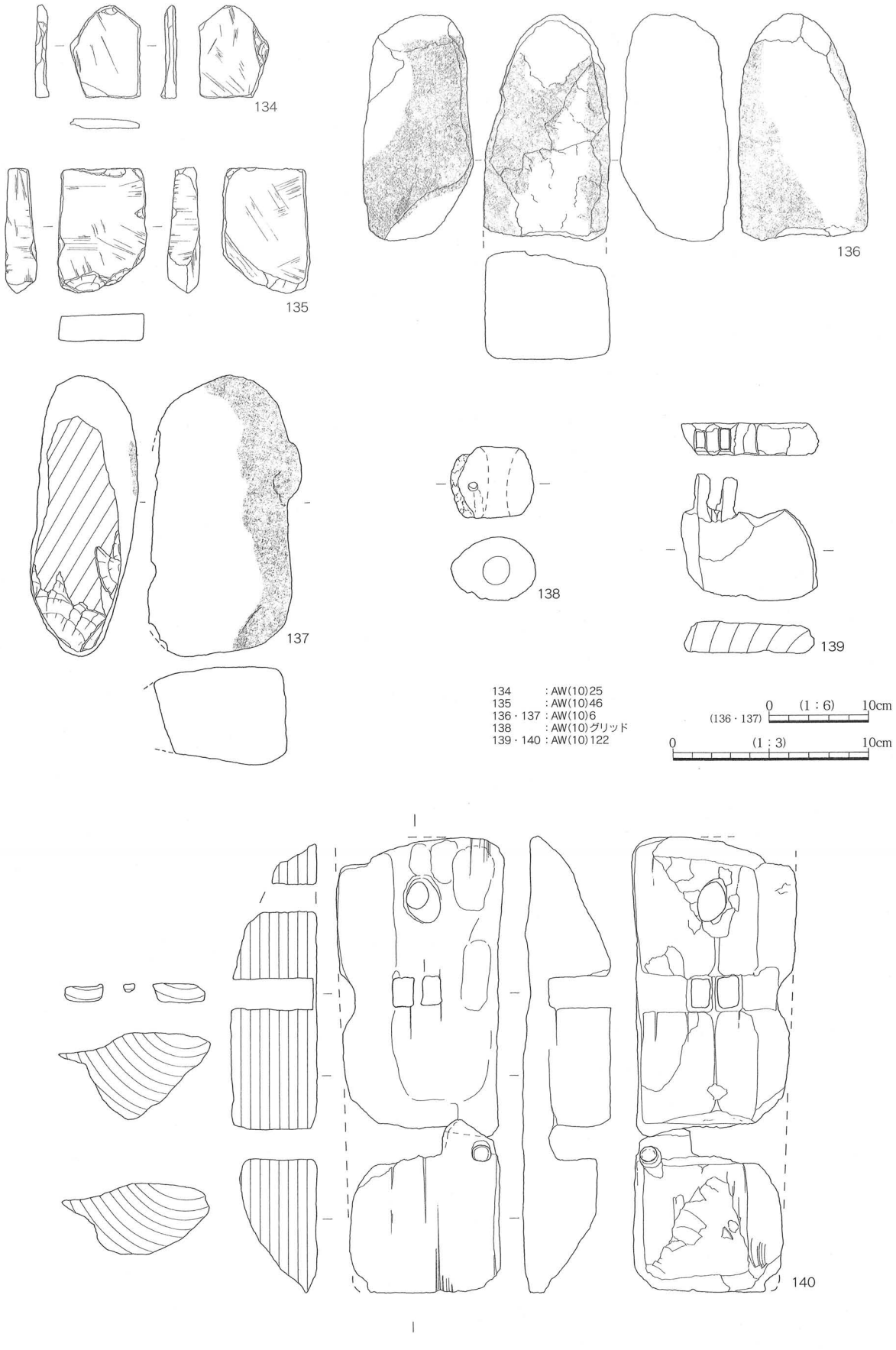
94・102・103 : AW(10)25
95・101・110 : AW(10)56
96 : AW(10)127
97・100・108・114 : AW(10)61
98・99・105・109・115・116・120・121 : AW(10)グリッド
103 : AW(10)24･表土剥ぎ
104・119 : AW(10)95
106 : AW(10)24
107・111 : AW(10)75
112 : AW(10)122
117・118 : AW(10)29

第37図　粟田遺跡（第10次）　遺物実測図(6)　(1/3)

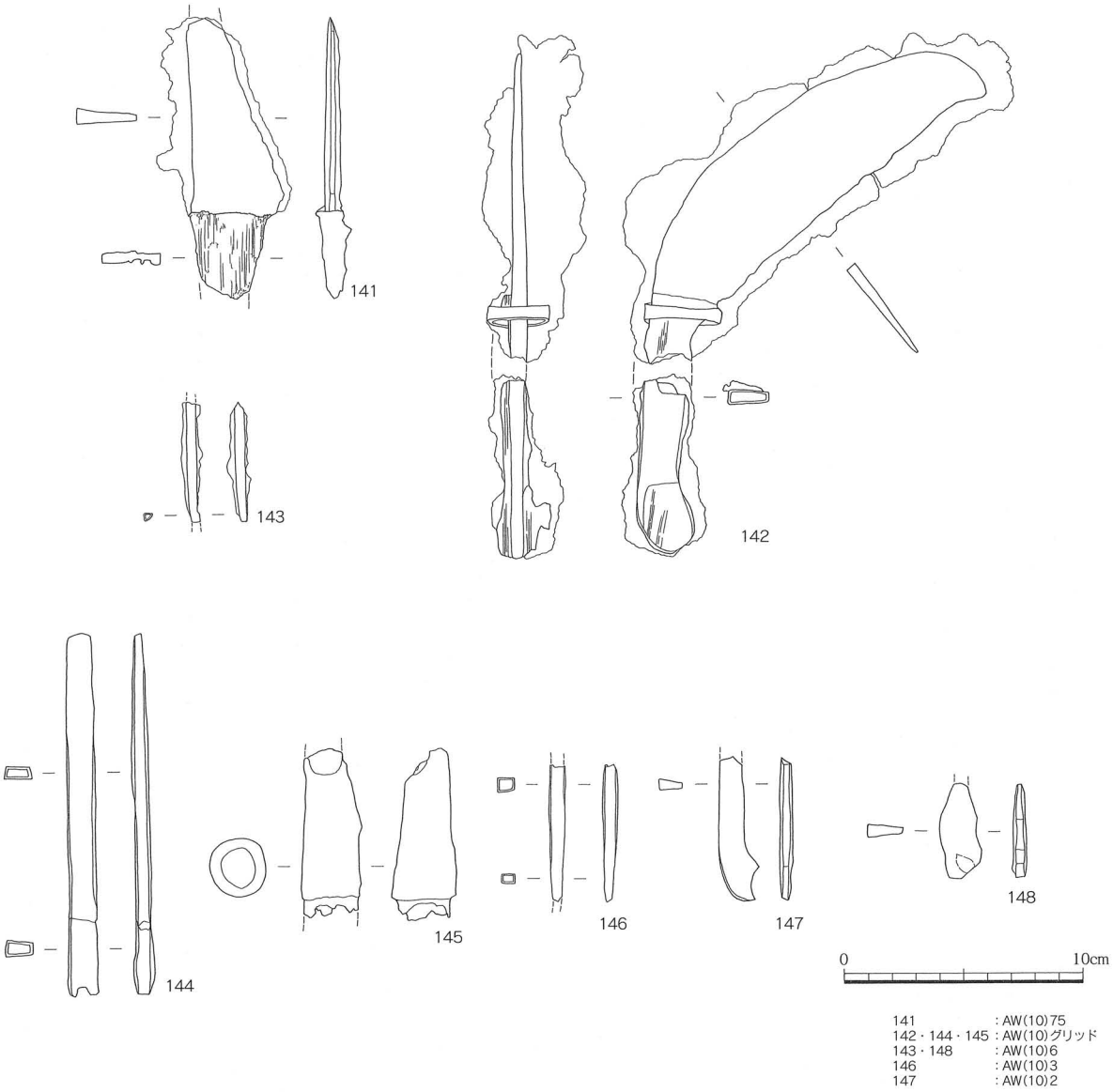


122 : AW(10)56
123・132・133 : AW(10)25
124・127・128 : AW(10)75
125・131 : AW(10)グリッド
126 : AW(10)表土剥ぎ
129 : AW(10)北調査区東溝
130 : AW(10)61・表土剥ぎ

第38図　粟田遺跡（第10次）　遺物実測図(7)　(1/3)



第39図　粟田遺跡（第10次）　遺物実測図(8)　(1/3、1/6)



第40図　粟田遺跡（第10次）　遺物実測図⑼　（1/3）

第５章　三納アラミヤ遺跡(第１・２次調査)

第１節　遺跡の概要(第49・50・52・53・69・73・75・76図)

当遺跡は古代を主体とし、縄文・中世・近世・近代以降の遺構・遺物も確認されている。調査区のほぼ全域で遺構が検出され、第１次調査区では古代の集落跡・旧河川や近世の水田、第２次調査区では古代の旧河川と中世の利水遺構を確認している。なお、第１次調査区は用水路により調査区が南北に分断されているため、５グリッドラインより北を北調査区、南を南調査区と呼称する。

縄文時代は第１次調査区で旧河川、第２次調査区で旧河川と石器の製作跡が確認された。打製石斧・土器が出土している。

古代の遺構・遺物は第１次調査区で掘立柱建物・竪穴建物・土坑・ピット・溝・道路状遺構・旧河川が、第２次調査区では旧河川が検出された。建物や土坑はそれぞれまとまりをもって検出されており、計画的に集落が形成されたことが考えられる。遺物は須恵器・土師器を主体とし、鉄滓も少量出土した。

中世は、第２次調査区で利水遺構・溝が検出されている。中世土師器、輸入磁器、加賀が出土した。

近世は第１次調査区で水田と利水遺構が検出された。遺物は肥前の碗・皿や甕類で、いずれも少ない。

近代以降は、第１次調査区で水門跡と旧河川が、第２次調査区で溝が検出された。遺物は碗皿類などが出土している。

第２節　遺　構

(1)縄文時代の遺構(第49～51・65・68図)

a)河川

SA(1)131(第49・65図、図版17)

Ｗ８～11グリッドに位置し、第１次調査区の中央付近を南東から北西に横断する。確認された最大長は約37m、幅７mだが、これは古墳時代以前の河川と古代の河川がほぼ同一地点で重複しているためで、古墳時代以前は西側３m部分が相当する(古代の河川部分については後述する)。Ｗ８～９グリッド部分は未掘削のため深度は不明であるが、確認できたところでは深度1.2～1.4mである。覆土は暗褐色土を主とし、一部に黒褐色土が見られる。遺物は縄文土器(１・３～７・11)、打製石斧(17・27・28)である。

SA(2)１(第50・68図、図版17)

Ｗ～Ｘ20～27グリッドに位置し、第２次調査区の南側ほぼ全域で南北に検出された。この遺構もSA(1)131と同じく古墳時代以前の河川と古代の河川が重複しており、古墳時代以前に相当する部分が若干幅広く、深い。調査区の制約のため確認はできないが、SA(1)131とSA(2)１は蛇行して北流する同一の旧河川であると思われる。確認できた地点では、長さ80m、最大幅８m、最も深いところで1.5mを測る。覆土は第68図a断面(調査区南壁)で第16～25層、第68図b断面では第21～26層に相当し、暗褐色土に一部シルト質や地山ブロックを含む。縄文土器(10)、打製石斧(19～22・30～32)が出土した。

b)石器製作跡

SA(2)325(第51図、図版14)

Ｗ23グリッドに位置する。平面形は不整形で、径約3.5×３mを測るが、東側と南側の遺構の立ち上がりは不明瞭である。床面は凹凸が激しく、深度は10～30cmである。覆土は黒褐色土をベースとする。打製石斧(26)のほか、石器製作に伴うと見られる剥片が多く出土した。なお、この遺構は上層を旧河川SA(2)１によって削平されており、その際に混入したと見られる須恵器・土師器が確認された。

⑵古代の遺構（第52～68図）

a）掘立柱建物

当遺跡では古代の建物跡は掘立柱建物と竪穴建物の２種類が確認された。竪穴建物どうしは重複がなく、出土遺物の時期差もほとんどないことから、ほぼ同時期と考えられる。掘立柱建物については出土遺物に乏しく、それぞれの前後関係は不明であるが、同一地点での建て替えと見られ、掘立柱建物どうしは大きく前後しない時期に建てられたと考えられる。

１号掘立柱建物：SA⑴①（第54図、図版14）

W12～13グリッドに位置する３×２間の側柱建物である。平面形は若干歪んでいる。最大長軸6.6m、短軸5.4mで平面積35.64㎡、軸はN－10°－Wである。構成ピットはSA⑴105・107・108・123・125・232・236・SA⑴①－Ｐ１・Ｐ２・９－Ｐ８で、南側桁のSA⑴９－Ｐ８が若干南にずれる。ピットの平面径が最も大きいのはSA⑴105で径76×64cm、小さいものはSA⑴108で径50×40cmを測り、最も深いものはSA⑴105で38cm、浅いものはSA⑴125で11cmである。ピットの平均径は約58cm、深度約27cmとなる。柱間はSA⑴９－Ｐ８とSA⑴105間の2.9mが最も長く、最も短いのはSA⑴123とSA⑴232間の２mである。覆土は暗褐色土と暗灰色土を主とする。SA⑴①－Ｐ２が３号竪穴建物SA⑴121と重複しており、SA⑴121が古く、SA⑴①－Ｐ２が新しい。遺物は、SA⑴123横のピットから須恵器無台杯(41)・盤(127)、土師器釜(207・211)が、SA⑴232から須恵器無台杯(39)が出土した。41が田嶋編年Ⅳ２（古）期、39がⅣ２期と考えられる。

２号掘立柱建物：SA⑴②（第55図、図版14）

W12グリッドに位置する３×２間の側柱建物である。最大長軸4.4m、短軸4.2m、平面積18.48㎡で、軸はN－９°－Wである。構成ピットはSA⑴109・111・119・122・126・127・129で、西側梁が欠ける。ピットの平面形が最も大きいのはSA⑴126で小さいのはSA⑴122、深度が最も深いものはSA⑴111、浅いものはSA⑴119である。ピットの平均径は約56cm、平均深度が28cmである。柱間は最も長いところがSA⑴119とSA⑴122の間の2.12m、短いのはSA⑴109からSA⑴129の1.38mである。覆土は暗褐色土を主とする。砕片のため実測していないが、ピットSA⑴111から土師器釜片が出土している。

３号掘立柱建物：SA⑴③（第56図、図版14）

W12～13グリッドに位置する、３×１間の側柱建物である。平面形は長方形を呈し、最大長軸4.8m、短軸3.75m、平面積18㎡、軸はN－９°－Wである。構成ピットはSA⑴104・106・128・９－P19・P20・③－Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３である。ピットの平面形が最も大きいのはSA⑴９－P20、小さいものはSA⑴③－Ｐ２で、深度が深いのはSA⑴９－P20、浅いものはSA⑴③－Ｐ１であるが、SA⑴③－Ｐ１はSA⑴６と重複している。柱間は最も長いところが梁の3.75m、短いのはSA⑴③－Ｐ１・２間とSA⑴③－Ｐ３・SA⑴128間の130cmである。遺物はない。

b）竪穴建物

１号竪穴建物：SA⑴９（第56～58図、図版14・15）

W12～13グリッドに位置する。東側を近代以降の溝SA⑴６に切られ、南東隅のSA⑴９－Ｐ１部分以外、東側の遺構の肩は遺存していない。遺存部分から考えると平面形は長方形で、長軸9.2m、短軸3.3mである。覆土は暗褐色土を主とし、部分的に地山質の多い褐色土が見られる。第５・６層がSA⑴９の覆土であり、第７層は床充填土の可能性がある。第11層は硬化面で、貼り床が部分的に観察された。なお、第５層は遺構の北側に多く、第６層は南側に多いことから、当遺構はふたつの竪穴建物が南北に重複している可能性がある。焼土や炭化物は見られず、カマドの所在は不明である。当遺構は床面上に多数のピットが確認されるが主柱穴を構成するものは不明である。他に、遺構の西側に並んで検出されたSA⑴109・237などもあり、これらもSA⑴９に関連するもの（出入り口）となる可能性があると思われる。床面のピットは小型で浅いものが多い。Ｐ７は竪穴の南西隅に掘り込まれた土坑である。覆土の堆積状況から本竪

穴に伴う遺構として理解できる。須恵器有台杯(92)、土師器椀(176)・釜(188・191・196・220)・小釜(184)、鉄釘(290)が出土した。遺物の時期は田嶋編年II～V期にわたるが、遺構の時期は、V期である196が上層の出土であり、主体となる時期はこれ以前と思われる。

2号竪穴建物：SA(1)120（第59・60図、図版15・16）

U～W11グリッドに位置する。西側が調査区壁にかかり、全体は明らかではない。確認できた部分で南北4m、東西2.8mである。覆土は暗褐色土を主とし、貼り床と考えられる硬化した第8層が確認された。また、遺構の南側に張りだした部分のうち、a・cに特に焼土と炭化物が多いため、この部分がカマドである可能性が高い。一方、当遺構の中央部分で検出された焼土については、床面との間に間層を持つことから、当遺構が廃絶した後のものである可能性がある。床面上では浅めのピットが東側と北側壁面に添って多数検出されている。ピットの径は20～30cmで深度は5～15cm、覆土は暗褐色土を中心とする。遺物は覆土中から多数出土している。このうち、須恵器無台杯(55)・有台杯(87・114)と土師器釜(189・190・192・193・195・202・205・212・213・214・215・216・219)・小釜(183)を図示した。遺物の時期は1号竪穴建物SA(1)9と同じくII～V期にわたるが、床面近くから出土しているものはII～III期が多いので、遺構の時期はII～III期となろう。

3号竪穴建物：SA(1)121（第59・60図、図版16）

W12グリッドに位置し、西側が調査区壁にかかるため、全体は明らかでない。確認できた部分で南北3.3m、東西1.4mである。覆土は暗褐色土を主体とし、地山土粒が混入する層と炭化物や焼土が混入する層が確認される。特に焼土が多く確認された南側の第15層は面的な広がりを持つことからカマド部分に相当し、さらに第10層部分は煙道と考えられる。床面は、調査区壁側に一部硬化面が見られた他、北端に、焼土の入る一段下がった土坑状の部分が検出された。床面にピットは少ない。1号掘立柱建物SA(1)①－P2と重複しており、前後関係では3号竪穴のほうが古い。遺物は須恵器有台杯(100)・甕(173)、土師器釜(218)が出土している。100はIV2(古)期と考えられる。

c)土坑

当遺跡の土坑は、掘立柱建物・竪穴建物の北東側、SA(1)131の西岸に集中する傾向が高い。

SA(1)4（第61図、図版16）

W14グリッドに位置する。東側が調査区壁に掛かるため全形は明らかでないが南北180×東西90cm、深度10cmである。覆土は暗褐色土を主とする。土師器釜(200・203)・小釜(185)、鉄滓(286)が出土した。200・203はいずれも田嶋編年のV期と考えられる。

SA(1)5（第61図）

W14グリッドに位置する。この地点に焼土や遺物が集中して検出されており、これらをまとめた。焼土は3地点確認される。焼土1は径40cm程度の硬化面の中央に強い焼け込みがあり、土師器釜(197)が出土した。焼土2は径30cm程度でオレンジ色の強い焼け込みが確認されている。焼土3は長さ50cm、幅10cm程度の細長い形状をしており、焼け込みは弱い。焼土2・3に遺物はない。この焼土3の西側に遺物集中地点があり、暗褐色土を主とした層に土師器釜(208)が出土している。197はIII期と考えられる。

SA(1)132（第61図、図版16）

W12グリッドに位置する。平面形は不整形で、径132×120cm、深度25cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、第3層に炭化物を多く含む。土師器釜(199)と須恵器の砕片が出土した。V期と考えられる。

SA(1)138（第62図、図版16）

W11グリッドに位置する。平面形は不整形で径260×194cm、深度40～69cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、第6層には地山ブロックが多く混入する。須恵器有台杯(88)・杯蓋(137)、土師器釜(217)が出土した。

SA(1)149（第62図）

W11グリッドに位置する。平面形は略三角形をなすが、南側は近代以降の溝SA(1)6と重複し、全体は不明である。南北290cm、東西150cm、深度約10cmを測る。砕片のため図示していないが、土師器釜片が出土した。

SA(1)157（第62図）

W11グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、径100×56cm、深度14cmを測る。砕片のため図示していないが、土師器釜片が出土した。

d)ピット群：SA(1)南側集中区（第52図）

第1次調査区において、1号竪穴建物SA(1)9の南側と道路状遺構SA(1)3の間、約15メートルにわたる区間にピットが集中している。これらは不規則に分布し、建物を構成するには至っていないため、ピット群として報告する。遺物が出土した遺構を中心にSA(1)14・20・22・25・28～31・70を図示した。平面形は略円形を呈し、径は40～50cm、深度10～30cmのものが多い。覆土は暗褐色土を主とし、黒褐色土・褐色土も見られる。遺物は須恵器・土師器の他、縄文時代の土器や打製石斧が混入している。このうち、SA(1)14出土の鉄滓(287)、SA(1)30出土の打製石斧(14)、SA(1)25出土の須恵器無台杯(54)、SA(1)28出土の須恵器無台杯(53)・土師器小釜(186)、SA(1)29出土の土師器釜(209)を図化した。いずれも砕片のため時期は不明である。これらのピット群は、掘立柱建物や竪穴建物から離れた場所にあり、後述する道路状遺構SA(1)2・3より南側には確認されないこと、建物群と重複しないことなどから建物群や道路状遺構と同時期の所産と考えられよう。

e)旧河川

SA(1)131（SA(1)224含む）（第52・64～66図、図版17）

U～W8～12グリッドにかけて確認される北北西に流下する旧河川である。第2節(1)で述べたように、当遺構は古墳時代以前と古代の旧河川部分が重複しているW10グリッドのみ最下層まで掘削を行い、他はトレンチを入れ層序を確認するに留めた。長さ約40m、最大幅約8m、最大深度約1mを測る。覆土は大きく上層・中層・下層・最下層(古段階)に分けられ、最下層からは縄文土器が出土し、上層～下層までは古代の遺物が出土しているため、上層～下層は古代、最下層は縄文時代～古墳時代と考えられる。下層は礫層の上にシルト層があり流量豊富な河川であったと考えられ、この層に最も遺物が多い。中層上面は遺物集中区SA(1)224（後述）のほか、完形に近い土器が多い。遺物は、第3節(1)で述べた縄文土器・石器のほか、須恵器無台杯(34～36・42・43・51・56)・有台杯(65・72・77～79・85・91・99・105・110・118・120・124)・盤(128)・杯蓋(133・136・139・146)・瓶類(148・150・151・154・158)・甕(167・168・172・174・175)、土師器椀(177・179・181)・釜(198・201)・小釜(187)が出土している。

SA(1)224はW9グリッドで確認された、旧河川SA(1)131内の土器集中地点である。ここでは、土師器鍋が正位に出土した他、その内部と周囲から須恵器・土師器供膳具が集中して出土した。このうち、須恵器無台杯(37・38)・有台杯(64・70・96)・杯(60)・盤(129)・杯蓋(141)、土師器椀(182)・鍋(222)、鉄滓(289)を図化している。

SA(2)1（第53・67・68図、図版17）

W20～27グリッドに位置し、北北東に流下する旧河川である。第2節(1)で述べたように、当遺構は古墳時代以前(古段階)と古代(新段階)が重複している。長さ80m、最大幅8m、深度1.9m、覆土は第68図a断面(調査区南壁)第2～15層、第68図b断面第1～20層が相当し、暗褐色土が主だが下層にいくほどシルト質が強くなる。a断面第15層やb断面第20層などの最下層には礫や砂と、古代の遺物が多い。須恵器無台杯(44～50・52)・有台杯(66・69・71・73～76・80～84・86・90・93～95・98・102～104・106・107・109・111～113・115～117・121～123・125)・杯(58・59・61)・杯蓋(134・135・138・140・143～145・147)・高杯(130・131)・壺(155・156)・壺蓋(132)・瓶類(149・152・153)・鉢(157)・甕(159・160・162・164～166・169～171)、土師器椀(178・180)・釜(194・204)・不明品(221)が出土している。

また攪乱部分から中世土師器(223)、肥前磁器皿(253)、土器用途不明品(275)、砥石(278)が出土した。なお、第3次調査区でSA(2)1の南側部分に古代の集落跡が確認されていることから、集落から河川への投棄によるものと思われる。

f)道路状遺構

SA(1)2・3(第63図、図版17)

W15グリッドに位置する。SA(1)2を南側の側溝、SA(1)3を北側の側溝とし、その間の長さ9m、幅3.5mの部分が道路と考えられる。溝の傾きはE－5°－Sで、SA(1)2・3はそれぞれ幅40～60cm、深度10～20cm。覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土である。遺物は須恵器無台杯(63)の他、砕片で須恵器有台杯、土師器釜が出土している。

(3)中世の遺構(第70～72図)

a)溝

SA(2)119(第72図、図版18)

W16～18グリッドにかけて位置する、長さ17m、幅120～200cmの溝である。一部、近世の遺構であるSA(2)182に切られる。深度35cm、覆土は褐灰色土で礫が多く入る。輸入青磁碗(227)と砥石(279)の他、混入品である打製石斧(15)、須恵器無台杯(40)が出土した。

b)利水遺構

SA(2)120・205(第69～72図、図版18)

SA(2)120はW19～22グリッドに位置する溝で、SA(2)205はV～W22～23グリッドに位置する不整形の土坑である。関連する遺構でありまとめて報告する。

SA(2)120は長さ32m、幅80～130cm、深度約10cmの溝で、W22グリッドでSA(2)205に接続する。北端は途切れるが、SA(2)119に向かっている。覆土は褐灰色土を主とし、下層に微量の砂と地山土ブロックを含む層が見られる。混入品の打製石斧(25)、須恵器有台杯(108)が出土した。

SA(2)205は南北10m、東西10mに亘る不整形の遺構で、東側に伸びる溝を持つ。底面は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土を主とし、地山である黄褐色土がブロック状に含まれる層も確認された。最低でも2～3回の掘り返しがなされており、必要に応じて範囲を拡張していった状況が見て取れる。混入品の須恵器有台杯(89)・甕(163)が出土している。

全体として、SA(2)205を中心として東側と北側に延びる溝が作られている。この時期の旧河川は調査区内では検出されず、その規模や流路は明らかでないものの、近世の河川が、後述するようにSA(1)225、近代の河川がSA(1)252のように調査区東側で蛇行している状況が窺えるので、中世においても概ね似たような流路であった可能性は高い。よって、近世・近代の旧河川SA(1)225・252のように調査区の東側に位置していたならば、東側の溝はこの河川から取水して水溜であるSA(2)205を通過、用水SA(2)120を経て水を誘導する利水施設と考えられる。他には、SA(2)205を舟着き場としてSA(2)120を舟用水路とする見方もあるが、舟が通過するにはSA(2)120が細いことや、SA(2)205の周囲や床面に桟橋や舟をもやうためのピットが見られないことから、蓋然性は低い。よってここでは利水施設と考えておきたい。

このような利水遺構は、野々市町では例が無い。同時期の水田・畠遺構こそ調査区内では確認できなかったが、当遺跡で中世の居住施設が検出されなかったことと、近隣の三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡では13～14世紀の集落跡が確認されていることから、当遺跡は周辺の三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡と関連した耕作域の可能性も考えられる。

(4)近世の遺構(第73・74図)

SA(1)250・251(第74図、図版19)

第１次調査区の北調査区では、近世の水田遺構とそれに付随する用水と考えられるSA(1)250・251が検出されている。一連の遺構でありまとめて報告する。

SA(1)250は、V～W１～４グリッドに位置する。W３グリッドで検出された段差によって南北に区画されており、この段差から北側①は南北18m、東西7.5m、南側②は南北17.5m、東西は最大で７mを測る。U～W２グリッド付近には耕作痕と思われる小ピットが点在する。覆土は上層が当時の耕作土と床土、下層に薄く旧土壌の暗褐色土が残る。なお、溝SA(1)251の東側③には床土のみが検出された。肥前陶器碗(265)、九谷擂鉢(269)のほか磁器小杯(248)が出土した。

SA(1)251は、W１～５グリッドに位置する溝である。長さ36m、幅は最大で1.6m、深度10～20cmである。両側に畦と考えられる幅１m程度の土手状の部分がありその間が溝となる。覆土は灰褐色土を主とする。瀬戸美濃卸皿(225)、肥前磁器碗(228)、筑前陶器皿(266)、砥石(277)が出土した。

(5)近代以降の遺構(第75～79図)

a)土坑

SA(2)3(第76図)

T21グリッドに位置する。径1.8×1.5m、深度14cmで、覆土は青灰色粘土。砕片のため実測していないが、現代の磁器が出土した。

b)溝

SA(1)6(第77図、図版19)

W11～13グリッドに位置し北北西に流下する溝である。長さ23m、幅は最大で120cm、深度10cmである。途中で東西方向の現代の溝に切られる。覆土は上層が淡青灰色シルト、下層が青灰色粘質土である。西側の古代の竪穴建物SA(1)９を切るかたちで造営されたため、近代以外の遺物も多く混じる。古代の須恵器無台杯(57)・有台杯(67・97・119・126)・杯(62)・甕(161)のほか、中世の加賀鉢(224)、近世以降の肥前磁器碗(232)・皿(252)、肥前陶器皿(267)、産地不明磁器碗(243・244)、陶器土瓶(268)、越前甕(272)、鉄釘(291)、寛永通宝(294)、土錘(282・283)、砥石(276)が出土した。

SA(2)101(第75・76図)

W15～16グリッドに位置し、第１次調査ではSA(1)１として確認されていた。長さ15m、幅120cm、深度10cmを測る溝である。覆土は青灰色微砂土。遺物は第１次調査で土錘(280・281)、簪(293)が、第２次調査で石鏃(12)、近世以降の磁器碗(242)・豆碗(258)が出土した。

SA(2)480(第75・76図)

V21～22グリッドに位置する。径400×120cm、深度５cmの土坑に長さ7.5m、幅80cm、深度20cmの溝がT字状に接続する。肥前磁器碗(229・236)、肥前陶器碗(264)の他、現代の土管が出土した。

c)旧河川

SA(1)225(第78・79図)

V６～７・W７～９グリッドに位置する旧河川である。調査区内を南東から北西に横断し、確認された部分だけで長さ20m、幅４m、深度50～70cmを測る。覆土は青灰色土を主とし、下層には礫が多い。第３・４層は水の流れによって堆積した砂質層である。河川内には取水施設の基礎と見られる木組みSA(1)226が設置されていた(後述)。出土した遺物は多く、打製石斧(18)のほか、近世以降の肥前磁器碗(245)・猪口(231)・肥前系鉢(255)・瓶(260)・蓋(256)、瀬戸美濃磁器碗(234)・小碗(246・247)・陶器甕(270)、再興九谷蓋付鉢(254)、産地不明磁器碗(237～241)・徳利(262)、陶器土瓶(273)、仏飯器(257)、ガラス瓶(298・299)、セルロイド櫛(300)、軒平瓦(285)、金属製品(295・296)が出土した。近世～近代の遺構であろう。

SA(1)252(第75・79図)

第１次北側調査区の南西隅と、南調査区のSA(1)242を繋ぐ部分に位置する河川である。途中が調査区外に相当するため、一部しか検出されていないが北北西に流下する河川である。覆土は青灰色土を主とする。河川内にはコンクリートを用いた枠SA(1)242が設置してあり、旧河川SA(1)225内の木枠SA(1)226と同様に取水施設の基礎と思われる。土層の堆積からSA(1)252がSA(1)225よりも新しい。

SA(1)252から遺物は出土しなかったが、SA(1)242出土遺物がこの河川の年代を示す。

d)取水施設

SA(1)226（第78・79図、図版19）

SA(1)226はＷ８グリッドに位置する。検出標高は27.80～28.00mである。長さ2.4mの横木の両端に４ｍの縦木が平行して付けられ、その間に30～40cm間隔で長さ1.6mの横木が７本はめ込まれている。なお、横木を装着するために縦木に掘り込まれたほぞ穴が８箇所確認されており、南から数えて三本目の横木が失われている。縦木の北端には横木に差し込むための凸部も確認されていることから、北端の横木も失われていることが分かる。河川の底を20cmほど掘り込んだ中に、長軸を河川方向に向けて設置されていた。

出土遺物は多い。肥前磁器碗(230・233)・皿(251)、肥前陶器碗(263)の他、近代の磁器瓶類(259)、陶器甕(271)、平瓦(284)を図示した。

SA(1)242（第79図）

Ｗ６グリッドに位置する。検出標高は28.00mである。調査区の制約のため、全形を確認できていない。調査区内で検出されたのは、長さ3.6m、幅30cmの南東～北西に置かれた断面四角形の棒状のコンクリートと同じく棒状の長さ1.6m、幅24cmのコンクリートの接合部分である。近代以降の磁器瓶類(261)、陶器甕(274)、ガラスの牛乳瓶(297)、煙管(292)を図示した。

第３節　遺　物（第６表）

遺物の記述には、観察表・本文・図面図版・写真図版を用いる。当調査区では縄文～近代までの遺物が出土している。種類と器種による分類は第５・６図に示した。点数はすべて破片数である。

(1)縄文～古墳時代の遺物（第80～82図、図版20・21）

土　器（１～11）　ほとんどが砕片である。１は眼鏡状突帯の施される晩期下野式期の浅鉢。２・３は横位の沈線が施文される。４・５は横位の条痕文が外面に施文される。６・７・８・９は内外面無文。７は口縁部の破片、10・11は底部の破片である。小片が多く時期を確定できる遺物に乏しいが、おおむね縄文時代晩期後半頃のものと思われる。

石　器(12～32)　打製石斧が多くを占める。他には、石鏃・剥片石器を各１点図化している。12は石鏃で先端部と脚部が一部欠損している。13は上下両端側からの剥離痕が認められるので楔形石器であろう。打製石斧は19点出土している(14～32)。形態は短冊状のものは無く、ほとんどが撥形で、表面に礫皮を残す。29には磨耗痕が観察された。石材は火山礫凝灰岩が多く、ほかに凝灰岩・砂岩・安山岩などが見られる。なお、図化していないが、出土した打製石斧と同一石材の未製品および製作過程と思われる破片が、第２次調査区旧河川SA(2)１内のSA(2)325付近から出土している。

(2)古代の遺物（第83～92図、図版９～13）

須恵器(33～175)　杯類(無台杯・有台杯・高杯)・杯蓋・瓶類・壺・甕が出土した。時期は田嶋編年のⅡ～Ⅳ期が多く、一部Ⅵ期まで下る。産地は南加賀窯が多くを占めるとともに、高松窯のものも見られる。墨書されたものや明瞭な墨痕を残す硯転用のものはない。33～57は無台杯、58～63は底部が不明の杯類、

64～126は有台杯、127～129は盤、130・131は高杯、133～147は杯蓋、148～154は瓶類、155～158は壺・鉢類、159～175は甕である。このうち、62は瓶類の底部である可能性がある。147は高松産の杯蓋で、野々市町では出土例が少ない。１次調査区から２次調査区にかけて蛇行しながら北流する一連の旧河川であるSA(1)131・224・SA(2)１から出土したものが多いことから、周辺の古代集落からの投棄による資料と思われる。

土師器(176～222)　椀皿類(176～182)・釜(183～221)・鍋(222)が出土した。椀皿類は少なく、ほとんどが煮水用の釜である。SA(1)９やSA(1)120などの竪穴建物から出土したものが多く、河川からの出土は少数である。222は河川SA(1)131内上層の遺物集中区SA(1)224から出土した。内面にコゲ、外面に焼成時の黒斑と煤の痕跡が残る。須恵器杯(37・38・60・64・70・96・129・141)・盤(129)・杯蓋(141)が共伴していた。

(3)中世の遺物(第92図、図版13)

土　器(223)　中世土師器の皿が数点出土したが、223を図化した。古代の河川であるSA(2)１の攪乱部分から出土している。

陶磁器(224～227)　加賀鉢(224)・瀬戸美濃卸皿(225)・輸入白磁碗(226)・青磁碗(227)をそれぞれ１点図化した。中世の溝SA(2)119から出土した227以外は、SA(1)６など他の時期の遺構から混入品として出土している。

(4)近世以降の遺物(第93～95図、図版26・27)

土　器(275)　不明品を１点図化した。

陶磁器(228～274)　磁器碗類(228～248)・皿(249～253)・鉢(254・255)・蓋(256)・仏飯器(257)・豆碗(258)・瓶類(259～262)、陶器碗類(263～265)・皿(266・277)・瓶類(268・273)・擂鉢(269)・壺(270)・甕(271・272・274)が見られる。多くは肥前であるが、一部に瀬戸美濃や九谷も見られる。当調査区の特徴として近代以降の遺物が非常に多いが、これらは旧河川SA(1)225・SA(1)252からの出土が多数を占める。碗は磁器製が多く、大橋編年のII～IV期に相当するものが出土しているが、近代以降も多数出土している。皿は見込みを「蛇の目釉剥ぎ」した大橋編年III～IV期のものが多い。産地は、近世は肥前が占めるが、近代以降は産地が不明のものがほとんどである。

(5)その他遺物(第96図、図版27)

石製品(276～279)　砥石を４点図化した。276・279に一部被熱痕跡がある。

土製品(280～283)　土錘を４点図化している。SA(1)１・６から出土した。山本直人氏の分類によれば[山本1986]、Ｉａ類に属する。「奈良～平安時代にかけての管状土錘では形態的に側縁部がふくらむＩ類のものがほとんど」[山本1986]とされることから古代の集落に伴うものと思われる。

瓦(284・285)　平瓦と軒平瓦を図化した。これ以外にも瓦の破片は近世以降の旧河川SA(1)225とSA(1)252から多数出土している。

鉄　滓(286～289)　４点図化した。いずれも椀形滓で、286と289はそれぞれ古代の土坑SA(1)４と土器集中区SA(1)224から出土した。

金属製品(290～296)　釘(290・291)・煙管(292)・簪(293)・銭貨(294)・やっとこ(295)・錠(296)を図化した。SA(1)９とそれを切るSA(1)６から出土した290・291が古代の可能性があるが、取水施設SA(1)242から出土した292や旧河川SA(1)225から出土した295・296など、近世以降の産と考えられるものが多い。

ガラス・セルロイド(297～300)　瓶類と櫛を図化した。近世・近代の旧河川SA(1)225と取水施設SA(1)242からは他にも多数のガラス製品が出土した。

第4節　小　結

(1)三納アラミヤ遺跡と周辺の古代集落について

はじめに　今回の調査では、古代の集落跡が確認された。当遺跡では旧河川SA(2)1の南側の第3次調査区でも古代の集落が確認されており、古代の集落が広く展開しているものと思われる。ここでは主に、当遺跡の古代における①建物規模②建物内部のカマドの位置③集落立地について、周辺の古代集落遺跡との関連についてまとめておきたい。なお、ここで取り上げる竪穴建物や掘立柱建物の規模については、竪穴建物の平面積20㎡未満をaタイプ、平面積20㎡以上～40㎡未満をbタイプ、平面積40㎡以上をcタイプとし、掘立柱建物の平面積40㎡未満をAタイプ、平面積40㎡以上～100㎡未満をBタイプ、平面積100㎡以上をCタイプとする。

最初に、当遺跡の建物規模と内部施設についてまとめておく。竪穴建物については、竪穴建物SA(1)9は東側を近代以降の溝SA(1)6と重複しており、遺存部分の平面積約30㎡であるので、規模はbタイプとなる。竪穴建物SA(1)120・121はその大半が調査区外にあるため、面積は不明である。竪穴建物の主体となる遺物は田嶋編年II～Ⅳ期となる。掘立柱建物の規模については、1号掘立柱建物SA(1)①が約36㎡、2号掘立柱建物SA(1)②は約18㎡、3号掘立柱建物SA(1)③は18㎡であるので、当遺跡の掘立柱建物は全てAタイプに属する。これらの掘立柱建物は遺物からⅣ～Ⅴ期に属すると考えられる。内部施設については、カマドは竪穴建物SA(1)120・121で確認された。SA(1)120・121は調査区外にその大半が伸びるものの、カマドは調査区内、すなわち建物内の東南隅に存在する。

周辺の遺跡の概要　三納アラミヤ遺跡周辺で、当遺跡とほぼ同時期に存続しているのは下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡・上林新庄遺跡・上林テラダ遺跡・上新庄ニシウラ遺跡・末松A遺跡である。次に、それぞれの遺跡の概要を述べる。時期は各報告書の記載に拠った。

当遺跡の南に位置する上林・新庄遺跡群は、下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡・上林新庄遺跡・上林テラダ遺跡・上新庄ニシウラ遺跡・上林遺跡からなる。これらの遺跡の消長は横山貴広氏の論考に詳しい[横山2003a、2003b]。それによると、7世紀初頭(田嶋編年Ⅰ期)に成立する上林テラダ遺跡と上林新庄遺跡西半に続き、7世紀後半から8世紀初頭(田嶋編年II～Ⅲ期)にかけて上林新庄遺跡南半と上新庄ニシウラ遺跡の南エリア、上林新庄遺跡北端・下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡の北エリアに発展しつつ分割される。北エリアが9世紀中頃(田嶋編年Ⅴ2期)まで続くのに対し、南エリアは9世紀前半(田嶋編年Ⅴ1期)で終息する。遺跡の特徴としては、南エリアが製鉄関連集団と思われるのに対し、北エリアが円面硯や仏器などを出土し、集落の当初から計画的な建物配置がなされている点で「極めて政治色の濃い集団」[横山2003a]と考えられている。竪穴建物は上林新庄遺跡と下新庄アラチ遺跡に多い。下新庄アラチ遺跡にはaタイプの竪穴建物が多いのに比べ、上林新庄遺跡にはbタイプが多く、cタイプの竪穴建物も存在する。上新庄ニシウラ遺跡では棟数自体は少ないものの、a～cタイプの竪穴建物が検出されている。下新庄タナカダ遺跡ではaタイプの竪穴建物しか検出されていない。掘立柱建物は上林新庄遺跡と下新庄アラチ遺跡でAタイプが多く、B・Cタイプは5棟程度に留まる。いっぽう、上新庄ニシウラ遺跡はBタイプが多い。

粟田遺跡は当遺跡に最も近い古代の集落である。粟田地区は8・9世紀(田嶋編年II～Ⅴ期)[㈱石川県埋蔵文化財保存協会1991]、中林地区は8世紀前半～9世紀中頃(田嶋編年II～Ⅴ2期)[石川県野々市町教委1992]、藤平地区は8世紀後半～9世紀前半(田嶋編年Ⅳ～Ⅴ1期)[石川県野々市町教委2000]と、調査地点によって存続時期が微妙に異なるが、集落の構成は竪穴建物が主となる時期から掘立柱建物が主となる形態へ移行するなど、類似した状況を呈している。竪穴建物はaタイプが多く、掘立柱建物はA・Bタイプがある。

清金アガトウ遺跡[野々市町教委2000]は当遺跡の西側に位置する。8世紀後半～10世紀後半(田嶋編年

遺跡名＼田嶋編年	II 2	II 3	III	IV 1	IV 2	V 1	V 2	VI 1	VI 2	VI 3	VII	遺　構
三納アラミヤ遺跡												掘３、竪３、道路、耕作域
粟田遺跡												掘18、竪39、道路、耕作域
下新庄アラチ遺跡												掘54、竪48、溝
下新庄タナカダ遺跡												竪３
上林新庄遺跡												掘56、竪85、溝
上林テラダ遺跡												
上新庄ニシウラ遺跡												掘15、竪５、土坑
上林遺跡												
清金アガトウ遺跡												掘６、竪16、道路
末松A遺跡												掘25、竪29
末松福正寺遺跡												
末松ダイカン遺跡												竪12、掘23

第７表　三納アラミヤ遺跡周辺の古代遺跡消長表

Ⅳ～Ⅵ期）の遺物が確認されているが、集落の盛期は９世紀後半（田嶋編年Ⅴ２期）と考えられる。明確な竪穴建物は報告されておらず、A・Bタイプの掘立柱建物が２棟検出された。

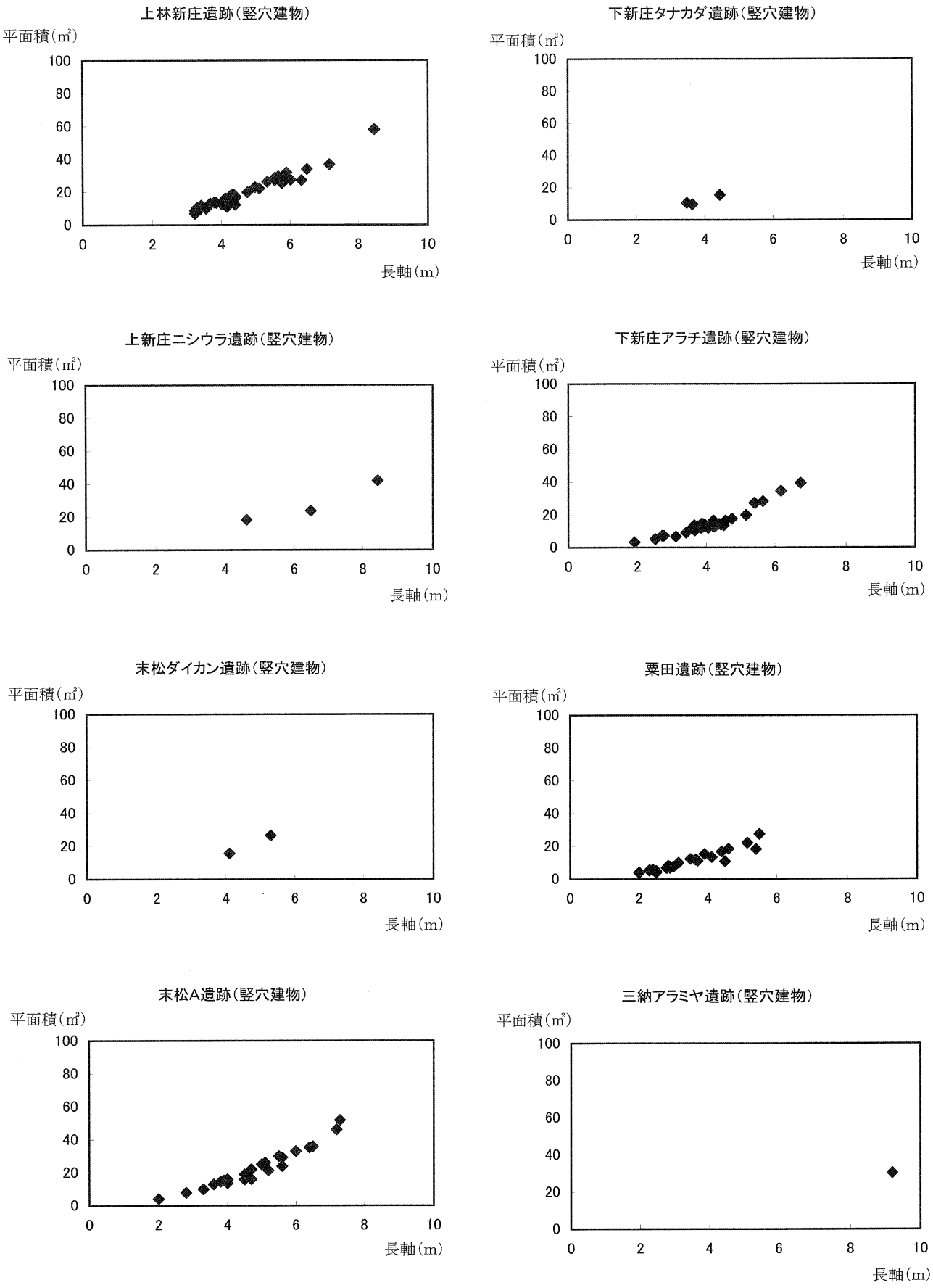
末松遺跡群は当遺跡の西南に位置する末松廃寺を中心とした遺跡群で、末松A遺跡・末松B遺跡・末松しりわん遺跡・末松廃寺・末松ダイカン遺跡・末松福正寺遺跡・末松信濃館跡からなる［㈶石川県埋文センター2000、石川県教委・㈶石川県埋文センター2005］。末松B遺跡は遺構が希薄で、後述する末松ダイカン遺跡の縁辺部にあたると考えられている。末松ダイカン遺跡は７世紀後半（田嶋編年Ⅰ～Ⅱ期）に竪穴建物を主体として成立するが、８世紀中頃（田嶋編年Ⅳ１期）以降は掘立柱建物が主体となる。末松福正寺遺跡は７世紀（田嶋編年Ⅰ～Ⅱ期）の遺跡で、竪穴建物が検出されている。これらは壁柱をもつものや南東角にカマドを持つものが確認されている。全体が解る竪穴建物は末松ダイカン遺跡と末松A遺跡に多い。末松A遺跡の竪穴建物はa・bタイプが多く、掘立柱建物はAタイプが多い。

存続時期　以上、周辺の遺跡を概観してきた。当遺跡の主体時期は７～９世紀（田嶋編年Ⅱ～Ⅴ期）で、下新庄タナカダ遺跡や上新庄ニシウラ遺跡と類似する。田嶋明人氏によれば［田嶋1996］、当遺跡が位置する手取扇状地扇央部は７世紀後半（田嶋編年Ⅱ期）以降の集落が多く確認されている。田嶋氏の分類によれば当遺跡は冨樫用水系中流域Dブロックに位置し、上林・新庄遺跡群や粟田遺跡と同じブロックに存在する。このブロックは盛期をⅡ～Ⅳ期に持つとされ、当遺跡の盛期とも合致する。

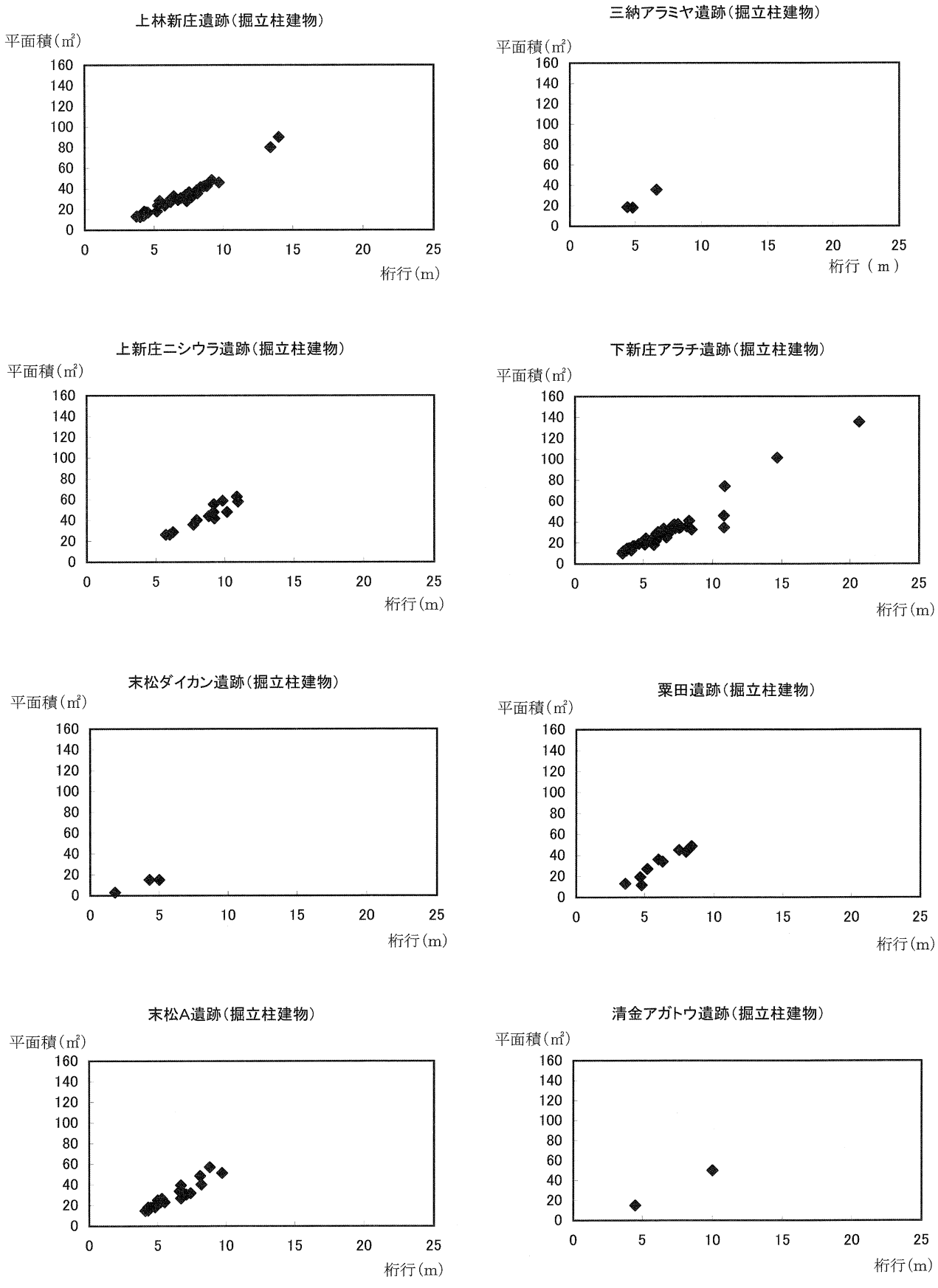
建物規模　古代の建物規模については、川畑誠氏の論考がある［川畑1995］。これによると、面積20㎡以上40㎡未満の３間×２間の掘立柱建物は８世紀中頃（田嶋編年Ⅳ１期）以降主体を占める。一方、竪穴建物は面積20㎡以上40㎡未満のものが７世紀後葉～８世紀前葉（田嶋編年Ⅱ～Ⅲ期）まで多数存在するとされる。当遺跡の竪穴建物SA(1)９は平面積約30㎡、掘立柱建物は１号掘立柱建物SA(1)①が約36㎡、２号掘立柱建物SA(1)②は約18㎡、３号掘立柱建物SA(1)③は18㎡であるので、川畑氏の結果と合致する。周辺においても、この規模の竪穴建物が確認されている遺跡の多くが田嶋編年Ⅱ～Ⅲ期に属し、当遺跡と時期的にほぼ合致する（第41図）。当遺跡の掘立柱建物は全てAタイプに属し、下新庄アラチ遺跡や上林新庄遺跡、粟田遺跡で確認されている規模と類似する（第42図）。下新庄アラチ遺跡を例に取れば、これらAタイプは田嶋編年Ⅲ～Ⅳ期まで多く確認されており、これも当遺跡の時期と合致する。

以上のように、当遺跡の建物規模は近隣の同時期の遺跡と比較して突出した規模にはなく、時期的な様相にも整合することが解った。

カマドの位置について　カマドは１号竪穴建物SA(1)９には検出されず、竪穴建物SA(1)120・121で確認された。SA(1)120・121は調査区外にその大半が伸びるものの、カマドは建物内の東南隅に存在する。このような配置は、上林新庄遺跡や下新庄アラチ遺跡、末松遺跡群でも多く確認されている。末松A遺跡



第41図　三納アラミヤ遺跡周辺の古代竪穴住居規模



第42図　三納アラミヤ遺跡周辺の古代掘立柱建物規模

は田嶋氏の分類によれば郷用水系中流域Bブロックに属する遺跡で[田嶋1996]、土師器煮炊具に近江型や青野型と呼ばれる畿内外縁部系統の土器や、東日本系、在地系と、多数の系統が見られる遺跡であり、近江や丹波をはじめとする移住者と、在地系の人々によって展開された集落であることが指摘されている[柿田2005]。当遺跡には、管見の限りでは他地域の影響が見られる土器は出土していないが、SA(1)120・121のような、竪穴建物におけるカマドの位置という点では同時期に展開していた近隣の集落と同じ様相を呈しており、富樫用水や郷用水といった水系を超えて現象化している点が注意される。

集落立地　当遺跡は調査区が南北に細長く、調査区の東側を旧河川SA(1)131・SA(2)1が縦断していることもあって、一見したところ、河川の強い規制を受けて成立した集落のように見える。しかし当遺跡では、この自然河川に影響されない直線的な道路状遺構SA(1)2・3が確認された。古代においては道路の方向は、土地区画である「条里」に規制される例があるが、粟田遺跡で確認された道路状遺構はN－21°－Wの主軸であり、当遺跡はN－45°－Wであるなど、当遺跡周辺の遺跡についてはその主軸方向は各遺跡で異なる。また、当遺跡周辺では「条里」は、近代の地籍図にその痕跡を残すいっぽう、下新庄アラチ遺跡のSD07（田嶋編年Ⅲ～Ⅳ期）が「条里」の可能性が指摘されている。さらに下新庄アラチ遺跡は、SD07を基準として集落内での建物配置に際し方形区画が意識されている事例が確認され、当遺跡から北に約2㎞離れた上荒屋遺跡でも9世紀（田嶋編年Ⅴ期）の「条里」が確認されている[小西1991]。このように、同じ扇状地でも施工には時期幅が見られることや、上荒屋遺跡に隣接する横江庄遺跡では建物配置が条里的な間隔を有さない[金田1996]ことなど、「条里」がいつ、どの程度の範囲で施工されたかなど不明な点は多い。しかし、周辺の集落の状況を考えた場合、集落配置を決定する要因として微地形や自然河川以外の要素として、「条里」も考えておく必要があるものと思われる。

まとめ　以上、当遺跡と周辺の古代集落との比較を通して、当遺跡の位置づけを考えてきた。当遺跡は、建物規模においては同時期の古代集落と類似した傾向にある。そして、存続時期に関しては同じ水系に位置する上林・新庄遺跡群や粟田遺跡と密接に関連しながら展開した様相を示し、さらにカマドの位置に関しては末松遺跡群のように異なる水系とも類似した状況であることが分かった。このような、水系を超えて共通点が確認されるという状況は、それ以前の弥生時代や古墳時代の集落が基本的に水系単位で消長することと異なり、水系を超えた地域単位でのまとまりを示すものであろう。田嶋氏も、Ⅱ期からⅢ期にかけて「用水系に沿った開発以上に、東西の軸線（道路）の設定を契機とした展開」[田嶋1996]が手取扇状地中流域でみられるとしており、このように考えれば、古代における当遺跡は、扇央部周辺の「村落群における前時代的諸関係を再編成するような、政治的に集村した律令的村落群」[前田1996]の一部をなすととらえることができるのではないだろうか。また、そういう村落だからこそ、古代においては国家権力による耕地整理手段であった「条里」もより強く意識されていた可能性が考えられよう。

⑵近世以降の取水施設

第1次調査では、旧河川内に設置された木製とコンクリート製の基礎が発掘された。これら2基の遺構については、ともに河川内にあることから何らかの利水施設であることが考えられる。調査時点において、現代の木呂川から北北東方向の集落である三納地区へ分水するための鉄製の水門が両遺構に近接して設置されていたことを重視すれば、これらは、先代、先々代の水門の基礎部分とみなすことが妥当と思われる。

水門は、平成16年の野々市町役場新庁舎の建設により場所が若干移動し、現在に至っているが、この水門は「狐薮水門」という名称で呼ばれていることが『野々市町史　集落編』[野々市町2004]に記載されている。水門が近代から現代にかけて木枠→コンクリート枠→鉄筋コンクリートという素材的な変化と、徐々に北へずれるという場所的な推移をみせていることが確認でき、第1次北側調査区で確認された水田遺構と共に、三納地区で現代まで続く水田経営と水利の歴史を理解する上での一助となる成果といえ

よう。

参考文献

石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2005　『末松遺跡』

石川県野々市町教育委員会　1992　『粟田遺跡第二次発掘調査報告書』

石川県野々市町教育委員会　2000　『粟田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡』

石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合　1998　『上新庄ニシウラ遺跡』

石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合　1999　『下新庄アラチ遺跡』

石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合　2000　『上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡
下新庄タナカダ遺跡』

㈶石川県埋蔵文化財センター　2000　『野々市町末松遺跡群』

柿田祐司　2005　「第４章第２節　古代前半期の末松A遺跡」『末松遺跡』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター

川畑　誠　1995　「石川県内の古代建物に関する基礎的考察」『㈳石川県埋蔵文化財保存協会年報６』
㈳石川県埋蔵文化財保存協会

北野博司　1997　「古代北陸の地域開発と出羽」『蝦夷・律令国家・日本海』
日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会

北野博司　2000　「古代北加賀の政治勢力」『市史かなざわ』第６号　金沢市

金田章裕　1996　「第一章加賀国石川郡の条里プランと横江庄」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会

小西昌志　1991　「金沢市上荒屋遺跡の条里遺構」『条里制研究』７

㈳石川県埋蔵文化財保存協会　1991　『粟田遺跡発掘調査報告書』

田嶋明人　1996　「手取扇状地にみる古代遺跡の動態」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会

野々市町史編纂専門委員会　2004　『野々市町史　集落編』　石川県野々市町

前田清彦　1996　「第５章　まとめ」『松任市三浦・幸明遺跡』松任市教育委員会

松任市教育委員会　1996　『松任市三浦・幸明遺跡』

山本直人　1986　「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌』29

横山貴広　2003a　「第二節　奈良後期～平安期の集落」『野々市町史資料編１』　石川県野々市町

横山貴広　2003b　「扇状地における新興開発領主層の台頭とその後の展開」『富山大学考古学研究室論集　蜃気楼』
秋山進午先生古稀記念論集刊行会

吉岡康暢　1996　「北陸の初期庄園遺跡と横江庄遺跡」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会

第６表　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)遺物観察表

縄　文

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
1	157	SA(1)131	W10下層	縄文土器	浅鉢				細片				
2	29	SA(1)18	W15グリッド	縄文土器					細片	外：にぶい黄褐	内：にぶい黄褐	砂礫多	
3	166	SA(1)131	W10上層	縄文土器					細片				
4	154	SA(1)131	W10下層下	縄文土器					細片				
5	155	SA(1)131	W10下層下	縄文土器					細片				
6	169	SA(1)131	W10グリッド	縄文土器					細片				
7	158	SA(1)131	W10下層	縄文土器					細片				
8	30	SA(1)18	W15グリッド	縄文土器					細片				
9	7	SA(1)	V２グリッド	縄文土器					細片	外：にぶい黄橙	内：褐		
10	55	SA(2)１	W24	縄文土器				40					底部
11	156	SA(1)131	W10下層	縄文土器					底部１/４				底部

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	長さ	幅(mm)	厚さ(mm)	残存率	石　材	重量(g)		備　考
12	24	SA(2)101	W26グリッド	石器	石鏃	26	17	4		安山岩	1		
13	64	SA(1)78		石器	楔形石器	31	13	8	完形	石英	3		
14	31	SA(1)30		石器	打製石斧	150	77	285	完形	ヒン岩	373		
15	19	SA(2)119	W17グリッド	石器	打製石斧	135	92	27	刃部欠損	火山礫凝灰岩	376		
16	13	SA(2)２		石器	打製石斧	142	101	31	基部欠損	火山礫凝灰岩	479		
17	128	SA(1)131	W９下層	石器	打製石斧	135	83	22	完形	火山礫凝灰岩	282		
18	74	SA(1)225	W７中層	石器	打製石斧	140	72	22	完形	流紋岩	305		
19	53	SA(2)１	W26グリッド	石器	打製石斧	122	82	315	完形	火山礫凝灰岩	375		
20	12	SA(2)１	V22グリッド	石器	打製石斧	133	71	32	刃部欠損	火山礫凝灰岩	292		
21	95	SA(2)１	W26グリッド	石器	打製石斧	120	84	34	基部欠損	火山礫凝灰岩	370		
22	9	SA(2)１	W18グリッド	石器	打製石斧	155	71	37	完形	火山礫凝灰岩	469		
23	10	SA(2)２		石器	打製石斧	165	92	32	完形	砂岩	439		
24	15	SA(2)44	1	石器	打製石斧	164	101	24	完形	凝灰岩	481		
25	11	SA(2)120		石器	打製石斧	142	83	24	完形	凝灰岩	409		
26	8	SA(2)325	3	石器	打製石斧	174	84	26	完形	砂岩	481		
27	167	SA(1)131	W10グリッド	石器	打製石斧	156	80	31	欠損		316		
28	131	SA(1)131	W８・下	石器	打製石斧	119	83	32	欠損	安山岩	284		
29	14	SA(2)２	U22グリッド	石器	打製石斧	92	103	28	基部欠損	火山礫凝灰岩	295		
30	52	SA(2)１	W24グリッド	石器	打製石斧	67	68	225	基部のみ	火山礫凝灰岩	117		
31	3	SA(2)１	2	石器	打製石斧	69	75	19	基部のみ	火山礫凝灰岩	116		
32	77	SA(2)１	W26グリッド	石器	打製石斧	61	71	18	基部のみ	火山礫凝灰岩	77		

古　代

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
33	63	SA(1)110		須恵器	無台杯	114	34	76	全体１/６	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ２期
34	140	SA(1)131	50、下層下	須恵器	無台杯	114	37	80	全体１/５	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅱ期
35	159	SA(1)131	58・59・60、上層	須恵器	無台杯	117	30	88	全体１/３	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅳ２(古)期
36	162	SA(1)131	42、下層	須恵器	無台杯	120	33	90	全体１/５	外：灰	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅴ１期
37	180	SA(1)224	14	須恵器	無台杯	120	32	68	口縁１/９	外：灰黄	内：灰黄	砂礫多	田嶋Ⅴ期
38	177	SA(1)224	3	須恵器	無台杯	124	31	70	全体１/６	外：灰白	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅴ期
39	60	SA(1)232		須恵器	無台杯	138		96	全体１/６	外：灰白	内：灰オリーブ	砂礫少	田嶋Ⅳ２期
40	20	SA(2)119	W17d	須恵器	無台杯	130		80	全体１/３	外：灰白	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅳ２期
41	87	SA(1)123	1	須恵器	無台杯	123	38	80	全体１/６	外：灰黄	内：灰黄	砂礫多	田嶋Ⅳ２(古)期
42	133	SA(1)131	W８上・中	須恵器	無台杯	132		80	全体１/５	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ２(新)期
43	151	SA(1)131	48、下層下	須恵器	無台杯	126	34	84	全体１/４	外：灰	内：灰	砂礫多	底部外面「｜」ヘラ描き
44	91	SA(2)１	W27	須恵器	無台杯	140	35		全体１/５	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
45	96	SA(2)１	W27	須恵器	無台杯	133	30	90	全体１/３	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
46	119	SA(2)１	W27最下層	須恵器	無台杯	137	31	95	全体１/２	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ期
47	113	SA(2)１	W26最下層	須恵器	無台杯	138	30	85	全体１/４	外：灰黄	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
48	92	SA(2)１	W26	須恵器	無台杯	156	32	99	全体１/７	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
49	47	SA(2)１	30	須恵器	無台杯	145	34	100	全体１/６	外：灰白	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
50	57	SA(2)１	24	須恵器	無台杯	158	31	100	全体１/９	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ期
51	170	SA(1)131	V７グリッド	須恵器	無台杯			90	底部１/４	外：灰白	内：灰白	砂礫多	
52	71	SA(2)１	W26最下層	須恵器	無台杯			86	底部１/７	外：灰白	内：灰白	砂礫少	
53	26	SA(1)28	2	須恵器	無台杯				底部１/７	外：灰	内：灰	砂礫少	転用硯？
54	28	SA(1)25	1	須恵器	無台杯				底部	外：灰黄	内：灰黄	砂礫少	
55	93	SA(1)120	37、B区	須恵器	無台杯			84	底部１/４	外：灰白	内：灰白	砂礫微	
56	138	SA(1)131	13、下層上	須恵器	無台杯			88	底部１/２	外：明オリーブ灰	内：オリーブ灰	砂礫少	
57	43	SA(1)６	W11グリッド	須恵器	無台杯			75	底部１/５	外：灰	内：灰	砂礫少	
58	81	SA(2)１	W26最下層	須恵器	杯	134			口縁１/８	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ２(新)期
59	82	SA(2)１	W26	須恵器	杯	121			口縁１/８	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅴ１期
60	179	SA(1)224	14	須恵器	杯	122			口縁１/４	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅴ期
61	120	SA(2)１	W27最下層	須恵器	杯	135			全体１/９	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅴ１期
62	41	SA(1)６	W11グリッド	須恵器	杯			69	底部１/６	外：灰	内：灰	砂礫少	瓶底部？
63	12	SA(1)２		須恵器	杯				底部１/２				転用砥
64	186	SA(1)224	9	須恵器	有台杯			67	底部１/４	外：灰	内：灰	砂礫少	
65	163	SA(1)131	11、下層上	須恵器	有台杯			60	底部完形	外：灰	内：灰白	砂礫少	
66	66	SA(2)１	W26最下層	須恵器	有台杯			63	底部１/４	外：灰	内：灰白	砂礫多	
67	38	SA(1)６	W11グリッド	須恵器	有台杯			69	底部１/２	外：灰	内：灰	砂礫少	
68	1	SA(2)324	2	須恵器	有台杯			67	底部１/４	外：灰	内：灰	砂礫少	
69	67	SA(2)１	W26最下層	須恵器	有台杯	105	38	57	全体１/６	外：灰白	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ２(新)期
70	178	SA(1)224	3	須恵器	有台杯			66	底部１/４	外：灰	内：灰	砂礫少	
71	101	SA(2)１	W27	須恵器	有台杯			61	底部１/４	外：灰	内：灰	砂礫少	
72	137	SA(1)131	2、中層下	須恵器	有台杯	116	46	70	全体１/７	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ期
73	98	SA(2)１	W27	須恵器	有台杯			80	底部１/２	外：灰	内：オリーブ灰	砂礫少	
74	116	SA(2)１	W26最下層	須恵器	有台杯			73	底部完形	外：浅黄	内：浅黄	砂礫少	
75	107	SA(2)１	W27最下層	須恵器	有台杯			80	底部１/５	外：灰	内：オリーブ灰	砂礫多	
76	48	SA(2)１	15	須恵器	有台杯			81	底部１/３	外：灰白	内：灰白	砂礫多	
77	142	SA(1)131	40、下層	須恵器	有台杯			74	底部１/２	外：淡黄	内：灰白	砂礫少	
78	160	SA(1)131	38、下層	須恵器	有台杯			78	底部完形	外：灰	内：灰	砂礫多	
79	161	SA(1)131	47、下層上	須恵器	有台杯			68	底部完形	外：黄灰	内：黄灰	砂礫少	
80	111	SA(2)１	W27最下層	須恵器	有台杯			72	底部１/３	外：灰	内：灰	砂礫多	

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
81	64	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			86	底部1/4	外：灰	内：灰	砂礫多	
82	68	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			75	底部1/2	外：灰白	内：灰白	砂礫少	
83	58	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			77	全体2/3	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅴ期
84	110	SA(2)1	W27下	須恵器	有台杯			69	底部1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ2期
85	144	SA(1)131	29、下層上	須恵器	有台杯	104	40	70	全体1/2	外：明オリーブ灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ2(新)期
86	51	SA(2)1	13	須恵器	有台杯			63	底部1/4	外：灰	内：灰	砂礫少	
87	108	SA(1)120	74、床から18cm	須恵器	有台杯			77	底部1/4	外：灰	内：灰白	砂礫多	
88	66	SA(1)138		須恵器	有台杯			54	底部1/3	外：灰	内：灰	砂礫少	
89	16	SA(2)205		須恵器	有台杯			70	底部1/2	外：灰白	内：灰白	砂礫少	
90	59	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯	111	34	81	全体1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ2(古)期
91	153	SA(1)131	48、下層下	須恵器	有台杯	109	41	73	全体1/2	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ1期
92	4	SA(1)9	4、床から2cm	須恵器	有台杯	121	40	45	全体1/4	外：灰色	内：灰色	砂礫少	底部外面「×」ヘラ書き、Ⅳ1
93	99	SA(2)1	W27	須恵器	有台杯			90	底部1/5	外：灰	内：灰	砂礫少	
94	100	SA(2)1	W27	須恵器	有台杯			87	底部1/3	外：灰	内：灰	砂礫少	
95	65	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			99	底部1/5	外：灰	内：灰	砂礫多	
96	184	SA(1)224	7	須恵器	有台杯			94	底部1/3	外：灰白	内：灰白	砂礫多	
97	37	SA(1)6	W11グリッド	須恵器	有台杯			92	底部1/3	外：灰白	内：灰白	砂礫少	
98	103	SA(2)1	W26b	須恵器	有台杯	144	42	92	全体1/3	外：灰	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅲ期
99	164	SA(1)131	51、下層上	須恵器	有台杯			80	底部完形	外：灰	内：灰白	砂礫多	
100	105	SA(1)121	8、床から8cm	須恵器	有台杯	119	45	80	全体1/2	外：灰	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅳ2(古)期
101	2	SA(2)322	1	須恵器	有台杯			91	底部1/6	外：灰	内：灰白	砂礫少	
102	97	SA(2)1	W27	須恵器	有台杯			83	全体1/3	外：灰	内：灰	砂礫少	
103	69	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			86	底部1/6	外：灰白	内：灰	砂礫少	
104	60	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			87	底部1/2	外：灰	内：灰	砂礫多	
105	147	SA(1)131	W8グリッド	須恵器	有台杯			88	底部完形	外：灰	内：灰白	砂礫多	底部外面「‖」ヘラ描き
106	105	SA(2)1	W27最下層	須恵器	有台杯			93	底部1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	
107	109	SA(2)1	W27最下層	須恵器	有台杯			97	底部1/4	外：灰	内：灰	砂礫多	
108	26	SA(2)120		須恵器	有台杯			120	底部1/6	外：灰	内：灰	砂礫多	
109	MA	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			103	底部1/4	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ期
110	165	SA(1)131	W8上・中層	須恵器	有台杯	145	42	105	全体1/2	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ期
111	70	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			95	底部1/3	外：灰白	内：灰	砂礫多	
112	61	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			99	底部1/5	外：灰白	内：灰白	砂礫少	
113	45	SA(2)1	W26c	須恵器	有台杯	163	41	98	全体1/5	外：灰白	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
114	109	SA(1)120	75、床から20cm	須恵器	有台杯			120	底部1/7	外：灰	内：灰	砂礫少	
115	104	SA(2)1	W27下	須恵器	有台杯			118	底部1/4	外：灰	内：灰白	砂礫多	
116	106	SA(2)1	W27下	須恵器	有台杯			118	底部1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	
117	108	SA(2)1	W27最下層	須恵器	有台杯			118	底部1/6	外：灰	内：灰	砂礫多	
118	129	SA(1)131	W8・下	須恵器	有台杯			114	底部1/2	外：灰	内：灰	砂礫多	
119	39	SA(1)6	W12グリッド	須恵器	有台杯			119	底部1/5	外：灰白	内：灰白	砂礫少	
120	152	SA(1)131	39、下層下	須恵器	有台杯			102	底部完形	外：灰	内：灰白	砂礫多	
121	102	SA(2)1	W27	須恵器	有台杯			96	底部1/3	外：暗灰	内：灰	砂礫多	
122	63	SA(2)1	W26最下層	須恵器	有台杯			128	底部1/5	外：灰	内：灰白	砂礫多	
123	89	SA(2)1	V27上層	須恵器	有台杯			131	底部1/7	外：灰	内：灰	砂礫多	
124	149	SA(1)131	52、下層上	須恵器	有台杯	180	64	120	全体1/3	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ2期
125	126	SA(2)1	W27最下層	須恵器	有台杯	159	69	126	全体1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ2期
126	40	SA(1)6	W12グリッド	須恵器	有台杯	170	60	121	全体1/8	外：オリーブ黒	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ2期
127	86	SA(1)123	上層	須恵器	盤	184	22	150	全体1/8	外：灰白	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ2(新)期
128	TCC'	SA(1)131	15・18、下層上	須恵器	盤	158	18	120	全体1/2	外：黄灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅴ1期
129	181	SA(1)224	4・13	須恵器	盤	172	19	132	全体1/7	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅴ2期
130	46	SA(2)1	31	須恵器	高杯				脚部1/2	外：灰白	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅳ期
131	87	SA(2)1	W26	須恵器	高杯			146	脚部1/8	外：灰オリーブ	内：灰白	砂礫少	
132	78	SA(2)1	W26最下層・下層	須恵器	壺蓋				全体1/3	外：オリーブ黒	内：灰	砂礫少	
133	130	SA(1)131	W8・下	須恵器	杯蓋					外：灰白	内：灰白	砂礫少	
134	74	SA(2)1	W26最下層	須恵器	杯蓋				全体1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	
135	122	SA(2)1	W27最下層	須恵器	杯蓋				全体1/5	外：灰	内：灰	砂礫多	
136	145	SA(1)131	31、下層上	須恵器	杯蓋				全体1/5	外：灰白	内：灰黄	砂礫少	
137	67	SA(1)138		須恵器	杯蓋					外：灰黄褐	内：黄灰	砂礫少	
138	43	SA(2)1	1	須恵器	杯蓋				全体1/3	外：灰	内：灰	砂礫多	
139	136	SA(1)131	W9・下層	須恵器	杯蓋	163	29		全体1/4	外：灰白	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
140	75	SA(2)1	W26最下層	須恵器	杯蓋	159	26		全体1/5	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅳ1期
141	185	SA(1)224	4	須恵器	杯蓋	164			全体1/6	外：灰白	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅳ2期
142	62	SA(1)92		須恵器	杯蓋	156				外：灰	内：灰白	砂礫少	田嶋Ⅴ1期
143	90	SA(2)1	W26上層・W27	須恵器	杯蓋	168	34		口縁1/2	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅲ期
144	88	SA(2)1	W27上層	須恵器	杯蓋	172			口縁1/4	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅲ期
145	76	SA(2)1	W26最下層	須恵器	杯蓋	165			全体1/9	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅲ期
146	132	SA(1)131	W9上・中	須恵器	杯蓋	130			全体1/6	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ2期
147	73	SA(2)1	W26最下層	須恵器	杯蓋	168	13		全体1/4	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ2期
148	148	SA(1)131	32、下層上	須恵器	横瓶				全体1/15	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ？期
149	125	SA(2)1	W27最下層	須恵器	瓶類				頸部1/2	外：灰白	内：灰	砂礫少	
150	135	SA(1)131	21(上層)・28(下層上)	須恵器	瓶類				肩部1/5	外：灰白	内：灰白	砂礫多	
151	TA	SA(1)131	4、中層下	須恵器	瓶類			118	底部1/2	外：灰	内：灰白	砂礫多	田嶋Ⅴ期
152	79	SA(2)1	W26下層	須恵器	瓶類			130	全体1/6	外：オリーブ黒	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅳ期
153	80	SA(2)1	W26最下層	須恵器	瓶類			101	底部破片	外：灰オリーブ	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅴ期
154	150	SA(1)131	53、下層下	須恵器	瓶類			86	底部1/2	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ期
155	62	SA(2)1	W26最下層	須恵器	壺			105	底部2/3	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅱ期
156	42	SA(2)1	29	須恵器	短頸壺			147	底部1/6	外：暗灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅱ期
157	127	SA(2)1	W27最下層	須恵器	鉢			111	底部1/3	外：灰黄	内：灰黄	砂礫多	
158	171	SA(1)131	W11グリッド	須恵器	瓶類			80	底部1/2	外：灰白	内：灰白	砂礫多	
159	83	SA(2)1	W26最下層	須恵器	甕	258			口縁1/9	外：オリーブ灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
160	84	SA(2)1	W26最下層	須恵器	甕	214			口縁1/4	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
161	44	SA(1)6	W13グリッド	須恵器	甕				破片	外：灰白	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
162	86	SA(2)1	W26最下層	須恵器	甕	229			口縁1/5	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
163	56	SA(2)205	3	須恵器	甕	260			口縁1/18	外：暗灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
164	124	SA(2)1	W27最下層	須恵器	甕	253			口縁1/6	外：灰白	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
165	72	SA(2)1	W26最下層	須恵器	甕	317			口縁1/12	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
166	85	SA(2)1	W26最下層	須恵器	甕	414			口縁1/10	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅱ－3期
167	174	SA(1)131	W8グリッド	須恵器	甕	400			口縁1/18	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
168	TB	SA(1)131	44、下層上	須恵器	甕	220			口縁1/10	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅱ－3期
169	123	SA(2)1	W27下	須恵器	甕				破片	外：灰	内：灰	砂礫多	田嶋Ⅲ～Ⅳ期

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
170	121	SA(2)1	W27最下層	須恵器	甕				口縁1/12	外：灰	内：灰	砂礫少	田嶋Ⅲ～Ⅳ期
171	44	SA(2)1	25	須恵器	甕	220			口縁1/6	外：灰	内：灰	砂礫多	
172	173	SA(1)131	17・19・21・23、上層	須恵器	甕				頸部1/6	外：灰	内：灰	砂礫多	
173	107	SA(1)121	9、上層	須恵器	甕				砕片	外：オリーブ灰	内：オリーブ灰	砂礫多	
174	175	SA(1)131	22、中層	須恵器	甕				砕片	外：灰	内：灰	砂礫多	
175	139	SA(1)131	1、下層	須恵器	甕			142	底部1/6	外：オリーブ灰	内：灰白	砂礫多	
176	9	SA(1)9	54、床から10cm	土師器	椀	121	24		全体1/7	外：橙	内：明赤褐	シャ、砂礫少	内外面赤彩、田嶋Ⅲ期
177	TD	SA(1)131	W10・上	土師器	椀			64	底部1/8	外：赤彩	内：赤彩	砂礫少	田嶋Ⅳ2期
178	50	SA(2)1	5	土師器	椀	142			口縁砕片	外：赤彩	内：赤彩	砂礫少	田嶋Ⅳ期
179	172	SA(1)131	W11グリッド	土師器	椀	150			口縁1/12	外：赤彩	内：赤彩	砂礫少	
180	49	SA(2)1	22	土師器	椀	150			口縁砕片	外：赤彩	内：赤彩	砂礫少	
181	134	SA(1)131	W8グリッド	土師器	椀	112			全体1/5	外：橙	内：黒	シャ、砂礫少	田嶋Ⅶ期
182	176	SA(1)224	2・13・17	土師器	椀	131	34	57	全体1/5	外：赤彩	内：黒	砂礫多	外赤彩内黒碗、田嶋Ⅵ期
183	99	SA(1)120	72(床から3cm)・24(床から15cm)・59(床から5cm)	土師器	小釜	124	121		全体1/2	外：浅黄橙	内：にぶい褐	シャ、砂礫多	田嶋Ⅳ期
184	11	SA(1)9	3、SD覆土下層	土師器	小釜			103	全体1/3	外：にぶい黄橙	内：褐	シャ、砂礫少	外面煤付着、底部のみ酸化
185	13	SA(1)4	4	土師器	小釜			680	底部完形	外：橙	内：黄橙	シャ、砂礫少	
186	27	SA(1)28	3	土師器	小釜				底部3/5	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	砂礫少	
187	143	SA(1)131	61、中層上	土師器	小釜	91	70		完形	外：橙	内：明黄橙	砂礫多	
188	1～3	SA(1)9	7・27・28・32・47、土坑覆土	土師器	釜	232			全体1/9	外：浅黄橙	内：褐	シャ、長石粒	外面に煤付着、同一個体、田嶋Ⅱ—3期
189	103	SA(1)120	91・67(焼土床上)、60(床直柱穴内)、53(床から7cm)、10・11・13(ハリダシa確認面)、28(床から10cm以下)、84・85・83・ハリダシa	土師器	釜	232				外：にぶい黄橙	内：橙	砂礫多	田嶋Ⅳ2期
190	102	SA(1)120	6・7	土師器	釜	222			口縁1/3	外：明黄褐	内：明黄褐	シャ、砂礫少	田嶋Ⅲ期
191	8	SA(1)9	55	土師器	釜	200			口縁1/7	外：橙	内：黄褐	シャ、砂礫少	外面に煤付着、田嶋Ⅳ1期
192	94	SA(1)120	71、床から18cm	土師器	釜	212			口縁1/9	外：浅黄橙	内：浅黄橙	シャ、砂礫少	田嶋Ⅳ2期
193	101	SA(1)120	4(確認面)・10(ハリダシa確認面)・44(床から10cm)・52(床から2cm)・A区・B区	土師器	釜	206			全体1/20	外：橙	内：にぶい黄褐	砂礫多	田嶋Ⅱ～Ⅲ期
194	115	SA(2)1	W26最下層	土師器	釜	215			口縁1/12	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	シャ、砂礫多	田嶋Ⅳ2期
195	95	SA(1)120	ハリダシa	土師器	釜	124			口縁1/10	外：にぶい褐	内：明褐灰	シャ、砂礫少	田嶋Ⅴ期
196	6	SA(1)9	53、上層	土師器	釜	141			全体1/18	外：にぶい橙	内：橙	砂礫少	口縁部内面にコゲ付着、田嶋Ⅴ1期
197	18	SA(1)5	8	土師器	釜				口縁1/12	外：にぶい黄褐	内：にぶい黄褐	砂礫少	田嶋Ⅲ期
198	141	SA(1)131	46、下層上	土師器	釜	204			口縁1/9	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	シャ、砂礫多	田嶋Ⅴ期
199	59	SA(1)132		土師器	釜				砕片	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	シャ、砂礫少	田嶋Ⅴ1期
200	15	SA(1)4	1	土師器	釜	241			口縁1/12	外：にぶい橙	内：にぶい橙	シャ、砂礫少	田嶋Ⅴ期
201	146	SA(1)131	W10上層下	土師器	釜	273			口縁1/18	外：浅黄橙	内：浅黄橙	シャ、砂礫少	田嶋Ⅴ期
202	96	SA(1)120	5(確認面)・ハリダシa・85	土師器	釜	260			口縁1/6	外：浅黄橙	内：浅黄橙	砂礫多	田嶋Ⅴ期
203	14	SA(1)4	10	土師器	釜				口縁1/12	外：浅黄橙	内：浅黄橙	砂礫少	田嶋Ⅴ1期
204	114	SA(2)1	W26最下層	土師器	釜	336			口縁1/18	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	シャ、砂礫多	
205	100	SA(1)120	46・47・48(床から2cm)	土師器	釜				体部1/5	外：にぶい黄橙	内：にぶい橙	シャ、砂礫少	田嶋Ⅱ—3期
206	61	SA(1)99		土師器	釜				胴部1/9	外：浅黄橙	内：橙	シャ、砂礫多	田嶋Ⅱ—3期
207	88	SA(1)123	2・8・上層、焼土上層	土師器	釜				体部1/8	外：にぶい橙	内：赤褐	砂礫少	内外面煤付着
208	16	SA(1)5	1・2・4	土師器	釜					外：浅黄橙	内：浅黄橙	砂礫少	
209	25	SA(1)29	1	土師器	釜				砕片	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	砂礫少	
210	24	SA(1)34	1	土師器	釜				砕片	外：浅黄橙	内：にぶい黄橙	シャ、砂礫少	
211	89	SA(1)123	3・7、焼土上層	土師器	釜				体部1/6	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄褐	砂礫少	外面煤付着、一部酸化
212	91'	SA(1)120		土師器	釜				砕片	外：橙	内：橙	シャ、砂礫少	
213	92	SA(1)120	45、床から5cm	土師器	釜				体部1/7	外：橙	内：橙	砂礫少	
214	91	SA(1)120	51、床から10cm	土師器	釜				砕片	外：にぶい橙	内：にぶい黄橙	砂礫多	外面煤付着
215	97	SA(1)120	30、確認面近く	土師器	釜				砕片	外：浅黄橙	内：にぶい黄褐	砂礫多	
216	98	SA(1)120	5、確認面近く	土師器	釜				砕片	外：淡黄	内：浅黄橙	砂礫多	
217	65	SA(1)138		土師器	釜				砕片	外：灰黄褐	内：浅黄橙	シャ、砂礫多	
218	106	SA(1)121	2、上層	土師器	釜				砕片	外：橙	内：にぶい橙	砂礫多	
219	90	SA(1)120	62(床から3cm)・16(確認面近く)	土師器	釜			64	底部1/2	外：浅黄橙	内：明褐灰	砂礫多	
220	10	SA(1)9	35、床から1cm	土師器	釜				底部完形	外：明赤褐	内：橙		
221	117	SA(2)1	W20	土師器	?			84	底部1/6	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	砂礫少	
222	187	SA(1)224	10～14	土師器	鍋	374	142	83	ほぼ完形	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	砂礫少	田嶋Ⅲ期

中　世

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
223	94	SA(2)1	W26カクラン	中世土師器	Ⅲ	72	15	45	全体1/9	外：浅黄橙	内：橙	シャ、砂礫少	藤田Ⅱ～Ⅲ期
224	45	SA(1)6	W10グリッド	加賀焼	擂鉢				砕片	外：灰白	内：黄灰		宮下Ⅱ～Ⅲ期
225	109	SA(1)251	W3グリッド	陶器	卸皿			54	底部1/4	釉：灰釉	胎：淡黄		瀬戸
226	1- 1	SA(2)2	T22a包含層	中国白磁	碗			35	底部1/3	釉：透明釉	胎：灰白	黒色粒	16C
227	27	SA(2)119	X19c	中国青磁	碗	118			口縁1/12	釉：青磁釉	胎：灰白		16C

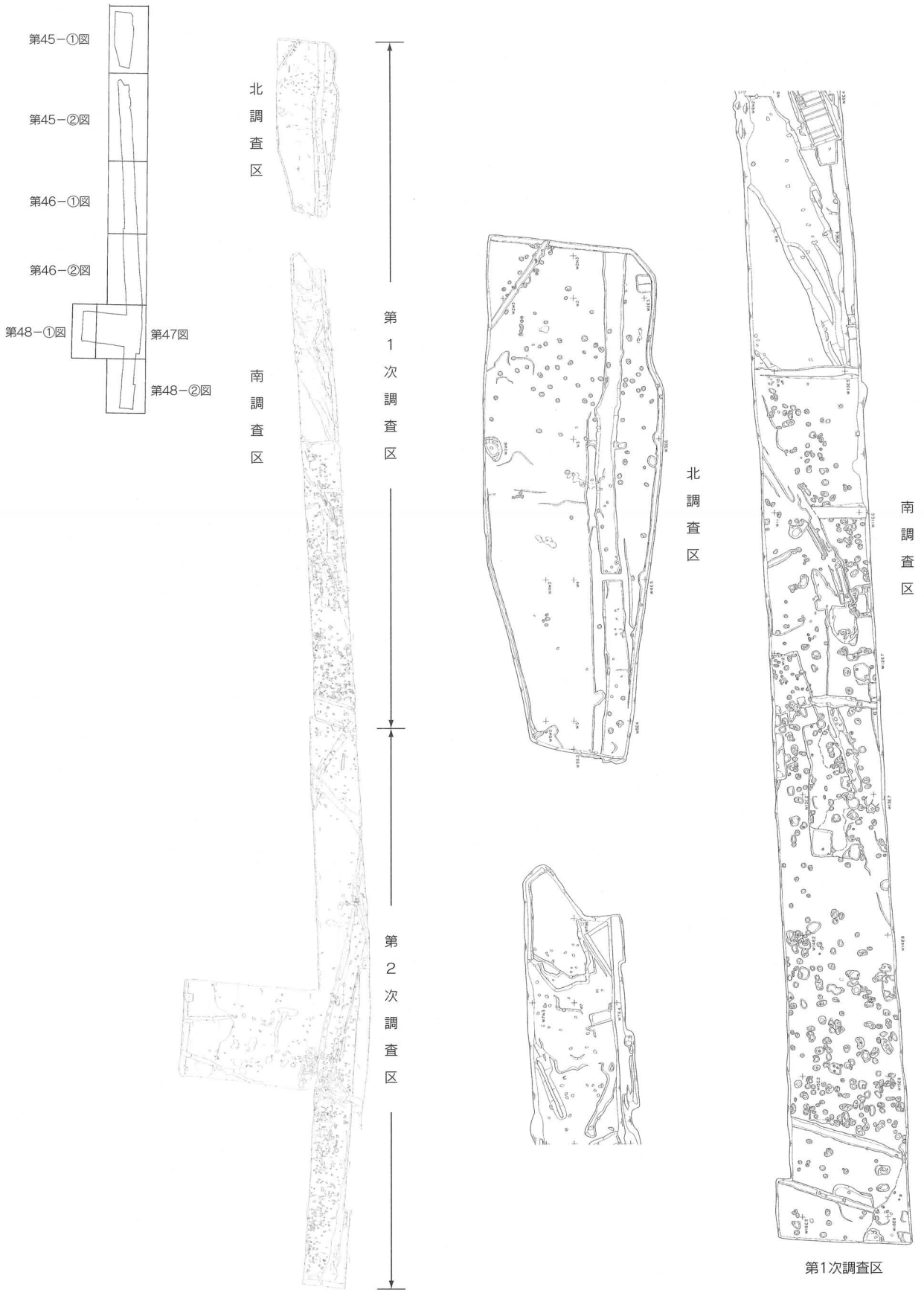
近世以降

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種 類	器 種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色 調	色 調	胎土混和物	備 考
228	108	SA(1)251	W3グリッド	磁器	碗			43	底部1/2	釉：青磁釉	胎：灰白		肥前、17C前(大橋Ⅱ期)
229	4	SA(2)480		磁器	碗	83			口縁1/7	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後(大橋Ⅲ期)
230	57	SA(1)226		磁器	碗			40	底部2/3	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、18C前(大橋Ⅳ期)
231	82	SA(1)225	W7グリッド	磁器	猪口	82			口縁1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、19C前
232	48	SA(1)6	W11グリッド	磁器	碗	91			全体1/6	釉：透明釉	胎：灰白		肥前系、18C後～19C初
233	56	SA(1)226		磁器	碗			49	底部1/2	釉：透明釉	胎：灰白		肥前(波佐見)、17C中～後(大橋Ⅲ期)、水による摩耗
234	79	SA(1)225	W8グリッド	磁器	碗			48	底部2/3	釉：透明釉	胎：灰白		瀬戸、銅板刷り
235	21	SA(2)18		磁器	筒形碗				全体1/4	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C中(大橋Ⅲ期)
236	5	SA(2)480		磁器	碗	96			口縁1/5	釉：青磁釉	胎：灰白		肥前、18C後
237	111	SA(1)225	W8・木枠上	磁器	碗			45	底部1/2	釉：透明釉	胎：灰白		近代

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
238	112	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	碗			44	底部２/３	釉：透明釉	胎：灰白		近代
239	118	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	碗			57	底部１/２	釉：透明釉	胎：灰白		近代
240	120	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	碗	55	59	40	全体１/２	釉：透明釉	胎：灰白		近代
241	121	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	碗			42	全体１/２	釉：透明釉	胎：灰白	黒色粒少	近代
242	25	SA(2)101		磁器	碗	124			口縁１/12	釉：透明釉	胎：灰白		近代
243	51	SA(1)６	W11グリッド	磁器	碗			46	全体１/５	釉：透明釉	胎：灰白		印刷、近代
244	53	SA(1)６	W12グリッド	磁器	碗	130			口縁１/７	釉：青磁釉	胎：灰白		近代
245	115	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	碗	73	35	28	全体１/８	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、19C中(大橋Ⅴ期)
246	83	SA(1)225	W７グリッド	磁器	小碗			30	底部１/３	釉：透明釉	胎：灰白		瀬戸、幕末～明治
247	85	SA(1)225	W７グリッド	磁器	小碗	86	38	28	全体１/２	釉：透明釉	胎：灰白		瀬戸
248	117	SA(1)250		磁器	小杯	60			口縁１/５	釉：透明釉	胎：灰白		現代？
249	22	SA(2)18		磁器	Ⅲ	108			口縁１/６	釉：透明釉	胎：灰白		肥前(波佐見)、17C後～18C前(大橋Ⅲ～Ⅳ期)
250	23	SA(2)182		磁器	Ⅲ			42	底部１/３	釉：透明釉	胎：灰白		肥前(波佐見)、17C後～18C前(大橋Ⅲ～Ⅳ期)
251	55	SA(1)226		磁器	Ⅲ			48	底部１/２	釉：透明釉	胎：灰白		肥前(波佐見)、17C後～18C中(大橋Ⅲ～Ⅳ期)
252	46	SA(1)６	W11グリッド	磁器	Ⅲ			47	全体１/３	釉：透明釉	胎：灰白		肥前(波佐見)、18C中～19C初(大橋Ⅳ～Ⅴ期)
253	93	SA(2)１	W26カクラン	磁器	Ⅲ	142			全体１/９	釉：透明釉	胎：灰白		肥前(波佐見)、17C末～18C中(大橋Ⅳ期)
254	81	SA(1)225	W７グリッド	磁器	蓋付鉢			50	底部１/４	釉：透明釉	胎：灰白	黒色粒多	再興九谷19C前
255	84	SA(1)225	W７グリッド	磁器	鉢	136			口縁１/18	釉：透明釉	胎：灰白		肥前系、18C後～19C初
256	113	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	蓋	134			口縁１/６	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、19C
257	123	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	仏飯器				全体１/３	釉：透明釉	胎：灰白		水摩耗激しい
258	TA	SA(2)101		磁器	豆碗	26	13	10	全体１/４	釉：透明釉	胎：灰白		
259	54	SA(1)226		磁器	瓶類	28			口縁完形	釉：透明釉	胎：灰白		
260	114	SA(1)225	W８・木枠上	磁器	瓶類				頸部１/２	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、18C(大橋Ⅳ～Ⅴ期)
261	70	SA(1)242		磁器	瓶類				体部１/３	釉：透明釉	胎：灰白		近代
262	76	SA(1)225	W７・上層	磁器	瓶類					釉：緑釉	胎：灰白		近代
263	58	SA(1)226		陶器	碗			46	底部１/３	釉：灰釉	胎：灰白		肥前、17C後(大橋Ⅲ期)
264	6	SA(2)480		陶器	碗			48	底部１/５	釉：灰釉・錆釉	胎：灰白		肥前、17C後～18C後(大橋Ⅲ～Ⅴ期)
265	116	SA(1)250		陶器	碗	78	39	39	全体１/５	釉：透明釉	胎：灰白		19C
266	110	SA(1)251	W３グリッド	陶器	Ⅲ			32	底部１/２	外：暗オリーブ	内：褐灰	砂礫微	筑前、17C初
267	47	SA(1)６	W11グリッド	陶器	Ⅲ			41	底部１/２	釉：灰釉	胎：鈍い黄橙		肥前、16C末～17C前(大橋Ⅰ～Ⅱ期)
268	52	SA(1)６	W12・上層	陶器	土瓶	91			口縁１/７	釉：透明釉	胎：灰白		近代
269	122	SA(1)250		陶器	擂鉢			136	底部１/６	外：暗褐	内：灰白	シャ多	九谷
270	75	SA(1)225	W７・上層	陶器	壺	220				釉：灰釉	胎：灰白	シャ、砂礫多	瀬戸
271	69	SA(1)226		陶器	甕	480			砕片	外：褐	内：灰白	砂礫	近代
272	49	SA(1)６	W11グリッド	陶器	甕	288			口縁１/14	釉：鉄泥	胎：浅黄橙		越前
273	119	SA(1)225	W８・木枠上	陶器	土瓶	84				釉：白泥釉	胎：橙		19C
274	71	SA(1)242		陶器	甕			105	底部１/６	外：にぶい赤褐	内：にぶい赤褐	砂礫	近代
275	118	SA(2)１	W27下	土器	？				砕片	外：にぶい黄橙	内：浅黄橙	シャ、砂礫多	

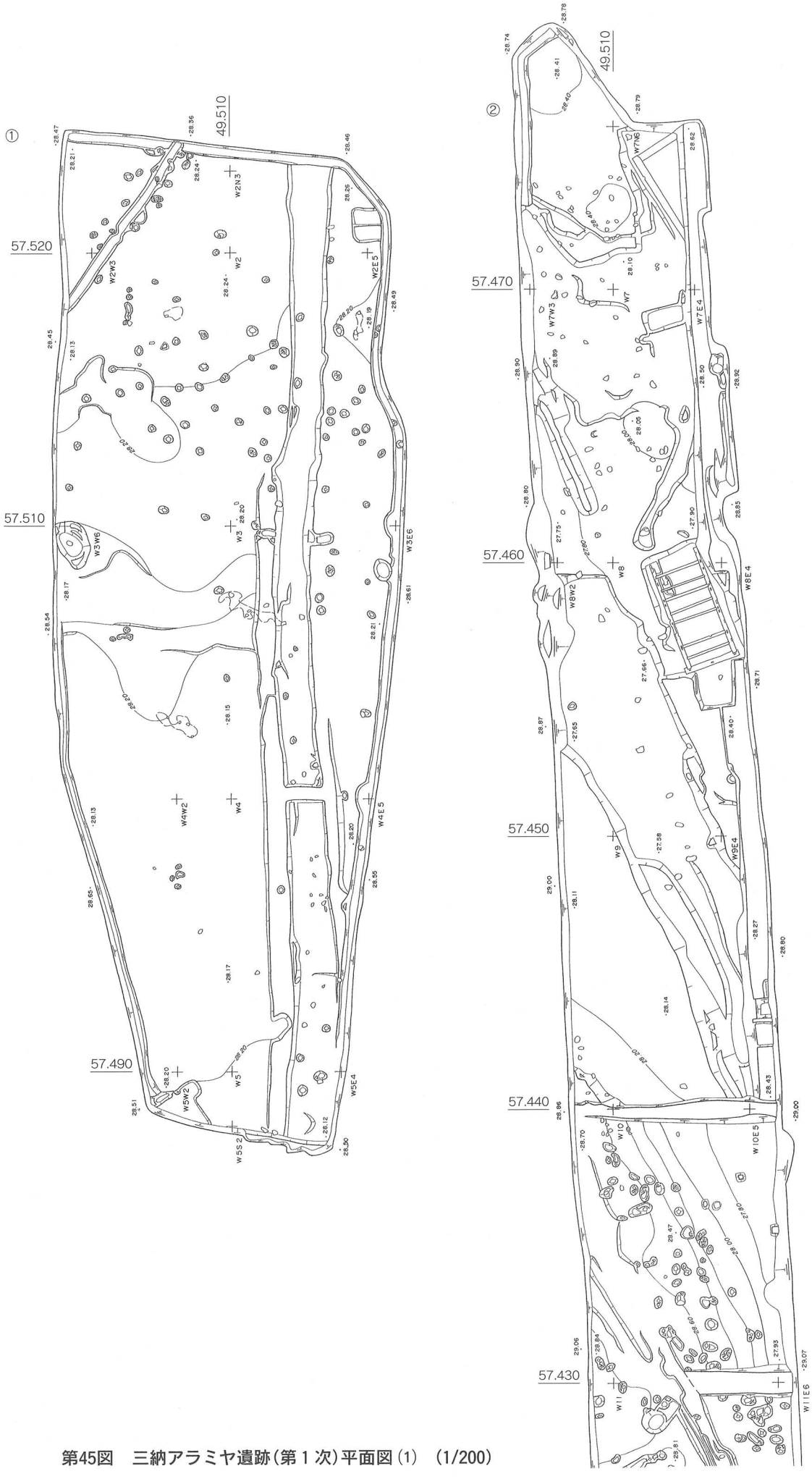
その他

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
276	50	SA(1)６	W12・上層	石製品	砥石								被熱、長81mm、幅50mm、厚43mm、重165g
277	127	SA(1)251	W３グリッド	石製品	砥石								長88mm、幅55mm、厚37mm、重165g
278	54	SA(2)１	W25a	石製品	砥石								頁岩？長115mm、幅45mm、厚29mm、重128g
279	28	SA(2)119	X19a	石製品	砥石								砂岩？被熱、長62mm、幅43mm、厚34mm、重138g
280	19	SA(1)１		土製品	土錘				全体１/３	外：にぶい橙	内：橙	シャ、砂礫多	長405mm、幅35mm、内径14mm、重23g
281	20	SA(1)１		土製品	土錘				全体１/３	外：にぶい黄橙	内：にぶい黄橙	砂礫多	長(34)mm、幅(31)mm、内径10mm、重13g
282	35	SA(1)６	W12グリッド	土製品	土錘				全体４/５	外：橙	内：橙	シャ、砂礫少	長37mm、幅28mm、内径10mm、重14g
283	36	SA(1)６	W12グリッド	土製品	土錘				全体１/２	外：橙	内：淡赤橙	シャ、骨針、砂礫少	長42mm、幅29mm、内径13mm、重14g
284	68	SA(1)226			平瓦								長171mm、幅146mm、厚26mm
285	124	SA(1)225	木枠上		軒平瓦						胎：赤褐		近代
286	21	SA(1)４	12		鉄滓								長410mm、幅37mm、厚19mm、重22g
287	22	SA(1)14			鉄滓								炉壁？　長460mm、幅40mm、厚22mm、重23g
288	23	SA(1)31			鉄塊								外面砂付着、長595mm、幅420mm、厚26mm、重83g
289	182	SA(1)224	8		鉄滓								炉壁？　長670mm、幅52mm、厚21mm、重66g
290	5	SA(1)９	10	金属製品	釘				全体１/２				重4.15g
291	33	SA(1)６	W12グリッド	金属製品	釘				完形				長57mm、頭部径12mm、厚4.5mm、重５g
292	73	SA(1)242		金属製品	煙管								長121mm、幅15mm、厚15mm
293	32	SA(1)１		金属製品	簪				完形				長148mm、最大幅６mm、厚２mm、重4.7g
294	34	SA(1)６	W12グリッド	金属製品	銭貨				完形				寛永通宝、長24mm、厚1.5mm、重２g
295	125	SA(1)225	W８・木枠上	金属製品	やっとこ				ほぼ完形				長216mm、幅51mm、厚24mm、重215g
296	126	SA(1)225	W８グリッド	金属製品	錠				ほぼ完形				長33mm、幅49mm、厚16mm、重19g
297	72	SA(1)242		ガラス	牛乳瓶				体部１/４				「全乳」、現代
298	77	SA(1)225	W７・中層	ガラス	瓶	38							近代
299	78	SA(1)225	W７・中層	ガラス	瓶			60					現代？
300	80	SA(1)225	W７グリッド	セルロイド	櫛				全体１/５				縦67mm、横28mm

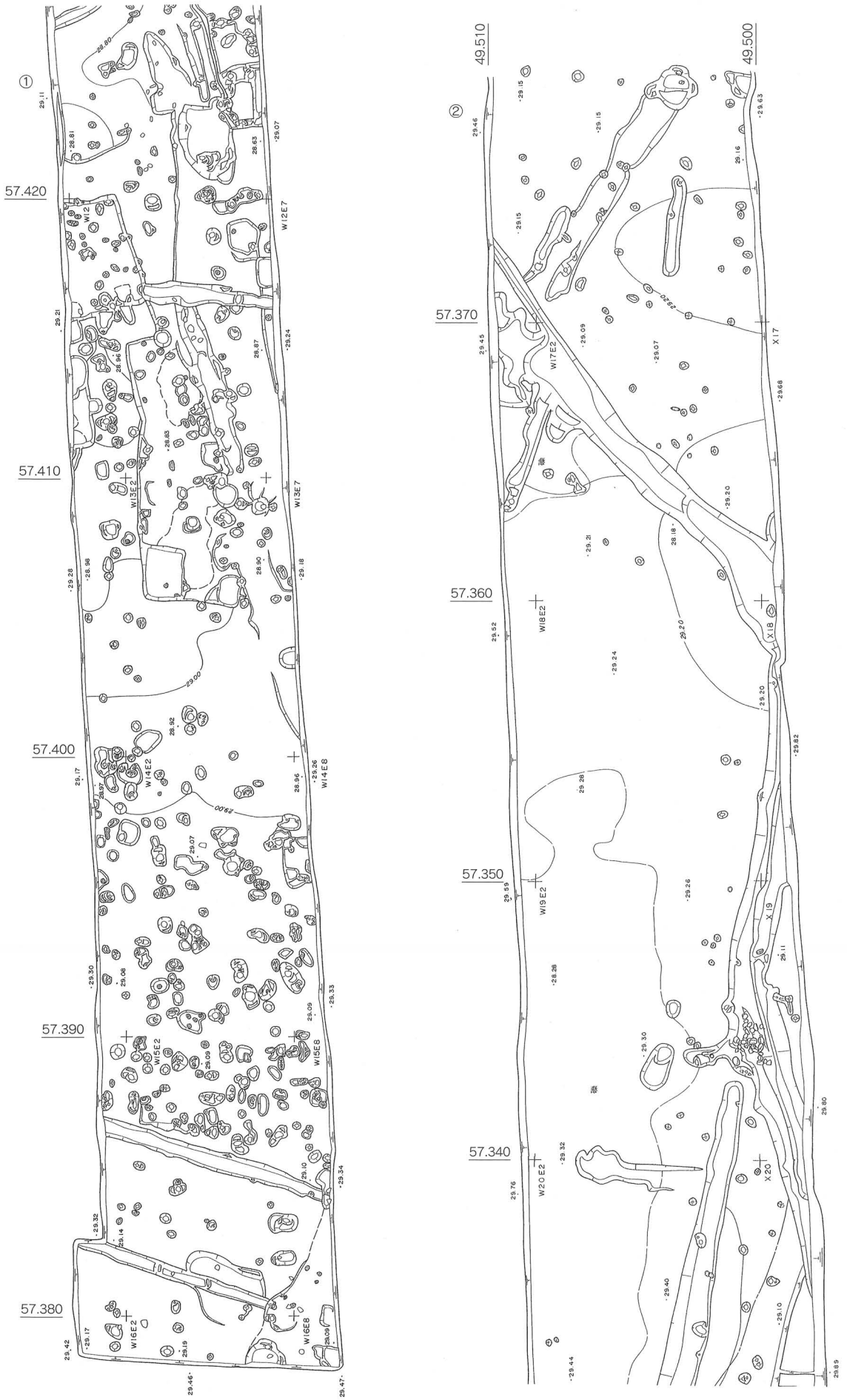


第43図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）遺構分布図(1)　(1/1,200、1/400)

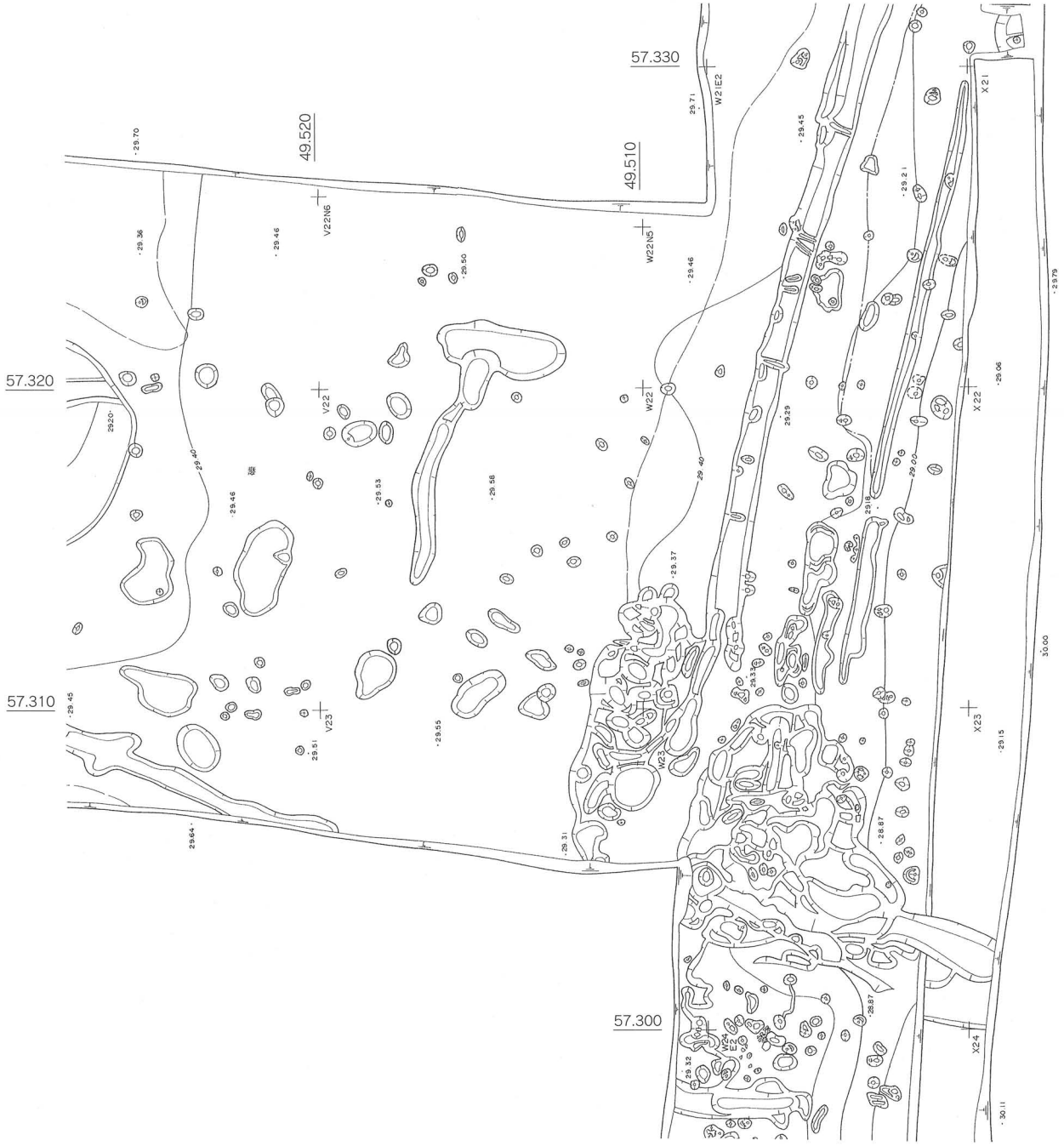
第44図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）遺構分布図(2)　(1/400)



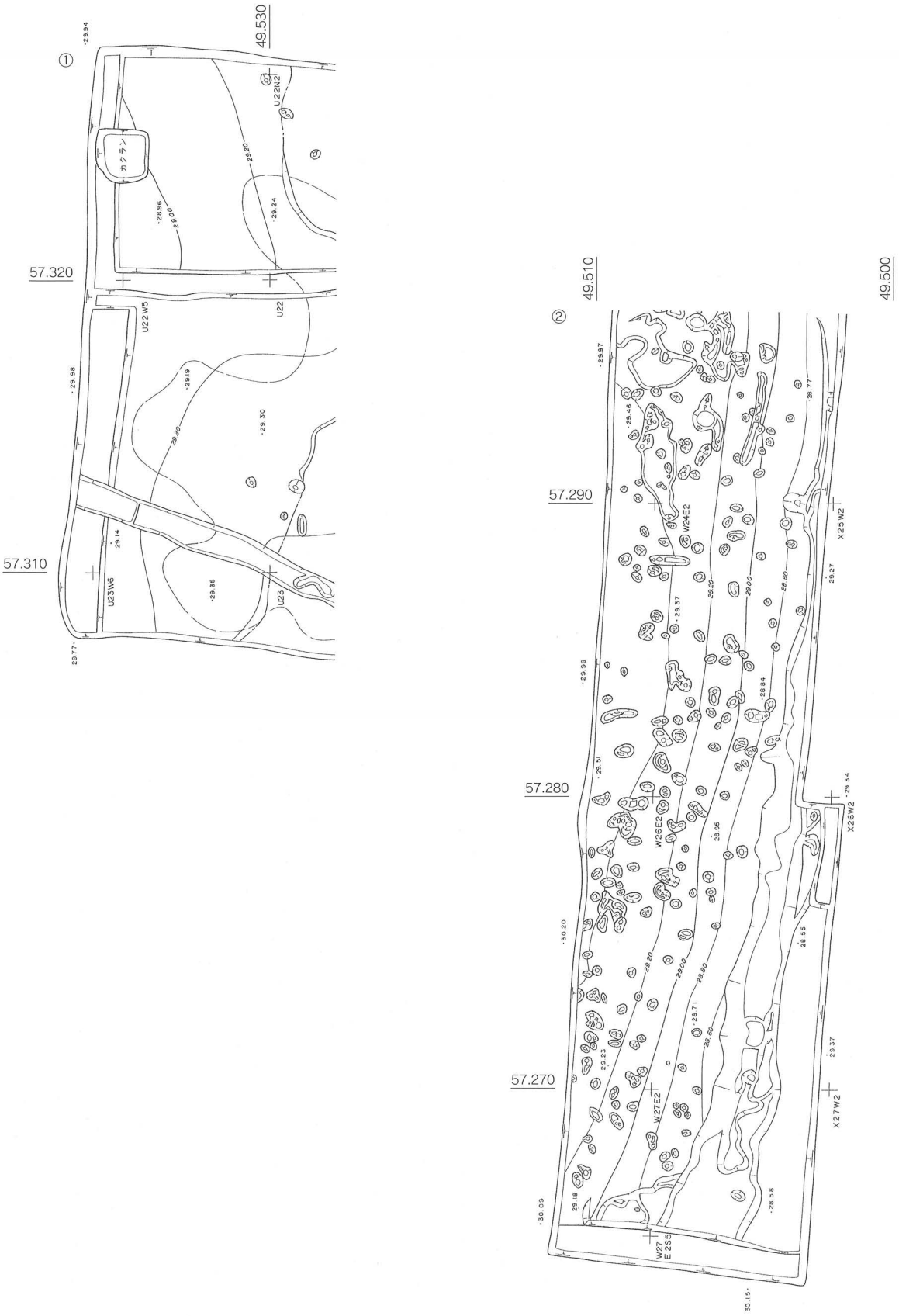
第45図　三納アラミヤ遺跡（第１次）平面図（1）（1/200）



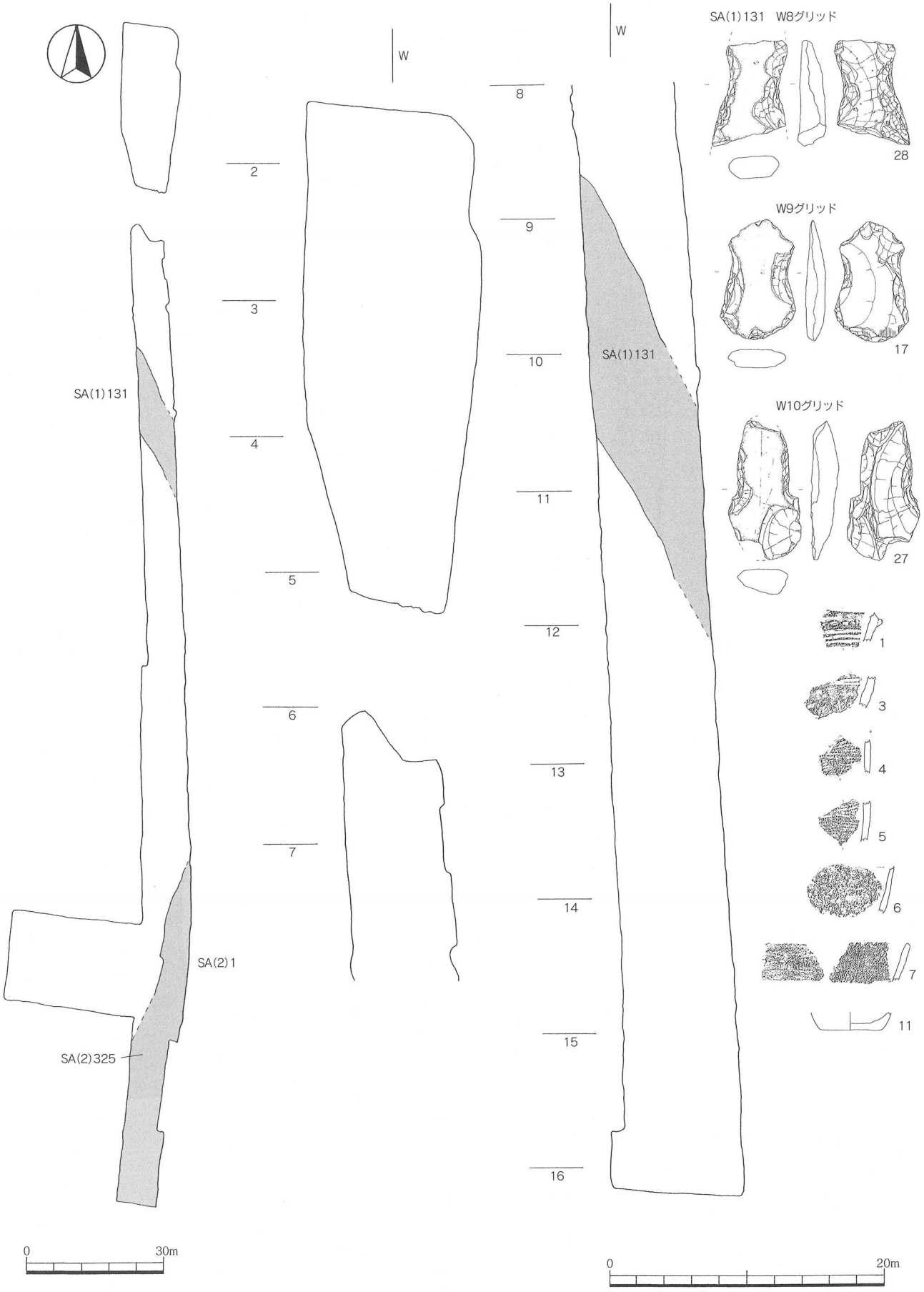
第46図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)平面図(2)　(1/200)



第47図　三納アラミヤ遺跡(第２次)平面図(3)　(1/200)

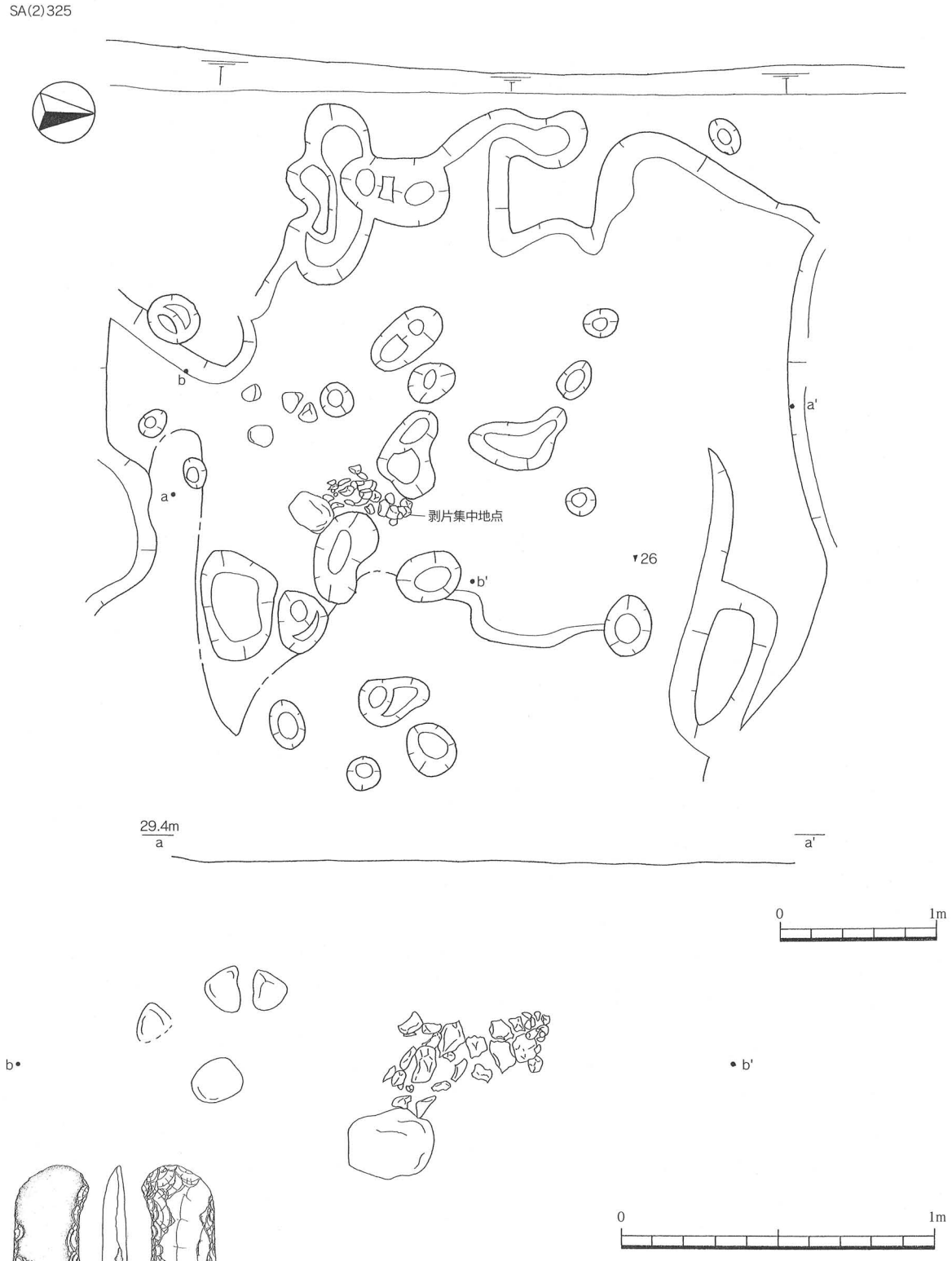


第48図　三納アラミヤ遺跡(第２次)平面図(4)　(1/200)



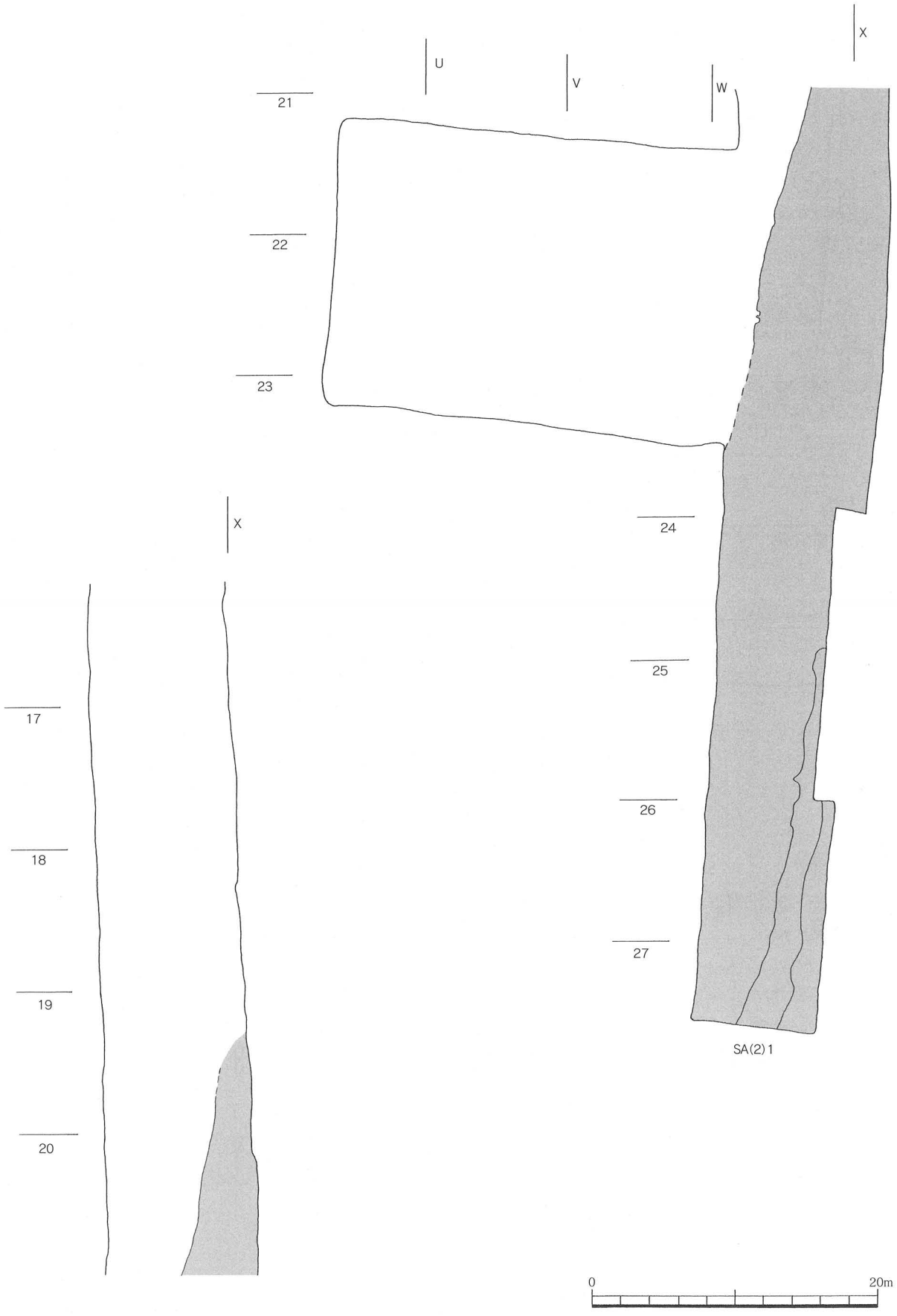
第49図　縄文時代遺構全体図(1)　(1/1,200、1/400)

第50図　縄文時代遺構全体図(2)　(1/400)

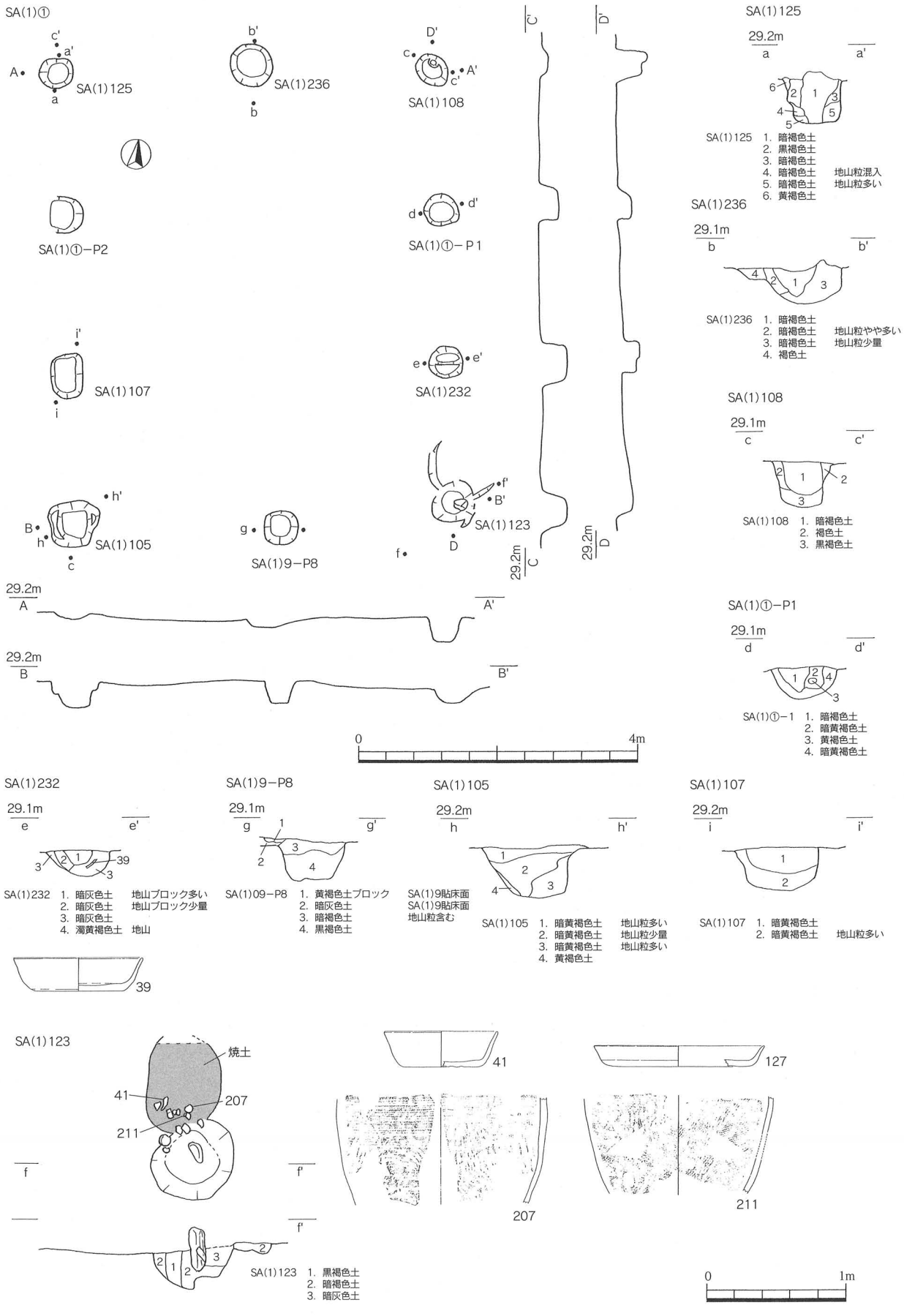


第51図　遺構実測図　SA(2)325　(1/40、1/20)

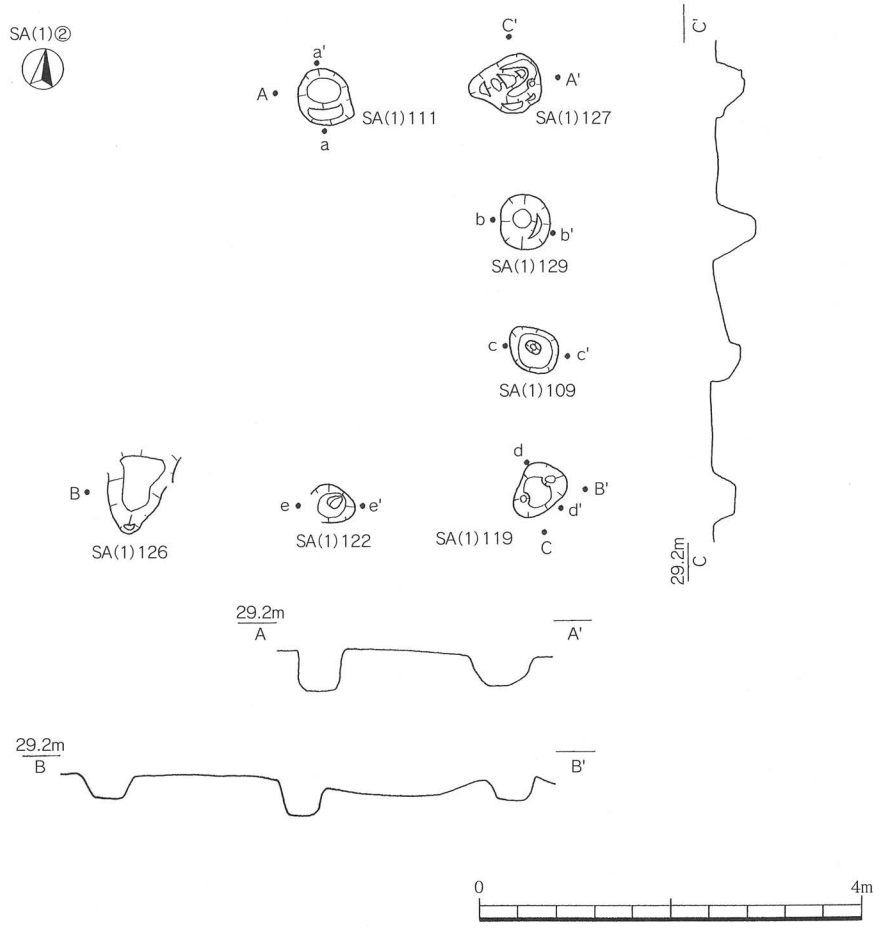
第52図　古代遺構全体図(1)　(1/1,200、1/400)

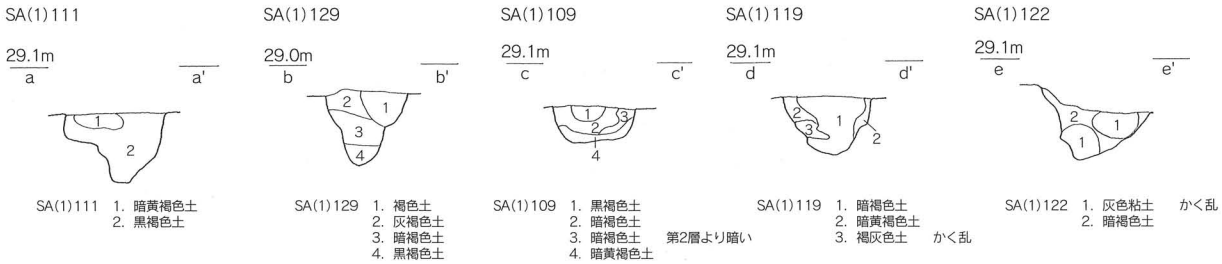


第53図　古代遺構全体図(2)　(1/400)



第54図　遺構実測図　掘立柱建物SA(1)①　(1/80、1/40)





SA(1)111 1. 暗黄褐色土
2. 黒褐色土

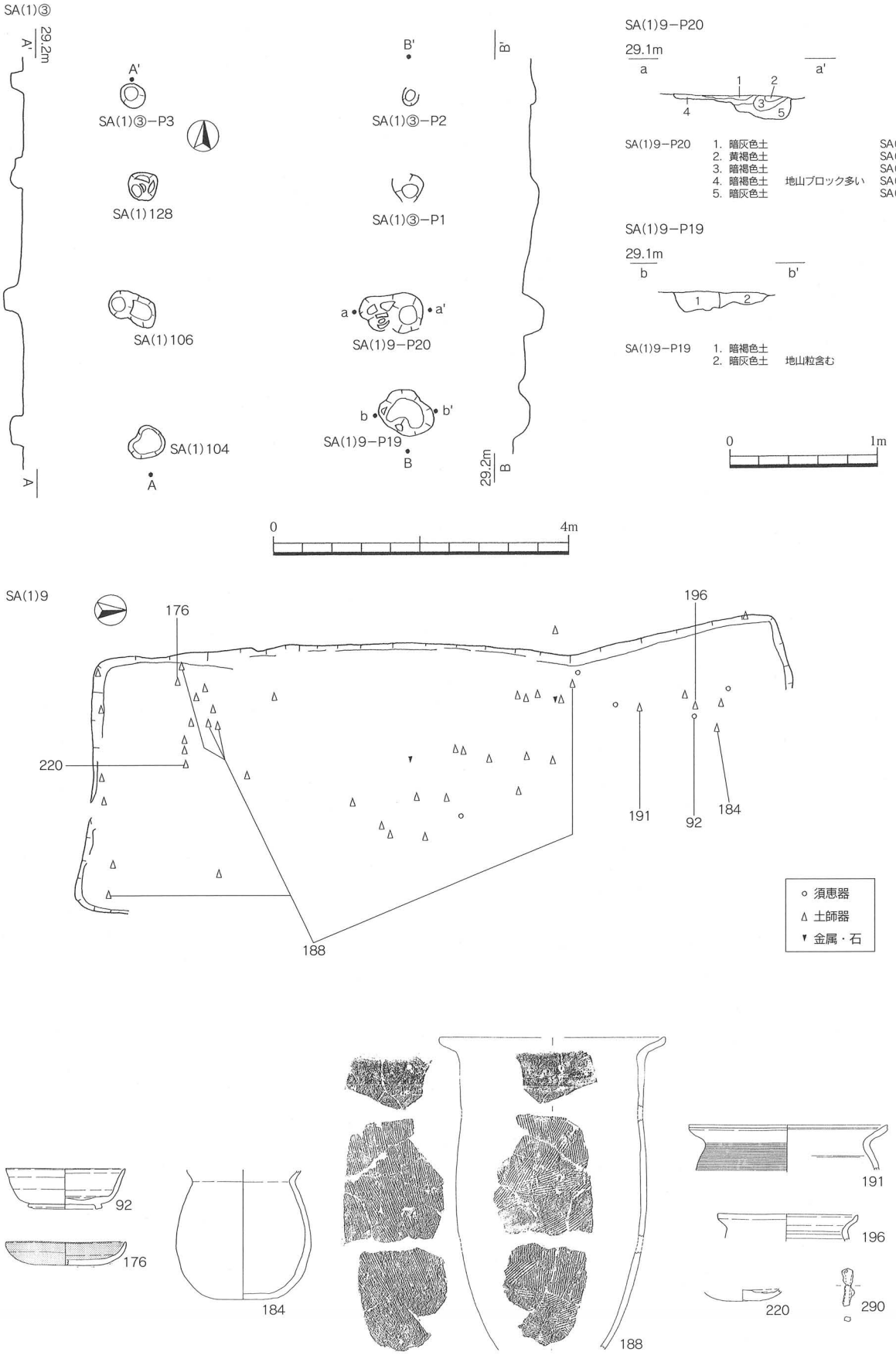
SA(1)129 1. 褐色土
2. 灰褐色土
3. 暗褐色土
4. 黒褐色土

SA(1)109 1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土 第2層より暗い
4. 暗黄褐色土

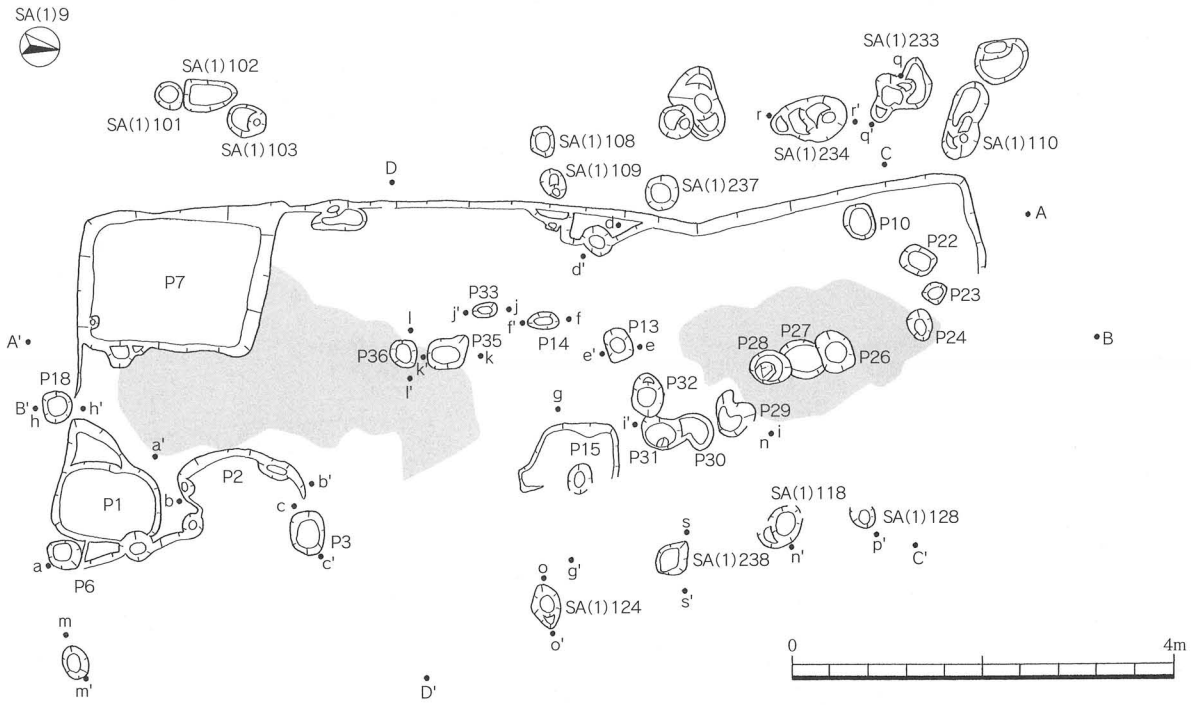
SA(1)119 1. 暗褐色土
2. 暗黄褐色土
3. 褐灰色土 かく乱

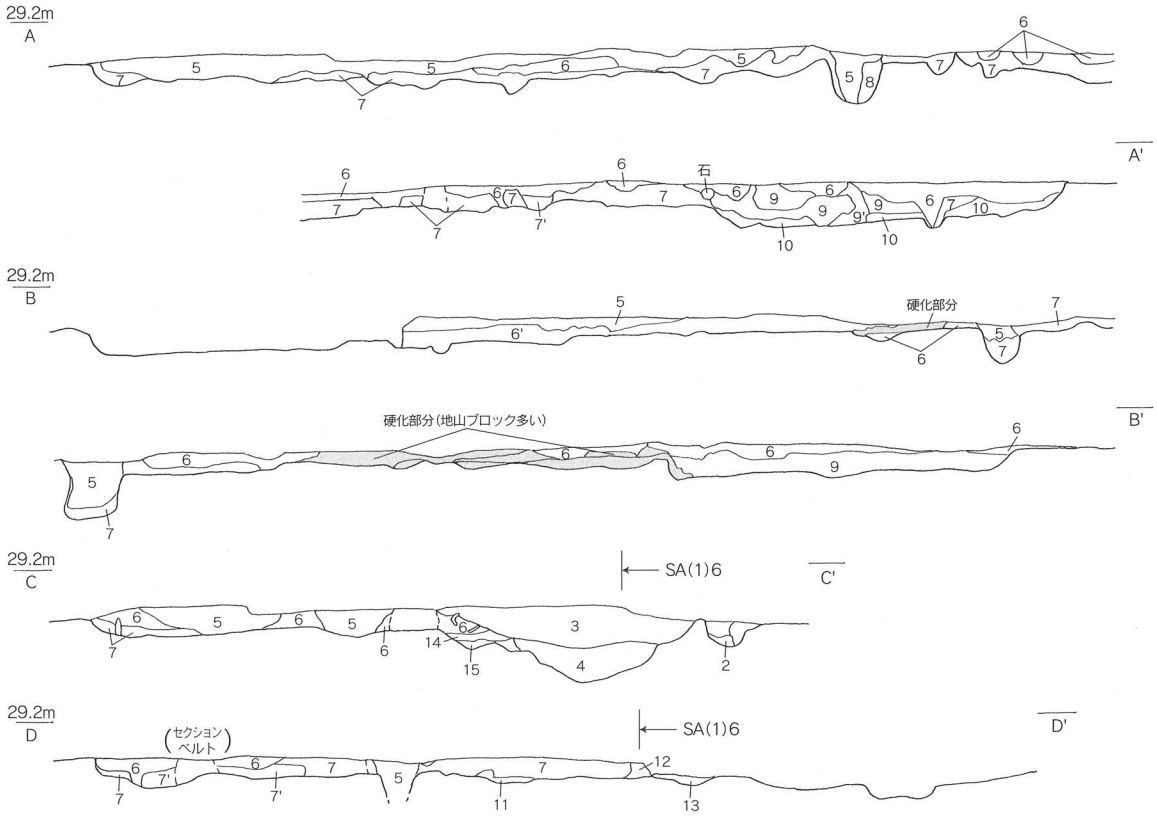
SA(1)122 1. 灰色粘土 かく乱
2. 暗褐色土

第55図　遺構実測図　掘立柱建物SA(1)②　(1/80、1/40)



第56図　遺構実測図　掘立柱建物SA(1)③・遺物出土状況図　竪穴建物SA(1)9　(1/80、1/40)





SA(1)9

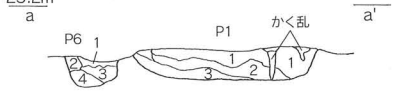
1.	褐灰色土		ピット覆土	9.	褐色土	地山粒少量
2.	濁黄褐色土		ピット覆土	9'.	褐色土	第9層より地山土多い
3.	淡青灰色シルト		SA(1)6覆土	10.	濁黄褐色土	
4.	青灰色粘質土		SA(1)6覆土	11.	濁黄褐色土	硬化面
5.	暗褐色土			12.	暗灰褐色土	
6.	暗褐色土	地山粒少量		13.	暗褐色土	地山ブロック多い　硬化面
7.	褐色土	地山質混入		14.	暗褐色土	地山ブロック多い　硬化面
7'.	褐色土	第7層より地山土多い		15.	濁黄褐色土	
8.	暗褐色土	地山粒含む				

0　1m

第57図　遺構実測図　竪穴建物SA(1)9(1)　(1/80、1/40)

SA(1)9周辺ピット

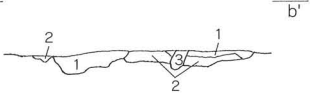
SA(1)9−P1・P6



SA(1)9−P1　1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 黒褐色土

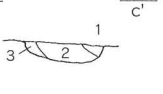
SA(1)9−P6　1. 暗褐色土
2. 暗褐色土　黄褐色土ブロック
3. 暗褐色土　第2層より暗い
4. 黒褐色土

SA(1)9−P2



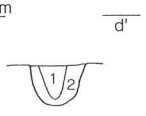
SA(1)9−P2　1. 黒褐色土
2. 淡褐色土　しまり強い
3. 褐色土　かく乱

SA(1)9−P3



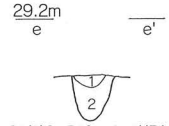
SA(1)9−P3　1. 暗灰色土
2. 暗褐色土
3. 暗灰色土

SA(1)9−P9



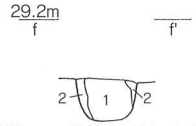
SA(1)9−P9　1. 暗褐色土　地山粒混入
2. 褐色土　地山土多い

SA(1)9−P13



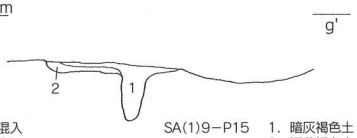
SA(1)9−P13　1. 暗褐色土　地山粒混入
2. 褐色土　地山土多い

SA(1)9−P14



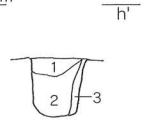
SA(1)9−P14　1. 暗褐色土　地山粒混入
2. 褐色土　地山土多い

SA(1)9−P15



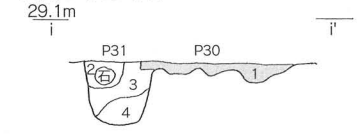
SA(1)9−P15　1. 暗灰褐色土
2. 濁黄褐色土

SA(1)9−P18



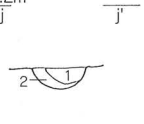
SA(1)9−P18　1. 暗灰色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　地山粒少量

SA(1)9−P30・P31



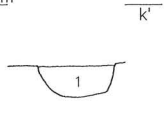
SA(1)9−P31　1. 暗灰褐色土　SA(1)09硬化面
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　地山ブロック多い
4. 暗褐色土

SA(1)9−P33



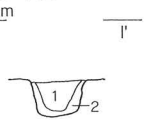
SA(1)9−P33　1. 暗灰褐色土　地山粒混入
2. 褐色土　地山土多

SA(1)9−P35



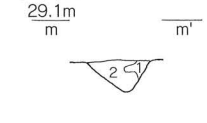
SA(1)9−P35　1. 暗褐色土

SA(1)9−P36



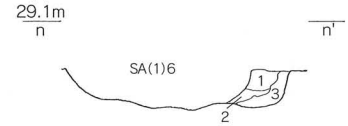
SA(1)9−P36　1. 暗褐色土
2. 暗褐色土　地山粒多い

SA(1)114



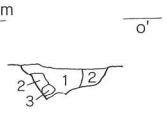
SA(1)114　1. 暗灰色土
2. 暗褐色土

SA(1)118



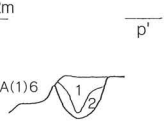
SA(1)118　1. 暗褐色土
2. 暗黄褐色土
3. 暗褐色土

SA(1)124



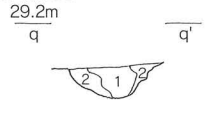
SA(1)124　1. 暗褐色土
2. 暗黄褐色土
3. 褐色土ブロック

SA(1)128



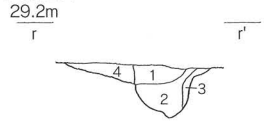
SA(1)128　1. 暗灰色土
2. 暗灰褐色土

SA(1)233



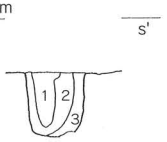
SA(1)233　1. 淡暗褐色土
2. 濁黄褐色土

SA(1)234



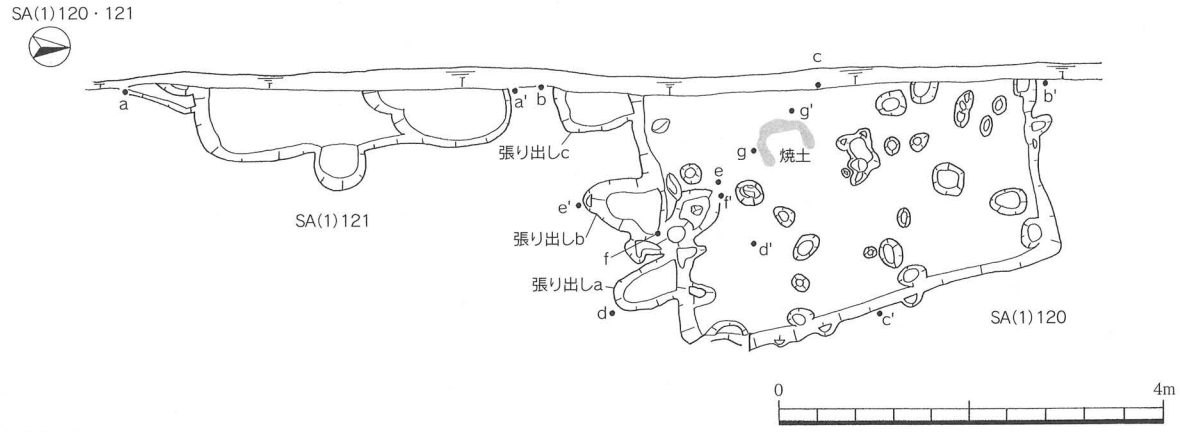
SA(1)234　1. 暗褐色土　地山粒混入
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　地山粒混入
4. 濁黄褐色土

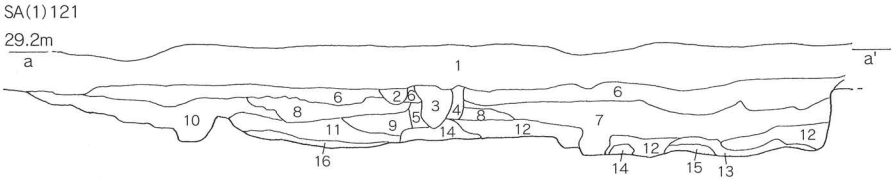
SA(1)238



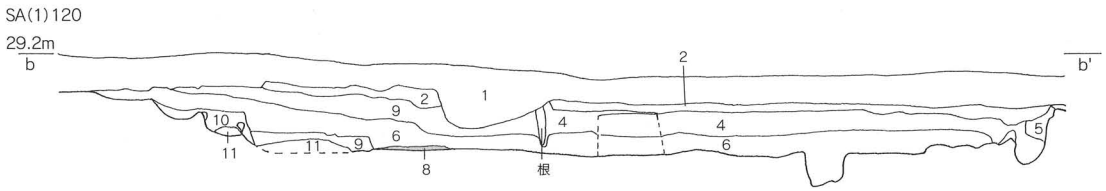
SA(1)238　1. 暗灰色土　柱痕
2. 暗灰褐色土
3. 濁黄褐色土

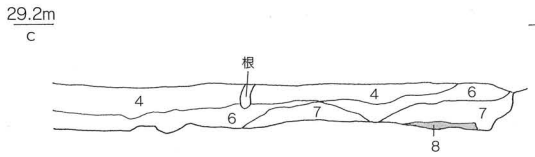
第58図　遺構実測図　竪穴建物SA(1)9(2)　(1/40)

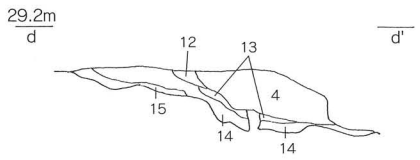


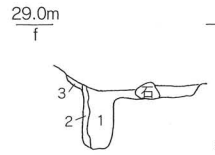


SA(1)121
1. 灰色粘土　現水田耕土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土　地山粒やや多い
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土　地山粒多い
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土　地山粒少量
11. 暗褐色土　炭化物少量
12. 暗褐色土　地山粒やや多い
13. 黒褐色土
14. 暗褐色土
15. 暗赤灰色土　炭化物含む　焼土
16. 暗赤灰色土　焼土

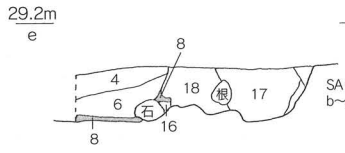




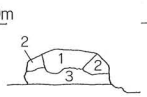




SA(1)120 断面
1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　地山粒含む

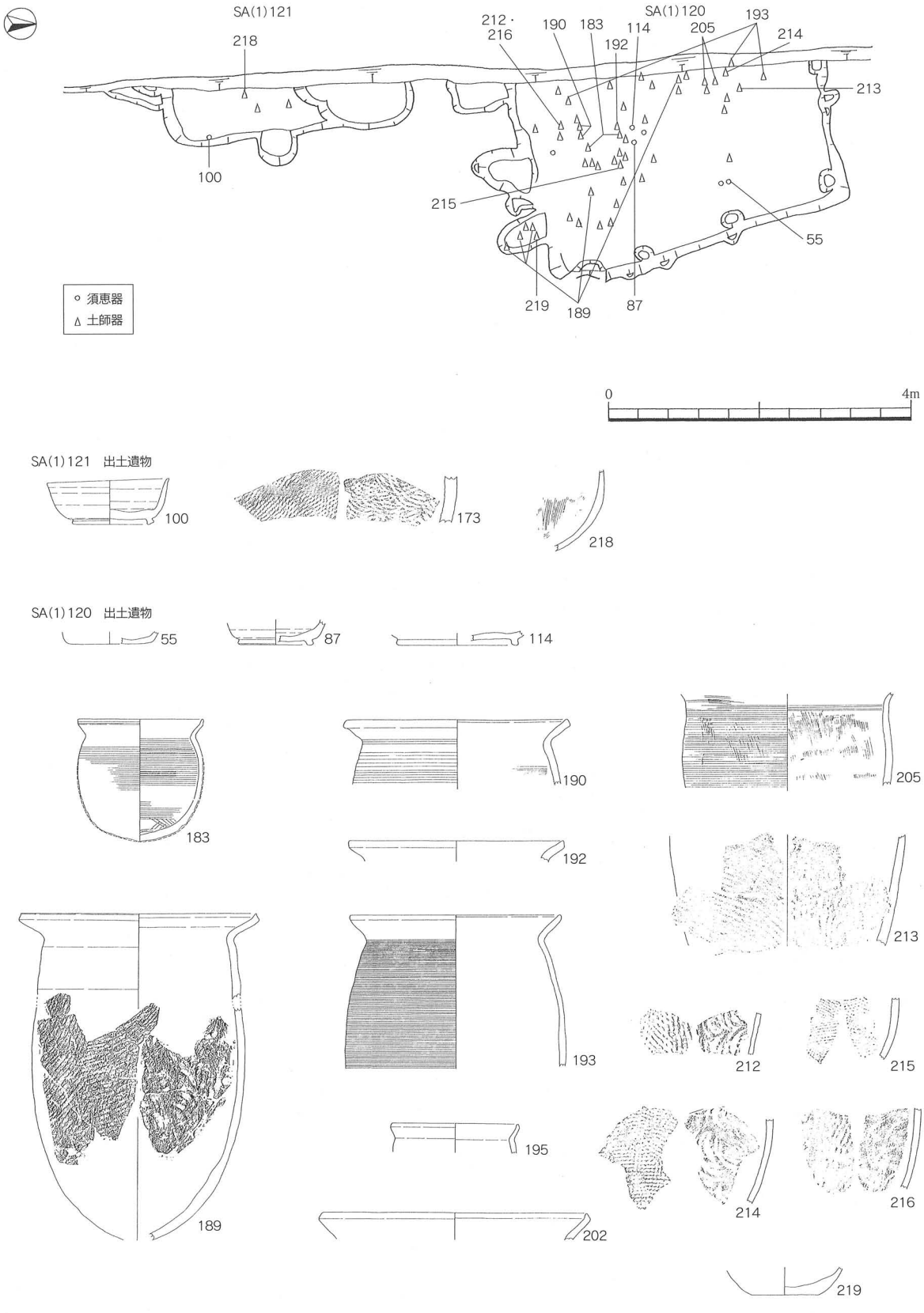


SA(1)120 b～e断面
1. 青灰色粘質土　現水田耕土
2. 明青灰色粘質土　現水田耕土
3. 黄青灰色粘質土　現水田耕土
4. 暗褐色土
5. 褐色土　地山粒多い
6. 暗褐色土　第4層より暗い
7. 褐色土　地山粒少量
8. 暗褐色土　地山粒少量、しまり強い　貼床？
9. 暗赤褐色土　焼土粒少量
10. 暗褐色土　地山粒少量
11. 褐色土
12. 褐色土
13. 暗赤褐色土
14. 褐色土
15. 黄褐色土
16. 暗褐色土
17. 暗褐色土
18. 暗褐色土　第17層より暗い

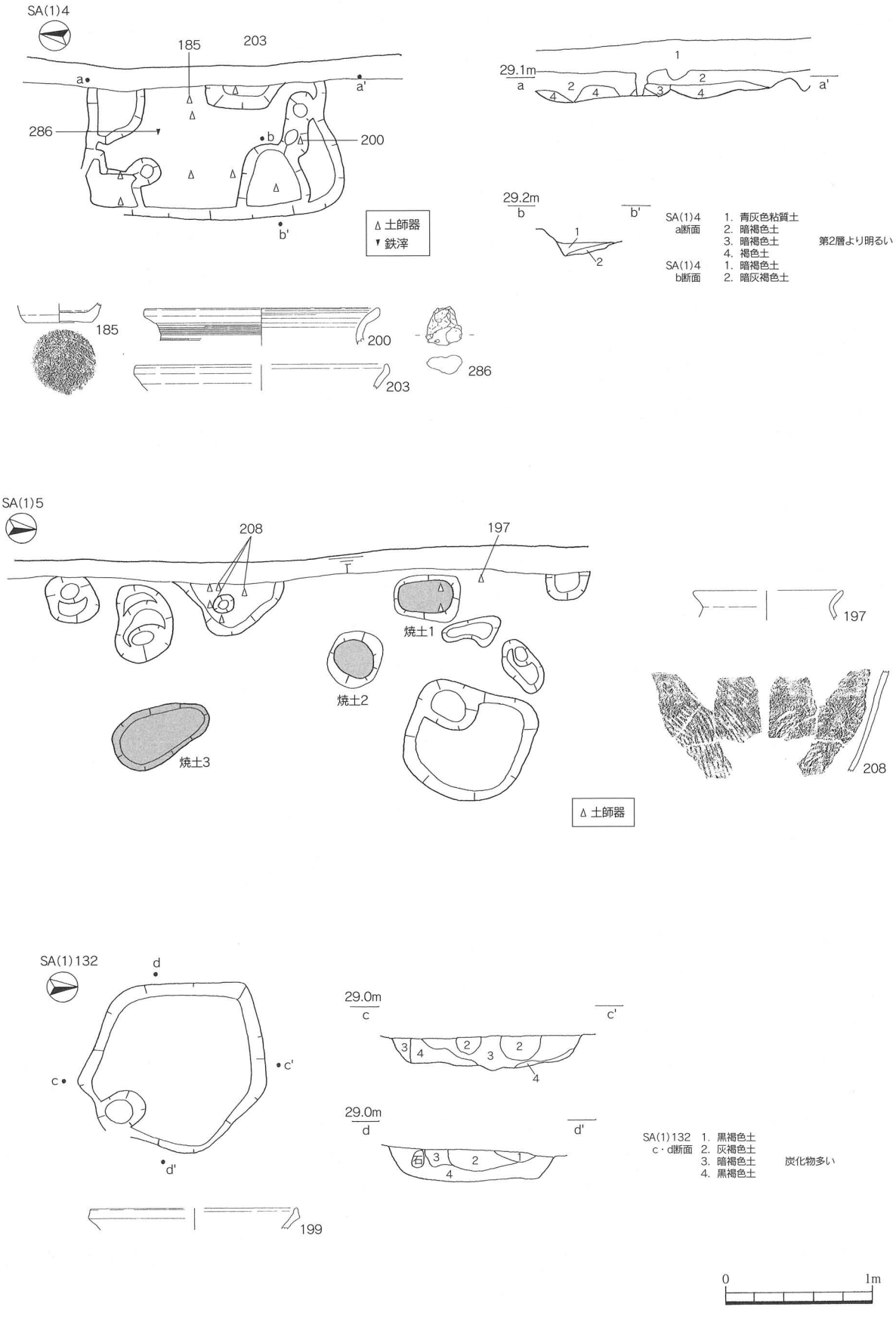


SA(1)120 g断面
1. 赤褐色土
2. 暗赤褐色土
3. 暗褐色土

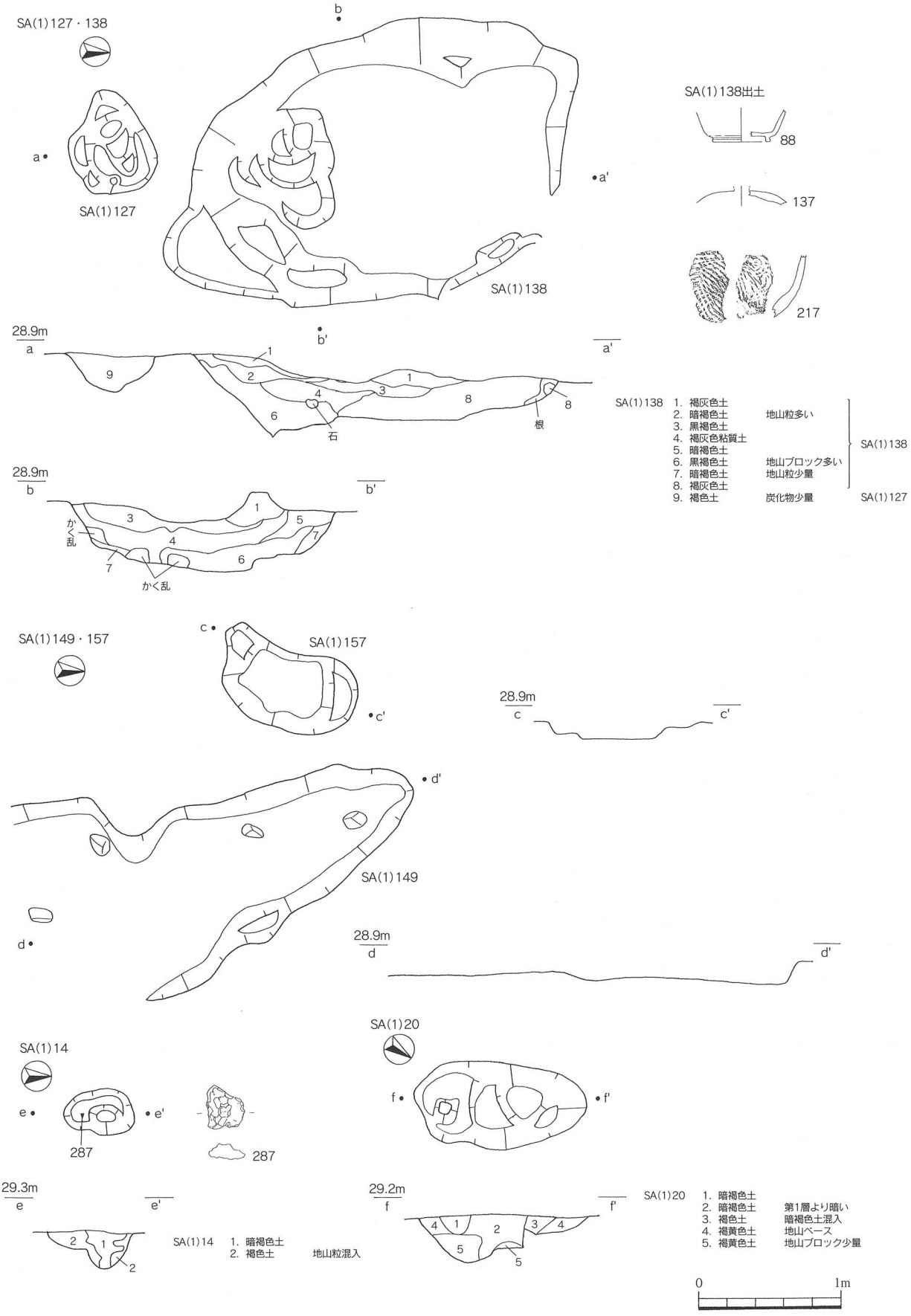
第59図　遺構実測図　竪穴建物SA(1)120・121　(1/80、1/40)



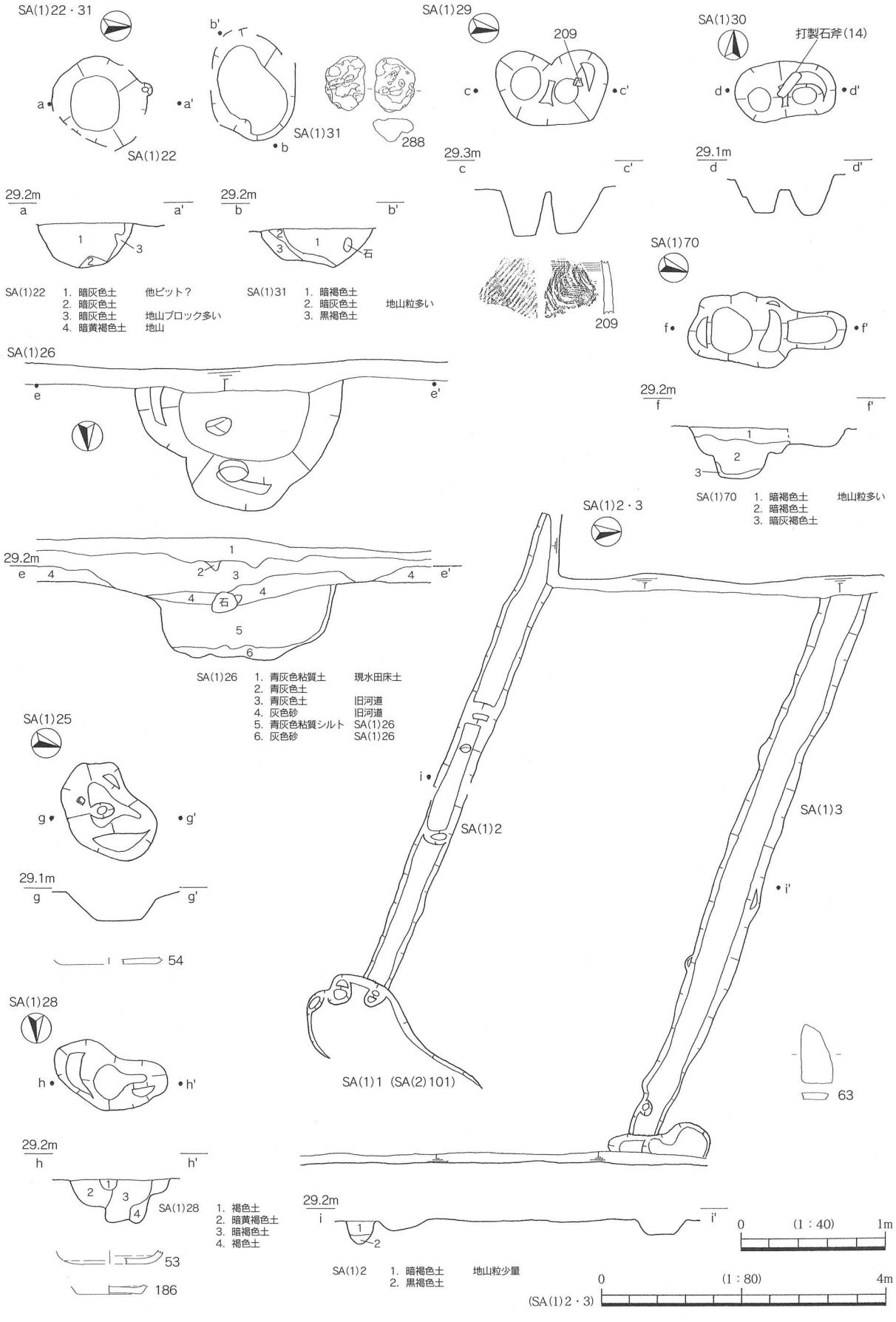
第60図　遺物出土状況　竪穴建物SA(1)120・121　(1/80)



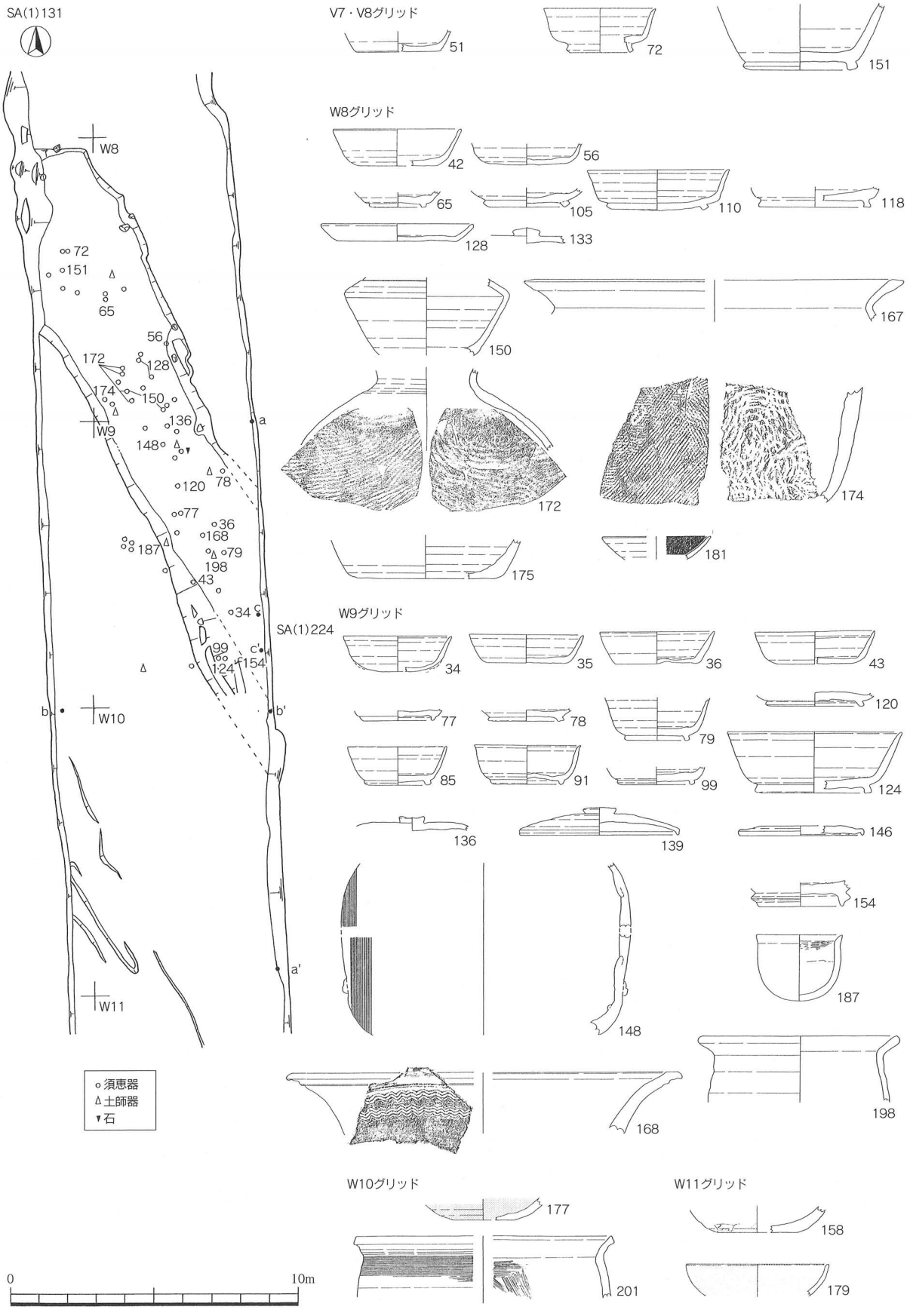
第61図　遺構実測図　土坑SA(1)4・5・132　(1/40)



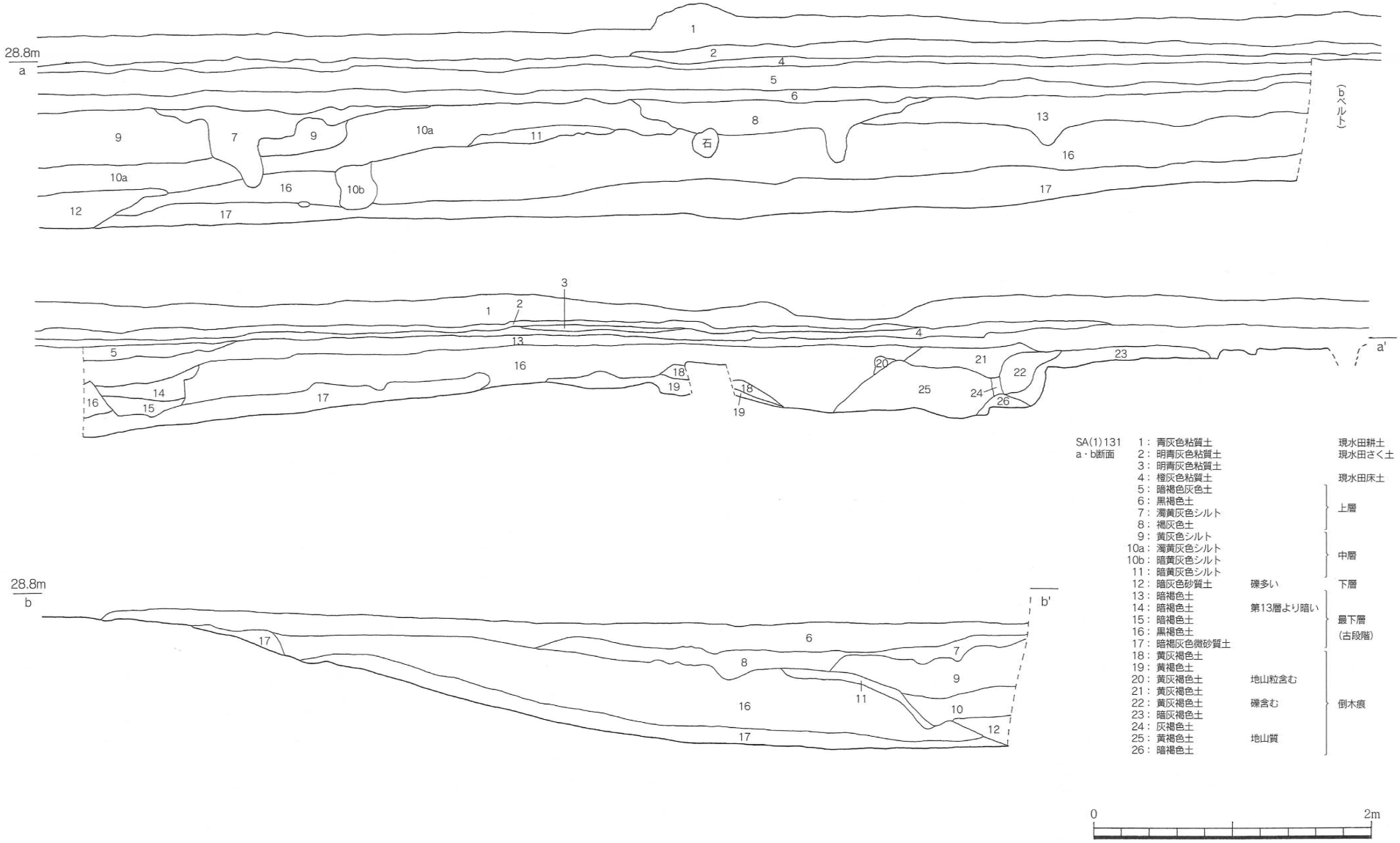
第62図　遺構実測図　土坑SA(1)14・20・127・138・149・157　(1/40)



第63図　遺構実測図　ピットSA(1)22・25・26・28～31・70・90、溝SA(1)2・3　(1/80、1/40)



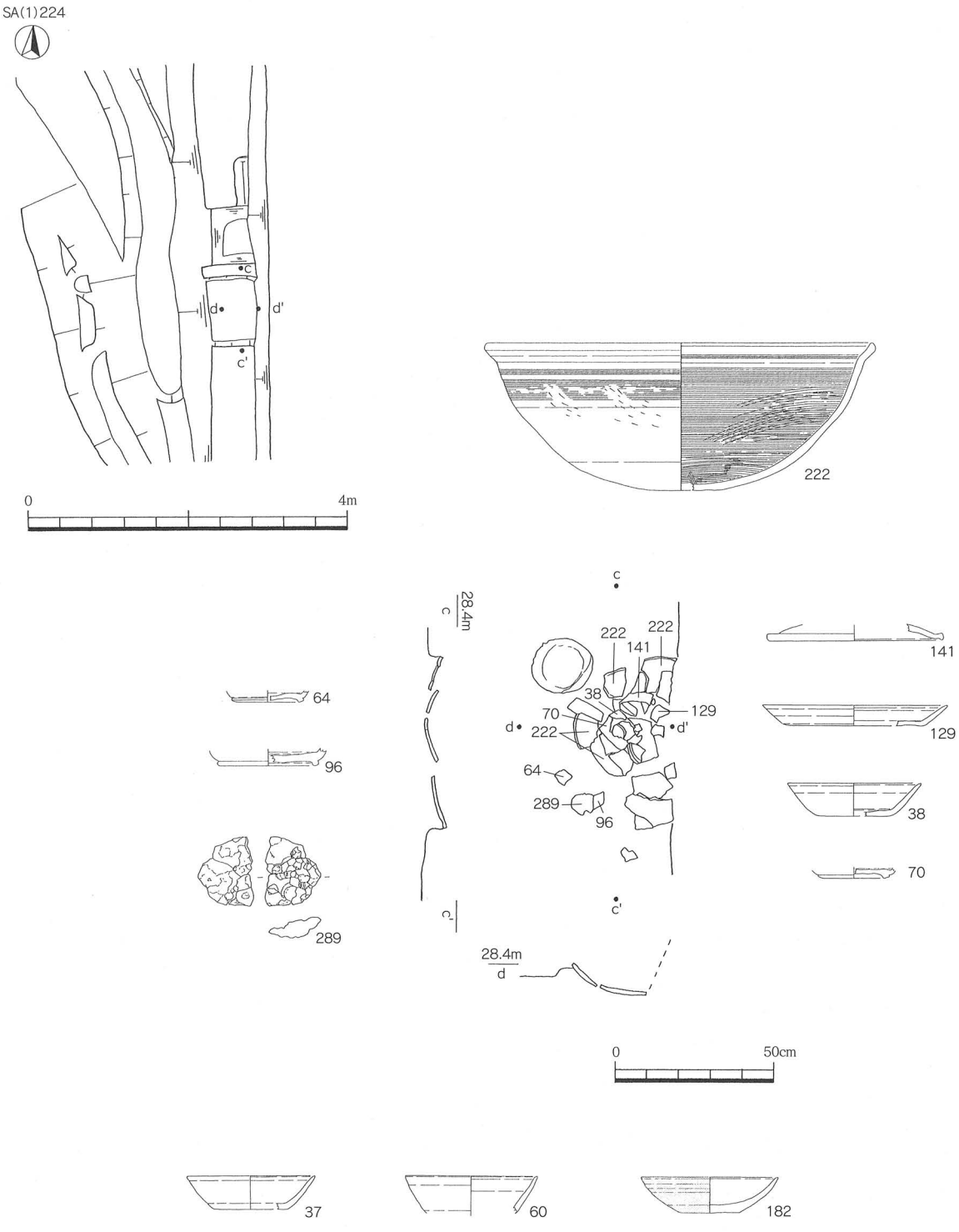
第64図　遺物出土状況　河川SA(1)131　(1/200)



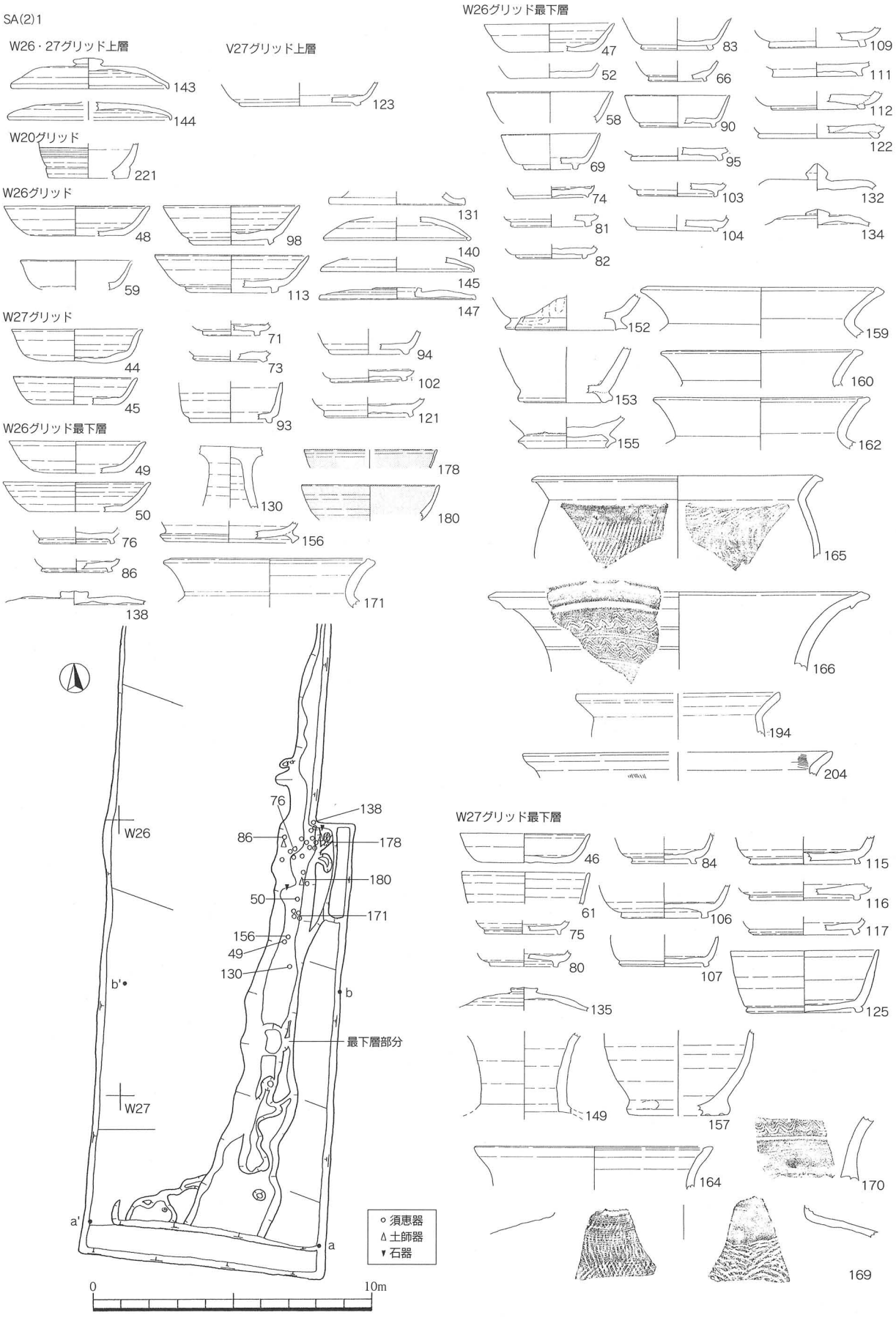
SA(1)131 a・b断面

1：	青灰色粘質土		現水田耕土
2：	明青灰色粘質土		現水田さく土
3：	明青灰色粘質土		
4：	橿灰色粘質土		現水田床土
5：	暗褐色灰色土		上層
6：	黒褐色土		
7：	濁黄灰色シルト		
8：	褐灰色土		
9：	黄灰色シルト		中層
10a：	濁黄灰色シルト		
10b：	暗黄灰色シルト		
11：	暗黄灰色シルト		
12：	暗灰色砂質土	礫多い	下層
13：	暗褐色土		最下層（古段階）
14：	暗褐色土	第13層より暗い	
15：	暗褐色土		
16：	黒褐色土		
17：	暗褐灰色微砂質土		
18：	黄灰褐色土		倒木痕
19：	黄褐色土		
20：	黄灰褐色土	地山粒含む	
21：	黄灰褐色土		
22：	黄灰褐色土	礫含む	
23：	暗灰褐色土		
24：	灰褐色土		
25：	黄褐色土	地山質	
26：	暗褐色土		

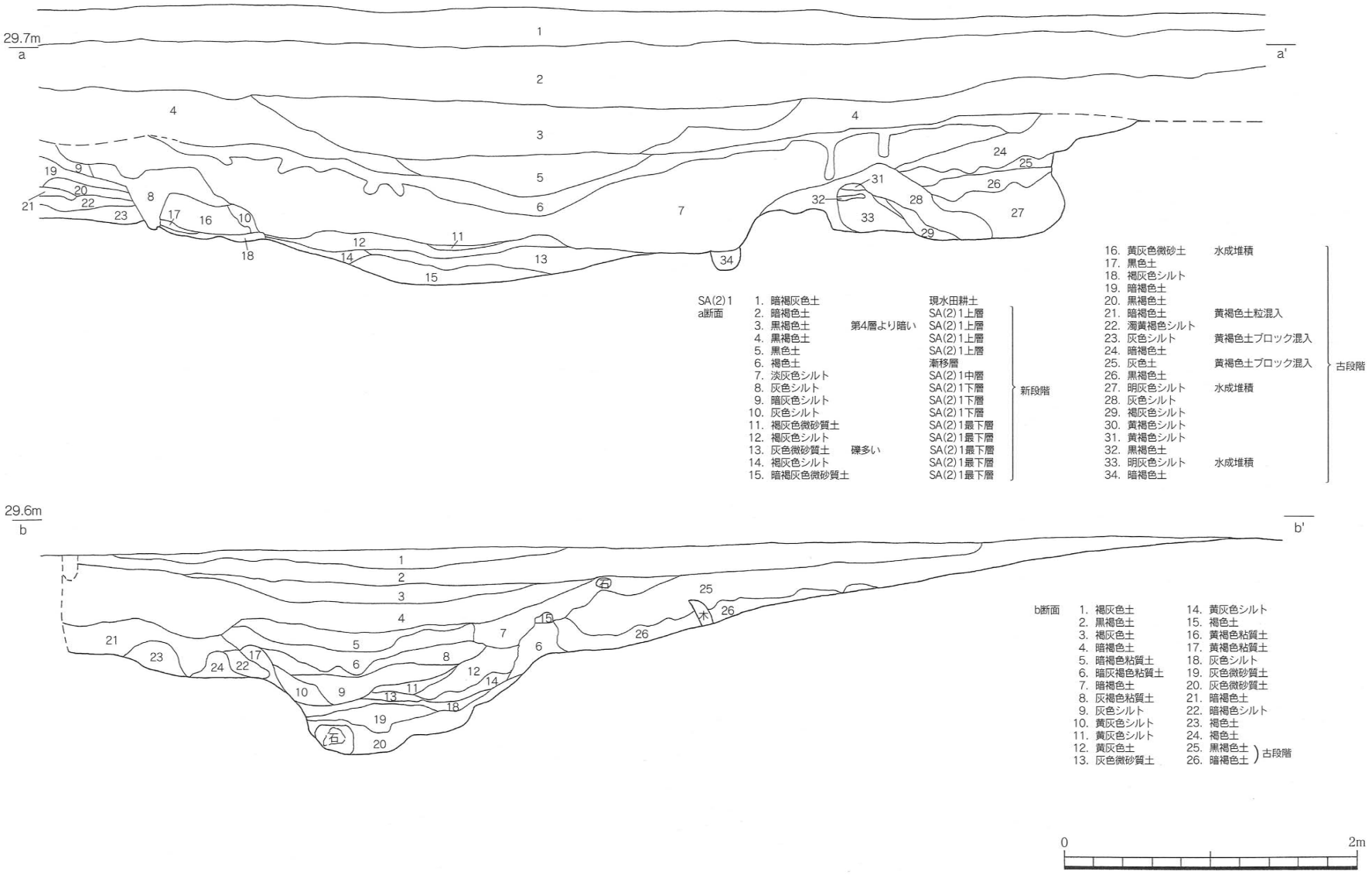
第65図　遺構実測図　河川SA(1)131　(1/40)



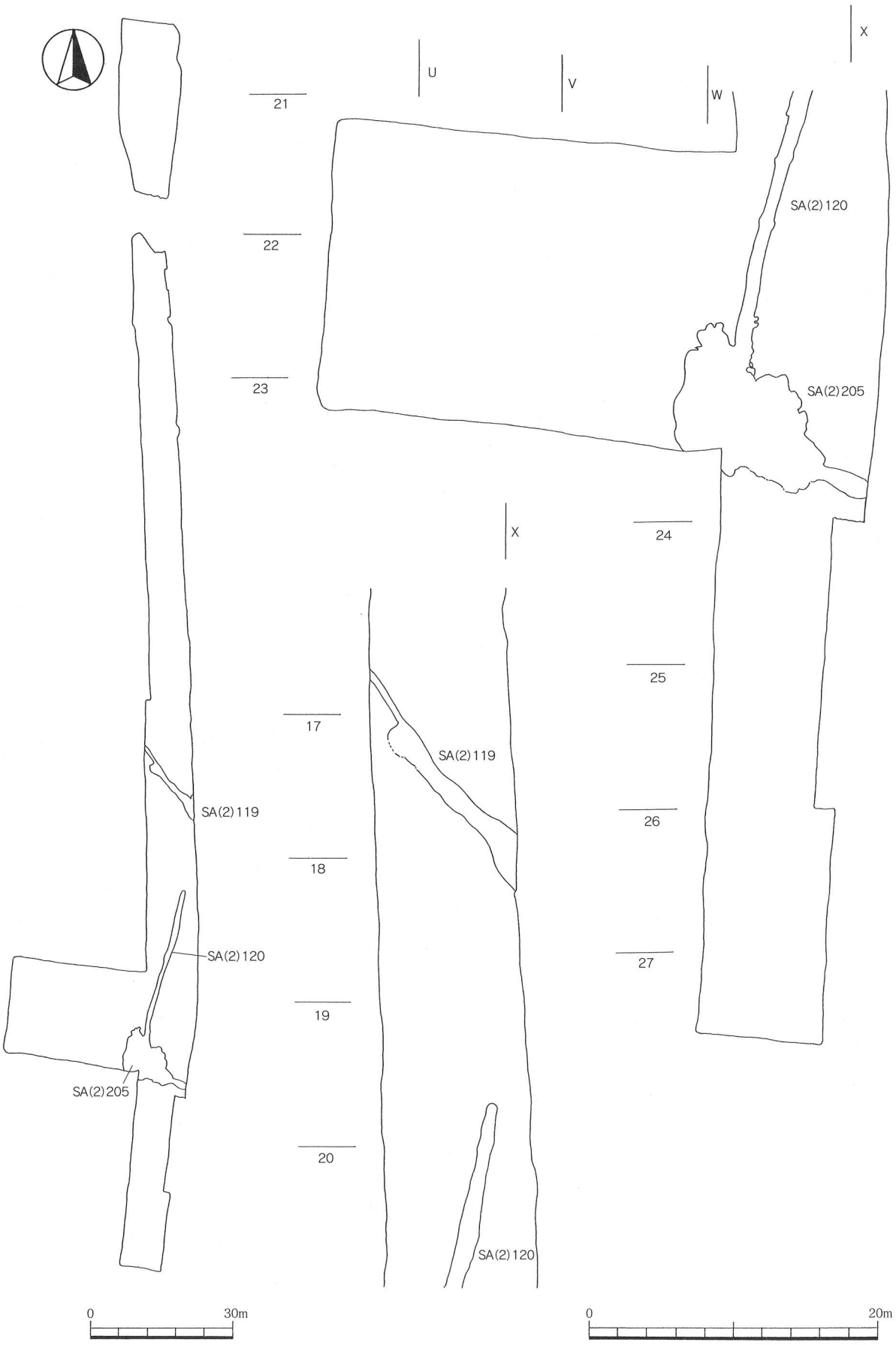
第66図　遺物出土状況　遺物集中区SA(1)224　(1/80、1/20)



第67図　遺物出土状況　河川SA(2)1　(1/200)

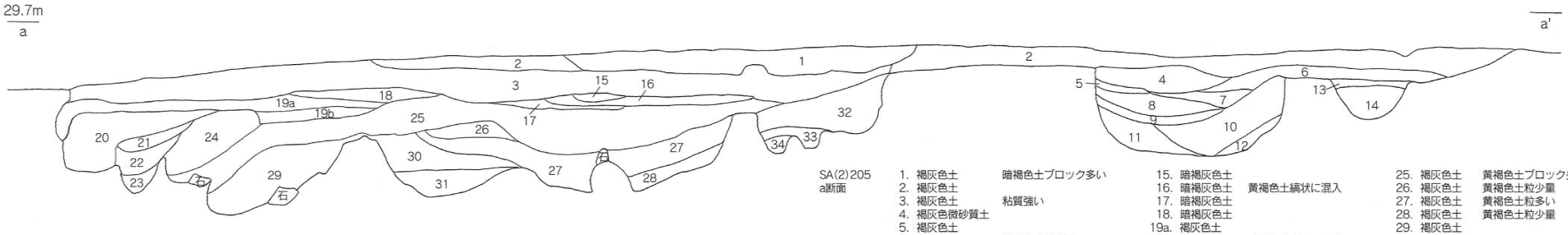


第68図　遺構実測図　河川SA(2)1　(1/40)



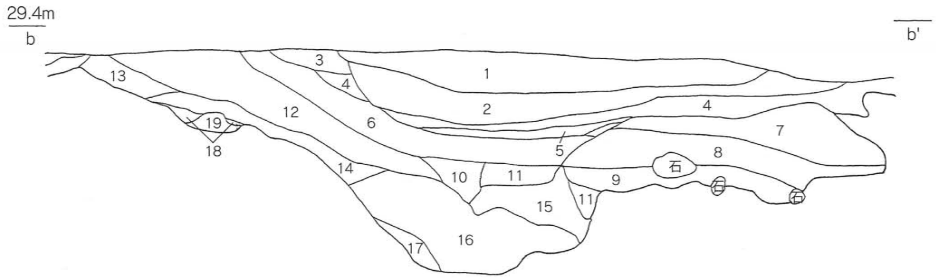
第69図　中世遺構全体図　(1/1,200、1/400)

第70図　遺構実測図　利水関連施設SA(2)205(1)　(1/100)



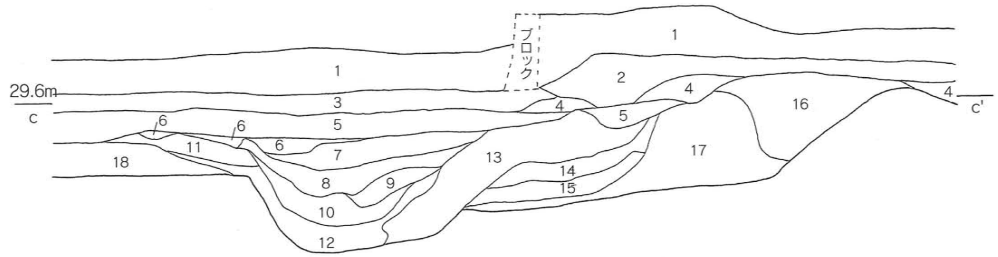
SA(2)205 a断面

1.	褐灰色土	暗褐色土ブロック多い
2.	褐灰色土	
3.	褐灰色土	粘質強い
4.	褐灰色微砂質土	
5.	褐灰色土	
6.	褐灰色土	黄褐色土粒少量
7.	褐灰色土	
8.	褐灰色土	黄褐色土粒少量
9.	褐灰色微砂質土	
10.	黒褐色土	黄褐色土ブロック多い
11.	褐灰色土	
12.	褐灰色土	黄褐色土ブロック多い
13.	褐灰色土	
14.	褐灰色土	
15.	暗褐灰色土	
16.	暗褐灰色土	黄褐色土縞状に混入
17.	暗褐灰色土	
18.	暗褐灰色土	
19a.	褐灰色土	
19b.	褐灰色土	暗褐色土ブロック多い
20.	暗褐灰色土	黄褐色土粒微量
21.	暗褐灰色土	黄褐色土ブロック少量
22.	暗褐灰色土	黄色褐色土粒少量
23.	暗褐灰色土	黄褐色土粒やや多い
24.	暗褐色土	
25.	褐灰色土	黄褐色土ブロック多い
26.	褐灰色土	黄褐色土粒少量
27.	褐灰色土	黄褐色土粒多い
28.	褐灰色土	黄褐色土粒少量
29.	褐灰色土	
30.	暗褐色土	
31.	暗褐色土	黄褐色土ブロック多い
32.	暗褐色土	
33.	黒褐色土	
34.	暗褐色土	



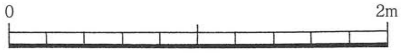
SA(2)205 b断面

1.	褐灰色土	
2.	褐灰色微砂質土	
3.	暗褐色土	
4.	褐灰色土	
5.	褐灰色粘質土	
6.	暗褐色粘質土	
7.	暗褐色土	
8.	暗褐色土	黄褐色土粒少量
9.	暗褐色土	黄褐色土ブロック多い
10.	黒色土	
11.	暗褐色土	黄褐色土ブロック多い
12.	暗褐灰色土	
13.	暗褐色土	黄褐色土粒少量
14.	暗褐色土	
15.	黄褐色シルト	
16.	暗褐色粘質土	
17.	青灰色粘質土	
18.	暗褐色土	青灰色土ブロック混入
19.	青褐色シルト	

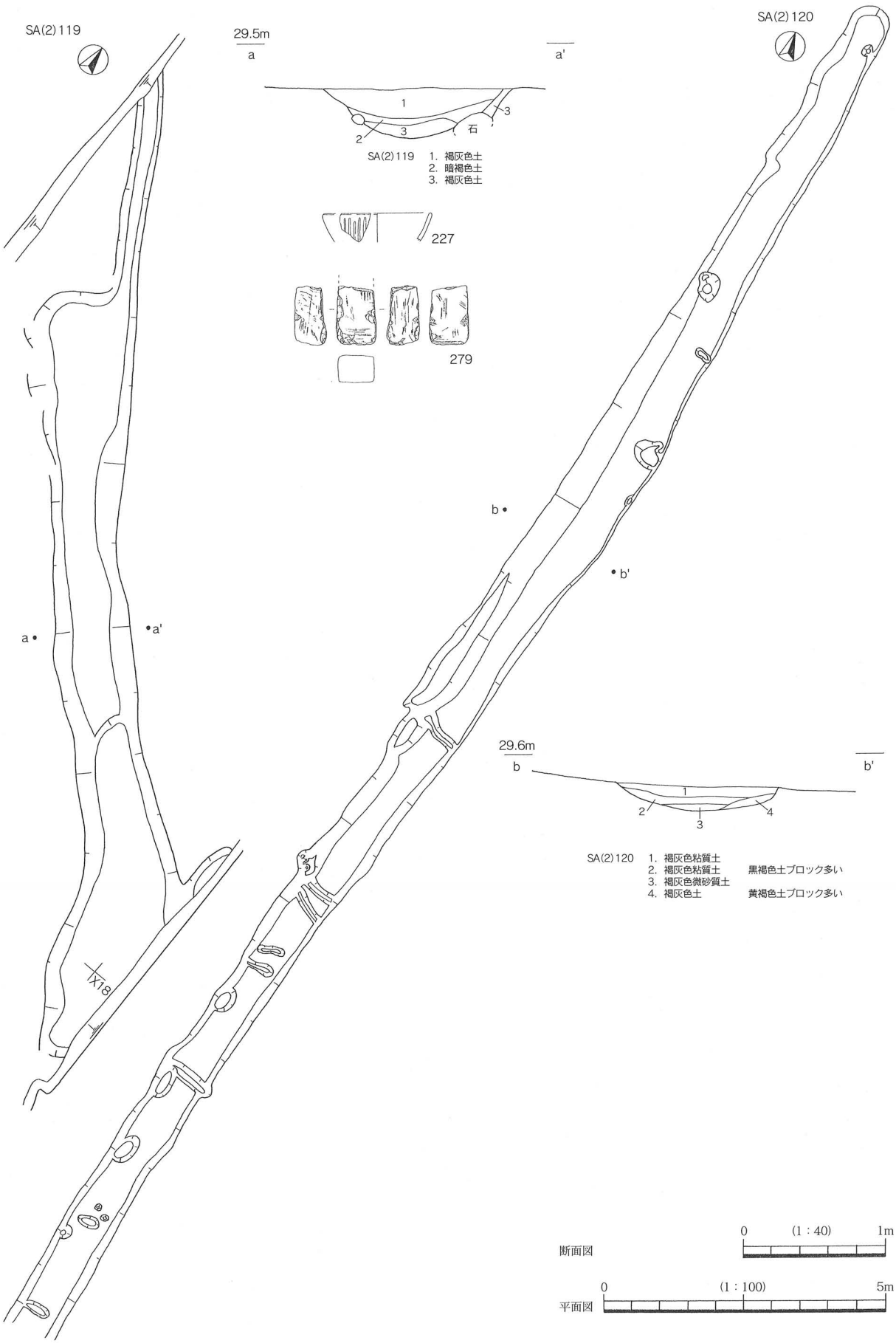


SA(2)205 c断面

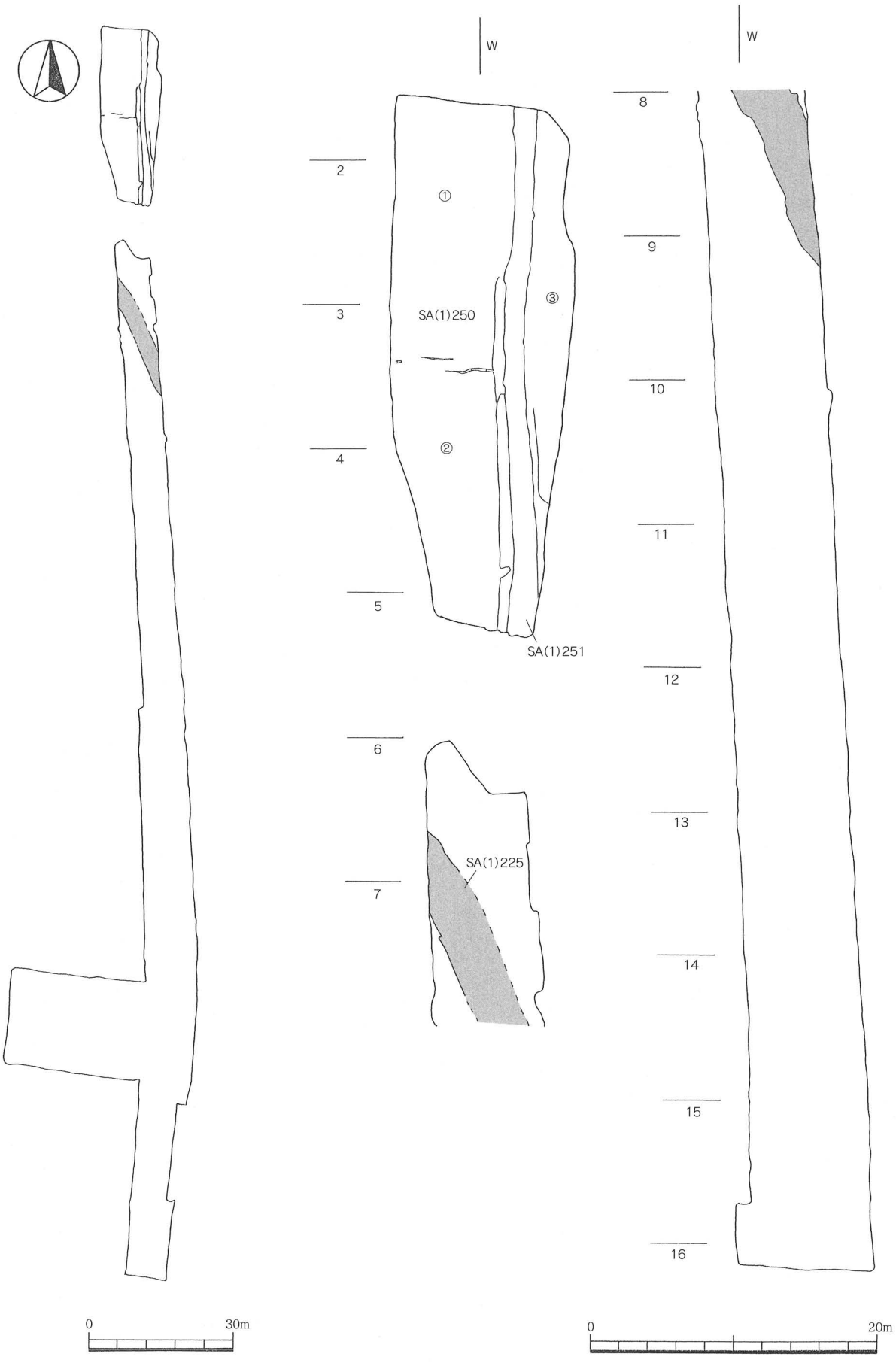
1.	暗褐灰色粘質土		現水田耕土
2.	淡褐灰色粘質土		現水田床土
3.	黄褐灰色粘質土		現水田床土
4.	褐灰色土		現水田床土
5.	褐灰色土	第4層より暗い	現水田床土
6.	暗褐色土		SA(2)205上層
7.	褐灰色シルト		SA(2)205上層
8.	褐灰色微砂質土		SA(2)205上層
9.	褐灰色粘質土		SA(2)205上層
10.	淡褐灰色微砂質土		SA(2)205上層
11.	淡褐灰色シルト		SA(2)205上層
12.	褐灰色粘質土		SA(2)205上層
13.	暗褐灰色粘質土		SA(2)205上層
14.	淡褐灰色粘質土	黄褐色土ブロック多い	SA(2)205上層
15.	淡褐灰色粘質土	黄褐色土ブロックやや多い	SA(2)205下層
16.	暗褐色土		SA(2)205下層
17.	暗褐灰色土		SA(2)205下層
18.	暗褐灰色土		SA(2)1覆土



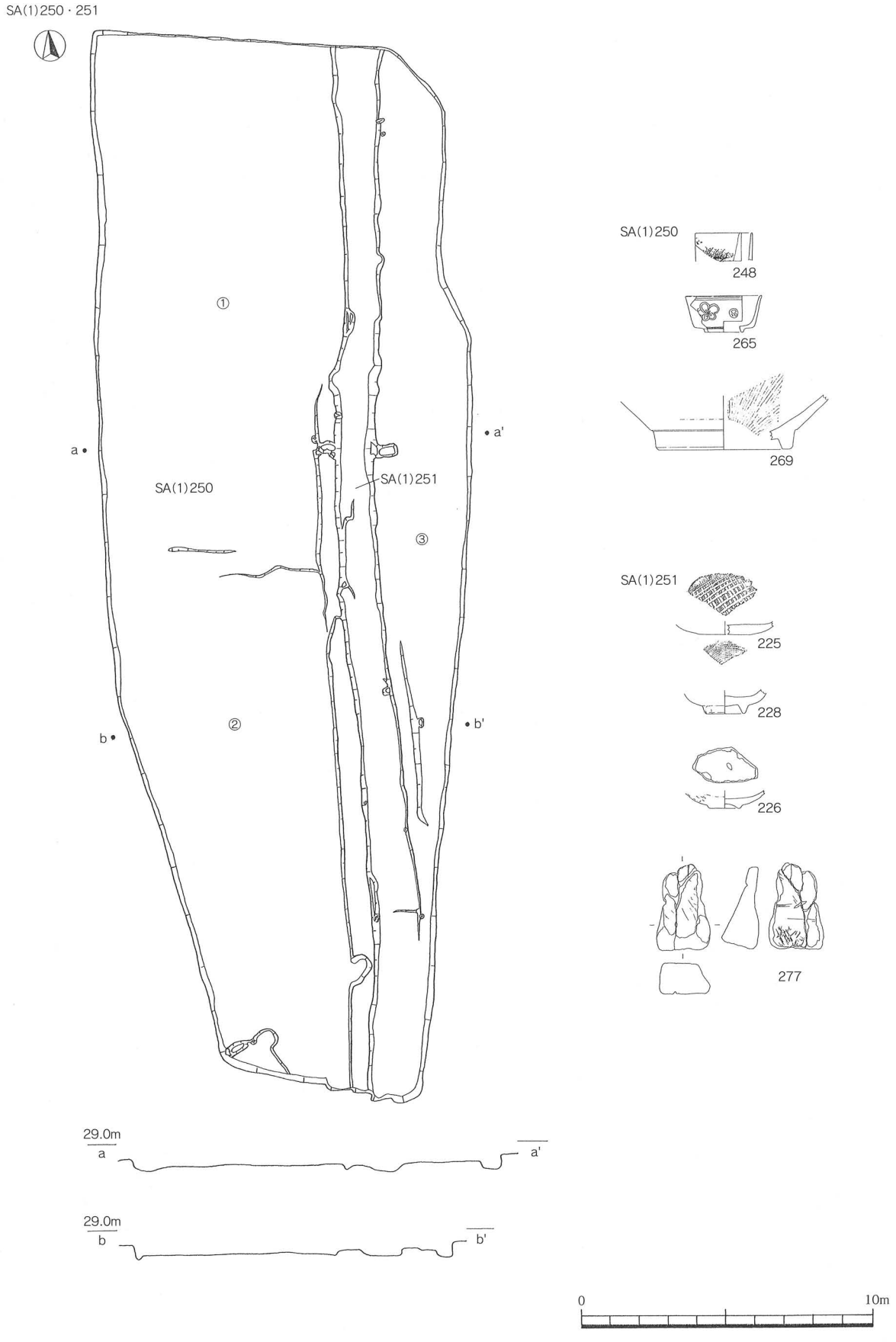
第71図　遺構実測図　利水関連施設SA(2)205(2)　(1/40)



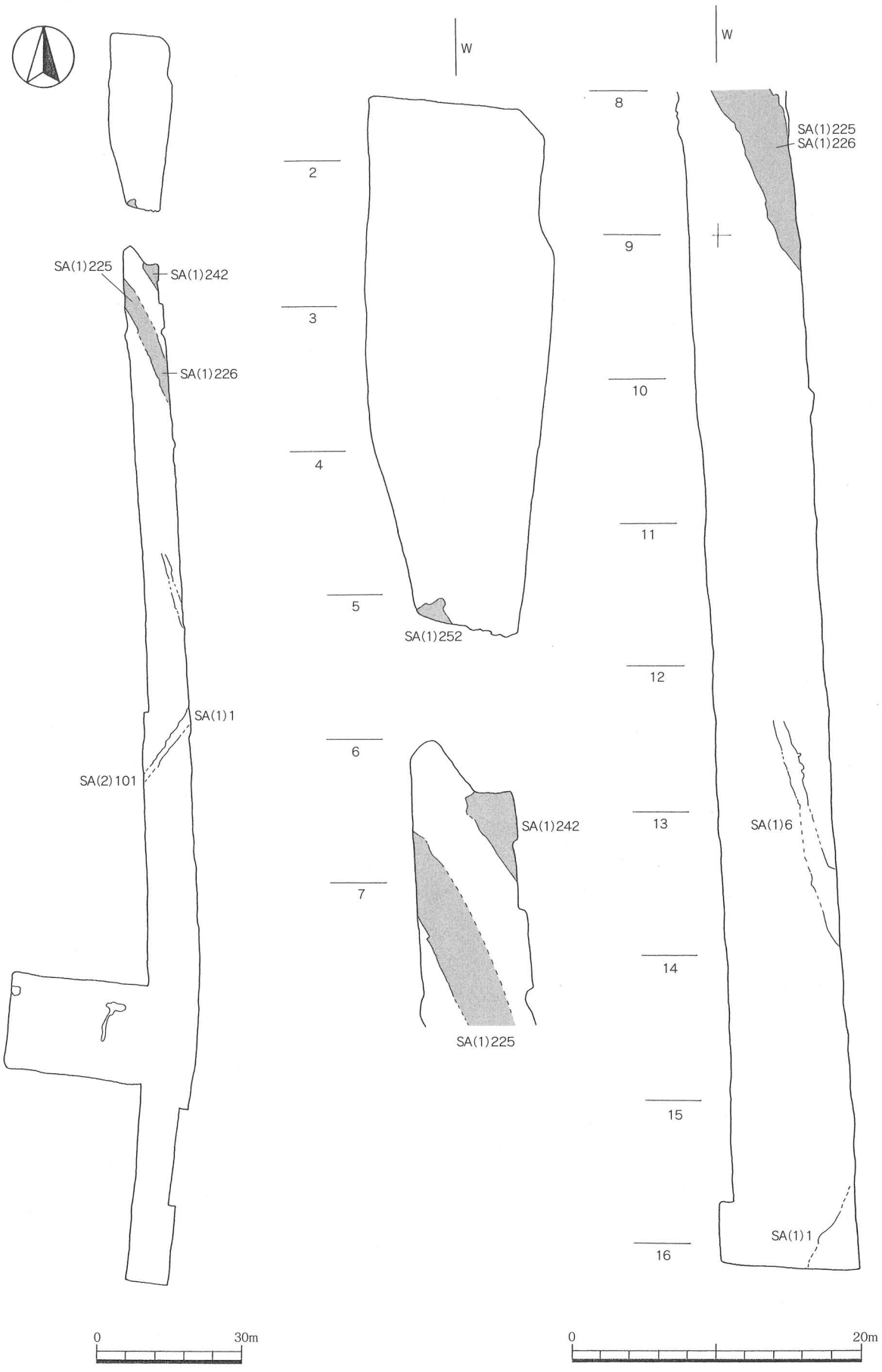
第72図　遺構実測図　溝SA(2)119・120　(1/100、1/40)



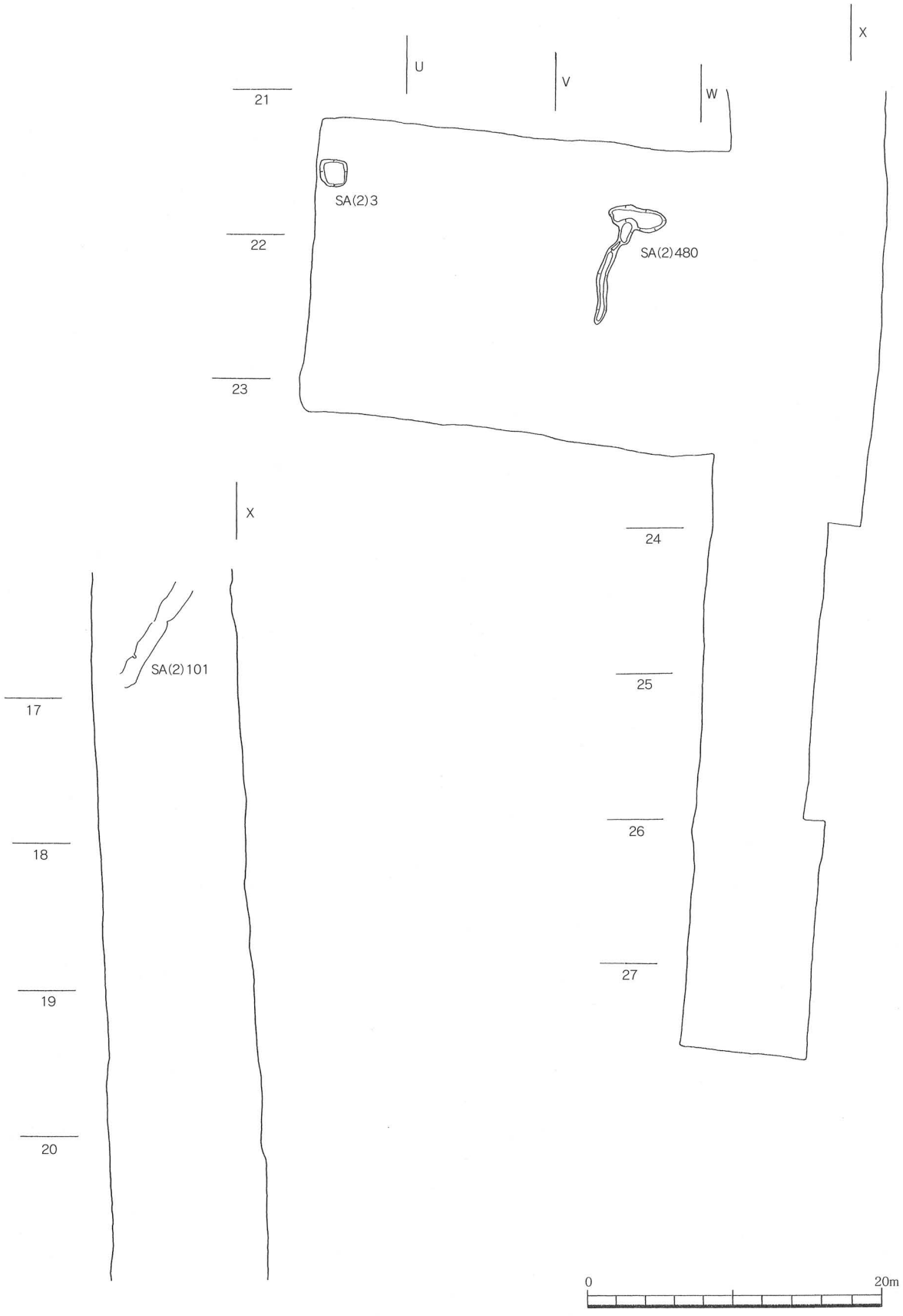
第73図　近世遺構全体図　(1/1,200、1/400)



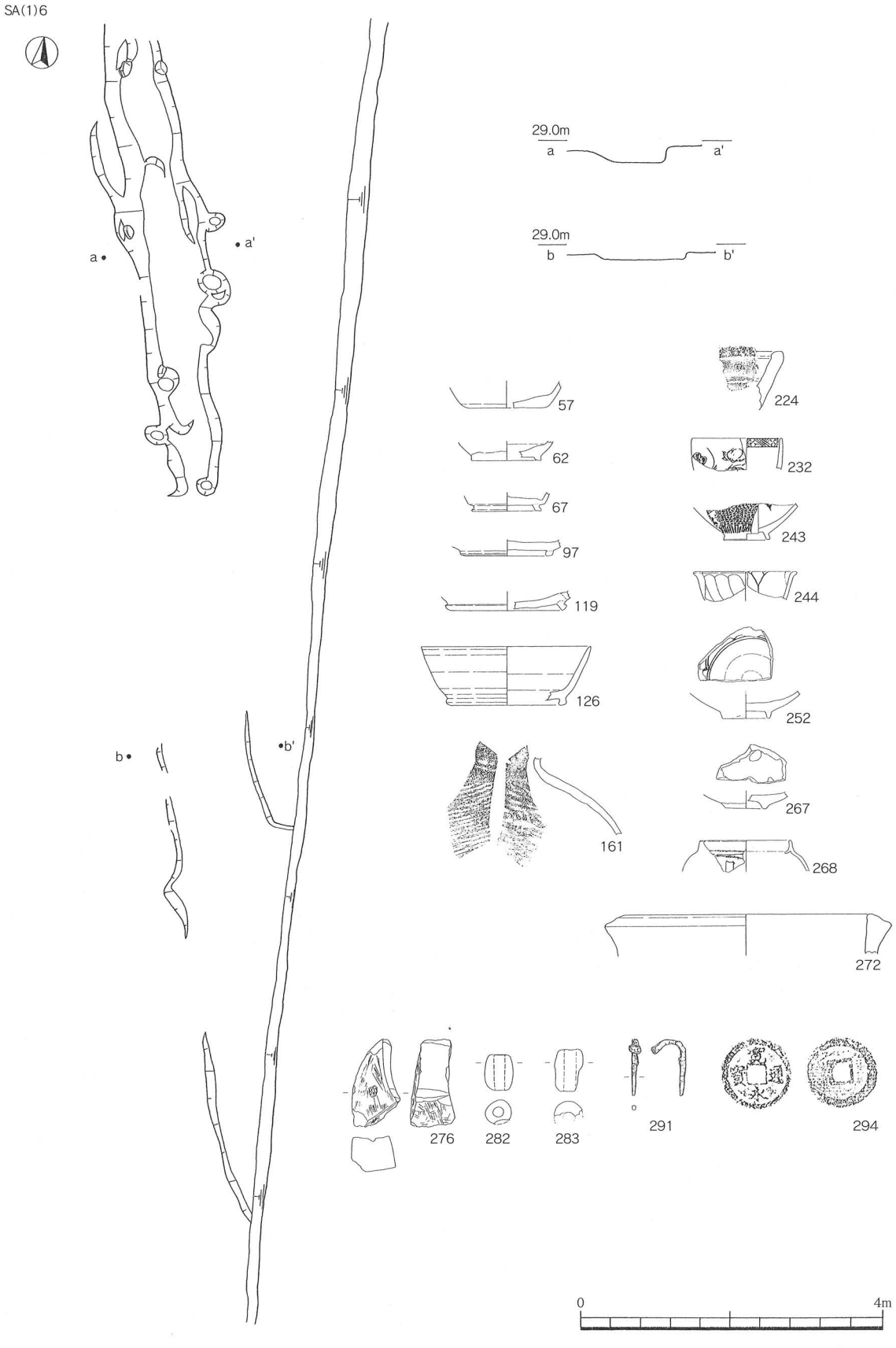
第74図　遺構実測図　水田SA(1)250、用水SA(1)251　(1/200)



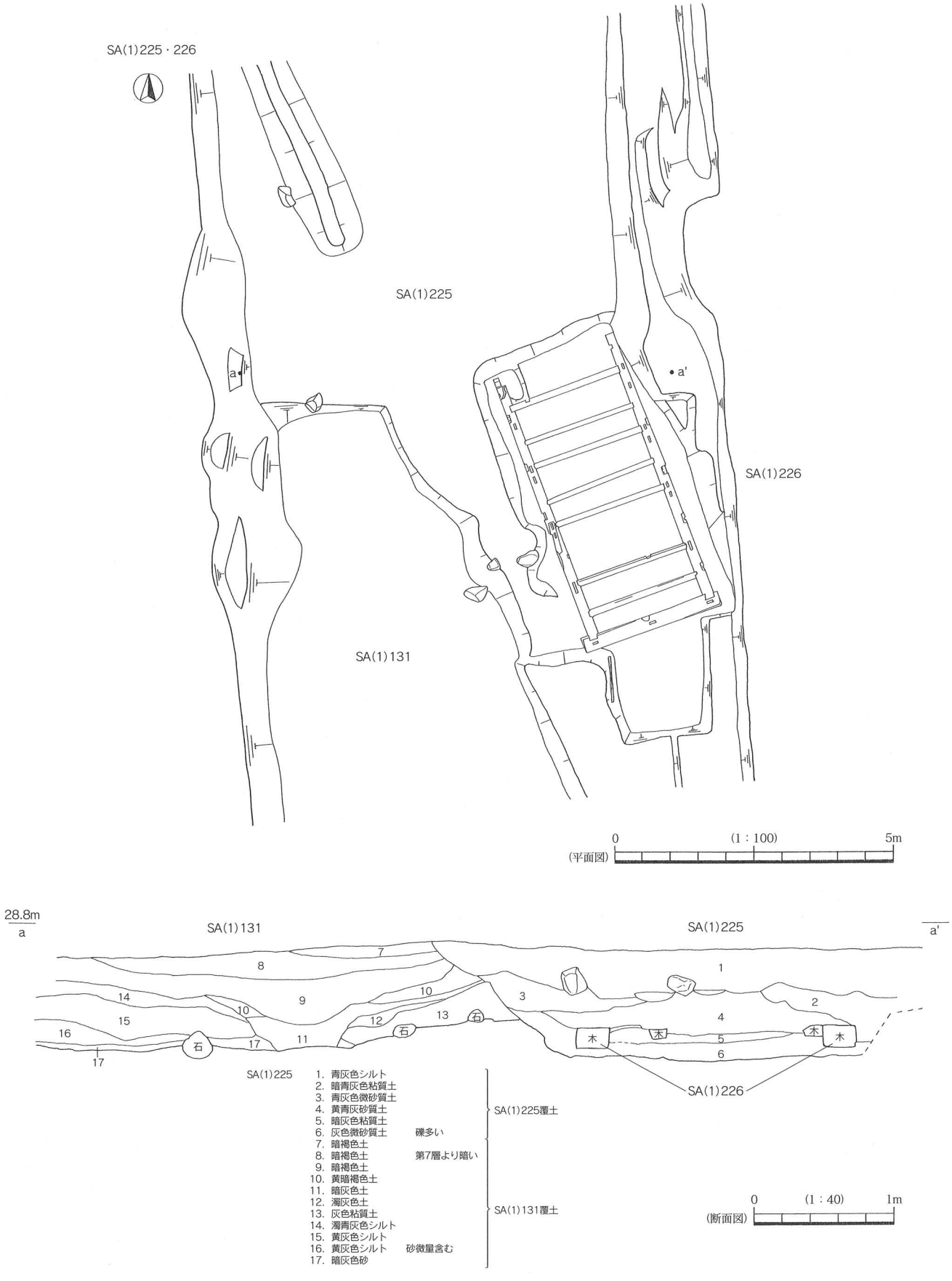
第75図　近代以降遺構全体図(1)　(1/1,200、1/400)



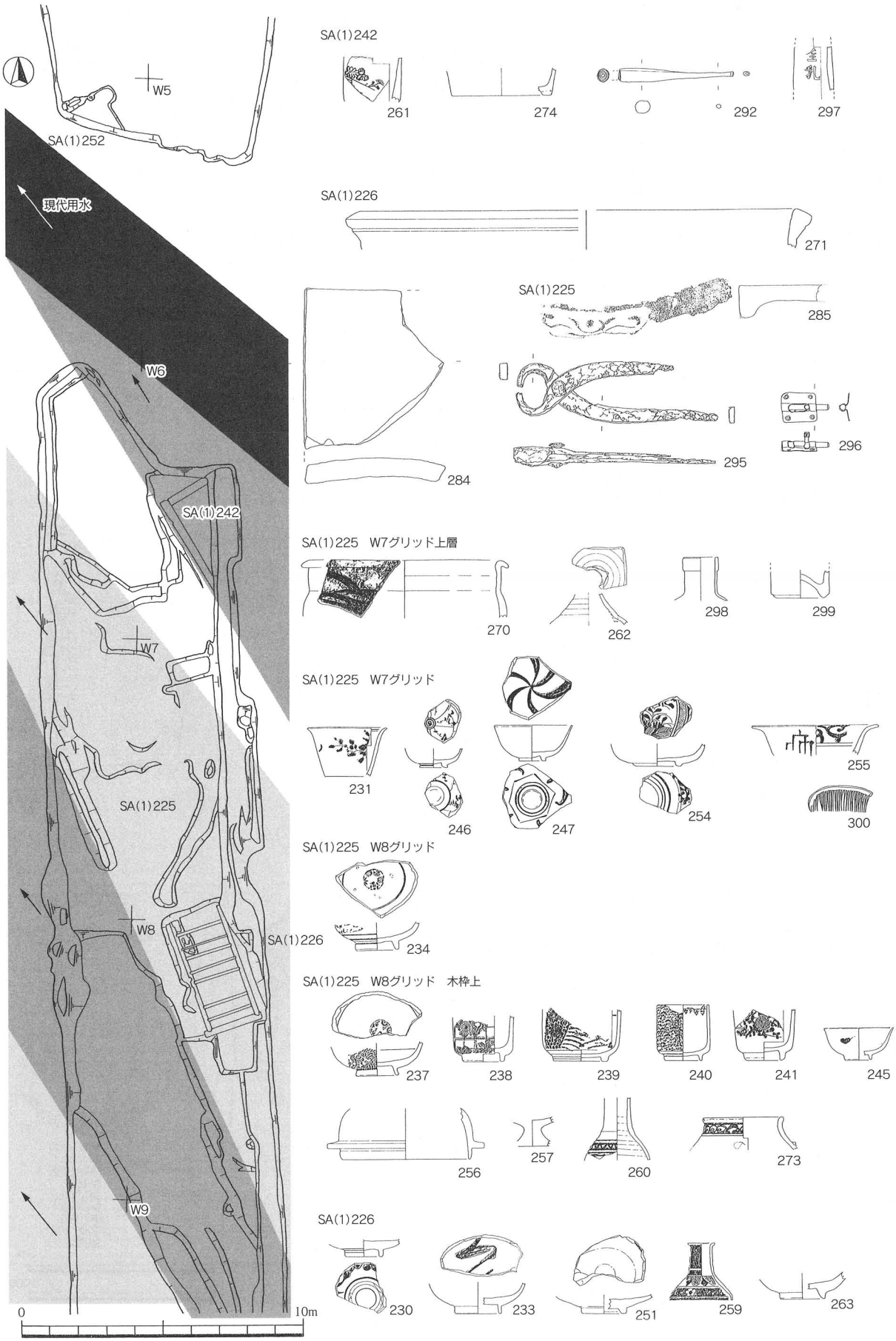
第76図　近代以降遺構全体図(2)　(1/400)



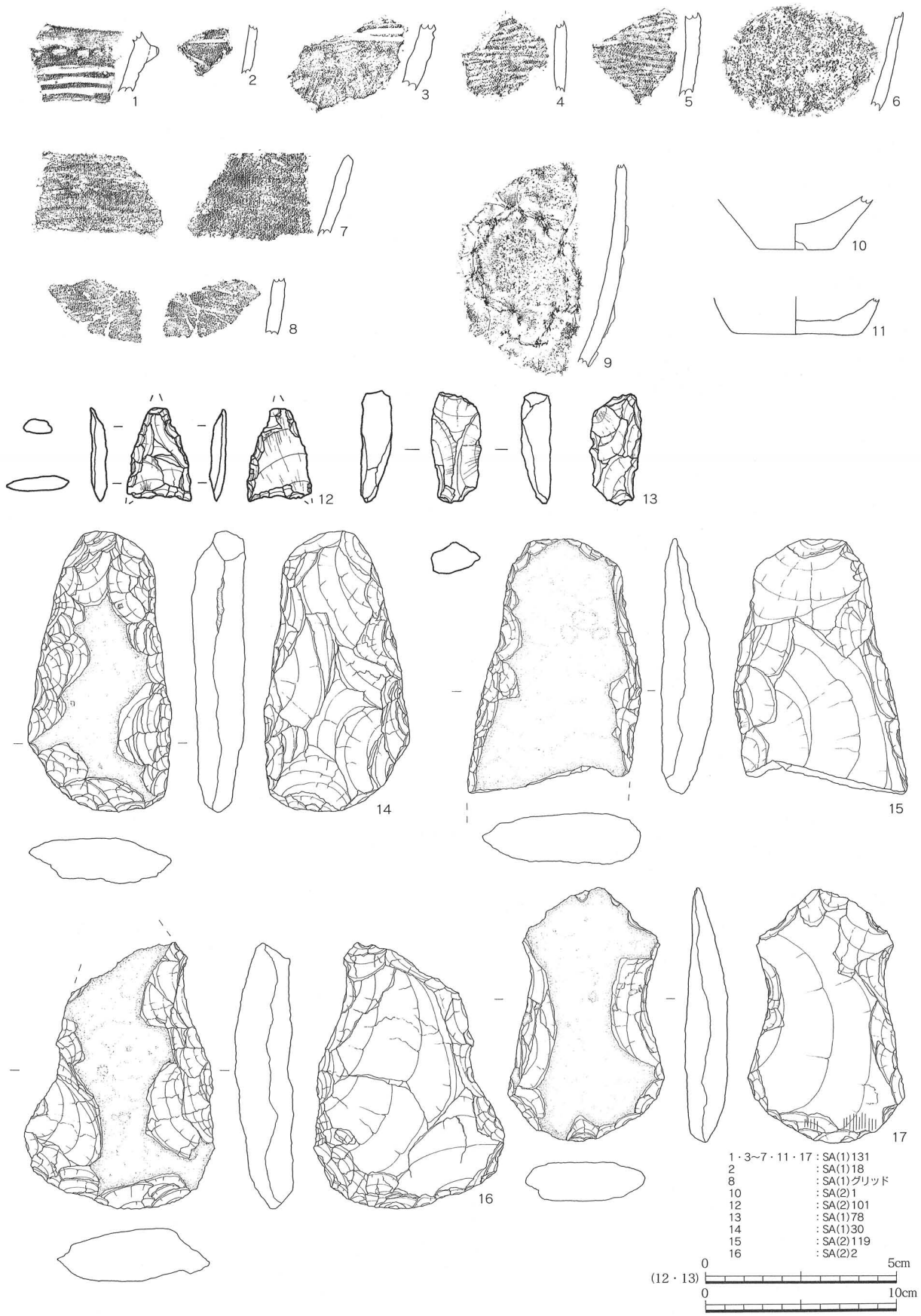
第77図　遺構実測図　溝SA(1)6　(1/80)



第78図　遺構実測図　河川SA(1)225、取水施設SA(1)226　(1/100、1/40)



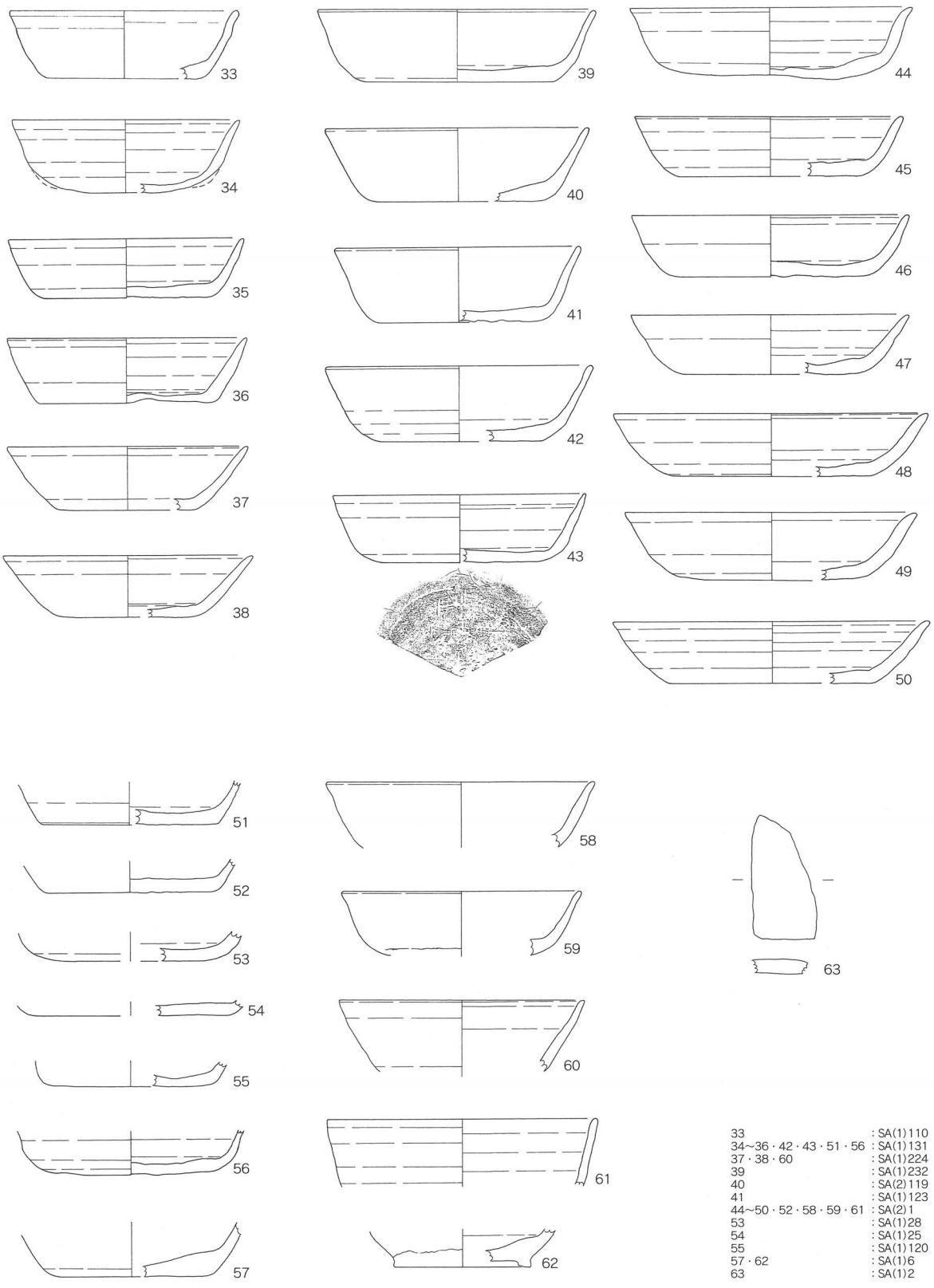
第79図　遺物出土状況　河川SA(1)225、取水施設SA(1)226・242　(1/200)



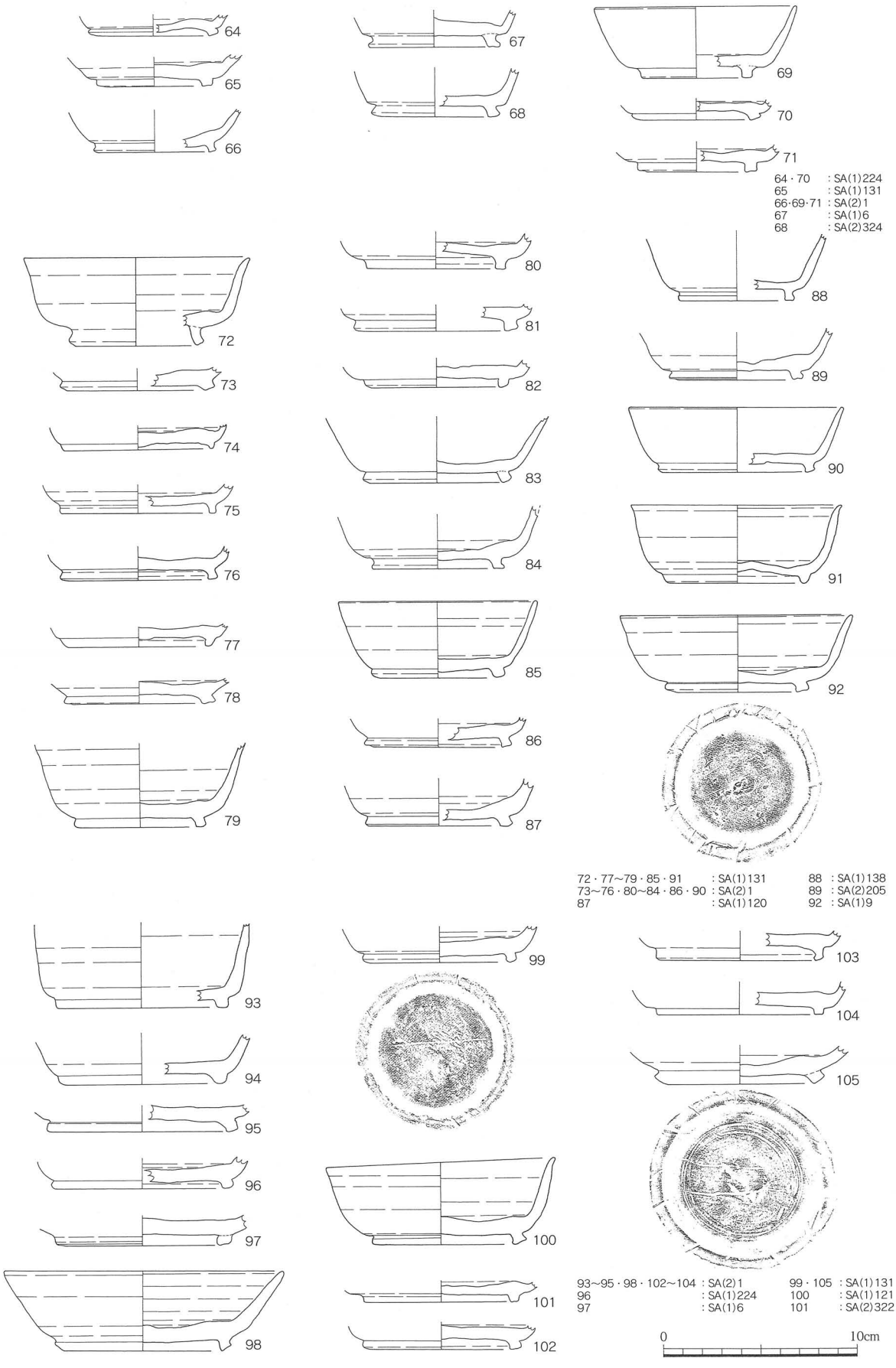
第80図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)　遺物実測図(1)　(2/3、1/3)

第81図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(2)　(1/3)

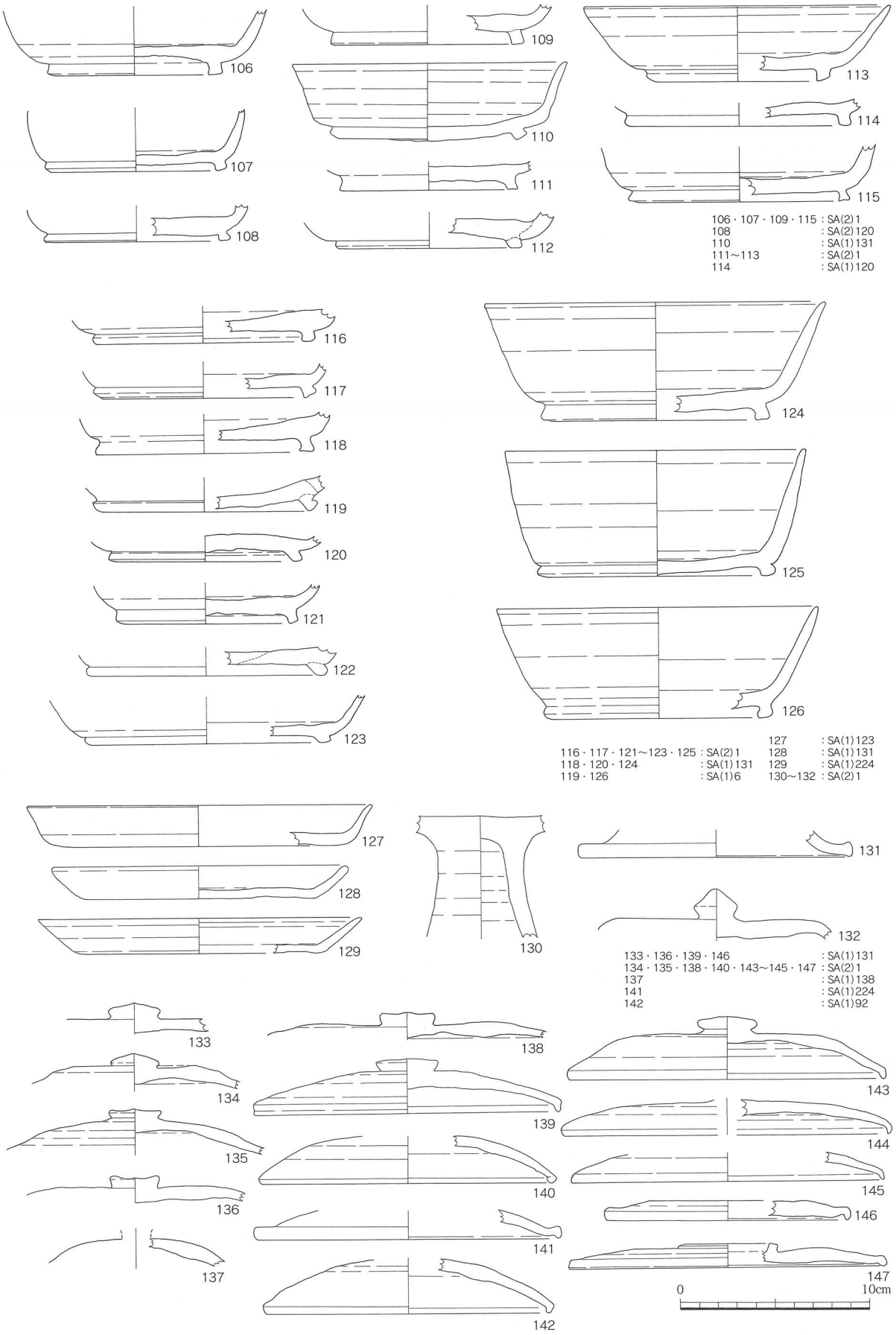
第82図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(3)　(1/3)



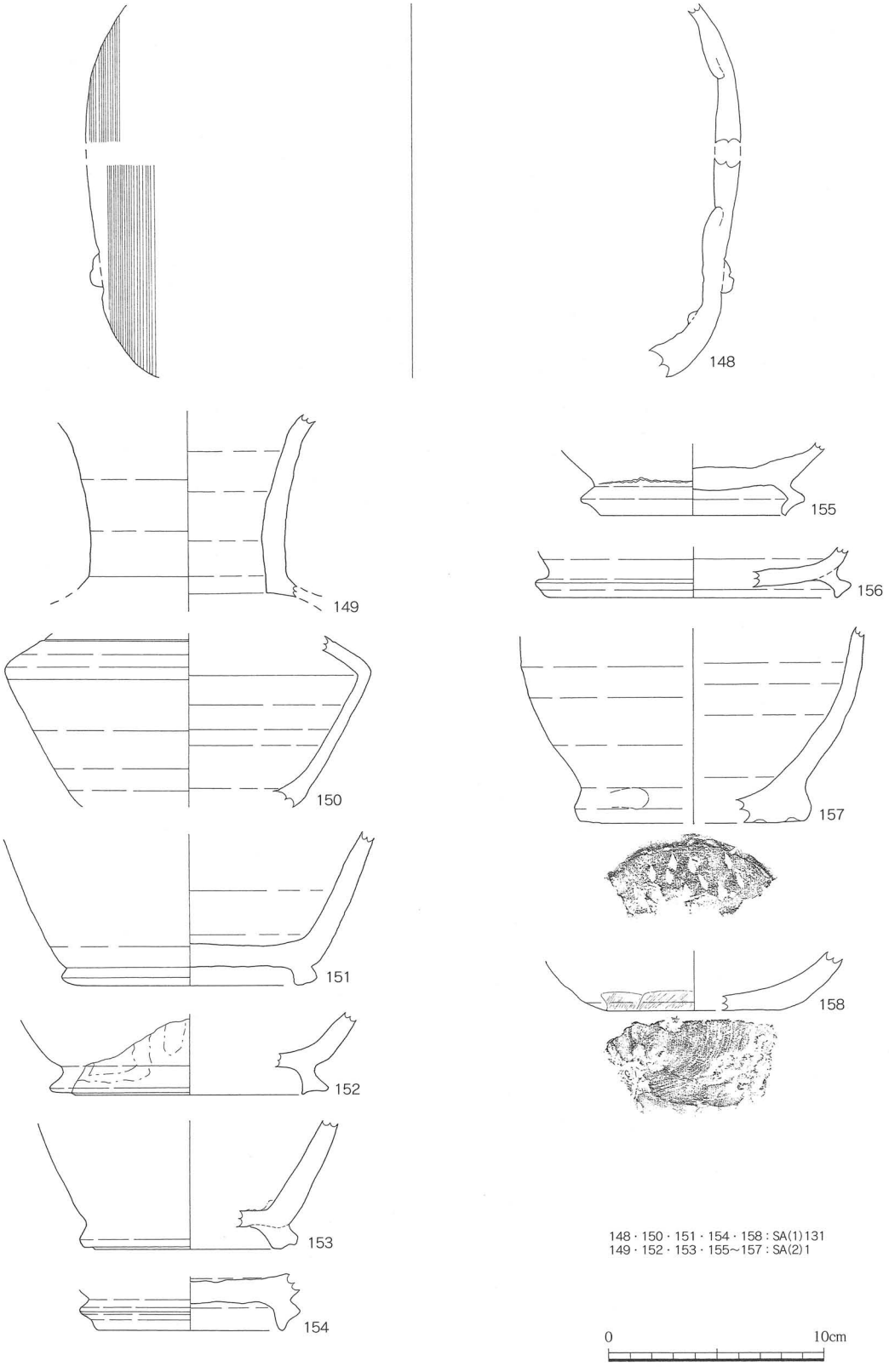
第83図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)　遺物実測図(4)　(1/3)



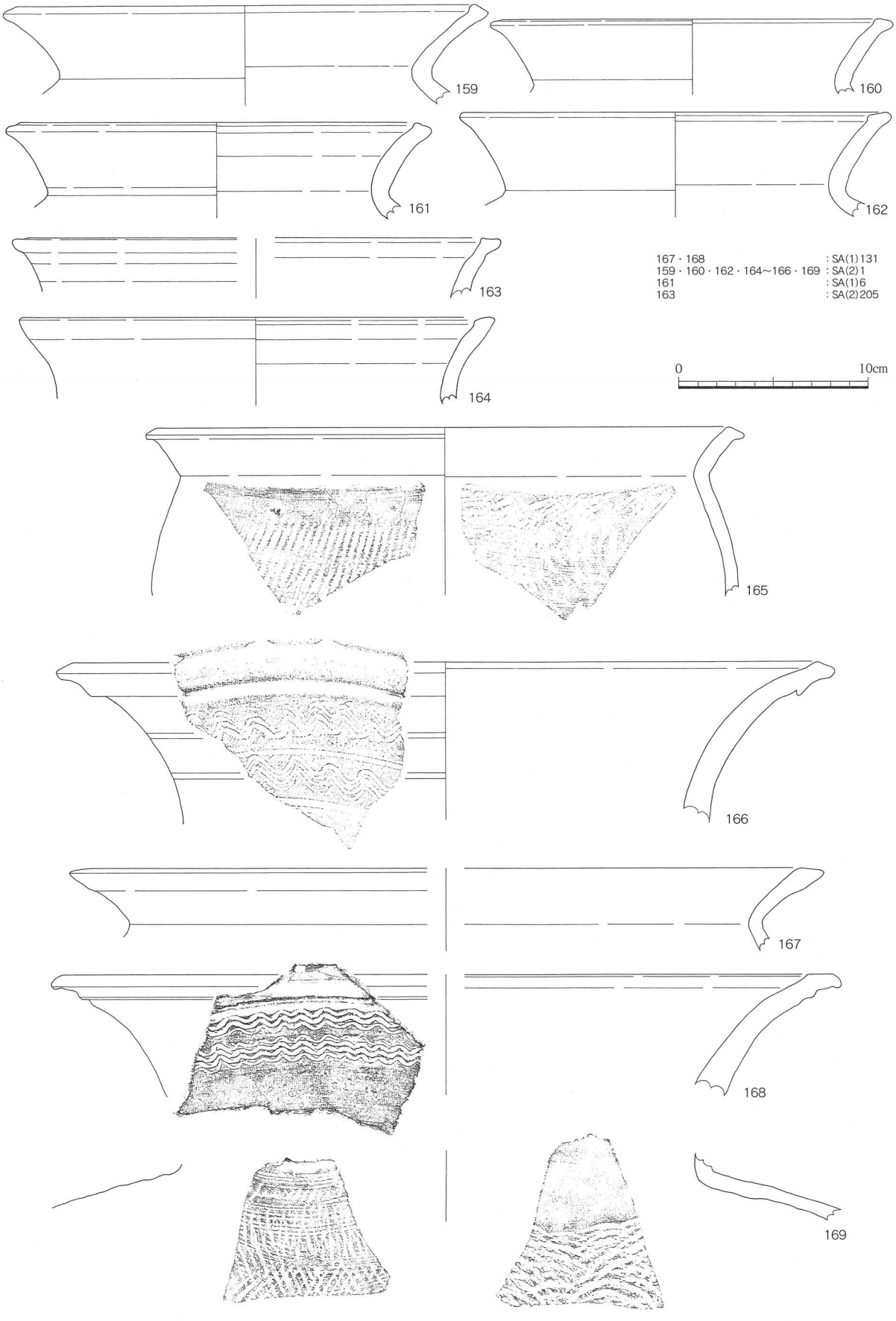
第84図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)　遺物実測図(5)　(1/3)



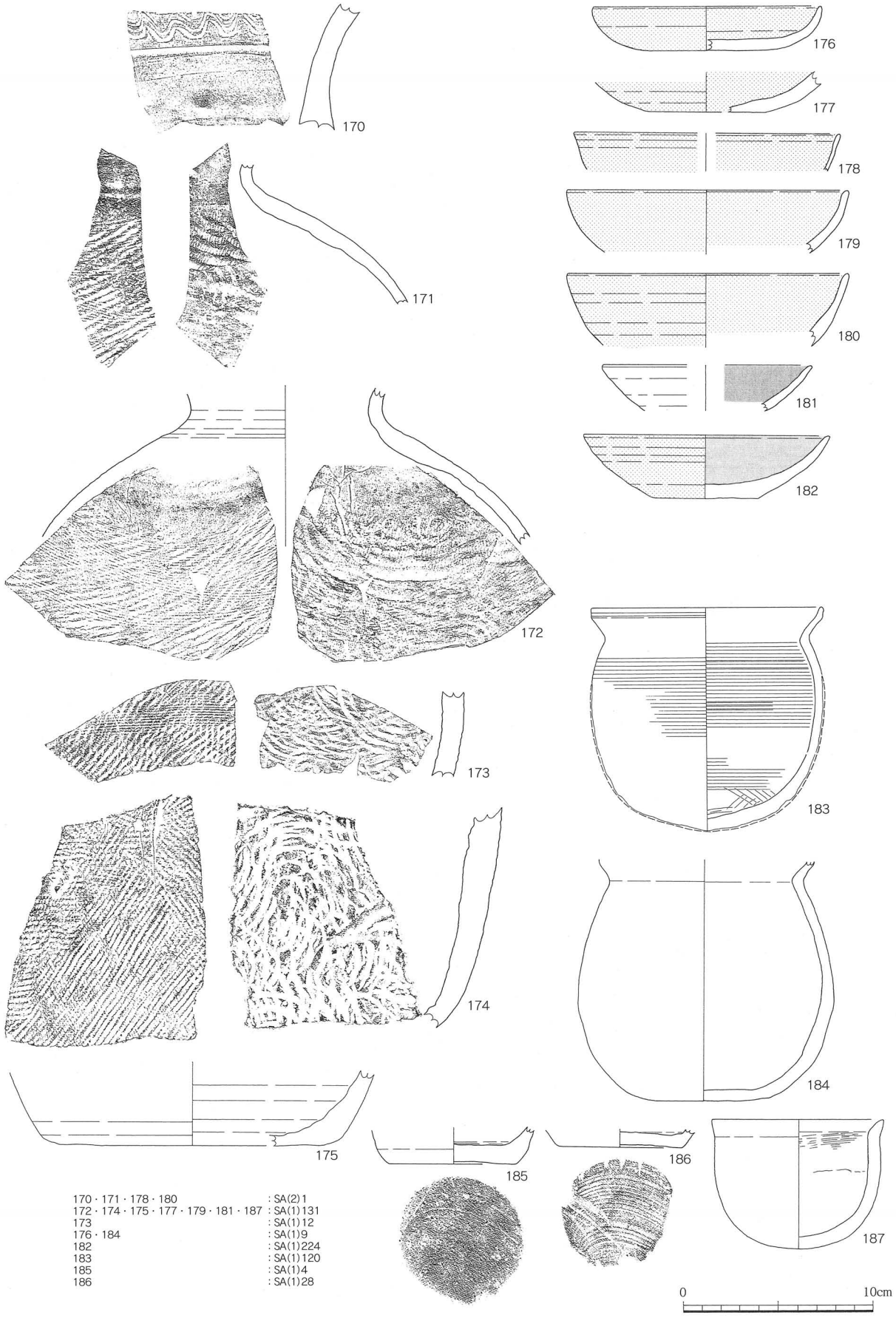
第85図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(6)　(1/3)



第86図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(7)　(1/3)

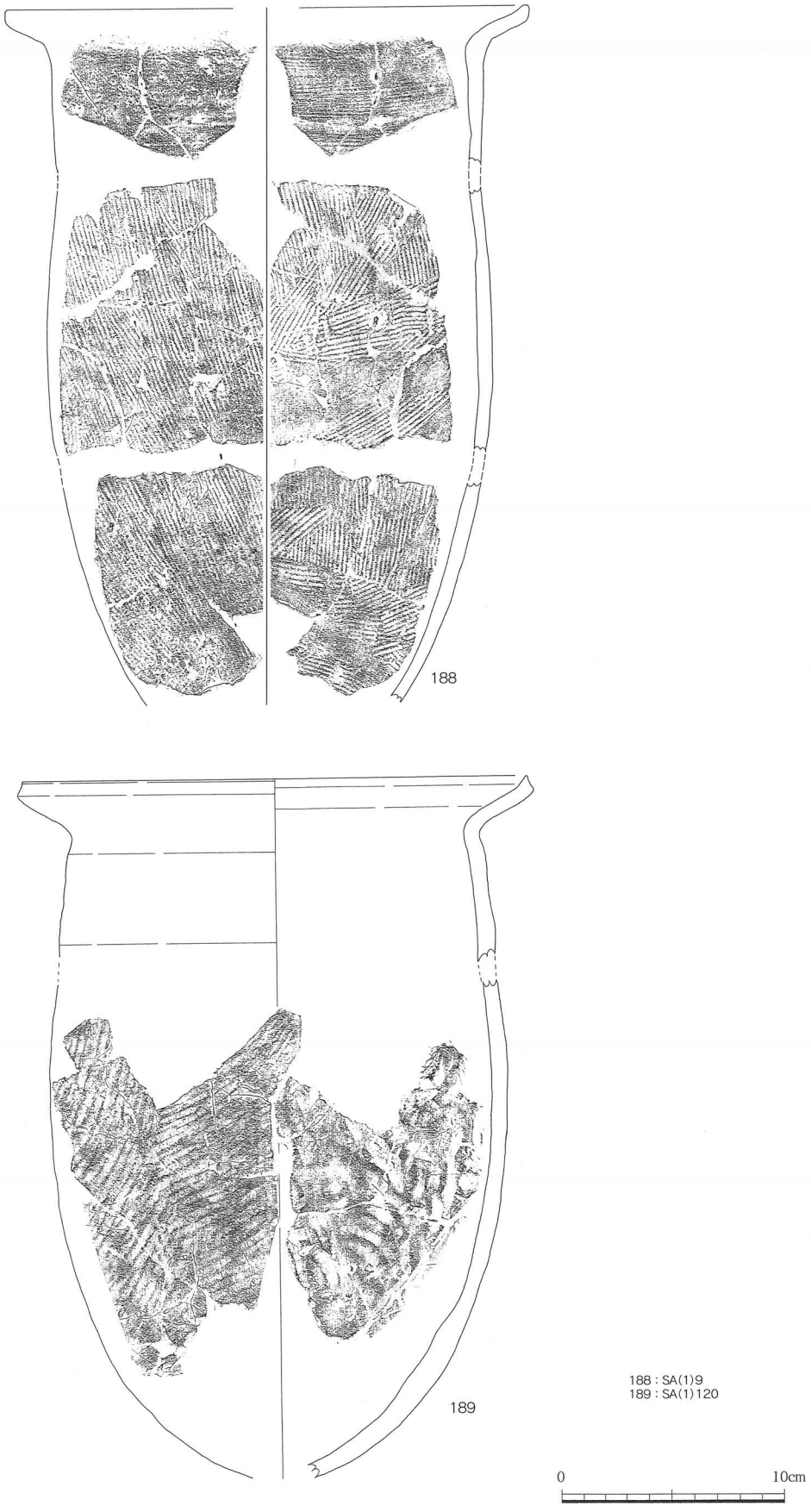


第87図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)　遺物実測図(8)　(1/3)

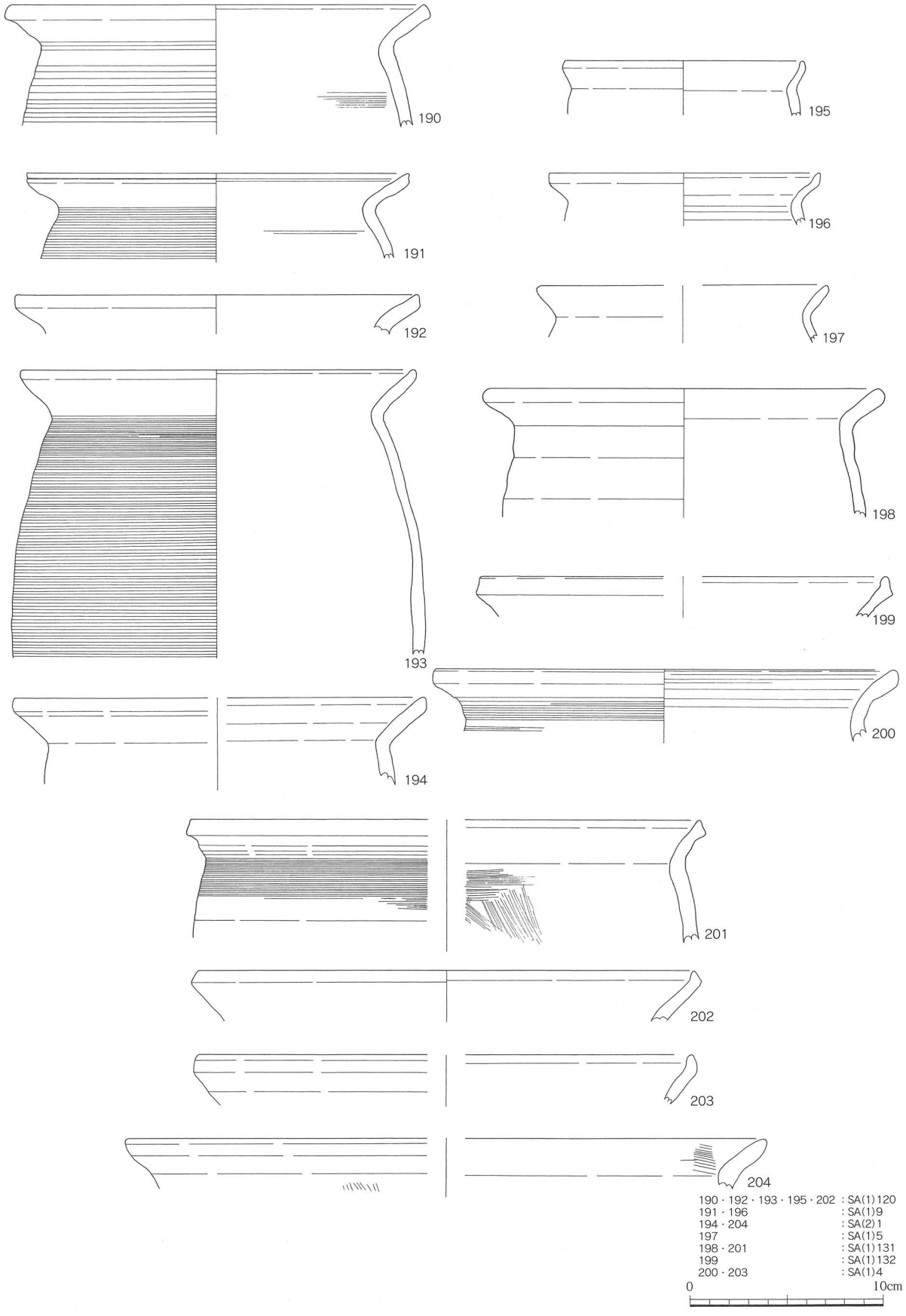


170・171・178・180	: SA(2)1
172・174・175・177・179・181・187	: SA(1)131
173	: SA(1)12
176・184	: SA(1)9
182	: SA(1)224
183	: SA(1)120
185	: SA(1)4
186	: SA(1)28

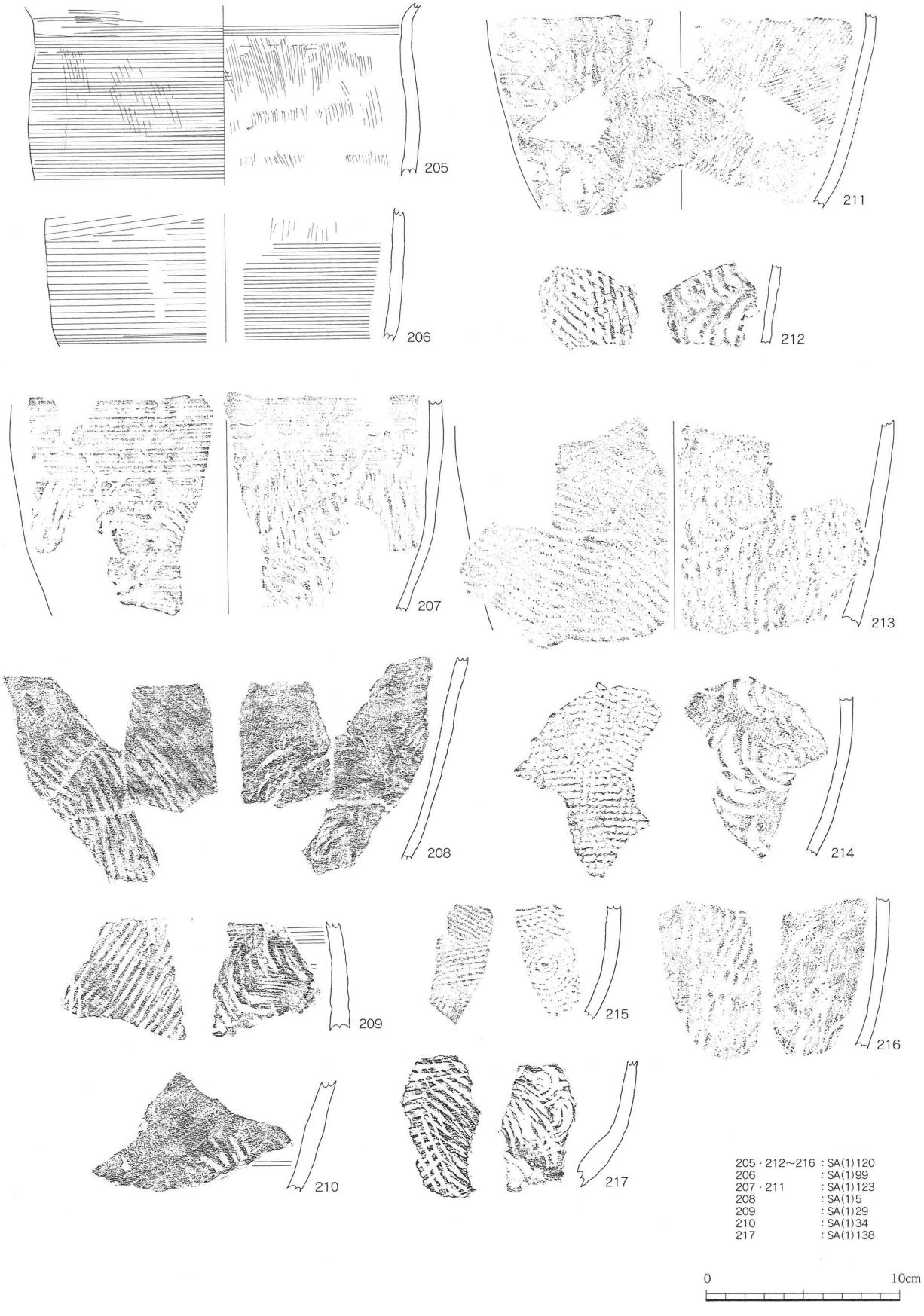
第88図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(9)　(1/3)



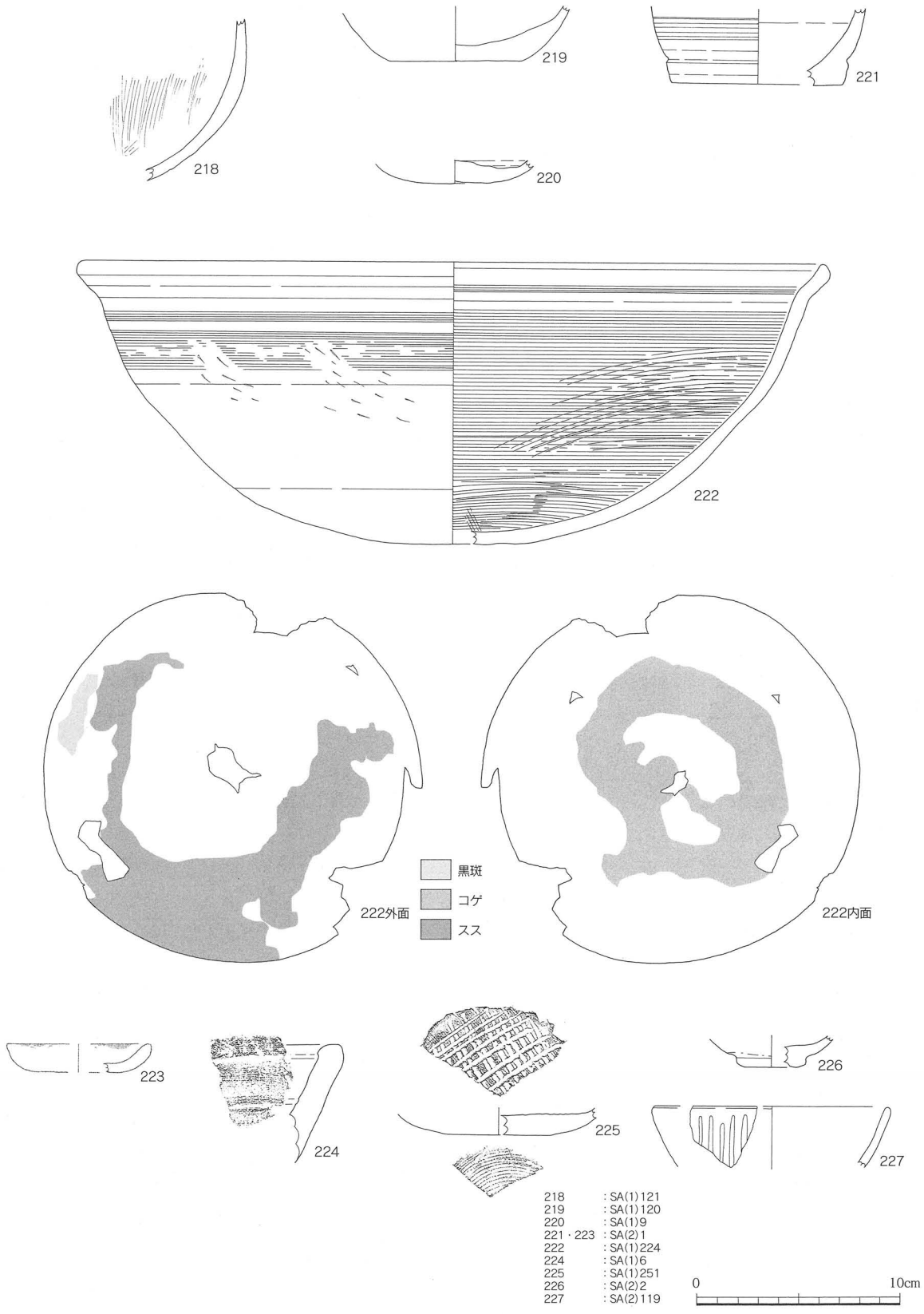
第89図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図⑽　(1/3)



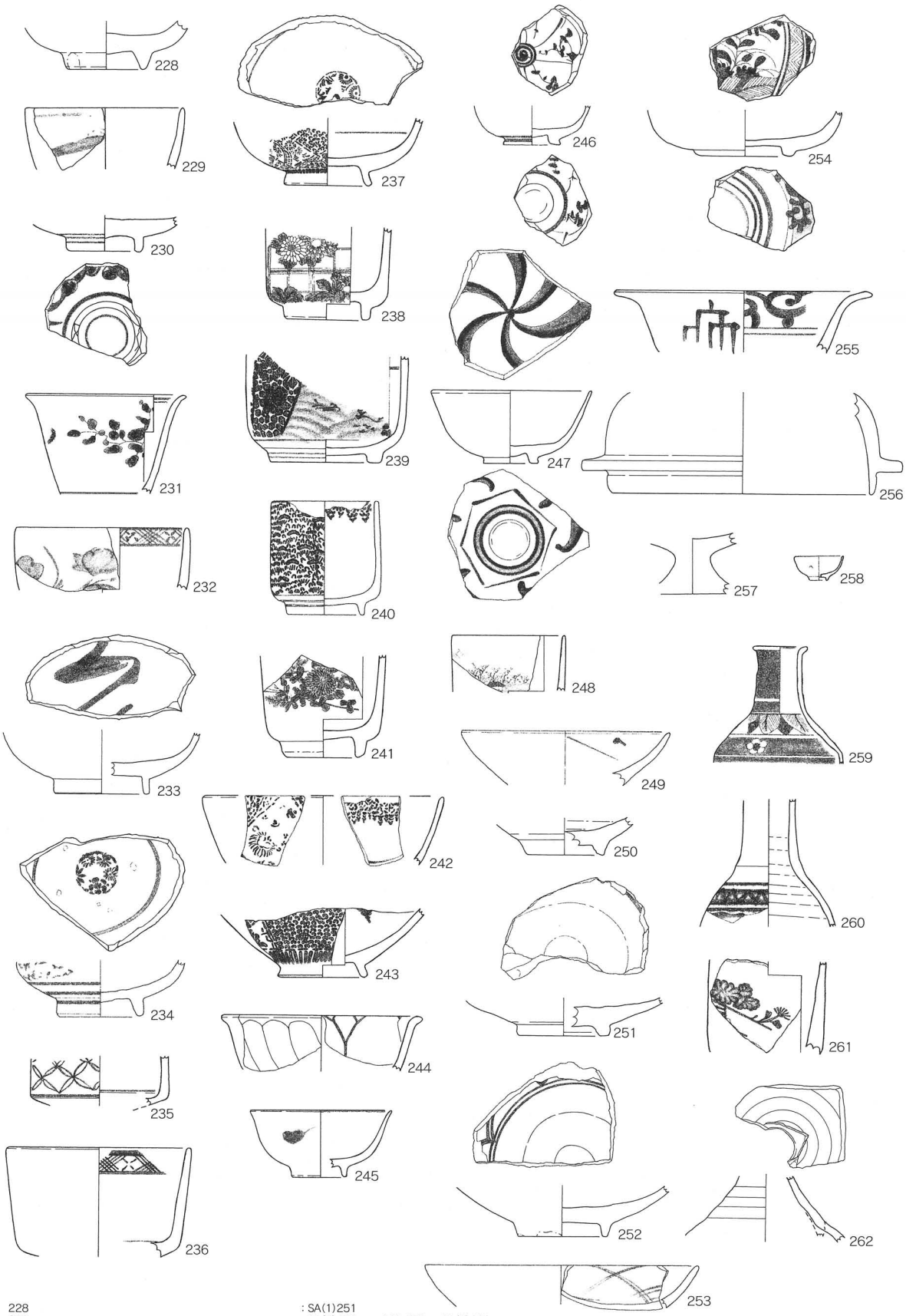
第90図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)　遺物実測図(11)　(1/3)



第91図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図⑿　(1/3)

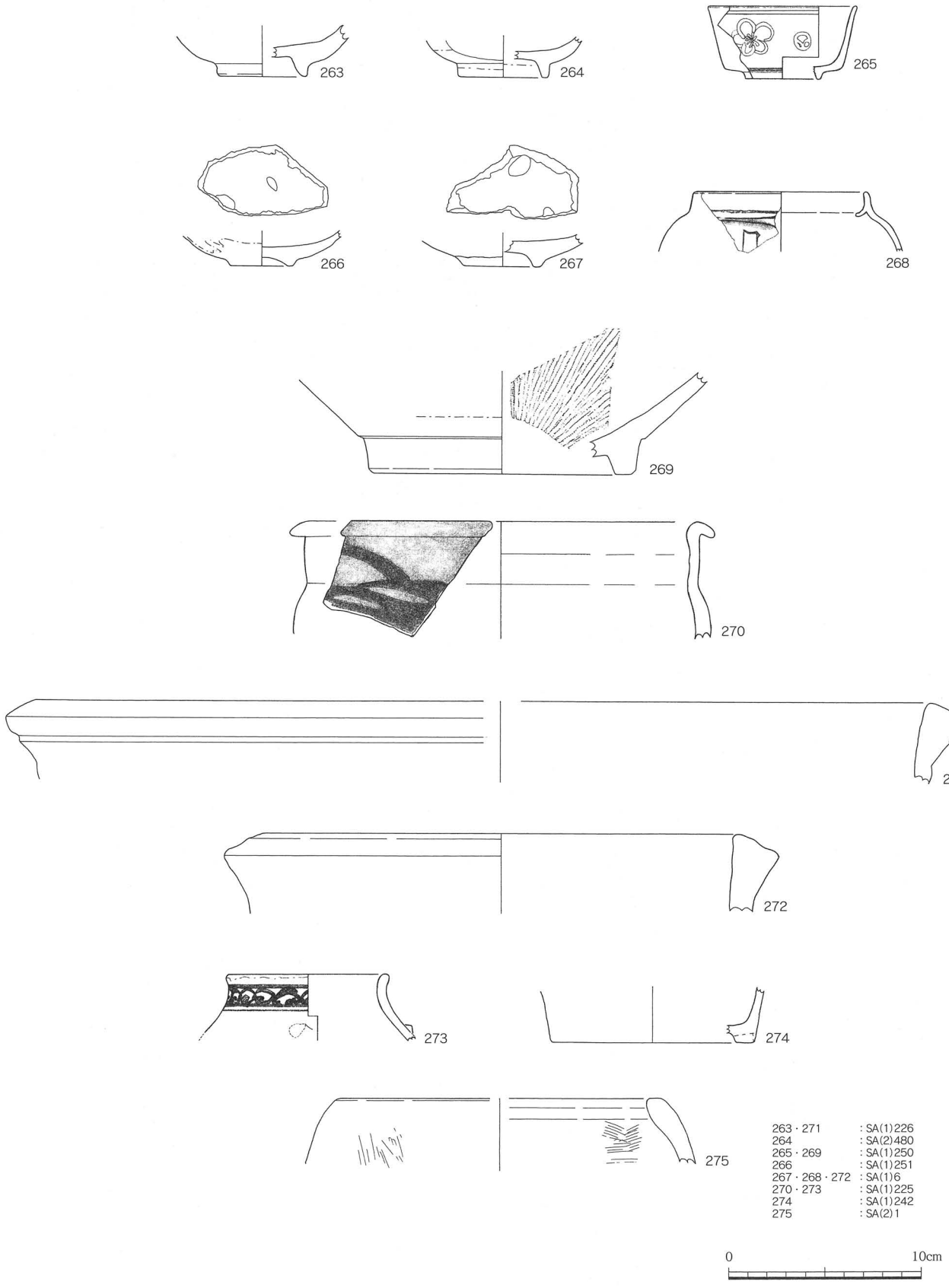


第92図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(13)　(1/3)

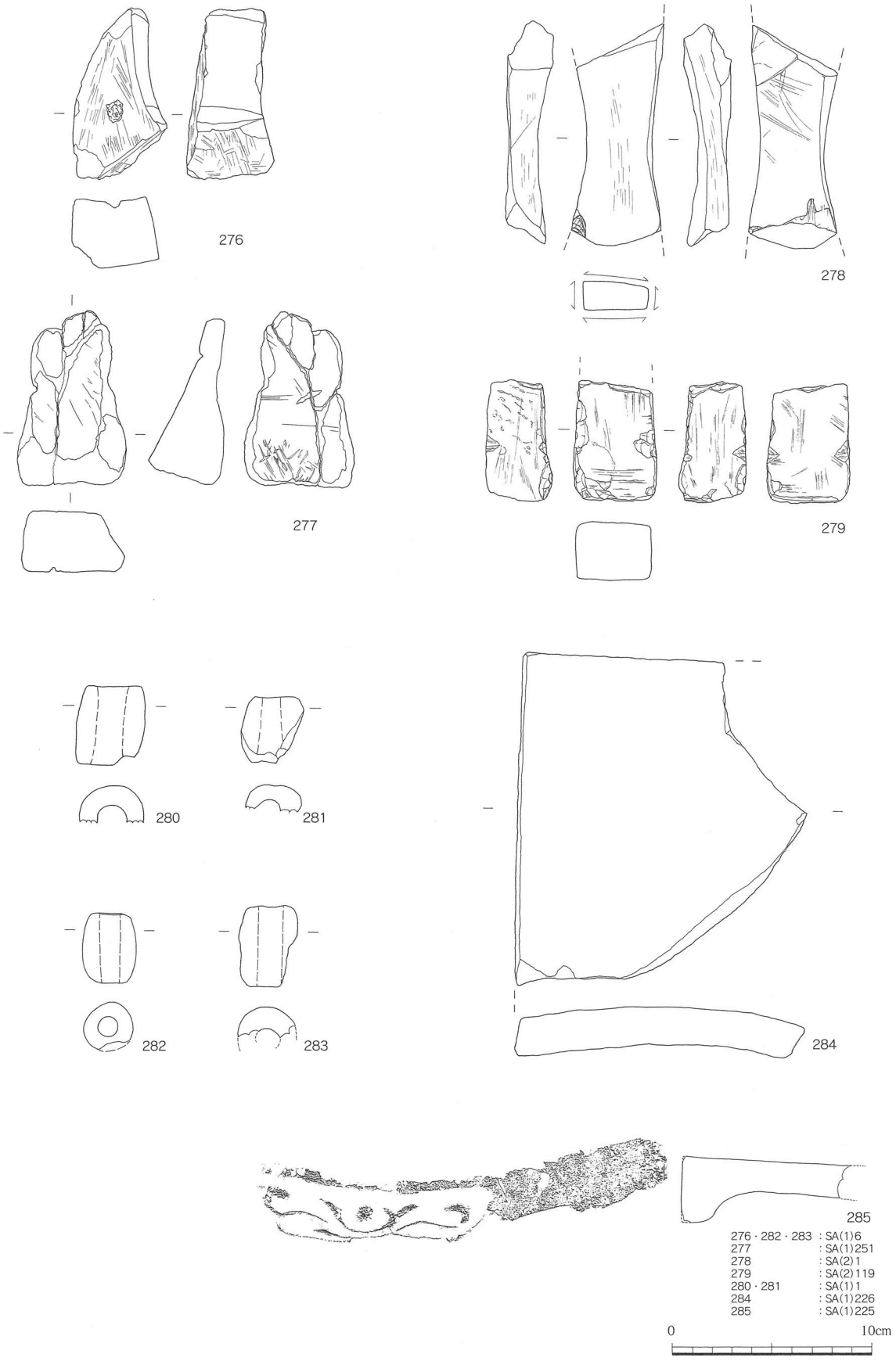


228 : SA(1)251
229 : SA(2)480
230・233・236・251・259 : SA(1)226
231・234・237～241・245～247・254～257・260・262 : SA(1)225
232・243・244・252 : SA(1)6
235・249 : SA(2)18
242・258 : SA(2)101
248 : SA(1)250
250 : SA(2)182
253 : SA(2)1
261 : SA(1)242

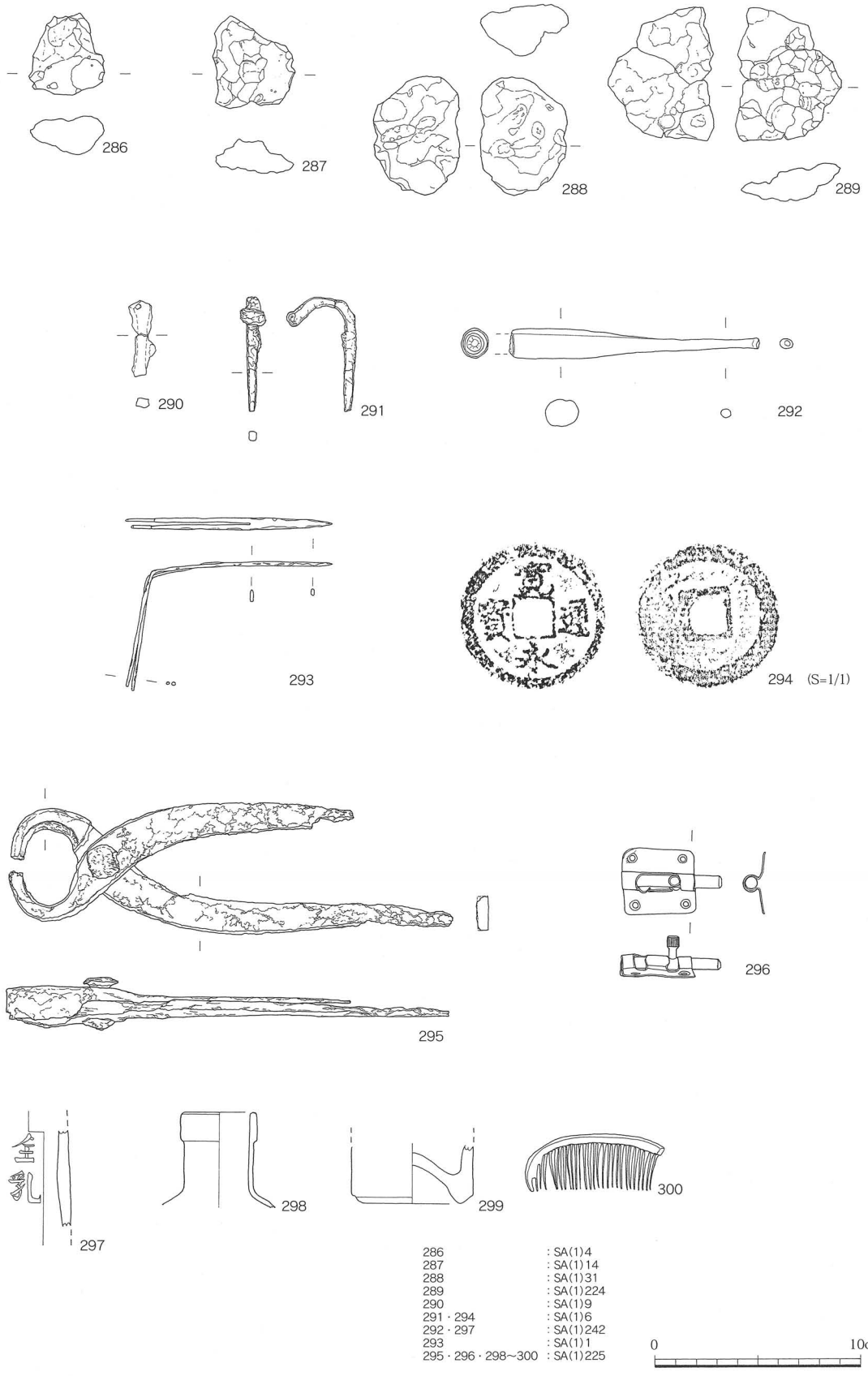
第93図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図⑭　（1/3）



第94図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図(15)　(1/3)



第95図　三納アラミヤ遺跡（第１・２次）　遺物実測図⑯　(1/3)



286	: SA(1)4
287	: SA(1)14
288	: SA(1)31
289	: SA(1)224
290	: SA(1)9
291・294	: SA(1)6
292・297	: SA(1)242
293	: SA(1)1
295・296・298～300	: SA(1)225

0 10cm

第96図　三納アラミヤ遺跡(第１・２次)　遺物実測図(17)　(1/1、1/3)

第６章　三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次調査）

第１節　遺跡の概要（第104・105・109・110図）

当遺跡は縄文時代と中近世を主体とし、古代や近世以降の遺構・遺物も僅かながら検出されている。調査区のほぼ全域で遺構が確認されたが、その種類は各調査年次で若干異なり、第１次調査区では耕作地・旧河川・倒木跡・土坑・ピットが、第３次調査区ではピット・土坑・溝・旧河川が主として検出された。全体的な層序は各調査区の調査区壁にかかる遺構の部分で確認している。近代の耕地整理により、ほぼ全ての場所で遺構確認面までの削平が行われているため遺物包含層は遺存せず、遺構内に堆積しているのみであった。遺構覆土は古代以前の黒褐色～暗褐色土と中世以降の褐灰色～灰色土に分かれるようである。なお、第１次調査区は農道を挟んで２区画に分かれ、南側を南調査区、北側を北調査区と呼称する。

古代以前の遺構としては旧河川・落ち込み・倒木跡群が確認され、縄文時代の土器・打製石斧・土偶、弥生時代の甕、古代の須恵器が出土した。遺構・遺物ともに希薄であり、縄文時代においては一時的な活動の場所、古代においては周辺で三納アラミヤ遺跡など古代の集落跡が確認されていることから、集落の縁辺部もしくは耕作地などの生産域と考えられる。

中近世は旧河川と耕作地、平行溝群が検出された。耕作地は方形区画内に耕作痕跡と見られる小ピットが多数確認されたもので、平行溝などを伴わないことから水田跡の可能性が高い。当該期の水田跡は野々市町では初めて確認されたものであり、周辺の遺跡と併せ今後の環境復元の一助となろう。中世の遺物は中世土師器・珠洲・瀬戸美濃で、近世の遺物は土師器・陶磁器類である。なお、新野々市町役場建設に伴う第２次発掘調査により、中世の集落跡が確認されている。

近代以降は、遺構は土坑が検出された。遺物は土管やガラス瓶などである。集落ではなく、空閑地もしくは耕作域と考えられる。

第２節　遺　構

(1)古代以前の遺構（第104～108図）

a)土坑

ST(1)6（第107図・図版29）

Ｘ３グリッドに位置する。平面形は不整円形で、径323×160cm、深度40cmの土坑である。土偶(10)が出土した。

b)旧河川・流路

古代以前の旧河川は調査区内に２か所、流路は３か所確認された。

ST(1)1（第104～106図、図版29）

第１次南調査区の南端に位置し、北北西方向に流下すると見られる旧河川である。Ｖ～Ｗ（－５）～（－２）グリッドに広がり、西側は調査区外のため幅は不明であるが、東側は底が緩やかに上がって岸となる。長さ37m、最大幅15m、深度約50cmである。覆土は暗褐灰色土を主とし、最下層のみ黒褐色土が見られ、土色から古代以前の遺構であると思われる。また、第４層の埋没後に第３層が入る地点が確認されることから、この地点には再び小流路が作られ、その時期は出土遺物から中世と考えられる。須恵器有台杯(16)、中世土師器(21)が出土した。

ST(1)20（第108図）

Ｘ７～８・Ｙ８グリッドに位置し、Ｊ字状に緩く屈曲する。ベースとする黄褐色の面で確認され、濁黄

褐色の地山質土が覆土として入っていた。流路は長さ23mにわたって検出され、最大幅５m、深度15～20cmである。東側の覆土中から縄文土器(１～６)がまとまって出土した。

ST(1)30（第107図、図版29）

X～Y14～15グリッドに位置し北東方向に流下する流路である。最大長17m、最大幅８m、深度10～20cmで、北東で近世以降の溝ST(1)37に切られる。覆土は黒褐色土が主体である。弥生土器(11)が出土した。

ST(3)1　後述

ST(3)29（第104・106図）

Z12～14グリッドに位置する、北北西方向に流下する流路である。長さ18m、最大幅4.5m、深度５～10cmを測る。浅く、遺構の平面形に不明瞭な部分がある。覆土は暗褐色土を主とし、下層に地山質の褐色シルト質土が見られる。遺物はない。覆土から古代以前と判断した。

c)倒木跡群

ST(1)3・5他（第105図、図版29）

第１次南調査区のW～X０～２グリッドに点在する。覆土から古代以前と判断し、ここに一括して報告する。ST(1)３は径4.6×4.3m、深度約40cmを測る。覆土は上層に褐色シルト質土、下層に濁黄褐色土が見られる。打製石斧(13)が出土した。ST(1)５は北側の調査区壁にかかって全形は明らかでないが、確認できた部分で径2.1×2.0m、深度約35cm、覆土は濁黄褐色土に暗褐色土が不規則に入り込んでいる。縄文土器(８・９)が出土した。

(2)中近世の遺構（第109～113図）

a)溝

ST(1)2（第110図）

W（－３）～（－４）グリッドに位置する。当遺構は旧河川ST(1)１の東側岸付近にあり、重複している。確認できた部分では、長さ９m、最大幅60cm、深度２～６cmを測る。覆土は暗褐灰色土を主とし、上層に灰白色粘質土がブロック状に入る。珠洲甕(23)が出土した。

ST(1)9（第110・111図、図版29）

W４グリッドに位置する東西方向の溝である。北側に、ほぼ平行に走る同規模の溝を確認している。西側調査区壁にかかるため全形は明らかでないが、確認できた部分では長さ4.5m、幅90cm、深度10cmを測る。覆土は黒褐色土で、地山ブロックを多く含む。遺物は出土していないが、後述するST(1)８と同一の覆土であることから、これに関わる遺構と考え、ここに記述した。

ST(1)33・ST(3)26（第109・111図、図版29・30）

X～Y15～16グリッドに位置する北西方向の溝である。上層では１本の広い溝として確認され、完掘時には２本の平行する溝が確認されている。北側の溝は長さ9.6m、最大幅1.4m、深度20～30cmを測る。覆土は暗褐灰色土を主とし、石が多く含まれる。南側の溝は３次調査区の溝ST(3)26に接続する。長さ22.5m、最大幅90cm、深度30～40cmを測る。覆土は地山粒が多く混じる暗褐灰色土である。遺物はない。覆土から中近世と判断した。

b)その他

旧河川

ST(3)1（第109・111図、図版30）

第３次調査区の東側半分、A12～15・Z14～15グリッドに位置し北北西方向に流下すると見られる旧河川である。期間的制約もあり、トレンチ調査に留めた。最大長29m、最大幅12m、深度は最大で75cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、部分的に粘質が強い。上層の第１層は中近世、下層は古代以前の包含層となっている。須恵器瓶類(17)、中世土師器(19)、近世土師器(34)が出土した。

耕作地(第110～113図、図版30)

当遺跡では耕作地跡と考えられる遺構がいくつか確認された。ここでは、それらを一括して記述する。

耕作地A　第１次北側調査区南半で確認された。大きく分けてＡ１・Ａ２・Ａ３の３区画に分かれており、Ａ１区画には東西方向の平行溝群からなる溝群③が入る。溝群③は北調査区の最も南に位置するもので、東側が調査区壁外へと続くものが多い。平均長は1.5m、平均幅20cm、深度は４～12cmと、溝群①とほぼ似た深度である。最大長は③－９の2.95mで最大幅は③－６の25cmである。軸E－０～４°－S、遺物はない。いずれも東西方向に長く掘削され、南北方向のものはない。

Ａ２区画は略方形の落ち込みST(1)８に溝ST(1)11と小ピット多数が掘り込まれる。落ち込みST(1)８は南北14m、東西10mの広がりを持ち、深度20cmを測る。覆土は暗褐色土を主とする。中世土師器(18)が出土している。小ピット群は溝ST(1)11の南側に多く、北側には少ないことからＡ２区画の北側の境は溝ST(1)11となると思われる。

Ａ３区画はL字状に屈曲する溝ST(1)７と東西方向の溝ST(1)11で構成される区画で、区画内に小ピットが多数掘り込まれる。ST(1)７はＡ３区画の南・西側を区画する。L字状を呈し、西端で二股に分かれる。全長23mで、東西部分は幅２m、南北部分は幅90cm、深度５～10cm、覆土は黒褐色土である。砕片のため実測していないが、縄文土器・中世土師器・近世陶磁器が出土した。

Ａ２・Ａ３区画ともに小ピット群は不規則で掘り込みも浅いものが多いことから建物等を構成するとは考えられず、耕作時の耕作痕跡と理解するほうが妥当と思われる。また、溝や落ち込みで区画されないＡ１区画には平行溝群があり、溝や落ち込みで区画されるＡ２・Ａ３区画には小ピットが多く、平行溝群は分布しないことから、Ａ１区画が畑跡、Ａ２・Ａ３区画が水田跡であると推定する。

耕作地Aにおいては、Ａ２区画とＡ３区画の境となるL字状に屈曲する溝ST(1)７と東西方向の溝ST(1)11の間は、土坑は見られるものの、ピットは少ない。西側に遺構の肩が確認されているため一概に言えないが、農道的な役割を果たしている空閑地かと思われる。

耕作地B　Ｗ８グリッド、W～Ｘ７グリッドの平行溝が連続して検出されている部分である。これらは覆土の観察から前述の水田遺構と同じ中世のものと考えられ、溝が作られる畑跡と推測する。Ｗ８グリッドを溝群①、W～Ｘ７グリッドを溝群②とした。

溝群①は平均長182cm、平均幅25cmで、深度は６～17cm、最も長い①－４で３m、幅は30cmである。軸はE－２～５°－Nで、遺物はない。溝群②は平均長149c m、平均幅23cm、深度は２～９cmで、溝群①に比べて浅く、全体的に短めのものが目立つ。もっとも長い②－４で2.8m、もっとも幅が広いものは②－５の40cmである。軸E－２～10°－N、遺物はない。

耕作地C　ST(1)12と、その内部で検出されたST(1)37に平行する小溝群からなる。ST(1)12はX～Ｙ６～９グリッドに位置する。遺構西側の深度は浅く、北と東側の遺構の立ち上がりは不明瞭である。確認できた部分で最大長25m、最大幅13m、深度５～30cm、覆土は暗褐灰色土である。近世土師器(31)と京焼？陶器皿(46)が出土した。ST(1)37などの小溝群はST(1)12内部で確認されたものでST(1)12に軸を合わせる。検出状況はST(1)12が埋まった後に小溝群が掘り込まれた状態で確認されており、ST(1)37から近世土師器(30)も出土していることから、時期的には近世以降のものとすることができよう。

(3)近代以降の遺構(第98図)

近代以降の遺構密度は希薄で、土坑ST(1)25・26が２基確認された程度である。調査区域は集落から離れているためであろう。ST(1)25からは肥前磁器碗(35)、京焼？陶器碗(44)のほか、近現代の瓦が出土、ST(1)26からは実測していないが、近現代の土管が出土した。

第3節　遺　物(第8表)

当調査区では、縄文時代～近代までの遺物が出土した。種類と器種による分類は第5・6図に示した。点数はすべて破片数である。

⑴古代以前の遺物(第114・115図、図版31)

土器・土製品(1～11・16・17)　縄文土器9点、弥生土器1点、土偶1点、須恵器2点を図化した。1～9が縄文土器で、1・6が口縁部、他が胴部である。無文のものが多く時期的な特徴が不明だが、縄文時代の後晩期に属するものと思われる。1～6が流路ST⑴20、7が倒木跡ST⑴35、8と9が倒木跡ST⑴5から出土している。10は土偶の胸部片。右の乳房部分と見られ、大きく盛り上がった表現が目を引く。胸部には沈線文と沈線間に目の細かい単節斜縄文LRが施文されている。これも小片であり時期の比定は難しいが、文様の特徴から縄文時代後期後葉から晩期中葉頃のものと思われる。土坑ST⑴6から出土した。11は弥生土器。流路ST⑴30から出土している。後期の甕口縁部片である。16が須恵器有台杯、旧河川ST⑴1からの出土。17が須恵器瓶類の底部で旧河川ST⑶1からの出土である。すべて古代以前の旧河川や土坑・倒木跡から出土している。

石　器(12～15)　12～14は打製石斧。12は完形で遺構確認面から出土。13・14は欠損している。13が倒木跡ST⑴3、14がW3～5グリッド出土である。15は敲石。円礫の上下端に敲打の痕跡と敲打による剥離痕が残る。

⑵中近世以降の遺物(第116図、図版32)

土　器(18～21・30～34)　中世土師器4点、近世土師器5点を図化した。18～21は中世土師器皿で、18は耕作地ST⑴8、19・20は旧河川ST⑶1上層から、21はST⑴1から出土している。30～34は近世土師器皿である。21は油煙痕が見られる。30は溝ST⑴37、31は耕作地ST⑴12、32は溝ST⑴11、33・34は旧河川ST⑶1上層から出土している。耕作地ST⑴8から出土した18、耕作地ST⑴12と旧河川ST⑶1から出土した19・31・33・34以外は他時期の遺構から出土している。

陶磁器(22～29・35～49)　中世は珠洲片口鉢(22)・甕(23)、越前甕(24)、瀬戸美濃皿(25・26)、輸入青磁碗(27～29)を図化した。砕片のため、詳細な時期は不明である。25・26は藤沢編年の古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ期と考えられる。27～29は14世紀後半以降と考えられる。

近世以降の遺物としては磁器碗類(35～40)・皿(41・42)、陶器碗(43・44)・皿(45～47)・天目茶碗(48)・擂鉢(49)を図化した。産地は、35・36・40・41・43・49が肥前、47が越中瀬戸、48が瀬戸、44・46が京焼？である。耕作地ST⑴12から出土した46、土坑ST⑴25から出土の35・44以外は、他時期の遺構から出土している。

石製品(50)　砥石を1点図化した。

第4節　小　結

三納トヘイダゴシ遺跡の中世の水田跡は、野々市町では初の検出である。近接する粟田遺跡第10次調査(第4章)、三納アラミヤ遺跡第1・2次調査(第5章)でも近世の水路・水田跡が確認されており、中世以降現代に至るまでの土地利用の変遷を考古学的に検討する資料が得られたこととなる。ここでは加賀・能登の中近世の水田について概観し、当遺跡周辺で近代に行われた耕地整理前の地籍図を踏まえたうえで、粟田・三納地区における景観の変遷について考えてみたい。

加賀・能登における中近世の水田跡　加賀・能登の遺跡で検出された耕作地の研究は、近年では安英樹氏による畑状遺構の研究がある[安2005]。これは、粟田遺跡第10次調査・三納トヘイダゴシ遺跡第1次

調査で確認されたような平行溝群に関する研究であり、さらに畑で栽培されていた植物についても言及している。翻って、加賀・能登における中世以降の水田についての考古学的な研究は少ない。遺跡での検出例が少ないこともあるが、加賀地方は近代に大規模な耕地整理が行われたために、目に見えるかたちで中近世の水田形態を確認しにくい所為もあろう。加賀・能登で中世以降の水田・水利施設が検出されているのは、貝田遺跡南調査区[石川県立埋文センター 1995]、四柳白山下遺跡[㈱石川県埋蔵文化財保存協会1996・1997、㈶石川県埋文センター 2005b]、四柳ミッコ遺跡[㈱石川県埋蔵文化財保存協会1998]、梅田B遺跡[石川県教委・㈶石川県埋文センター 2004、2005a]、漆町遺跡白江・フジマキ地区[石川県立埋文センター 1989]が挙げられるに留まる。

貝田遺跡は富来町の富来川流域の丘陵部と沖積地に広がる遺跡であるが、ここでは11世紀後半～12世紀前半の「丘陵裾部から低地に展開する水田域」が検出された。具体的には畦畔によって区切られた「隅丸の長方形の格子状の区画」であり、間隔が判明した地点では東西約13m、短辺約６mの規模となる。調査区内ですべて同じ規模とはならず、水路も確認されていない。

四柳白山下遺跡は羽咋市の邑知潟北東部の複合扇状地の扇端部に位置する遺跡である。この遺跡や後述する四柳ミッコ遺跡が存在する邑知地溝帯の集落遺跡は碁石が峯・眉丈山の前縁に帯状に張り出した微高地と、それより続く複合小扇状地の極めて狭い集落適地に等高線に沿うように帯状に分布し、縄文時代中期～近世初頭の集落が現在の集落域とほぼ重なるという大きな特徴を持つ。ここでは、C地区第Ⅱ面(14世紀中頃を下限とする水田域)、D地区第Ⅱ面(14世紀中頃を下限とする水田域)、E地区第Ⅲ－２面で水田跡が確認された。いずれも正式報告は未刊であるが、概報によるとC･D地区の第Ⅱ面は４°の傾斜をもつ地形を階段状に造成し幅15cm程度の畦で区画しており、C地区とD地区では畦畔長辺の傾きが異なることから、用水として使用されていた河川を中軸として扇状に水田が展開していた様相が想定されている。水田区画はC地区で最小12×７m、最大20×８m、D地区で21×10mである。D地区では水口や湧水口と思われるものも検出されており、特に湧水口は蛇行していることから、「ぬるめ」の可能性も指摘されている。E地区第Ⅲ－２面は９世紀後半に埋没した水田跡で、水田１が南北7.5×9.4m、水田２が南北11m以上×東西12mである。それぞれ一箇所づつ水口が設けられ、幅１m程度の畦畔で区画されている。第Ⅲ－２面の下の第Ⅳ面は８世紀～９世紀中頃であることから、水田は短期間で埋没したと考えられる。

四柳ミッコ遺跡は四柳白山下遺跡の北東に位置する遺跡で、四柳白山下遺跡と同様に多数の遺構面が確認されている。そのB区Ⅱ面で中世以降近世前半の水田面が検出された。水利施設は未確認であるが、５×６mを標準とする16区画の水田で、畦畔の幅は50cm～１m程度である。

梅田B遺跡は、第３次調査A・B区と第４次調査１・２区上層で16世紀に掘削され、昭和20年代の耕地整理まで使用されていた用排水路が検出された。これは現・河原市用水の原形と考えられている。

漆町遺跡白江・フジマキ地区は、近世の水田と畑地が確認されている。第31号溝・第15号溝から水を供給される中央・東側ブロックと、第57号溝から水を供給される西側ブロックと畑状遺構に分けられる。南調査区では三角形・台形・長方形の水田区画が見られるが、北調査区では長方形の水田区画が多い。特に北調査区では第１・２・５号水田状遺構と第３・４・６号水田状遺構の南北の長さがほぼ揃い、第６・８・10号水田状遺構は東西幅も揃うなど、やや規則的な区割りがなされている。区画は最大で22×15m（ただし６分割される可能性あり）、最小で５×３mである。

以上、能登・加賀で検出された水田遺構を見てきた。正式報告がなされていない遺跡もあり、時期については今後、若干の異同もあると思われる。遺跡は扇状地に立地するものが多いが、能登の扇状地は概して小規模であり、三納トヘイダゴシ遺跡が所在する手取扇状地とは異なる。区画の大きさについては、最大は漆町遺跡の22×15m、次いで四柳白山下遺跡D地区の21×10mである。最小は漆町遺跡の５×３m、次いで四柳ミッコ遺跡５×６mである。沖積地に立地する漆町遺跡白江・フジマキ地区は扇状地

の三納トヘイダゴシ遺跡より大きな区画のものもある。

なお、水田区画を設定する際に基準とされたと考えられている「条里」は、今回の事例では確認できなかった。もともと中近世における「条里」は古代「条里」と異なって、国家権力によらない[金田1990]耕地整理手段でありまた地点表示方式に過ぎず[服部1983]、今回取り上げた遺跡では現地の状況により即した方法が取られたために、水田区画幅に規則性が見られない事例が多くなったと考えられる。今後、周辺の状況が明らかになれば立地や集落内の空間構成から耕作域の設定方法やその基準を考えることも可能であろう。水田区画や立地の問題については、それを待って再考したい。いずれにせよ、三納トヘイダゴシ遺跡の耕作地は、加賀地方における中近世の水田遺構を考える上で良好な資料と評価できよう。

地籍図にみる遺跡周辺の状況　野々市町は、明治～大正にかけて大規模な耕地整理が行われている。三納地区は大正３(1914)年～同11 (1922)年[有田・村上・増山2004]、近隣の粟田地区は明治44 (1911)年～大正６(1917)年にかけて行われた[有田・石田・増山2004]。粟田・三納地区にはこの耕地整理に伴う土地図が残されている。土地図は耕地整理前の状況を記録したもので、粟田遺跡第10次調査区(第４章)と耕地整理以前の地籍図を重ねたものが第97－１図、三納トヘイダゴシ遺跡第１・３次調査区(第６章)と三納アラミヤ遺跡第１・２次調査区(第５章)を重ねたものが第97－２図である。

第97－１図からは粟田遺跡の近世の溝AW(10)25が地籍図の溝に整合することが解る。この地籍図が描かれた明治44年には調査区とその周辺は水田であるから、水田化したのが耕地整理前なのは確かであるが、いつから水田であったかという記載はない。しかし溝AW(10)25の東側に検出された溝AW(10)61は、周辺に柱穴こそ検出できなかったがその形状から建物の雨落ち溝と思われ、粟田遺跡第10次調査区における遺物量のピークである17世紀後半～18世紀前半頃に溝AW(10)25の東側は宅地であったと想定している(なお、平成16年度に行われた第13次発掘調査では第10次調査区の東側が調査され、近世の建物を伴う宅地が検出されている)。第１章で述べたように、粟田集落は、鎮守神社の西側にあった村を「粟田川」(木呂川)の氾濫のため粟田新保に移した、という伝承がある[石川縣石川郡自治協會1927、「富奥村」の項]。伝承にある洪水の痕跡は基本層序では確認できないため、耕地整理の際に削平された可能性もある。集落が移動した時期は明らかではないが、18世紀後半以降に集落の移動があり明治年間には耕作地化していたことが考えられよう。

一方、第97－２図においては、三納アラミヤ遺跡の旧河川SA(1)225と取水施設SA(1)226が水路の分岐点及び水路と一致し、三納トヘイダゴシ遺跡の耕作地ST(1)12の西側肩部分が土地境と一致する。しかし、耕作地ST(1)７・８に一致する線は見られず、この地籍図が作成された段階には既に存在しなかったものと思われる。三納アラミヤ遺跡の水田SA(1)250の中央部分に検出された区画も地籍図に見えない。

以上、地籍図と検出遺構を比較した。粟田遺跡・三納アラミヤ遺跡においては水路や取水施設が地籍図と一致し、三納トヘイダゴシ遺跡では耕作地の区画が一致した。一方、粟田遺跡では17世紀後半～18世紀前半に溝AW(10)25東側が宅地として機能した後に集落が移動した結果、地籍図作成段階では耕作地となっていたと考えられ、土地利用に変化があったことが判明した。

粟田・三納地区における耕作地の変遷　第１章で述べたように、粟田・三納地区ともに集落の成立は古代を待たなくてはならない。古代になると粟田遺跡第10次調査区には平行溝群A・Bが確認され、耕作地が展開してくる。また、三納アラミヤ遺跡第１次調査区南端には古代の道路状遺構SA(1)２・３と竪穴建物群SA(1)９・120・121との間に耕作痕と思われるピット群が検出される。このピット群は建物群と明確に場所を分けて存在していることから、耕作地と居住地を区別する意識があったものと考えられる。しかし一方で道路状遺構SA(1)２・３の南側に住居や耕作痕が検出されないことから、あくまで道路状遺構SA(1)２・３までが集落のまとまりとして認識されていたものと思われる。

中世には三納アラミヤ遺跡で利水遺構SA(2)205・119が掘削され、三納トヘイダゴシ遺跡でも耕作地A(ST(1)７・８)・B (ST(1)平行溝群①・②)が出現する。両者は調査区内に集落を伴わないが、周辺の三

第97－１図　粟田地区（約S＝1/1,500、上がほぼ北）

第97－２図　三納地区（約S＝1/750、上がほぼ北）

第97図　地籍図との対比状況（三納地区、粟田地区）

納ニシヨサ遺跡や三納トヘイダゴシ遺跡第２次調査で中世の集落が確認されていることからこれに関係したものと思われる。この耕作地が所謂「散村」的に個々の建物に付随した状況で展開するのか、「集村」的に集落域と分けて存在するのかは三納ニシヨサ遺跡や三納トヘイダゴシ遺跡第２次調査の正式報告を待ちたいが、いずれにしても、これらの耕作地は古代には土地利用がなかった場所に出現している点に注意したい。

近世になると、三納アラミヤ遺跡で水田SA(1)250・用水SA(1)251、旧河川SA(1)225と取水施設SA(1)226が作られ、三納トヘイダゴシ遺跡では耕作地C（ST(1)12）が成立する。粟田遺跡第10次調査区では溝AW⑽25・75などの溝が掘削されるが、耕作地は確認できない。この段階は耕地整理前の地籍図に若干ながらその姿を確認でき、三納アラミヤ遺跡と三納トヘイダゴシ遺跡では耕作地として利用された状況が変化していないことが分かる。一方、粟田遺跡では、出土遺物から18世紀前半までは宅地と考えられるAW⑽25東側部分が、それ以降に移動した後に耕作地化したことが地籍図からもうかがわれる。近代には耕地整理が行われて近世の地割りも姿を消して整然とした水田区画に生まれかわるとともに、三納アラミヤ遺跡の旧河川SA(1)225もSA(1)252へと付け替えられ、取水施設もSA(1)226もSA(1)242となった。

現在の粟田・三納地区は、発掘調査の契機となった土地区画整理が着々と進行している。近代から現代にかけて碁盤の目状に整然と区画された水田が一面に並んでいた景観は、宅地や大型店舗からなる市街地へと大きく変わりつつある。今回の調査では、水田が一面に広がる景観は近世以降に成立したもので、それ以前は集落や畑・水田が時代ごとに入れ替わりながら展開する状況にあったことが判明した。この報告書が、当地域での人々の営みを知る上での一助となれば幸いである。

参考文献

有田明子・石田文一・増山了昭　2004　「粟田」『野々市町史　集落編』野々市町史編纂専門委員会

有田明子・村上和生雄・増山了昭　2004　「三納」『野々市町史　集落編』野々市町史編纂専門委員会

石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2004　『梅田B遺跡』

石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2005a　『梅田B遺跡』

石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2005b　『四柳白山下遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター　1989　『漆町遺跡Ⅳ』

石川県立埋蔵文化財センター　1995　『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』

石川縣石川郡自治協會　1927　『石川県石川郡誌』

伊藤雅文　1998　「15　石川県」『治水・利水遺跡を考える〈第Ⅰ分冊　資料編〉』第７回東日本埋蔵文化財研究会

金田章裕　1990　「国図の条里プランと荘園の条里プラン」『日本史研究』332

㈳石川県埋蔵文化財保存協会　1996　『㈳石川県埋蔵文化財保存協会年報７　平成７年度』

㈳石川県埋蔵文化財保存協会　1997　『㈳石川県埋蔵文化財保存協会年報８　平成８年度』

㈳石川県埋蔵文化財保存協会　1998　『㈳石川県埋蔵文化財保存協会年報９　平成９年度』

野々市町教育委員会　1992　『粟田遺跡　第二次発掘調査』

野々市町史編纂専門委員会　2004　『野々市町史　集落編』　石川県野々市町

服部昌之　1983　『律令国家の歴史地理学的研究』

安　英樹　2005　「石川県の畑状遺構と栽培植物」『石川県埋蔵文化財情報』13　㈶石川県埋蔵文化財センター

第８表　三納トヘイダゴシ遺跡(第１・３次)遺物観察表

縄　文

掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
1	10	ST(1)20	⑤	縄文土器	深鉢				口縁１/４	外：にぶい橙	内：にぶい褐	砂礫多	
2	12	ST(1)20	⑥	縄文土器					細片	外：にぶい橙	内：暗赤	石英多	
3	13	ST(1)20	④	縄文土器					細片	外：にぶい橙	内：暗赤	石英多	
4	14	ST(1)20	①	縄文土器					細片	外：橙	内：にぶい褐	石英多	
5	16	ST(1)20	④	縄文土器					細片	外：にぶい橙	内：灰褐	石英多	
6	17	ST(1)20	⑦	縄文土器					細片	外：にぶい橙	内：にぶい橙	骨針、石英多	外面煤付着
7	19	ST(1)35	断面付近	縄文土器					細片	外：にぶい橙	内：にぶい橙		外面煤付着
8	31	ST(1)５		縄文土器					細片	外：橙	内：暗赤褐	石英多	
9	32	ST(1)５		縄文土器					細片	外：赤褐	内：暗赤褐	石英多	
11	24	ST(1)30		弥生土器	甕	195			細片	外：にぶい橙	内：にぶい橙	シャ、石英多	外面煤付着
10	15	ST(1)６		土偶					胸部１/２	外：橙		石英少	
12	4	ST(1)		石器	打製石斧	155	73	25	完形				重328g
13	1	ST(1)３	黒褐色土内	石器	打製石斧	156	95	29	全体２/３				重410g
14	3	ST(1)	W３～５グリッド	石器	打製石斧	82	82	19	全体１/２				重129g
15	2	ST(1)	Y９グリッド東側上層	石器	敲石	116	70	49	完形				砂岩、重560g

古　代

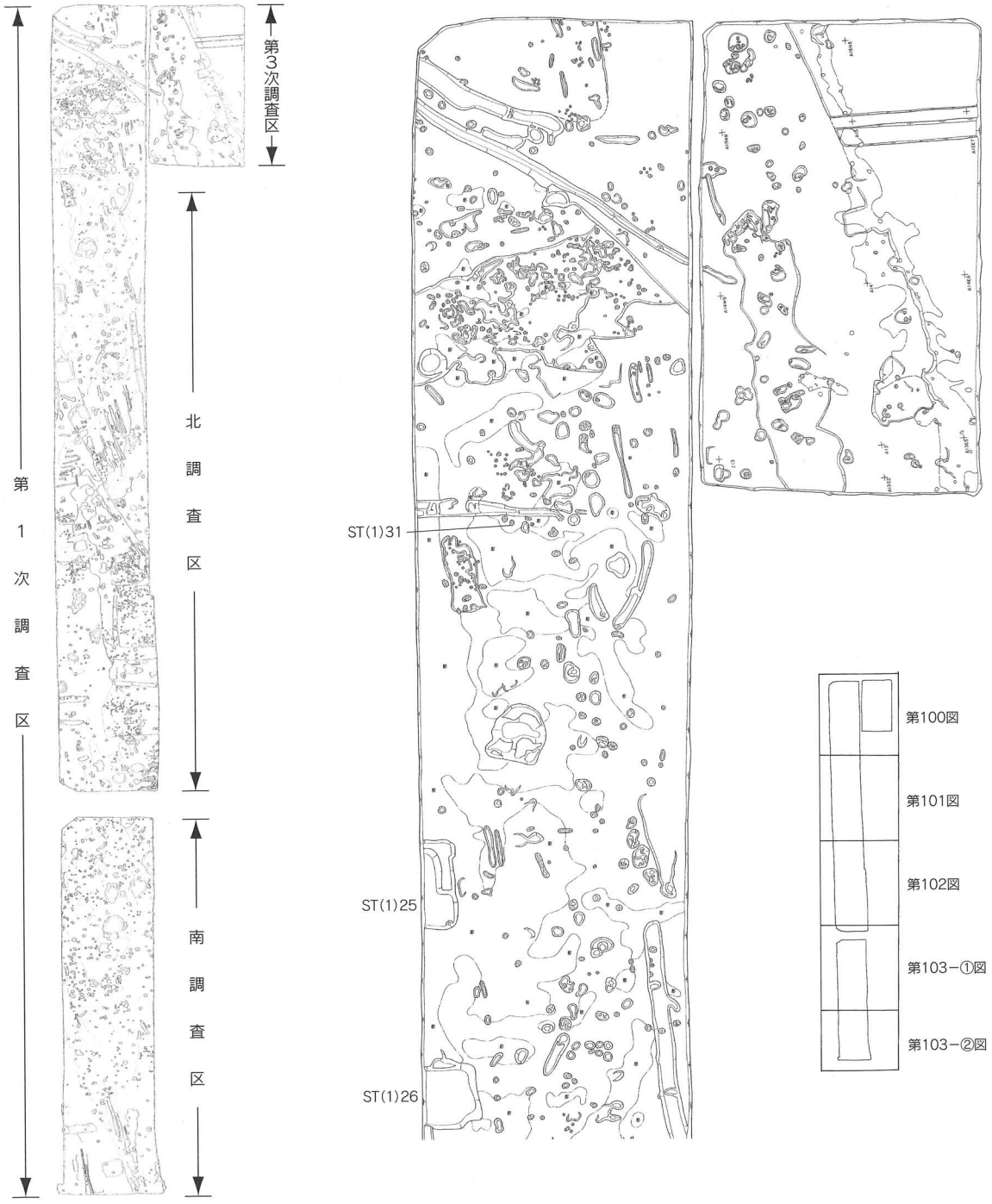
掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
16	9	ST(1)１	西壁	須恵器	有台杯			96	底部１/６	外：灰白	内：灰白	石英少	田嶋Ⅳ期
17	41	ST(3)１	A14グリッド	須恵器	瓶類			76	底部２/３	外：黄灰	内：黄灰	石英少	

中　世

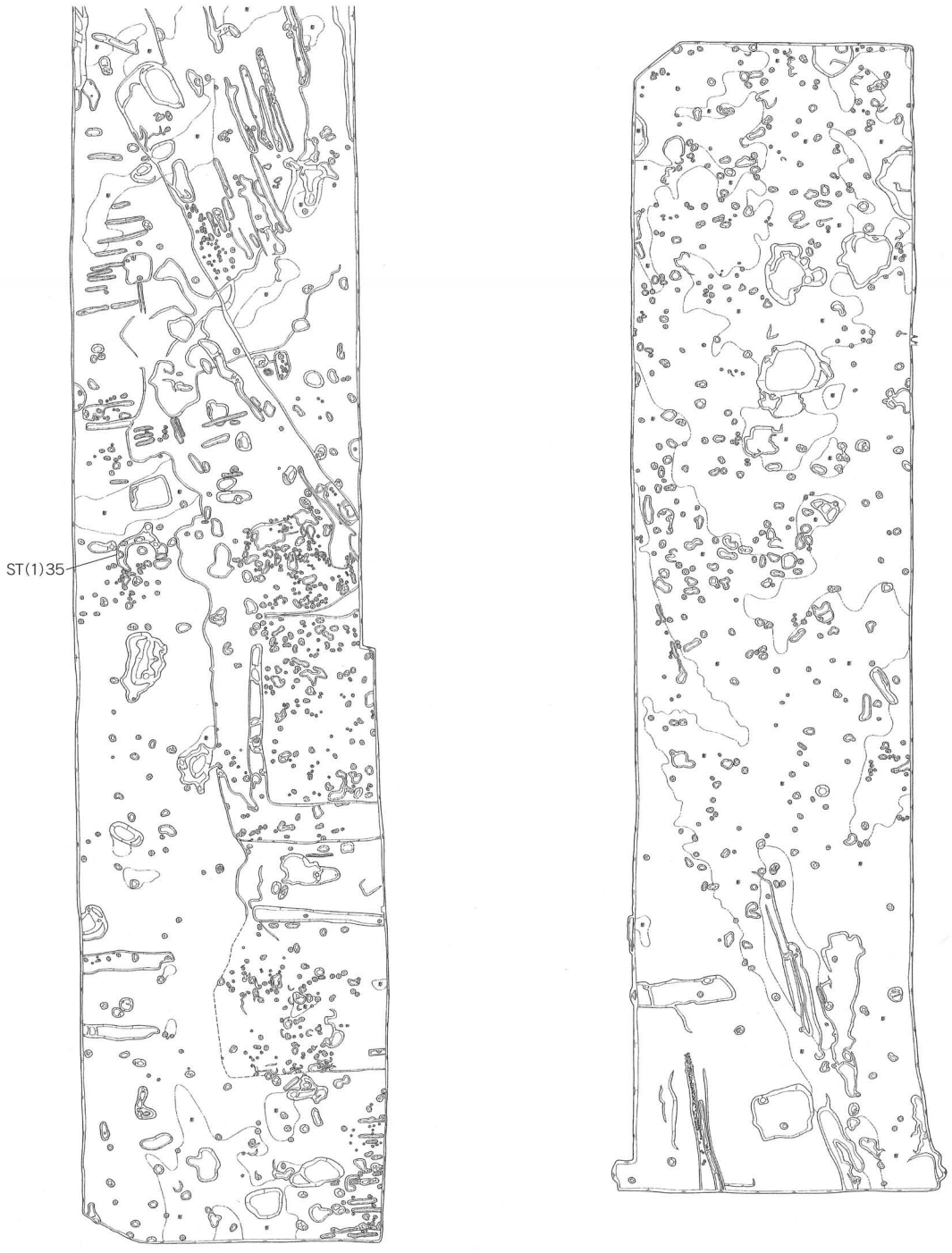
掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
18	22	ST(1)８	西	中世土師器	Ⅲ	67			全体１/６	外：橙	内：橙	シャ、石英少	藤田Ⅱ－Ⅱ～Ⅲ－１期
19	49	ST(3)１	A16グリッド	中世土師器	Ⅲ	66	17		全体１/18	外：浅黄橙	内：浅黄橙	シャ、石英少	藤田Ⅲ－１期
20	43	ST(3)１	上層	中世土師器	Ⅲ	68			全体１/６	外：明褐灰	内：浅黄橙	石英微	藤田Ⅳ－１期
21	8	ST(1)１	西壁	中世土師器	Ⅲ	70			ほぼ完形	外：橙	内：橙	シャ、石英多	藤田Ⅳ～Ⅴ期
22	11	ST(1)	W-５グリッド西壁	珠洲	片口鉢				砕片	外：灰	内：にぶい赤褐		
23	5	ST(1)２	底	珠洲	甕				砕片	外：灰	内：灰	石英少	
24	6	ST(1)	W３～４グリッド西	越前	甕				砕片	外：褐	内：にぶい褐	長石少	中世
25	35	ST(1)32		陶器	Ⅲ	321			砕片	釉：灰釉	胎：灰白		瀬戸、藤澤古瀬戸後Ⅱ～Ⅳ期
26	37	ST(1)32		陶器	Ⅲ	92	23	39	全体１/４	釉：灰釉	胎：灰白		瀬戸、藤澤古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期
27	44	ST(1)	表土剥ぎNR覆土内	中国青磁	碗			50	底部完形	釉：青磁釉	胎：灰白		14C後
28	21	ST(1)	W-３グリッド東側	中国青磁	碗				砕片	釉：青磁釉	胎：灰白		15C
29	7	ST(1)	W３～４グリッド西	中国青磁	碗			42	底部１/２	釉：青磁釉	胎：灰白		中世

近世以降

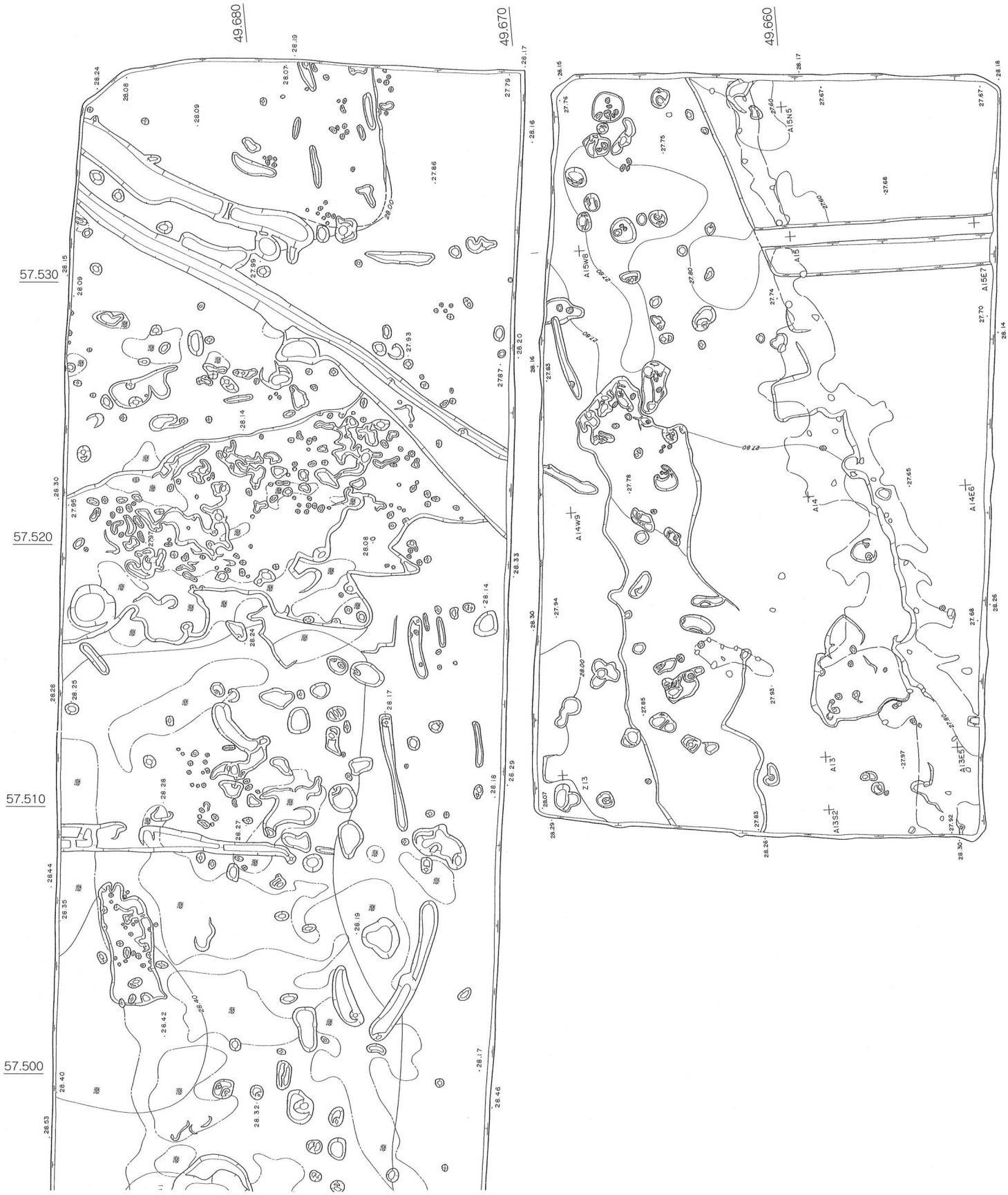
掲載番号	実測番号	出土地点	No.ほか	種　類	器　種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	残存率	色　調	色　調	胎土混和物	備　考
30	27	ST(1)37	①	土師器	Ⅲ	92			口縁１/６	外：浅黄橙	内：浅黄橙	石英微	17C前(増山編年による)
31	26	ST(1)12	褐灰色土層①	土師器	Ⅲ	82			口縁１/８	外：浅黄橙	内：浅黄橙	石英微	17C前～中(増山編年による)
32	20	ST(1)11	確認面	土師器	Ⅲ	67			砕片	外：灰白	内：灰白	石英微	17C中(増山編年による)
33	42	ST(3)１	上層	土師器	Ⅲ				砕片	外：浅黄灰	内：灰白	石英微	17C中(増山編年による)
34	48	ST(3)１	A16グリッド	土師器	Ⅲ	148			口縁１/18	外：灰白	内：灰白		17C中(増山編年による)
35	33	ST(1)25		磁器	碗			34	底部完形	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後(大橋Ⅲ期)
36	47	ST(3)	A14グリッド遺構検出	磁器	碗	96			口縁１/12	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、17C後(大橋Ⅲ期)
37	46	ST(3)	A14グリッド遺構検出	磁器	碗	88			口縁１/８	釉：透明釉	胎：灰白		
38	30'	ST(1)	南区表採	磁器	碗	71			全体１/12	釉：透明釉	胎：灰白		
39	36	ST(1)32		磁器	小杯			25	底部１/２	釉：透明釉	胎：灰白		
40	30	ST(1)	南区表採	磁器	筒形碗				胴部１/６	釉：透明釉	胎：灰白		肥前、18C後～19C初(大橋Ⅳ～Ⅴ期)
41	28	ST(1)31		磁器	Ⅲ	121			砕片	釉：透明釉	胎：灰白		肥前
42	45	ST(3)	Z14遺構検出	磁器	Ⅲ			68	底部１/９	釉：透明釉	胎：明緑灰		
43	18	ST(1)	周辺表採	陶器	碗			36	底部１/３	釉：灰釉	胎：黄灰		肥前、17C後(大橋Ⅲ期)
44	34	ST(1)25		陶器	碗	110			口縁１/９	釉：灰釉、部分銅釉	胎：浅黄橙		京焼？
45	23	ST(1)	W-２グリッド床上	陶器	Ⅲ			44	底部１/４	釉：銅緑釉	胎：灰白		17C後
46	25	ST(1)12	15区	陶器	Ⅲ			41	底部１/４	釉：灰釉	胎：浅黄橙		京焼？
47	29	ST(1)	W０グリッド東側	陶器	Ⅲ			56	底部１/８	釉：灰釉	胎：にぶい赤褐		越中瀬戸、17C
48	38	ST(1)32		陶器	天目碗	120			全体１/18	釉：鉄釉	胎：灰白		瀬戸、17C前
49	39	ST(1)32		陶器	擂鉢				砕片	外：灰褐	内：灰褐		肥前？
50	40	ST(1)32		石製品	砥石								長55mm、幅42mm、厚６mm、重19g



第98図　三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次)遺構分布図(1)　(1/1,200、1/400)

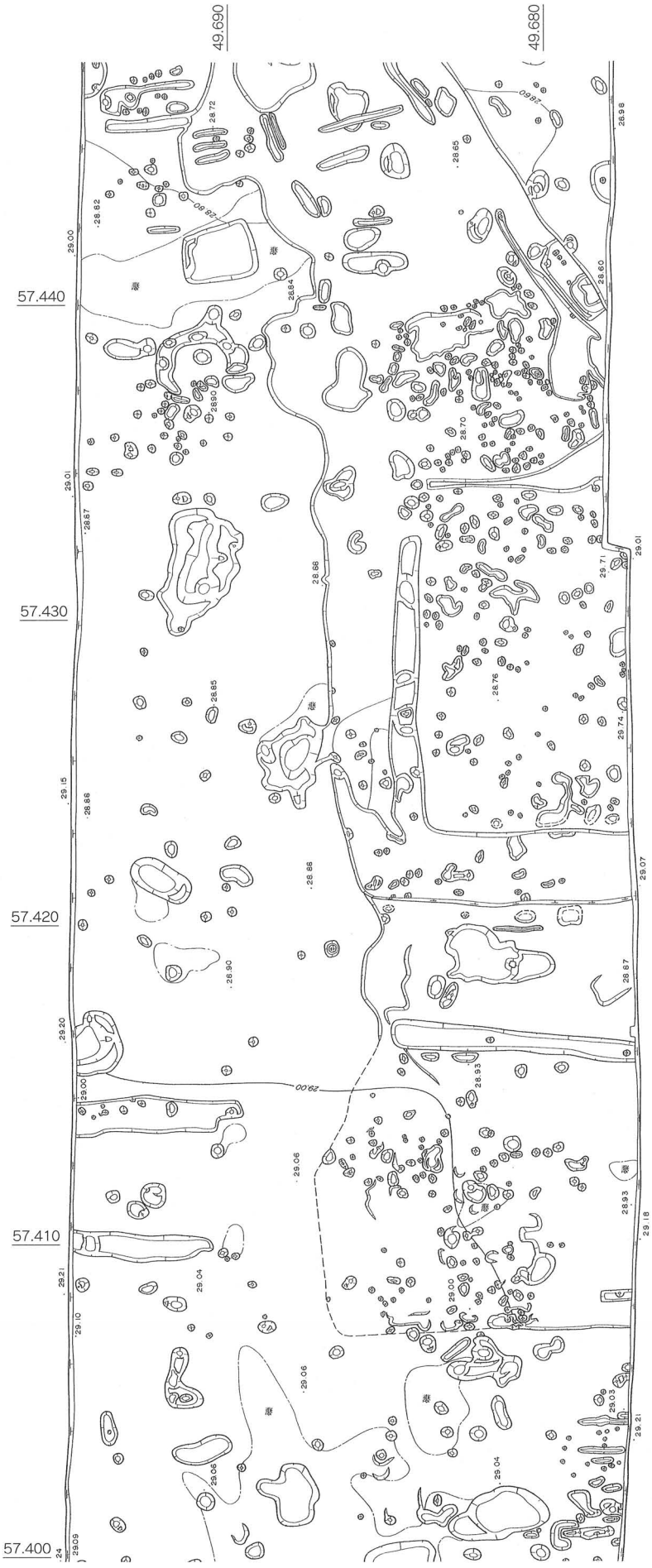


第99図　三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次）遺構分布図(2)　(1/400)



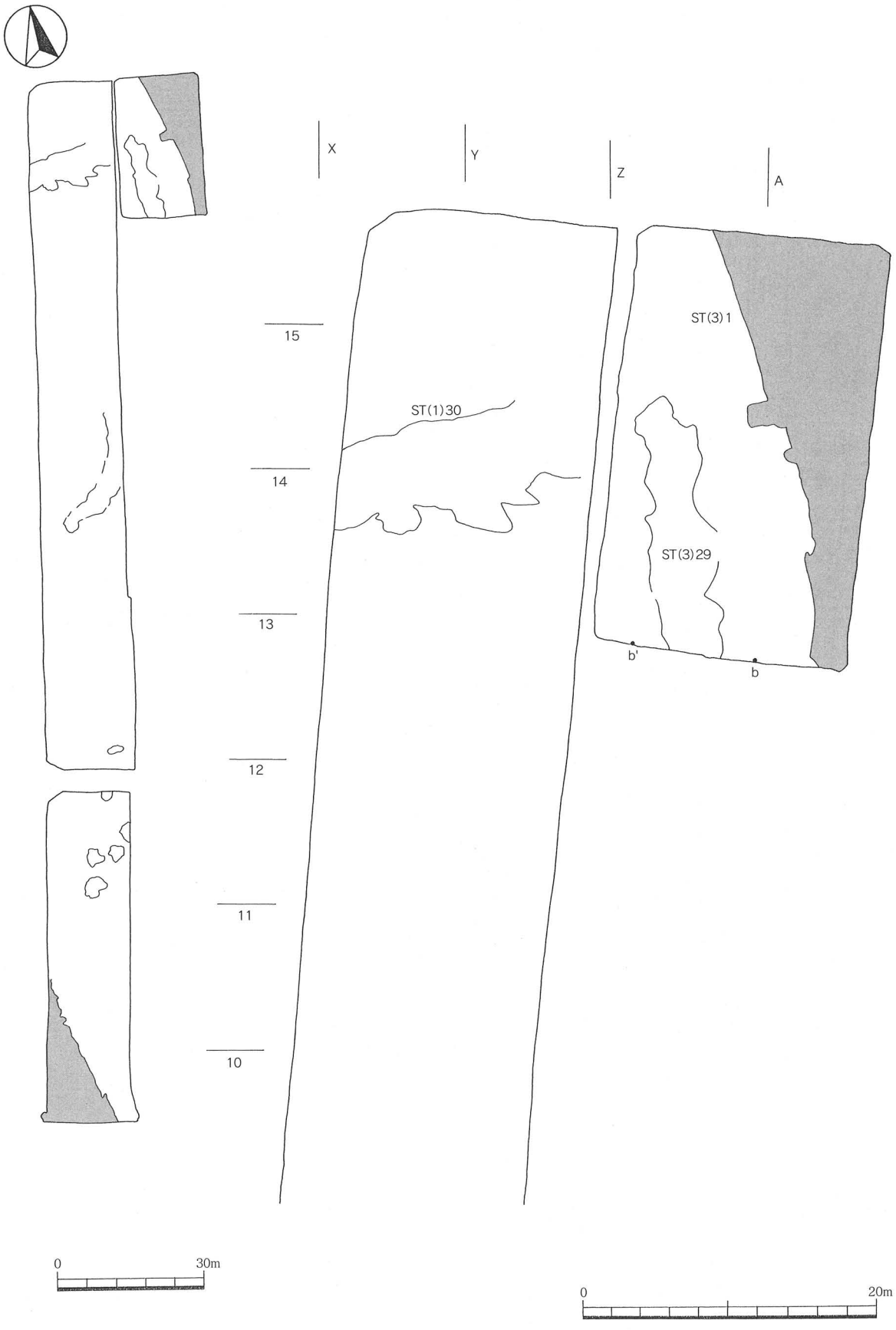
第100図　三納トヘイダゴシ遺跡(第1・3次)平面図(1)　(1/200)

第101図　三納トヘイダゴシ遺跡（第１次）平面図(2)　(1/200)

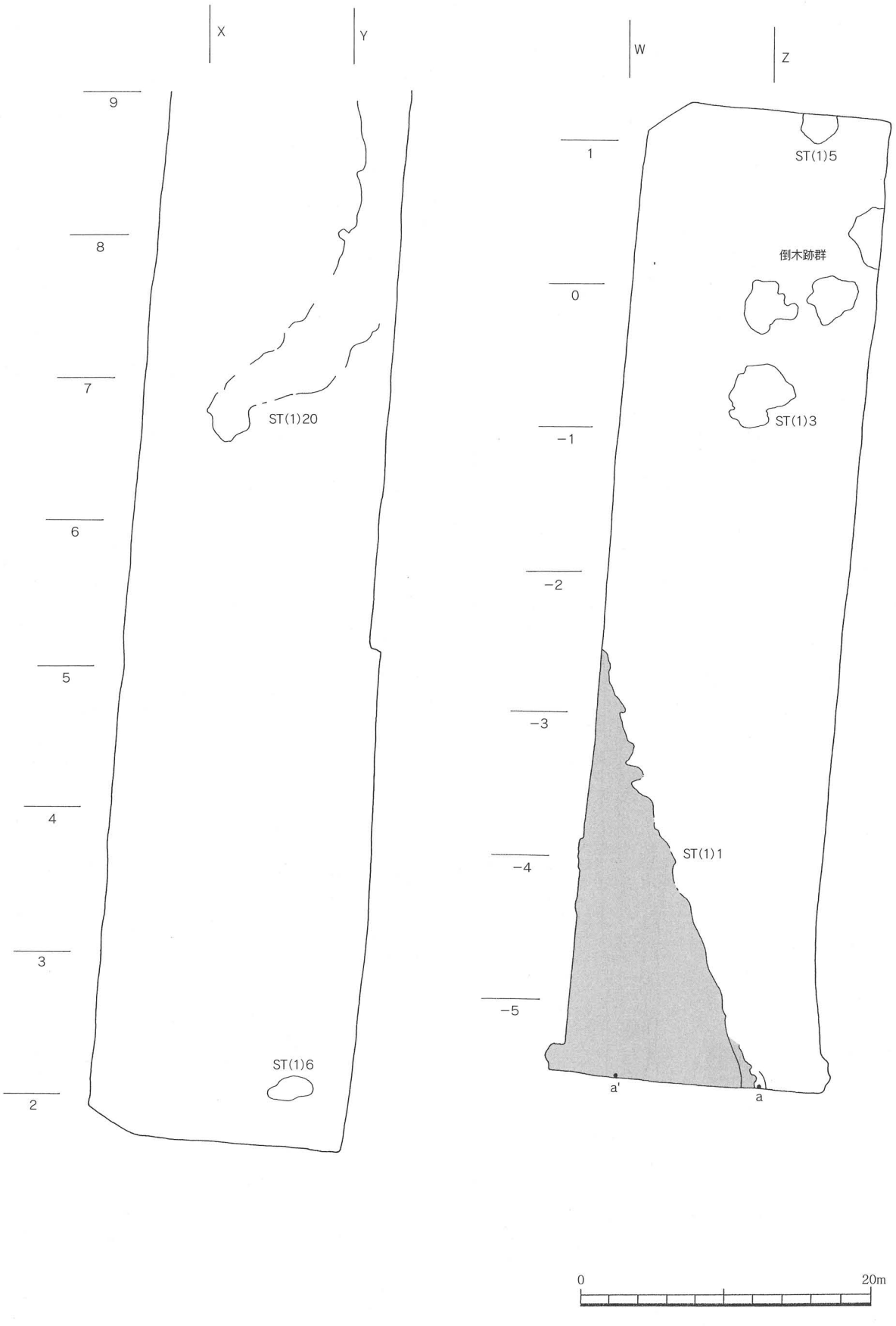


第102図　三納トヘイダゴシ遺跡（第１次）平面図(3)　(1/200)

第103図　三納トヘイダゴシ遺跡（第１次）平面図(4)　(1/200)

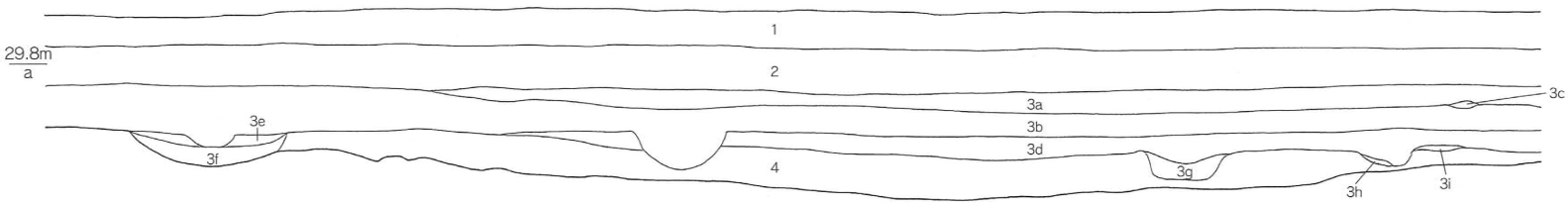


第104図　古代以前遺構全体図(1)　(1/1,200、1/400)

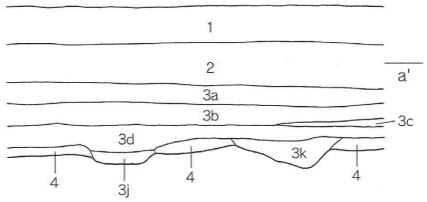


第105図　古代以前遺構全体図(2)　(1/400)

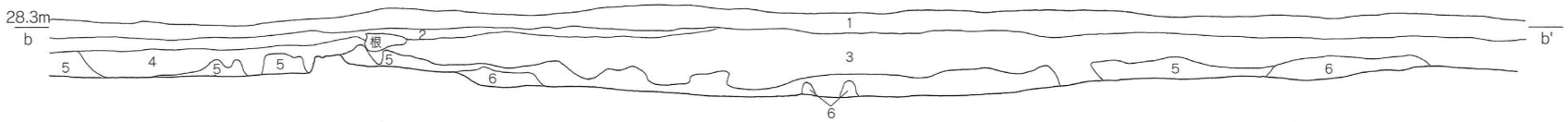
ST(1)1



ST(1)1
1. 青灰色土　現水田耕土
2. 褐灰色土　現水田床土混入
3a. 暗褐灰色土
3b. 暗褐灰色土　第3a層より明るい
3c. 暗褐灰色土
3d. 暗褐灰色土　サビ沈着
3e. 暗褐灰色土　灰白色粘質土ブロック混入
3f. 暗褐灰色土　灰白色粘質土層状に混入
3g. 暗褐灰色土　第4層少量混入
3h. 暗褐灰色土　第3d層より明るい
3i. 暗褐灰色土　地山ブロック少量混入
3j. 暗褐灰色土　黄褐色土ブロック少量混入
3k. 暗褐灰色土　地山ブロック少量混入
4. 黒褐色土　粘性あり

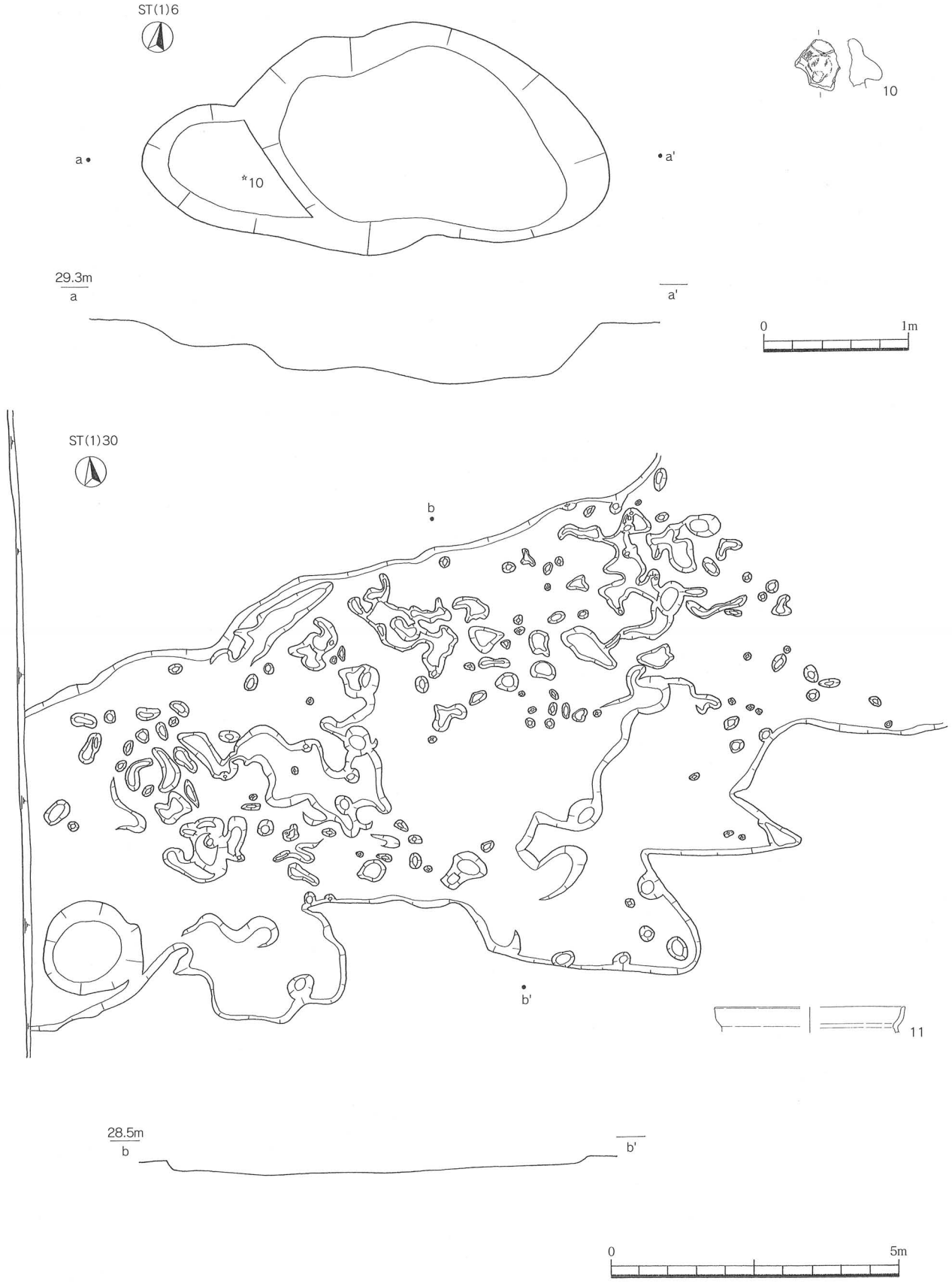


ST(3)29



ST(3)29
1. 褐灰色土　現水田床土
2. 暗褐灰色土
3. 暗褐色土　シルト質
4. 暗褐色土　シルト質、地山混入
5. 褐色土　シルト質
6. 灘黄褐色土　シルト質

第106図　遺構実測図　河川ST(1)1、落ち込みST(3)29　(1/40)

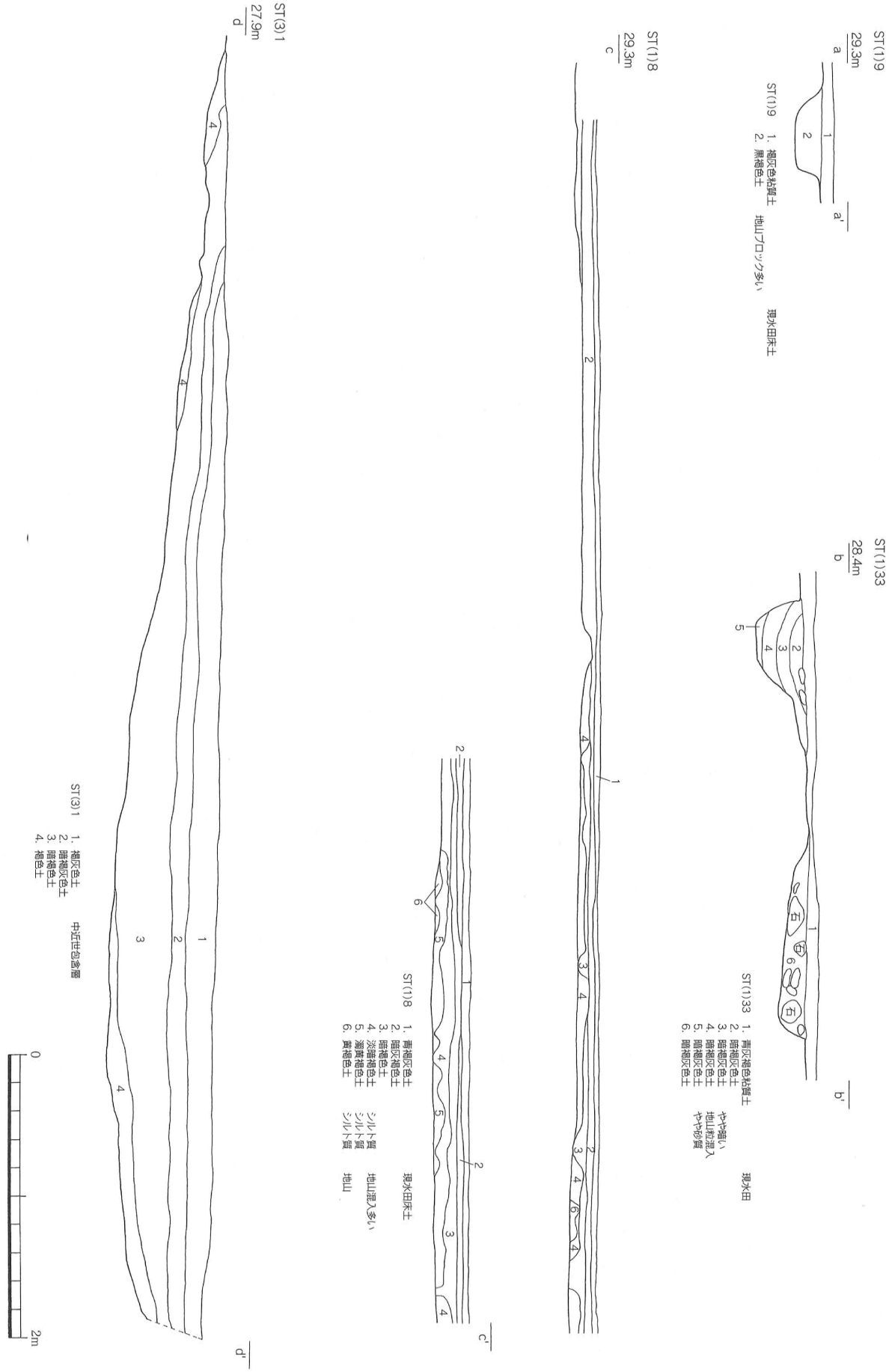


第107図　遺構実測図　土坑ST(1)6、流路ST(1)30　(1/100、1/40)

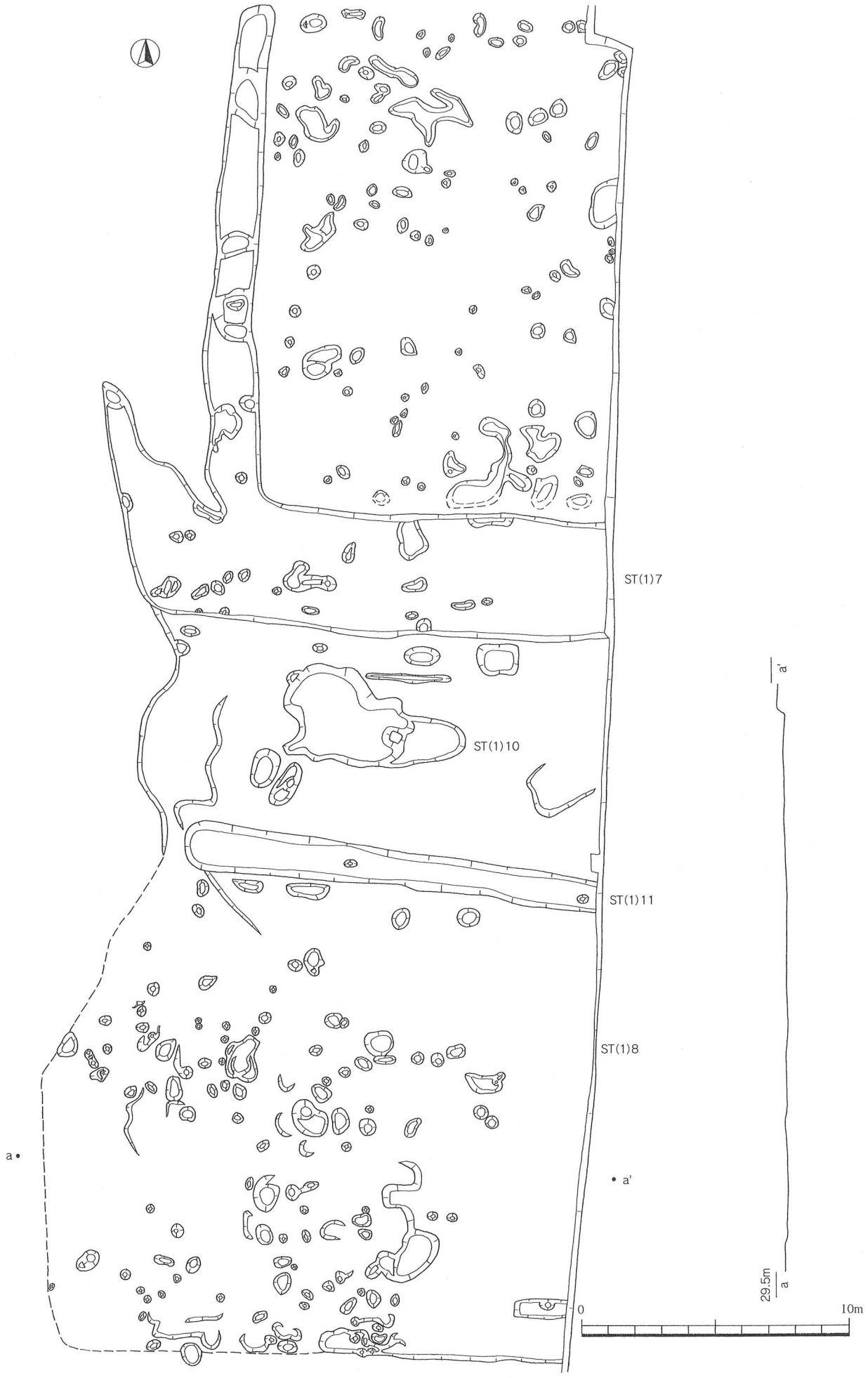
第108図　遺構実測図　流路ST(1)20　(1/100)

第109図　中近世遺構全体図(1)　(1/1,200、1/400)

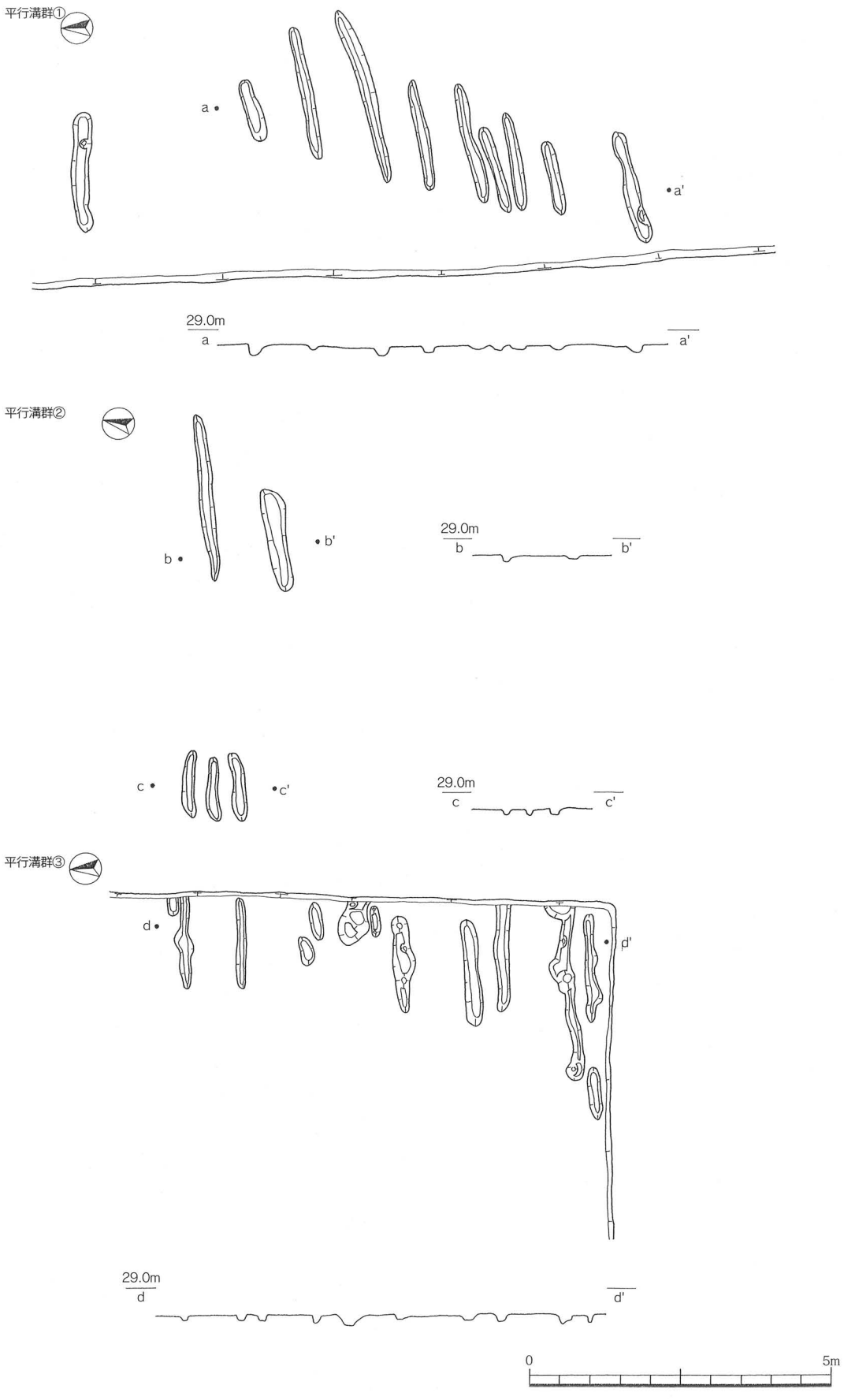
第110図　中近世遺構全体図(2)　(1/400)



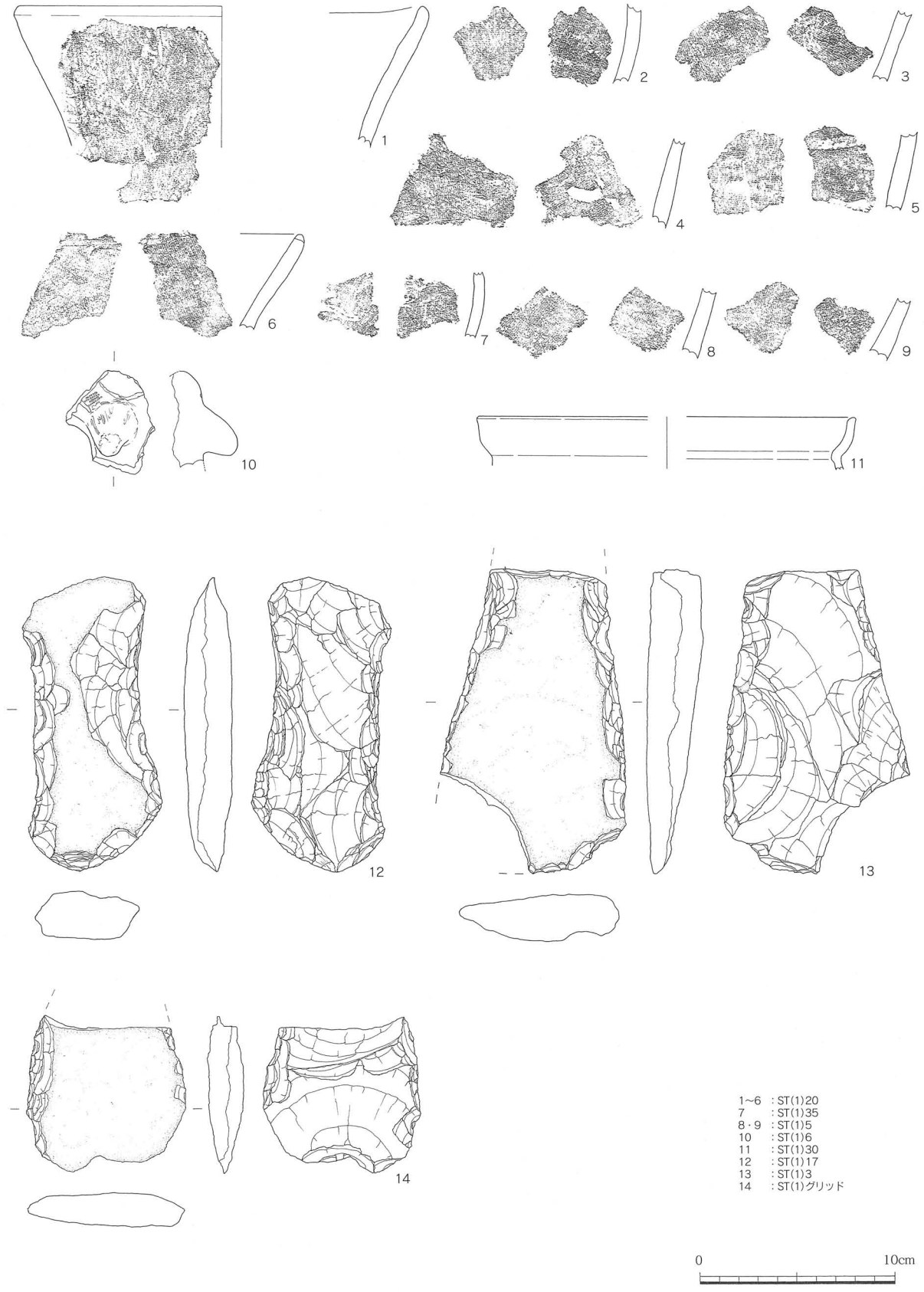
第111図　遺構実測図　溝ST(1)9・33、耕作地ST(1)8、河川ST(3)1　(1/40)



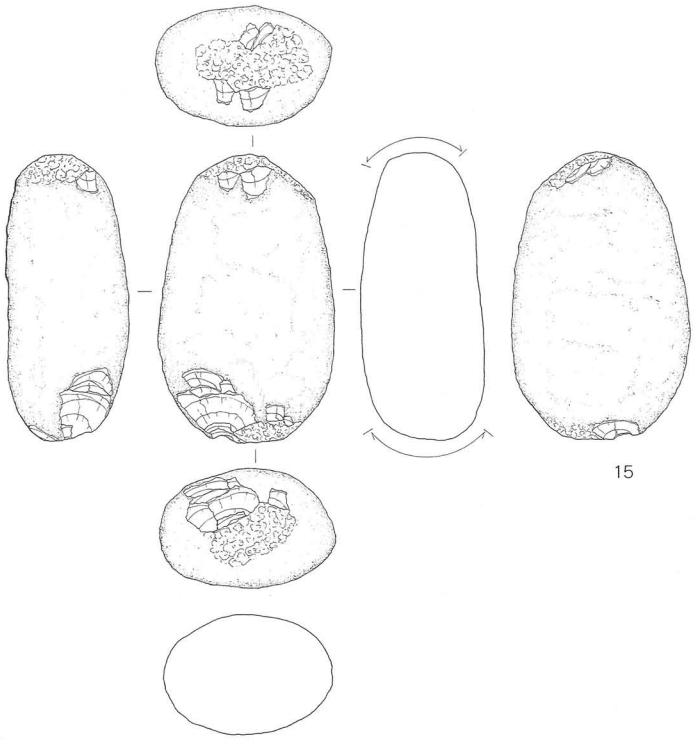
第112図　遺構実測図　耕作地ST(1)7・8・11　(1/100)

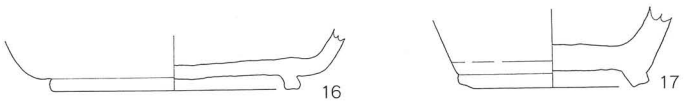


第113図　遺構実測図　ST(1)平行溝群　(1/100)



第114図　三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次）　遺物実測図(1)　(1/3)

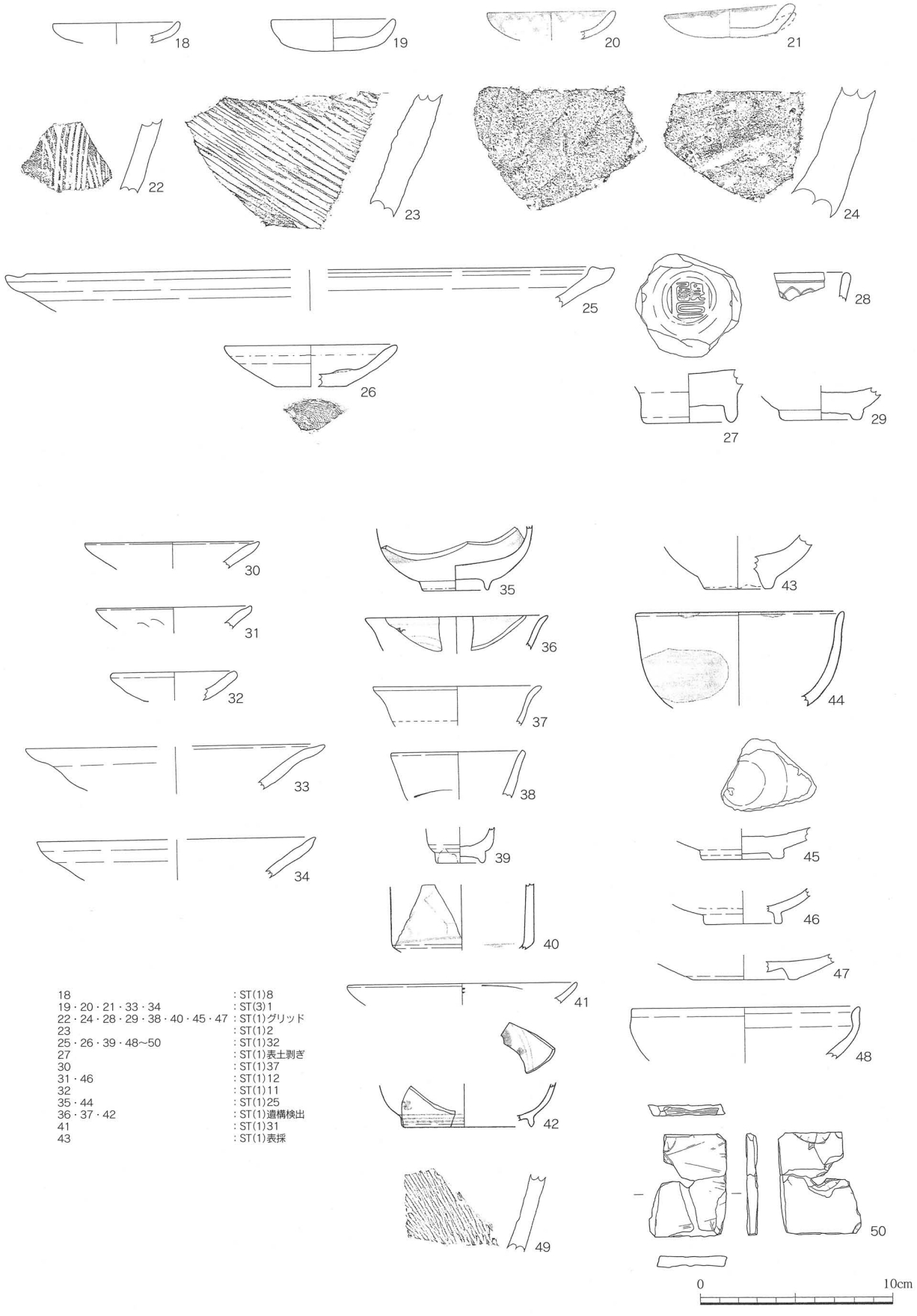




15 : ST(1)グリッド
16 : ST(1)1
17 : ST(3)1

0 10cm

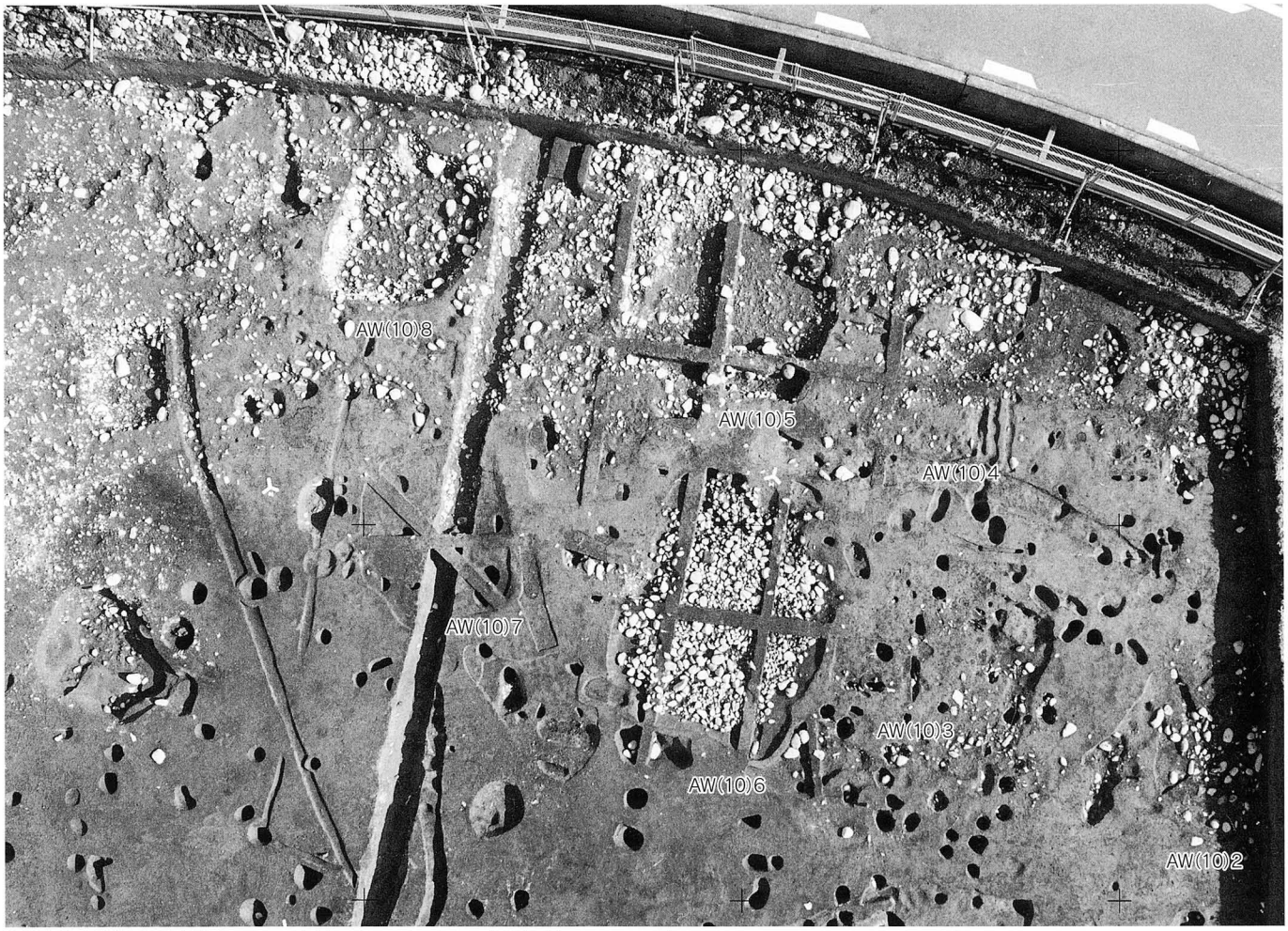
第115図　三納トヘイダゴシ遺跡（第１・３次）　遺物実測図(2)　(1/3)



18	: ST(1)8
19・20・21・33・34	: ST(3)1
22・24・28・29・38・40・45・47	: ST(1)グリッド
23	: ST(1)2
25・26・39・48~50	: ST(1)32
27	: ST(1)表土剥ぎ
30	: ST(1)37
31・46	: ST(1)12
32	: ST(1)11
35・44	: ST(1)25
36・37・42	: ST(1)遺構検出
41	: ST(1)31
43	: ST(1)表採

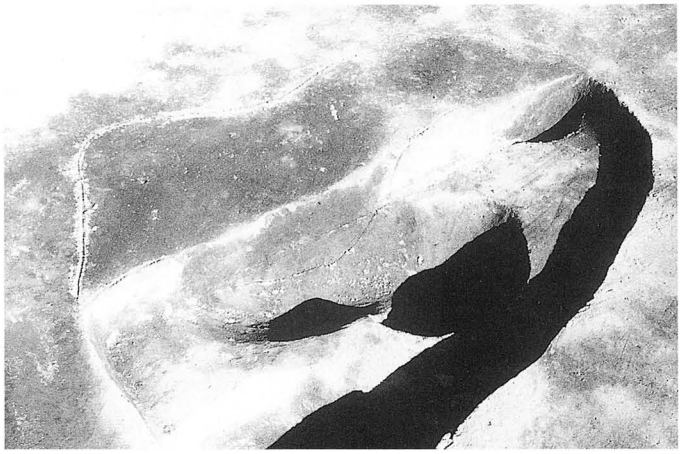
第116図　三納トヘイダゴシ遺跡(第１・３次)　遺物実測図(3)　(1/3)

竪穴建物（竪穴状遺構）AW⑽２～８　検出（南から）

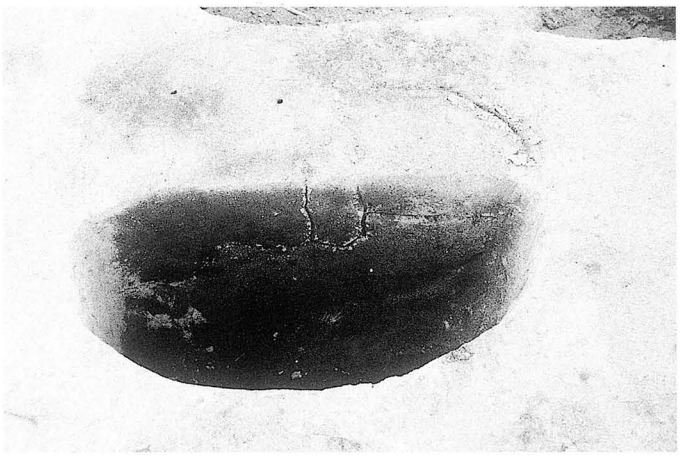


竪穴建物（竪穴状遺構）AW⑽２～８（西から）

ピットAW(10)48　断面（南から）



ピットAW(10)49　断面（南西から）



ピットAW(10)50　断面（東から）

ピットAW(10)51　断面（西から）

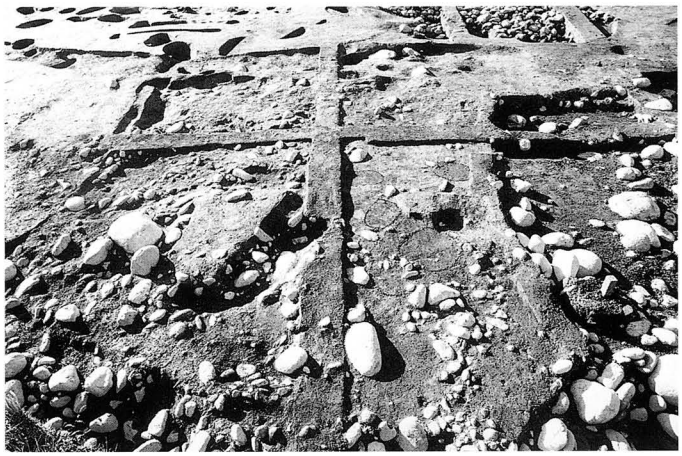
竪穴建物AW(10)２　遺物出土状況

竪穴建物AW(10)２　断面（北西から）

竪穴建物AW(10)２　完掘（北西から）

竪穴建物AW(10)３　ピット遺物出土状況（南から）

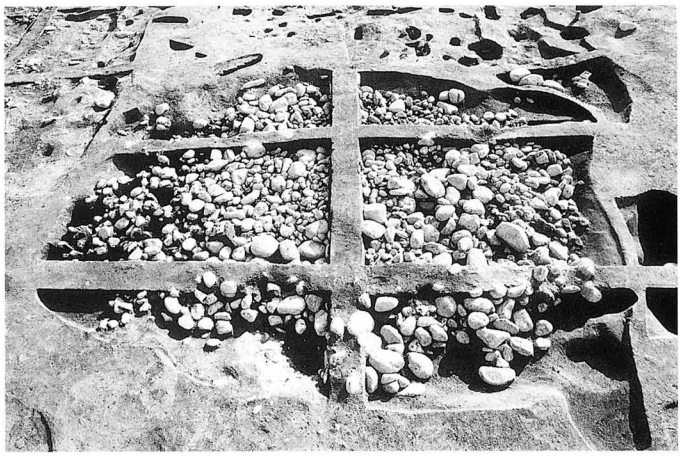
竪穴建物AW(10) 3　断面（南から）



竪穴建物AW(10) 4　断面（南から）

竪穴状遺構AW(10) 5　断面（西から）

竪穴状遺構AW(10) 5　完掘（南から）



竪穴建物AW(10) 6　礫面検出（北から）

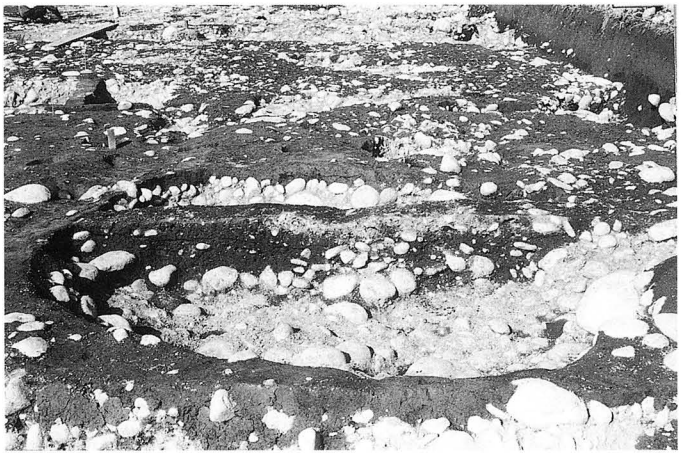
竪穴建物AW(10) 6　作業状況

竪穴建物AW(10) 6　遺物出土状況

竪穴建物AW(10) 6　断面（南から）

竪穴状遺構AW⑽ 5・6　完掘（西から）

竪穴建物AW⑽ 7　完掘（南西から）



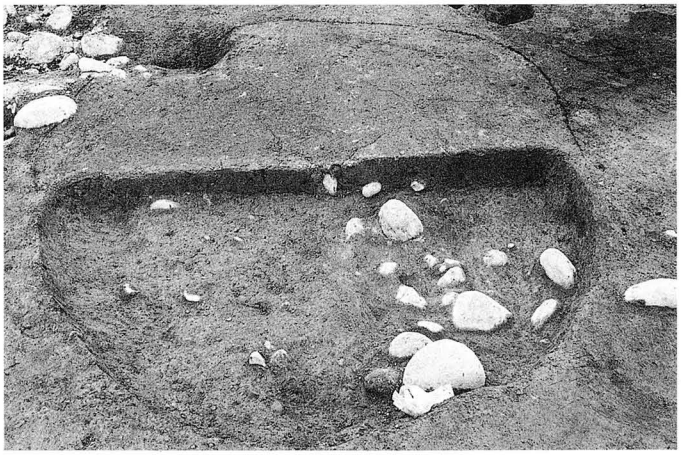
竪穴状遺構AW⑽ 8　断面（南から）

竪穴状遺構AW⑽ 8　完掘（南から）

作業状況

土坑AW⑽ 9　断面（東から）

土坑AW⑽10　断面（西から）

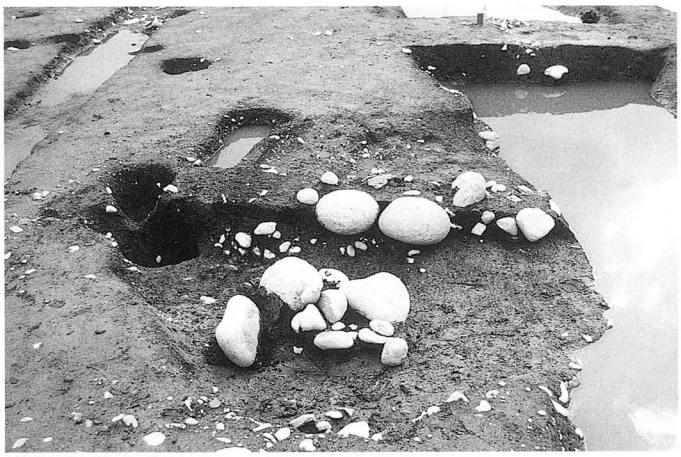


土坑AW⑽18　断面（南から）

土坑AW(10)43　断面（南から）

土坑AW(10)60　断面（南から）

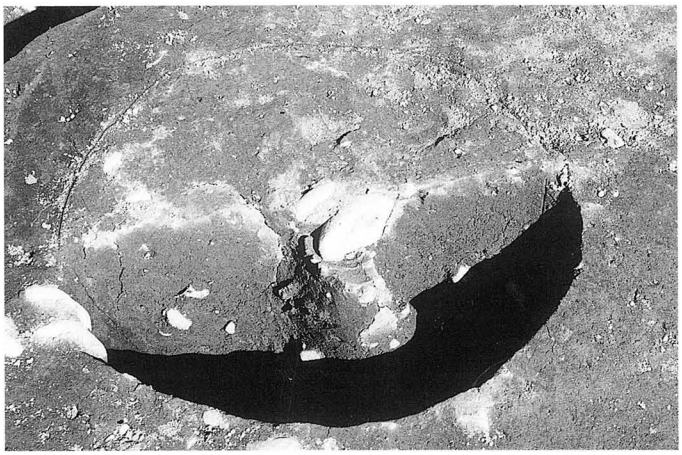
土坑AW(10)60　完掘（南から）



土坑AW(10)74　断面（北から）

土坑AW(10)74　完掘（東から）

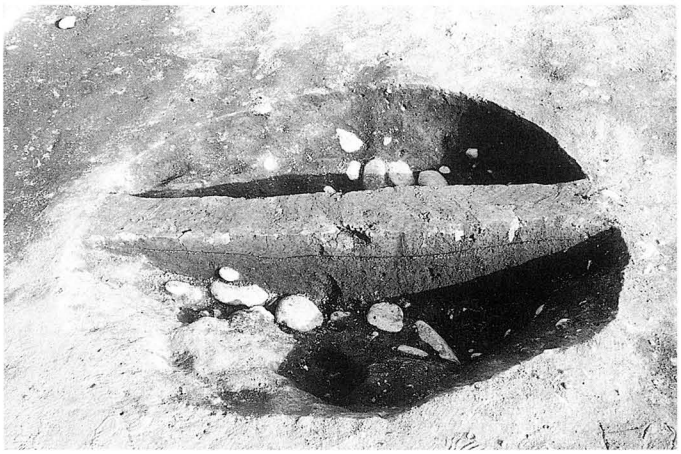
土坑AW(10)134　遺物出土状況（南から）



埋納遺構AW(10)42　遺物出土状況（南から）

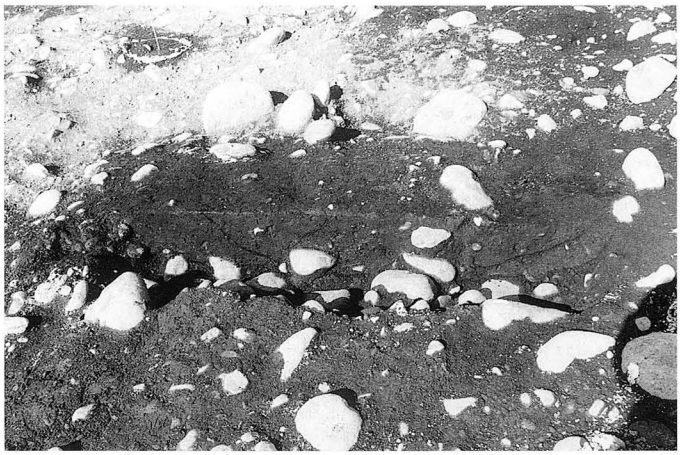
土坑AW(10)28　断面（西から）

土坑AW⑽29　断面（西から）

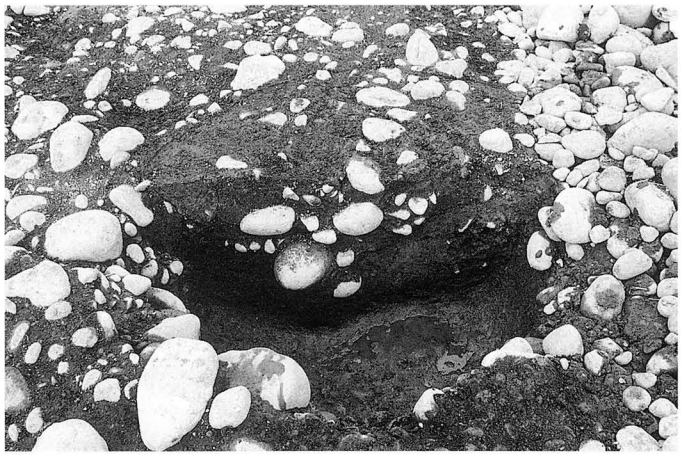


土坑AW⑽52　断面（西から）

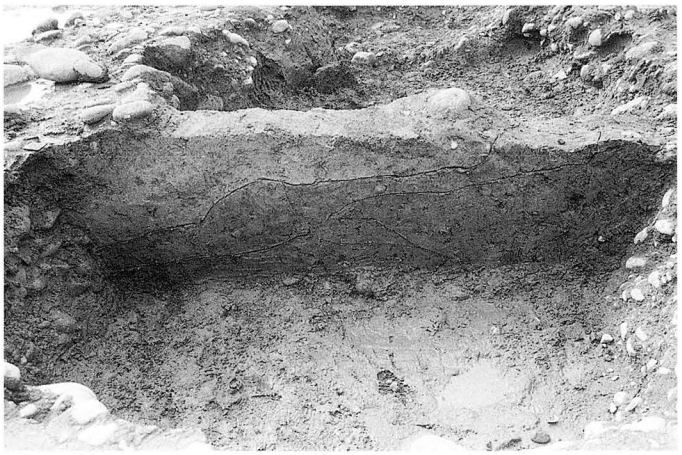
土坑AW⑽56　断面（南西から）



土坑AW⑽58　断面



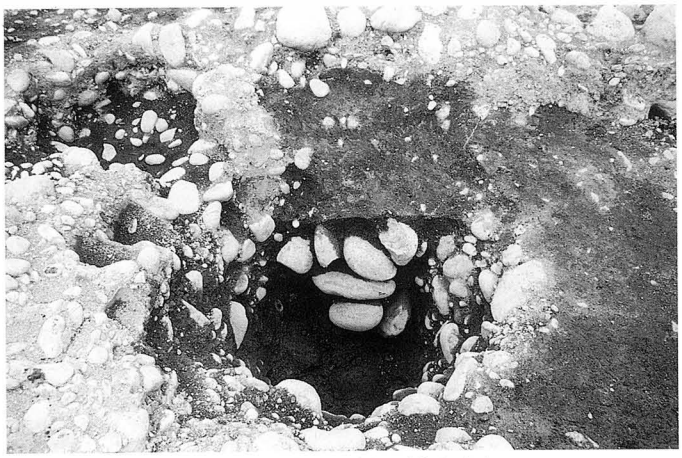
土坑AW⑽62　断面



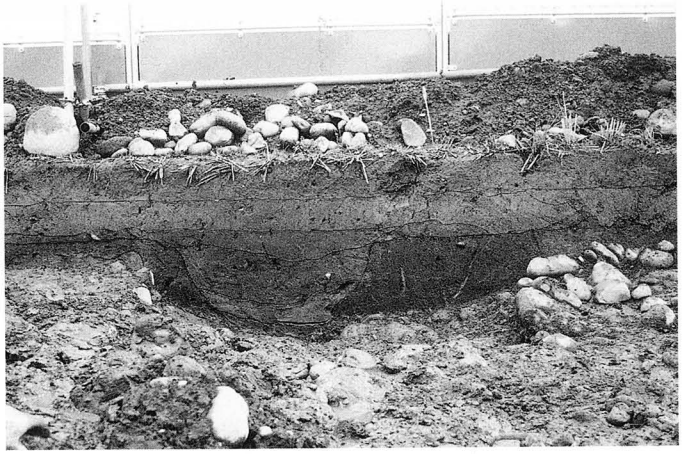
土坑AW⑽122　断面（東から）

土坑AW⑽122　遺物出土状況

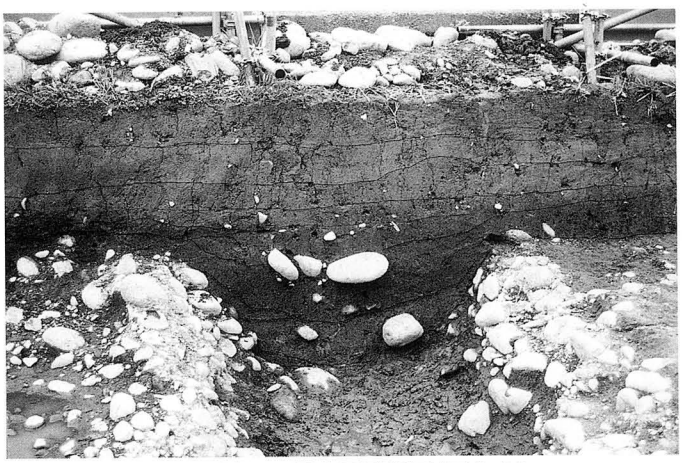
土坑AW⑽122　木枠（部分）



土坑AW⑽72　断面（南から）

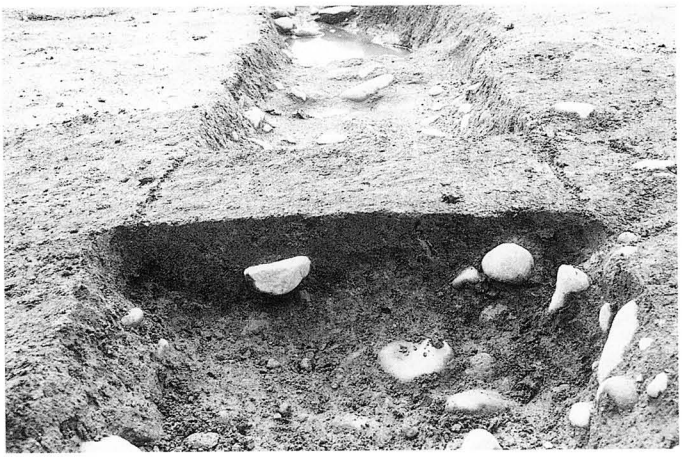


溝AW⑽24　断面（西から）



溝AW⑽25　調査区壁断面（西から）

溝AW⑽25　断面（南から）

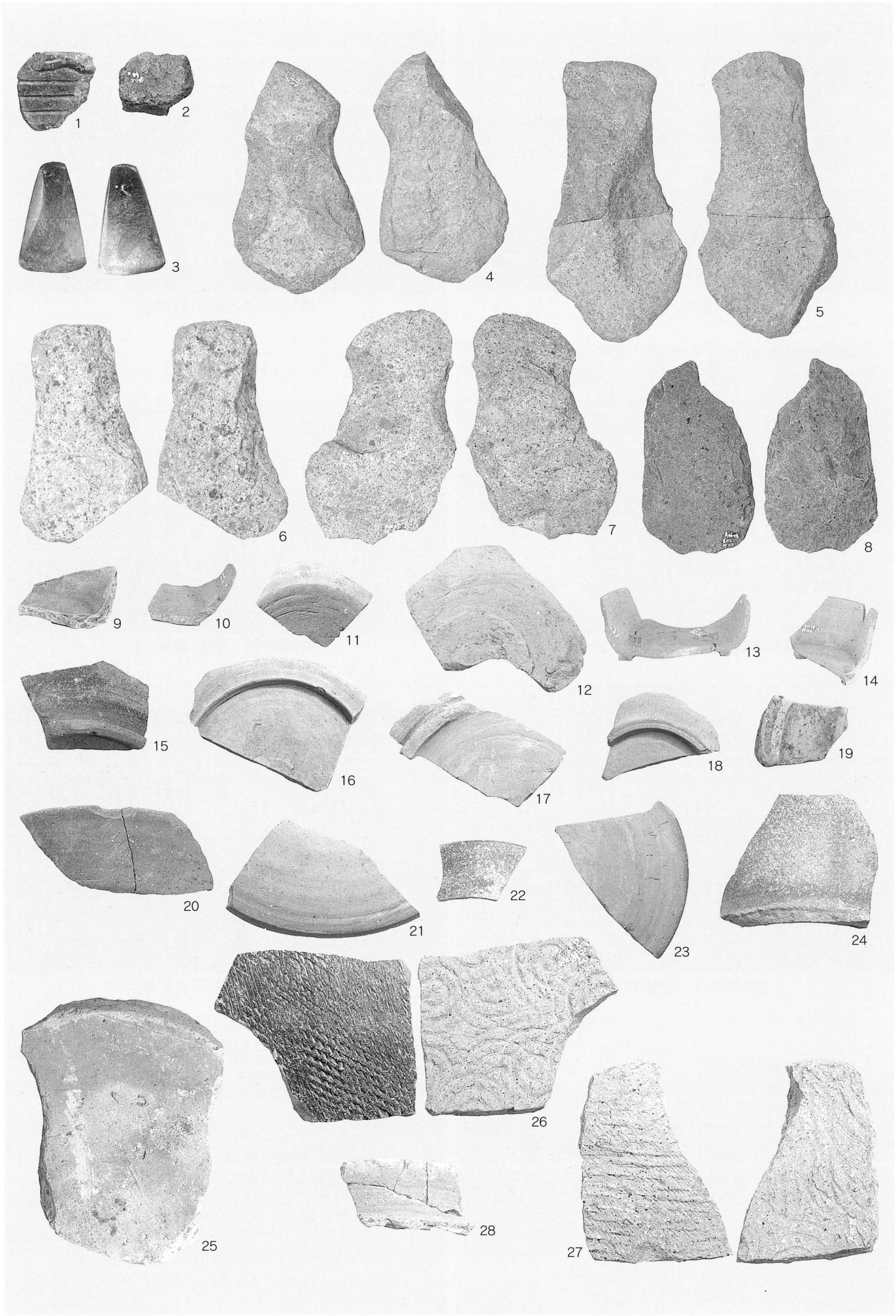


溝AW⑽61　断面（南から）

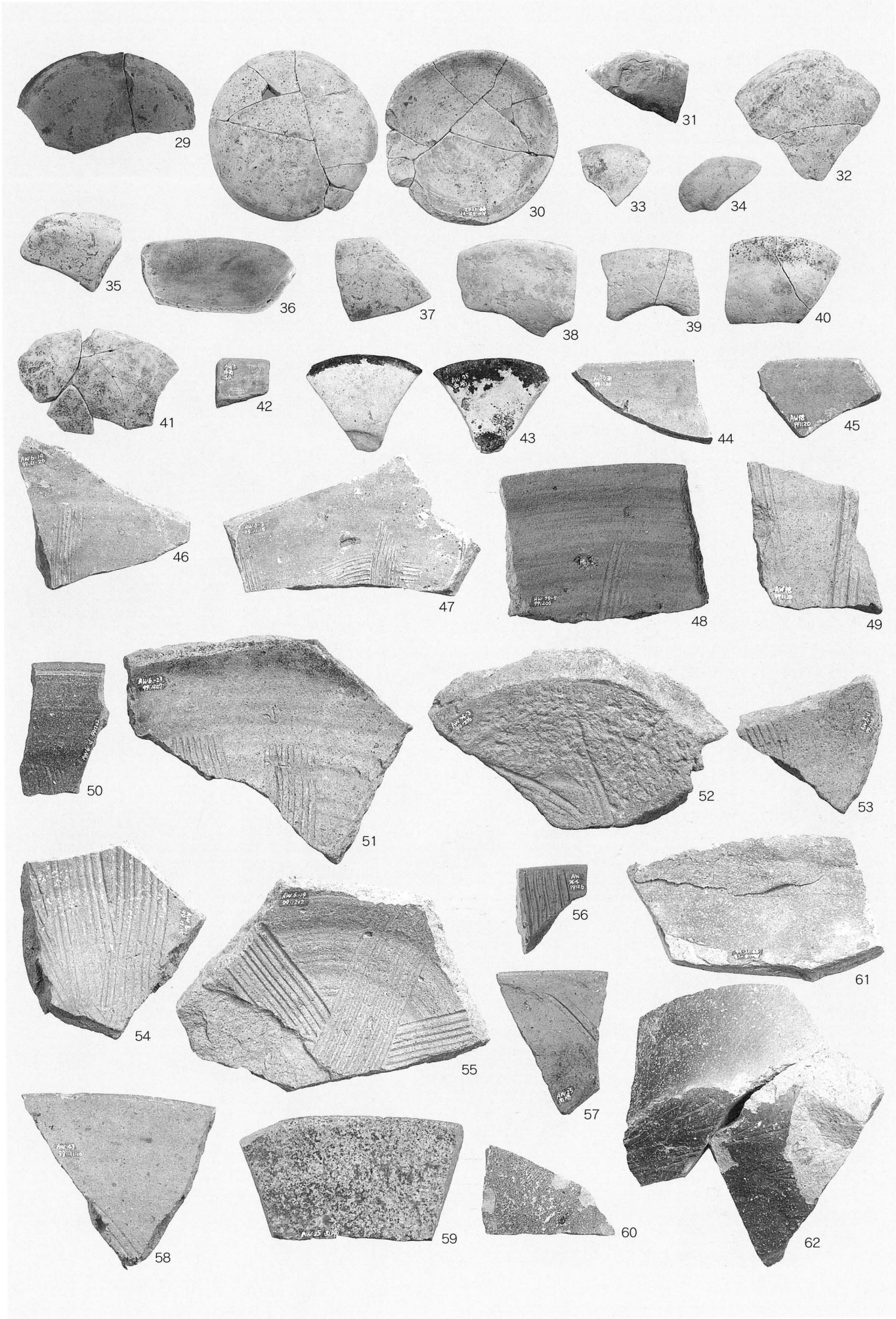
溝AW⑽61　完掘（西から）

溝AW⑽75　断面（南から）

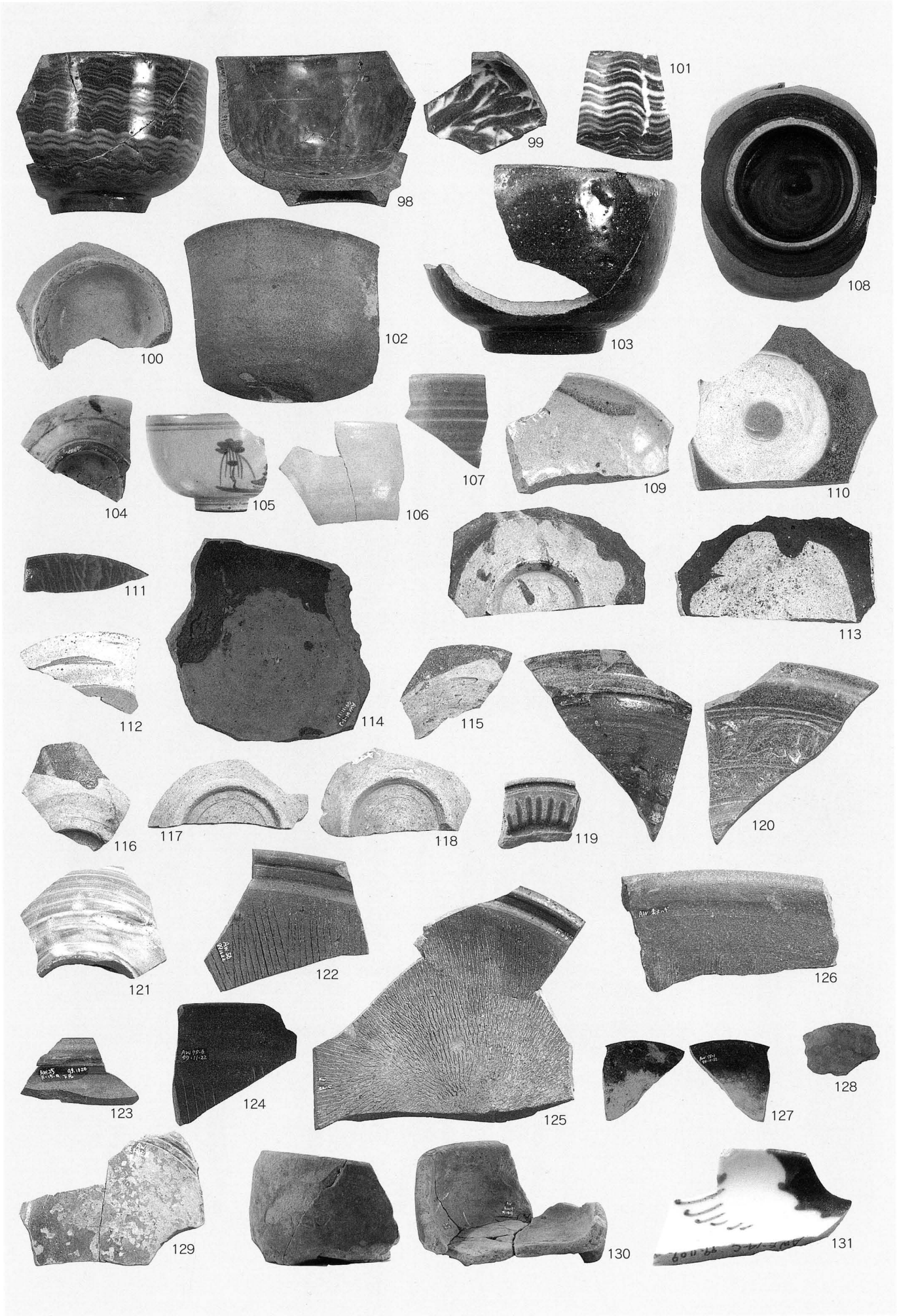
溝AW⑽25・75　完掘（南から）

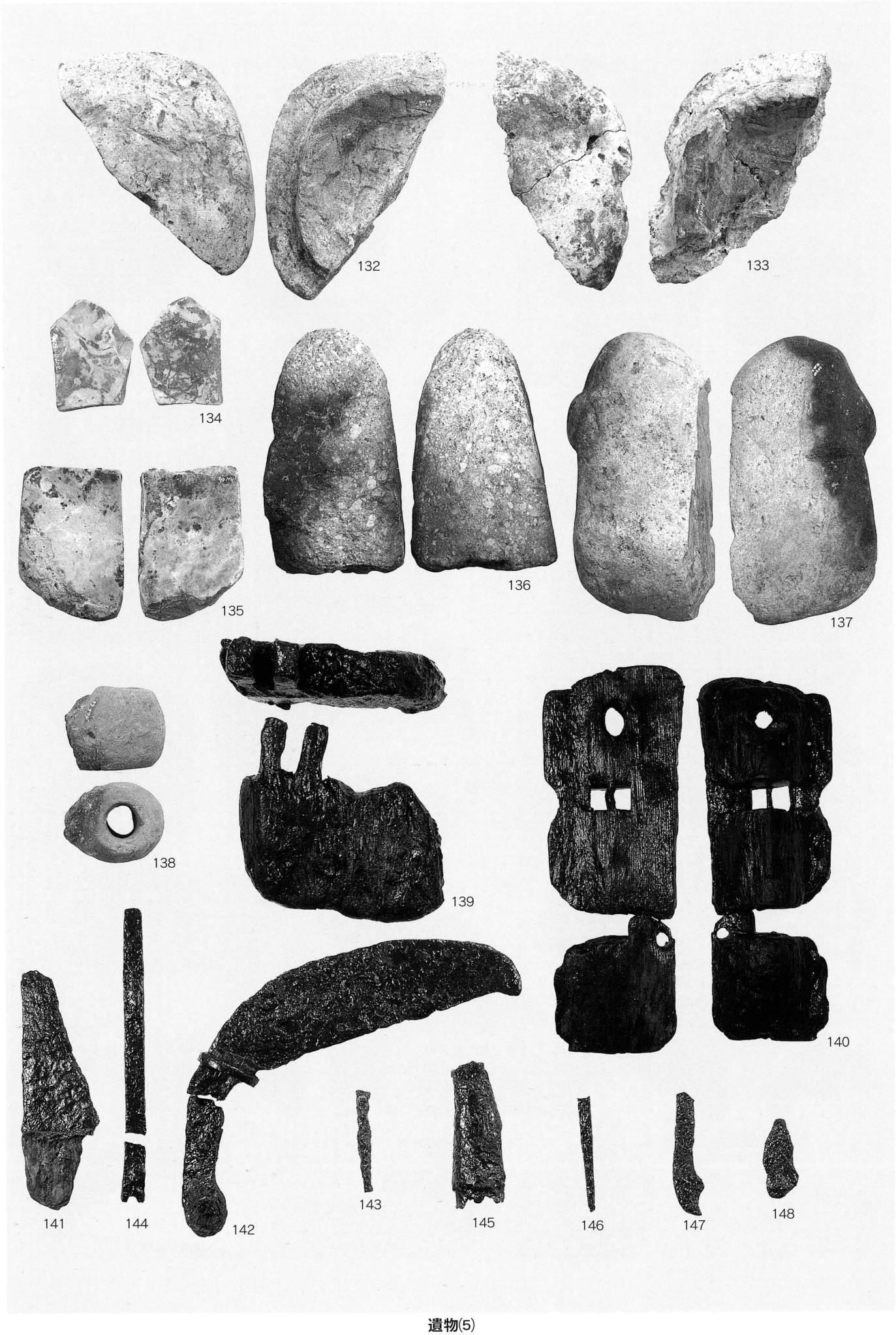


遺物(1)


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62

63
64
65
66
67
68
72
73
69
74
71
70
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97


98
99
101
103
108
100
102
104
105
106
107
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131

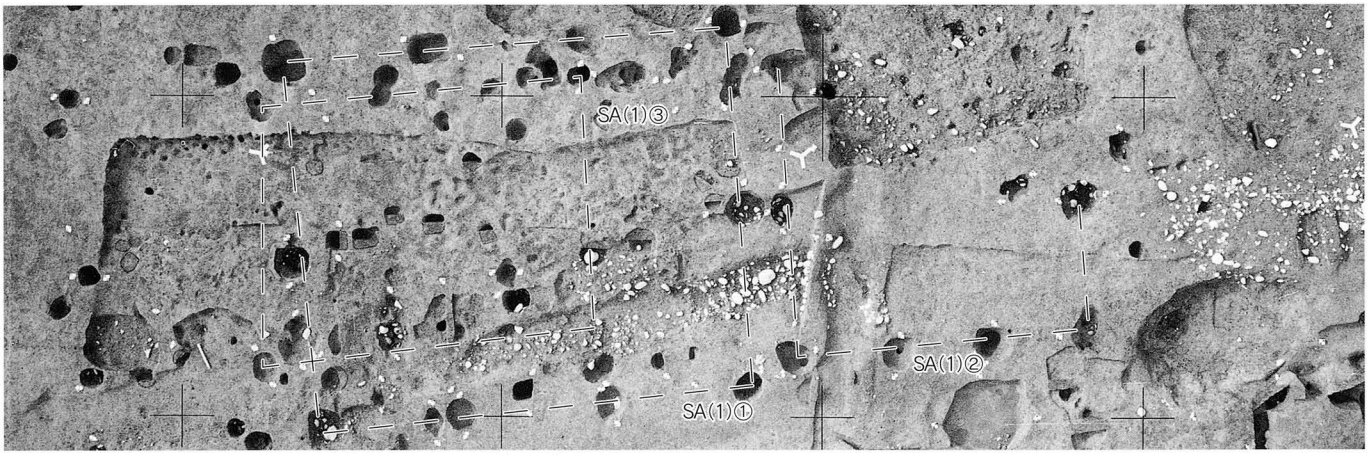

132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148

第１次調査区南半　検出(南から)

第１次調査区北半　検出(南から)

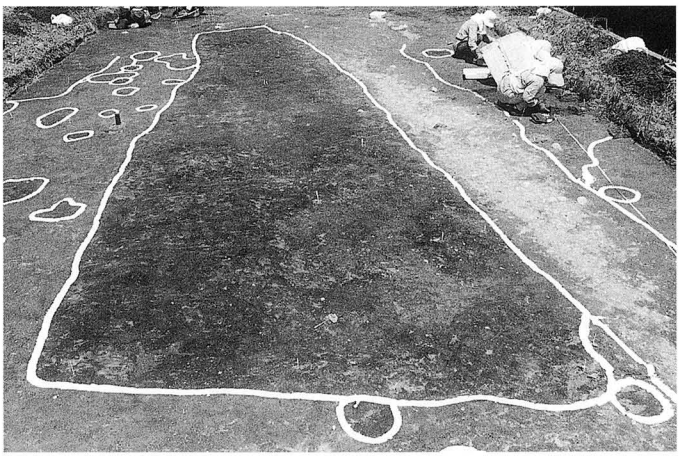
石器製作跡SA⑵325　（東から）

石器製作跡SA⑵325　遺物出土状況（東から）



掘立柱建物SA⑴①～③・竪穴建物SA⑴９・120・121　完掘（東から）

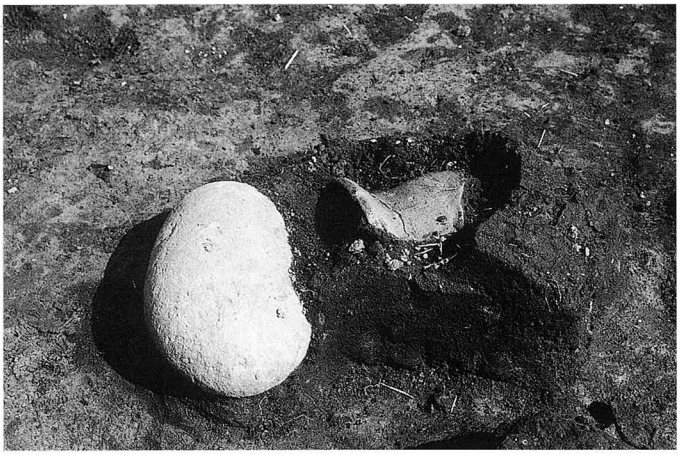
掘立柱建物SA⑴①～③　完掘（南東から）



竪穴建物SA⑴９　検出（南から）

竪穴建物SA⑴９　遺物出土状況（南から）

竪穴建物SA⑴９-Ｐ１遺物出土状況（東から）

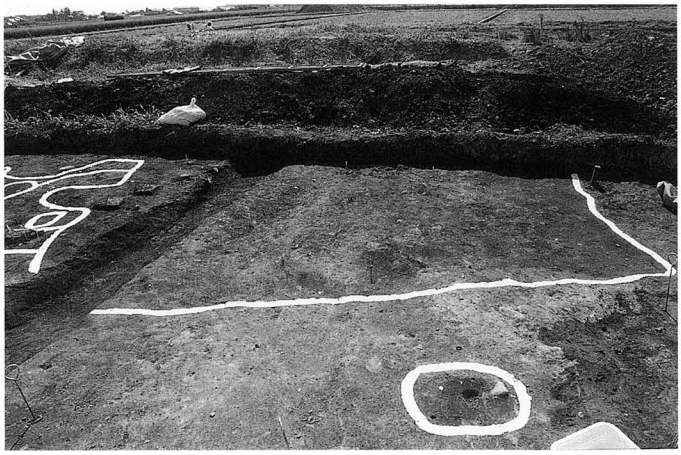


竪穴建物SA(1)９　遺物出土状況

竪穴建物SA(1)９　作業状況

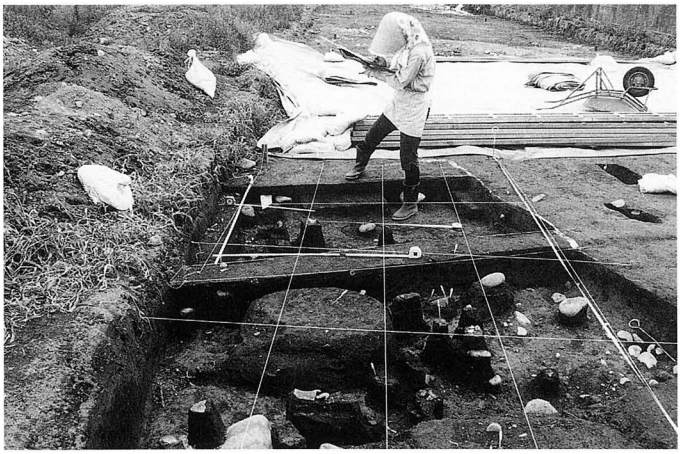
竪穴建物SA(1)９　C・D断面（南から）

竪穴建物SA(1)９　A・B断面（部分：東から）



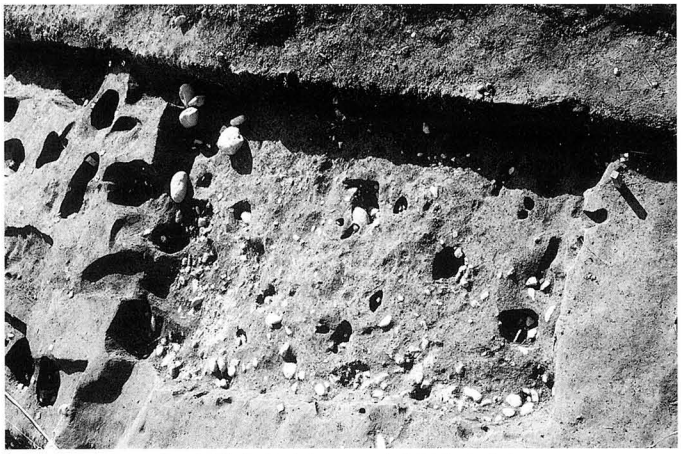
竪穴建物SA(1)120　検出（東から）

竪穴建物SA(1)120　遺物出土状況（東から）



竪穴建物SA(1)120　作業状況

竪穴建物SA(1)120　断面（東から）



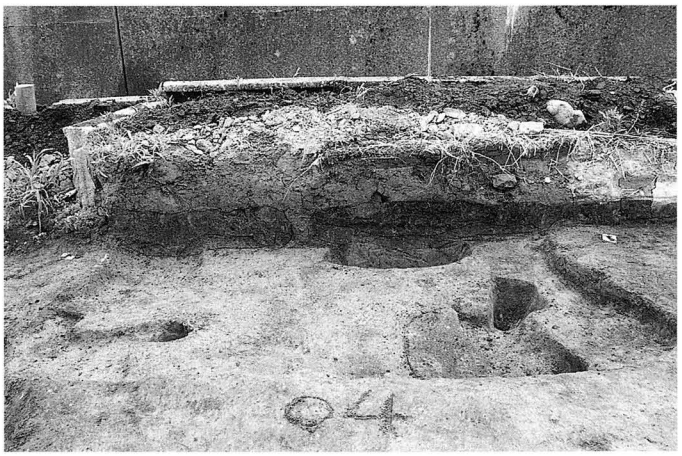
竪穴建物SA(1)120　完掘（東から）

竪穴建物SA(1)120　遺物出土状況（南から）

竪穴建物SA(1)121　断面（東から）

竪穴建物SA(1)121　完掘（北から）

土坑SA(1)４　床面検出（東から）



土坑SA(1)４　断面（東から）

土坑SA(1)132　断面（南から）

土坑SA(1)138　断面（南から）

遺物集中区SA(1)224（SA(1)131内：西から）

河川SA(1)131　東西断面(南から)

河川SA(1)131　完掘(南から)

河川SA(2)１　遺物出土状況(北から)

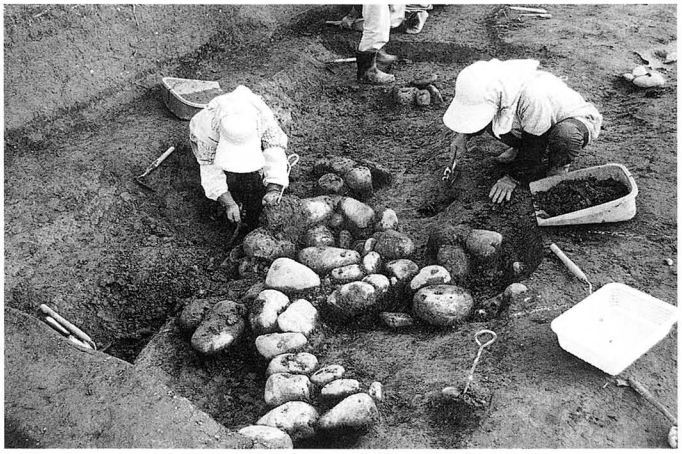
河川SA(2)１　南壁断面(北から)

河川SA(2)１　完掘(北から)

溝SA(1)２　断面(東から)

道路状遺構SA(1)２・３　完掘(南から)

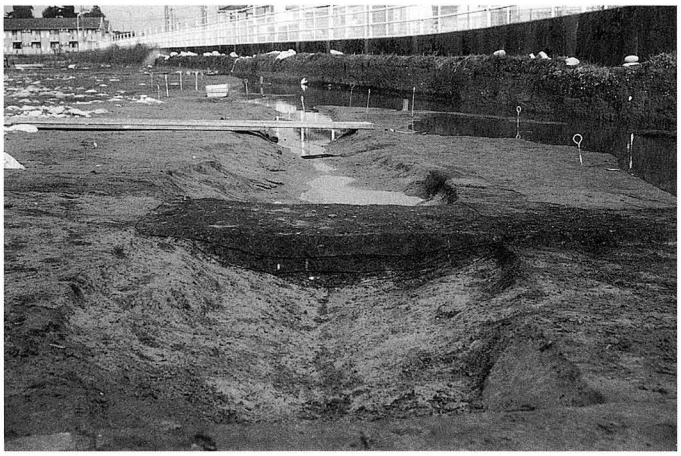
溝SA(2)119・120　検出（北から）



溝SA(2)119　石出土状況（東から）

溝SA(2)119　断面（東から）

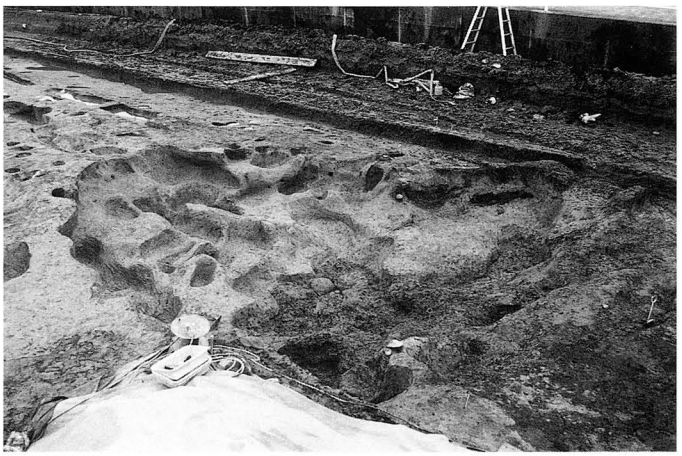
溝SA(2)119　完掘（北西から）



溝SA(2)120　断面（南から）

溝SA(2)120　完掘（南から）

利水遺構SA(2)205　東壁断面（西から）



利水遺構SA(2)205　完掘（南西から）

溝SA(1) 6　断面(南から)

水田SA(1)250　(北から)

用水SA(1)251　断面(南から)

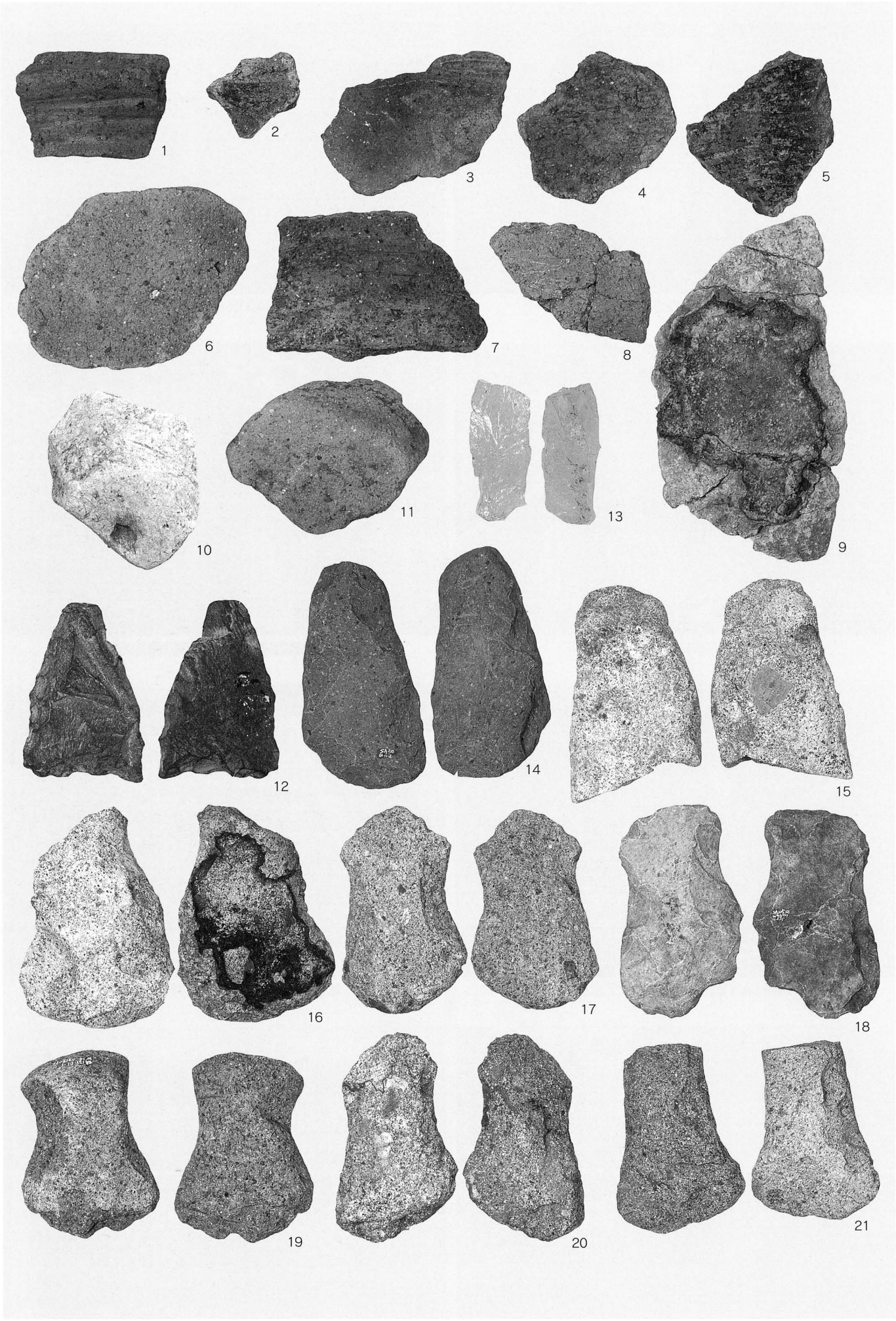
取水施設SA(1)226　断面(南から)

取水施設SA(1)226　遺物出土状況(南から)

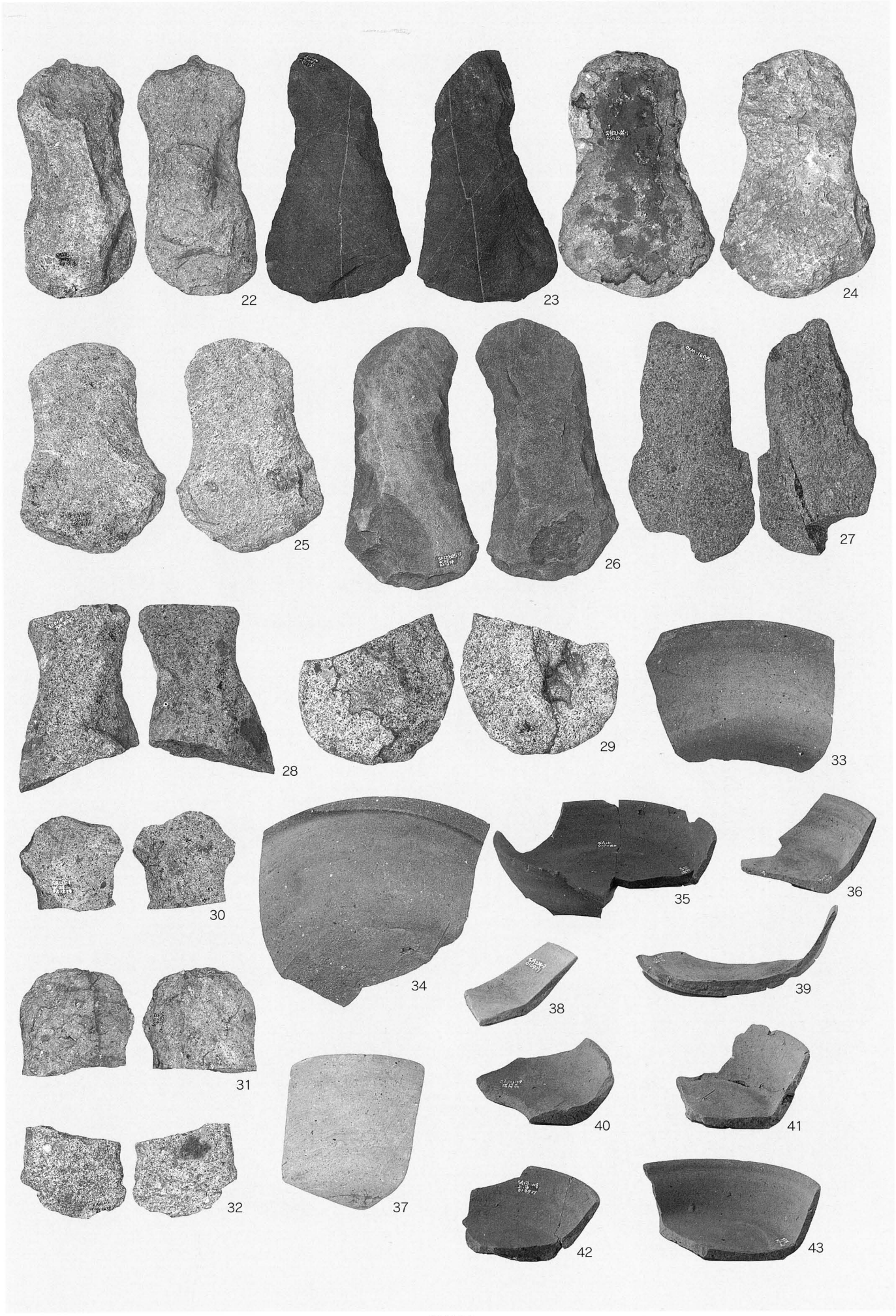
取水施設SA(1)226　完掘(北から)

SA(2)T～V22～23グリッド　完掘(東から)

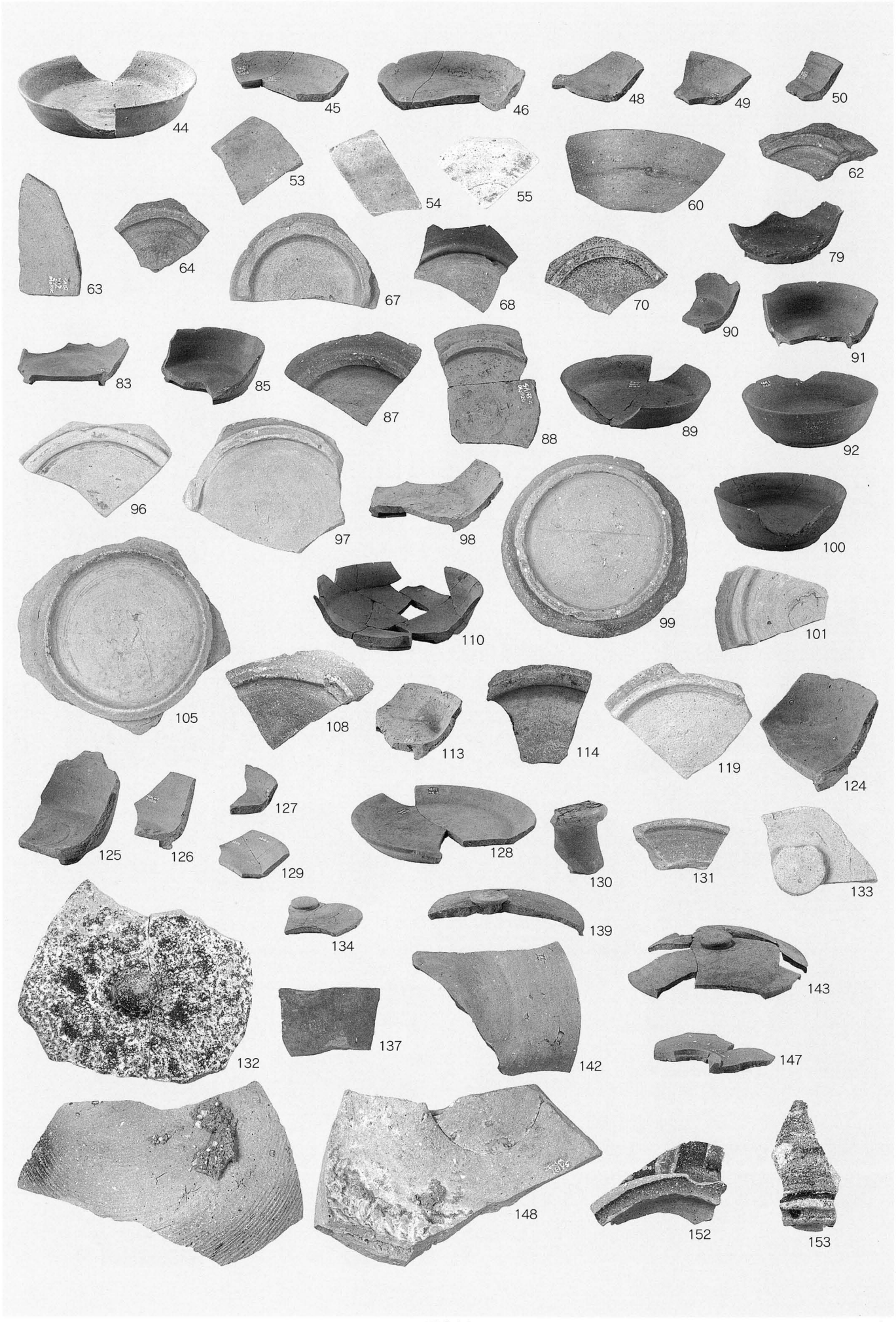
SA(2)W16～21グリッド　完掘(南東から)



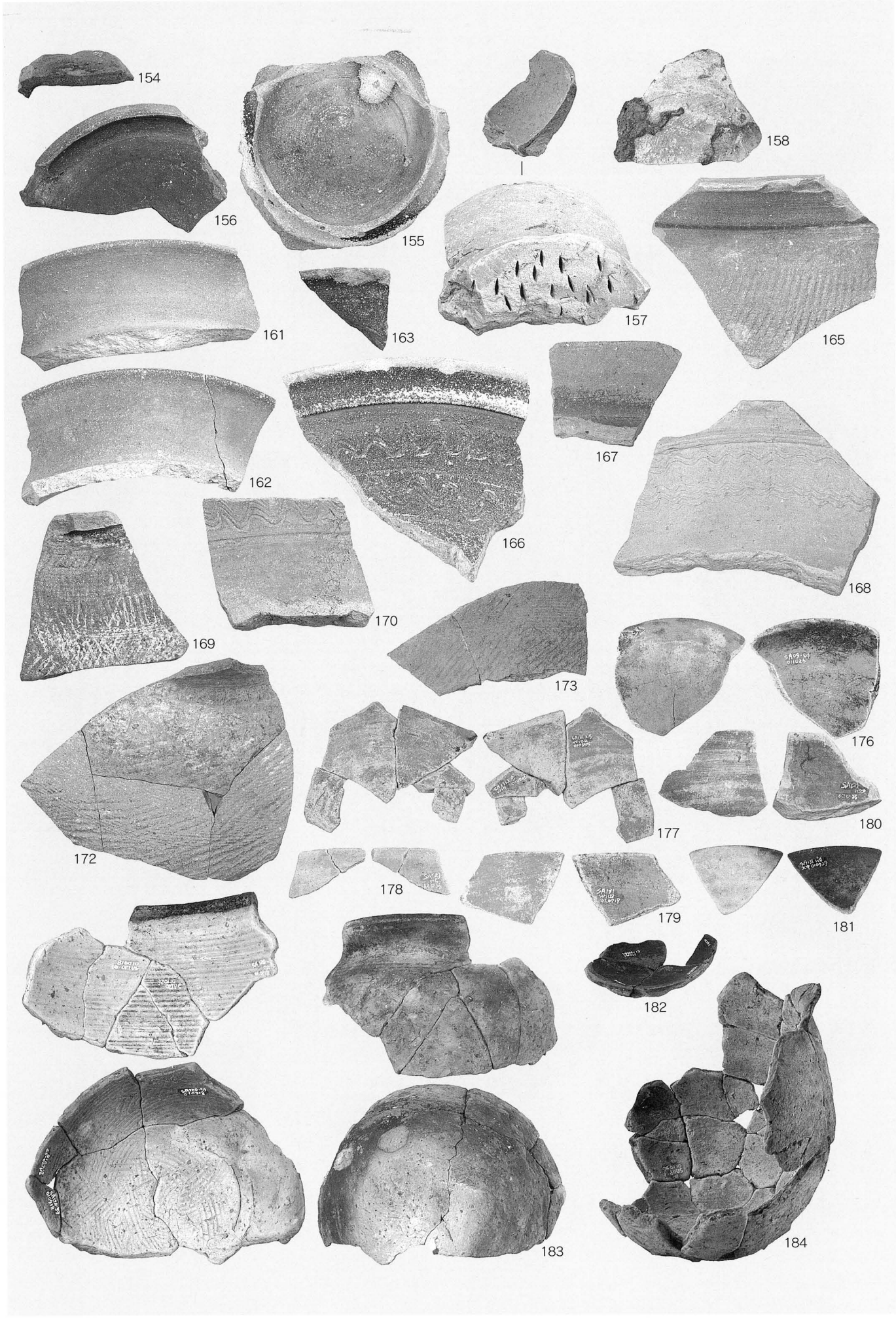
遺物(1)



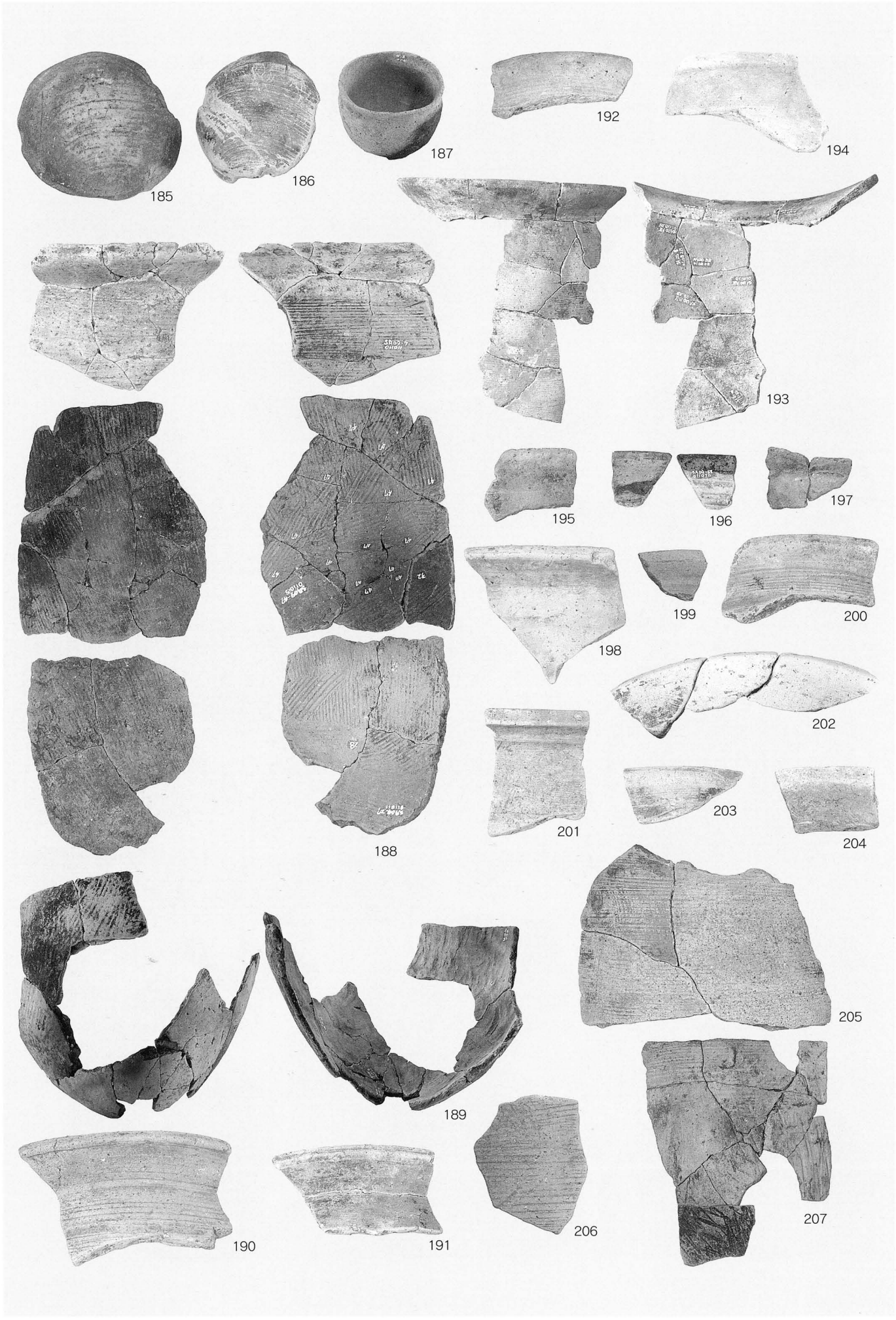
遺物(2)

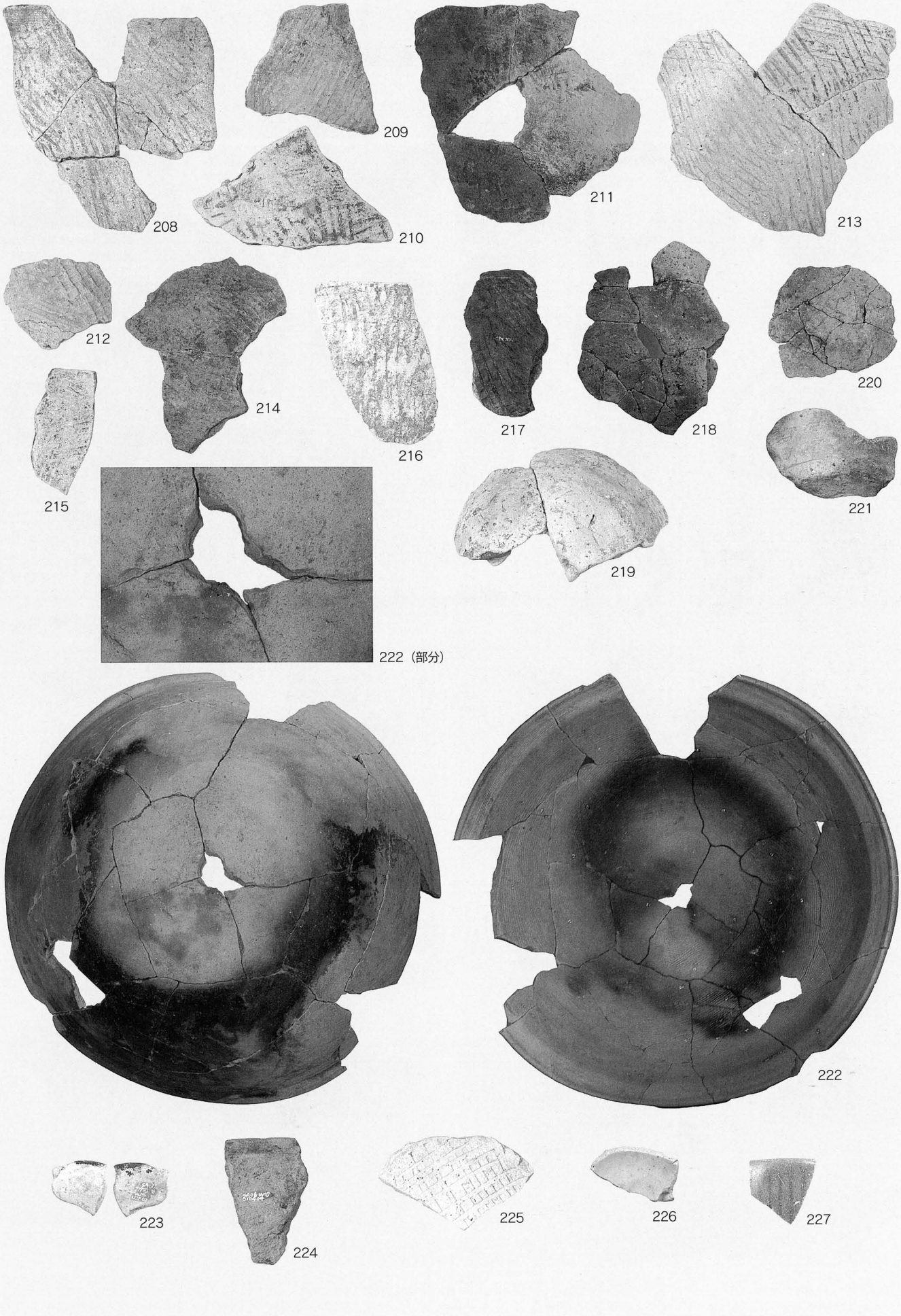

44
45
46
48
49
50
53
54
55
60
62
63
64
67
68
70
79
83
85
87
88
89
90
91
92
96
97
98
99
100
101
105
108
110
113
114
119
124
125
126
127
128
129
130
131
133
132
134
137
139
142
143
147
148
152
153

遺物(3)

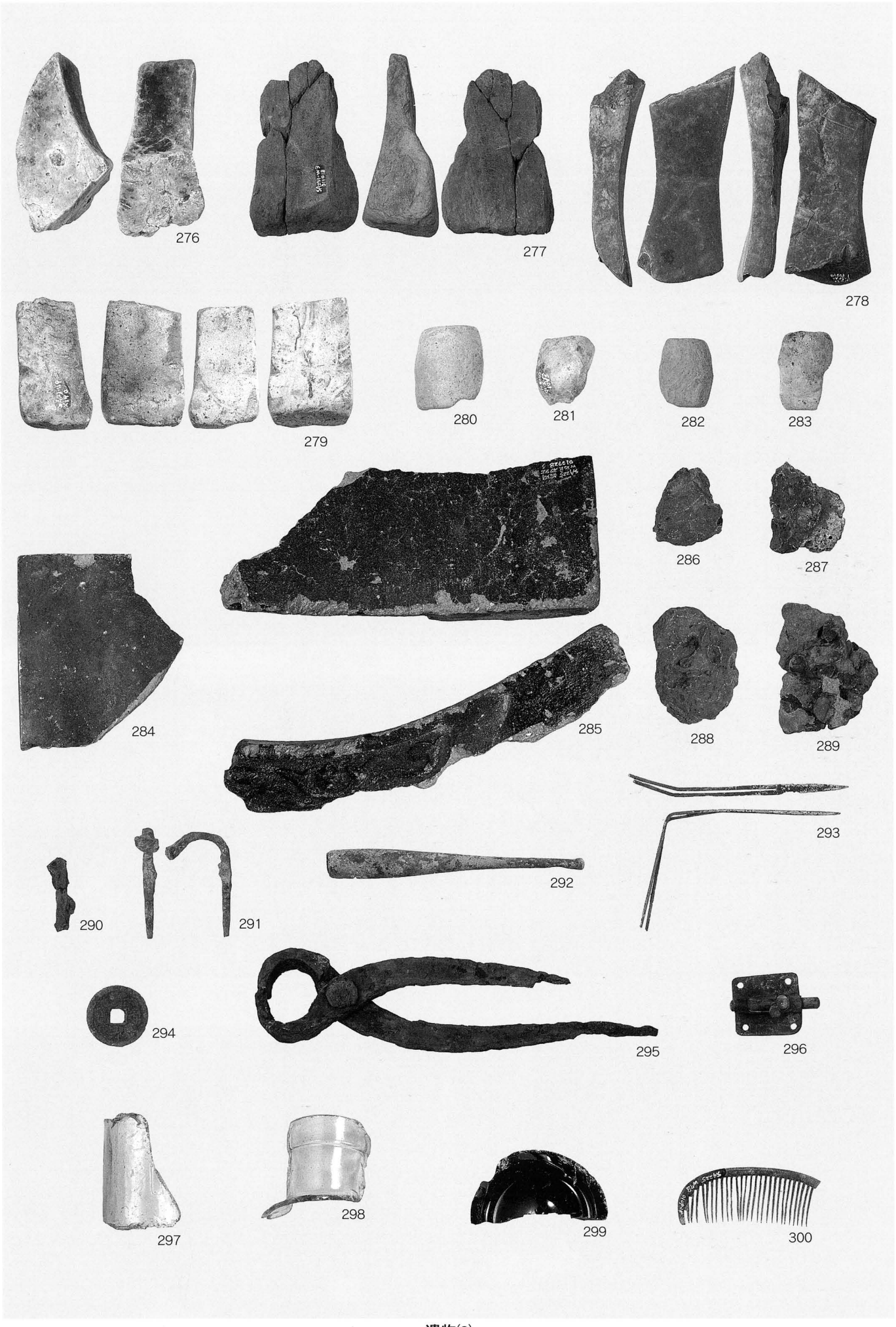

154
156
155
158
161
163
157
165
162
167
166
168
169
170
173
172
176
177
180
178
179
181
182
183
184

遺物(4)


185
186
187
192
194
193
195
196
197
198
199
200
188
201
202
203
204
205
189
190
191
206
207


208
209
210
211
213
212
214
216
217
218
220
215
219
221
222（部分）
222
223
224
225
226
227

228
230
231
232
233
229
235
236
237
238
239
240
241
242
234
244
245
248
247
243
246
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
270
271
272
268
269
273
274
275

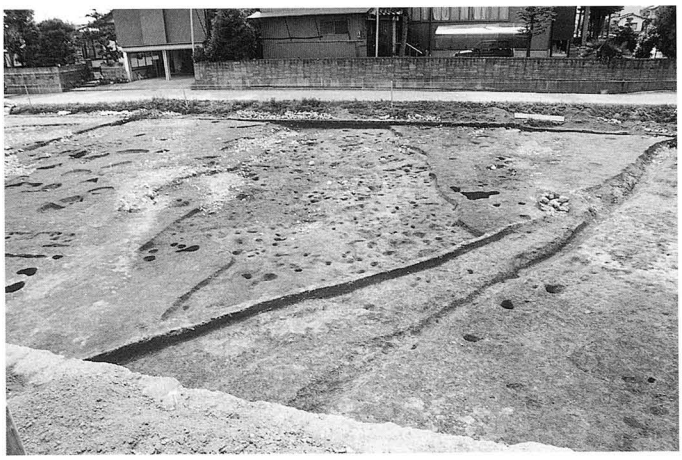

276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300

遺物(8)

第１次調査区Ｘ７～９グリッド　検出（北から）

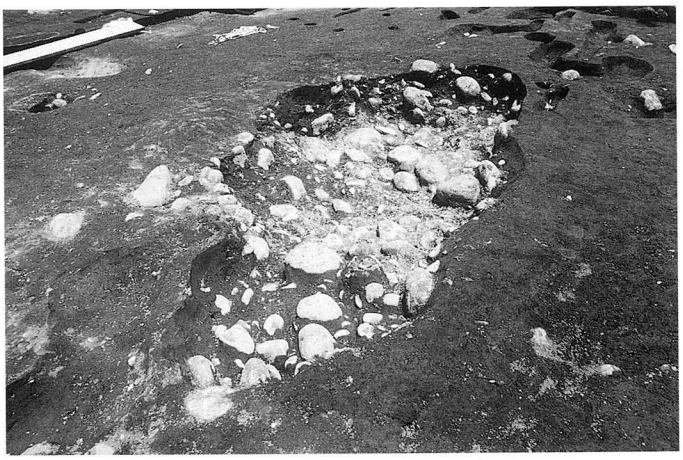
第３次調査区　完掘（南から）

河川ST(1)１　断面（北東から）



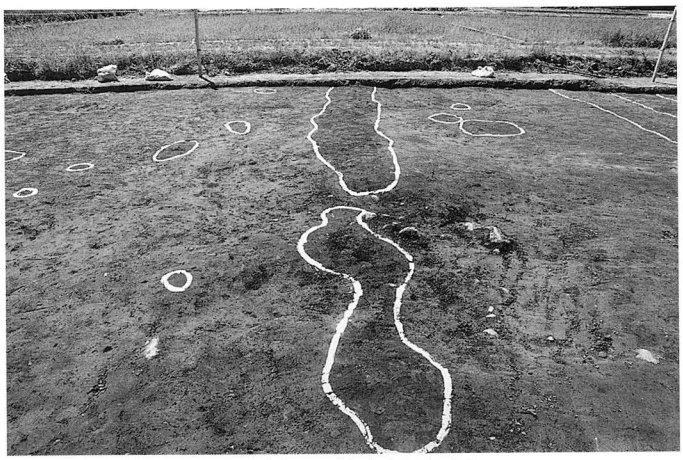
流路ST(1)30　完掘（東から）

土坑ST(1)６　遺物出土状況（西から）



土坑ST(1)６　完掘（西から）

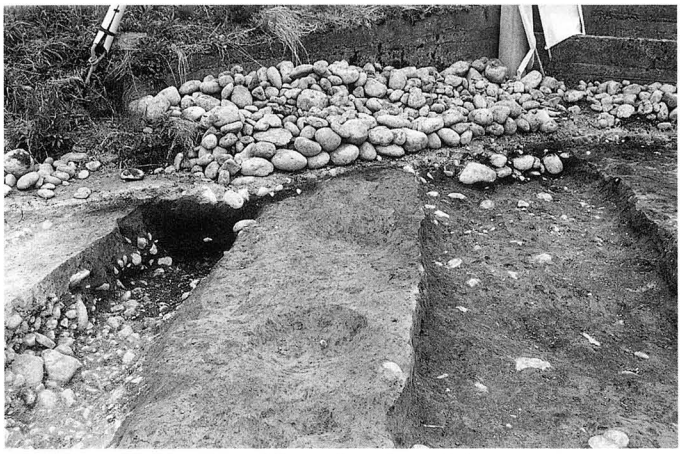
ST(1)倒木跡群（南東から）



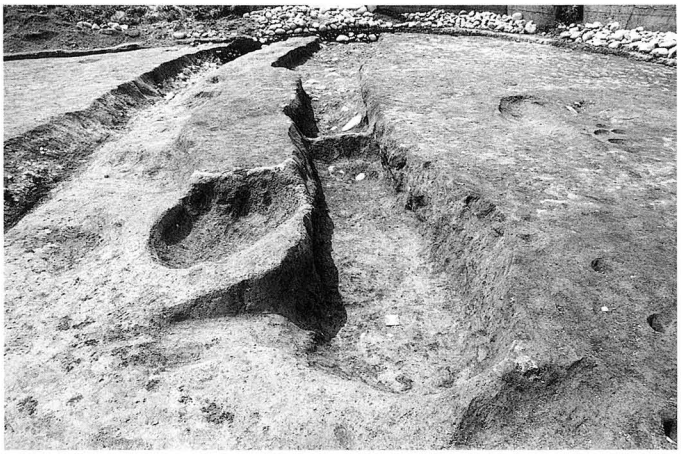
溝ST(1)９　検出（東から）

溝ST(1)９　断面（東から）

溝ST(1)33　作業状況

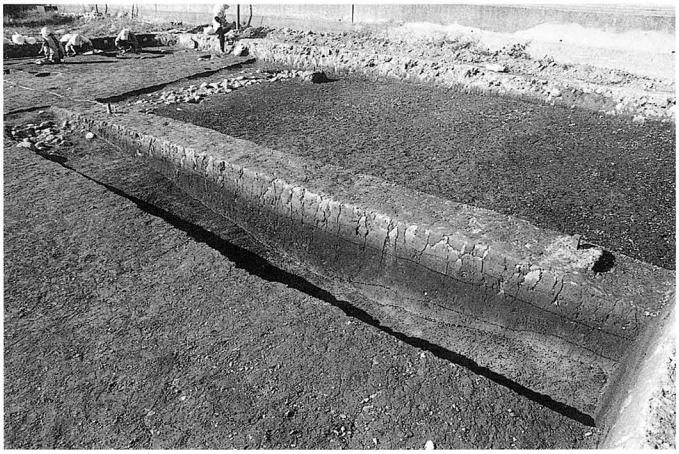


溝ST(1)33　断面（西から）



溝ST(1)33　完掘（東から）

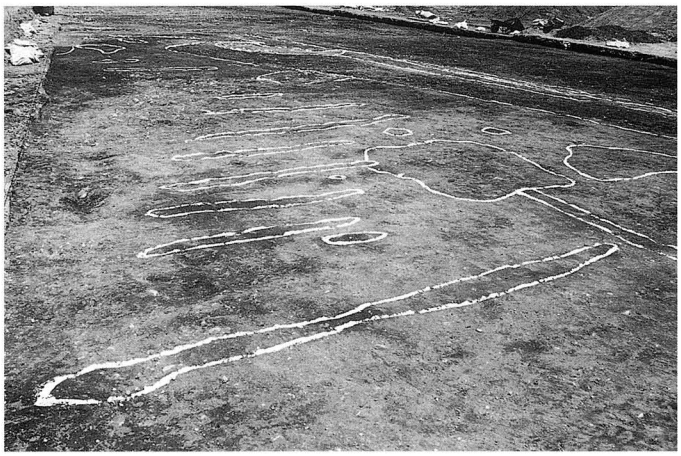
河川ST(3)１　検出（北から）



河川ST(3)１　断面（南から）

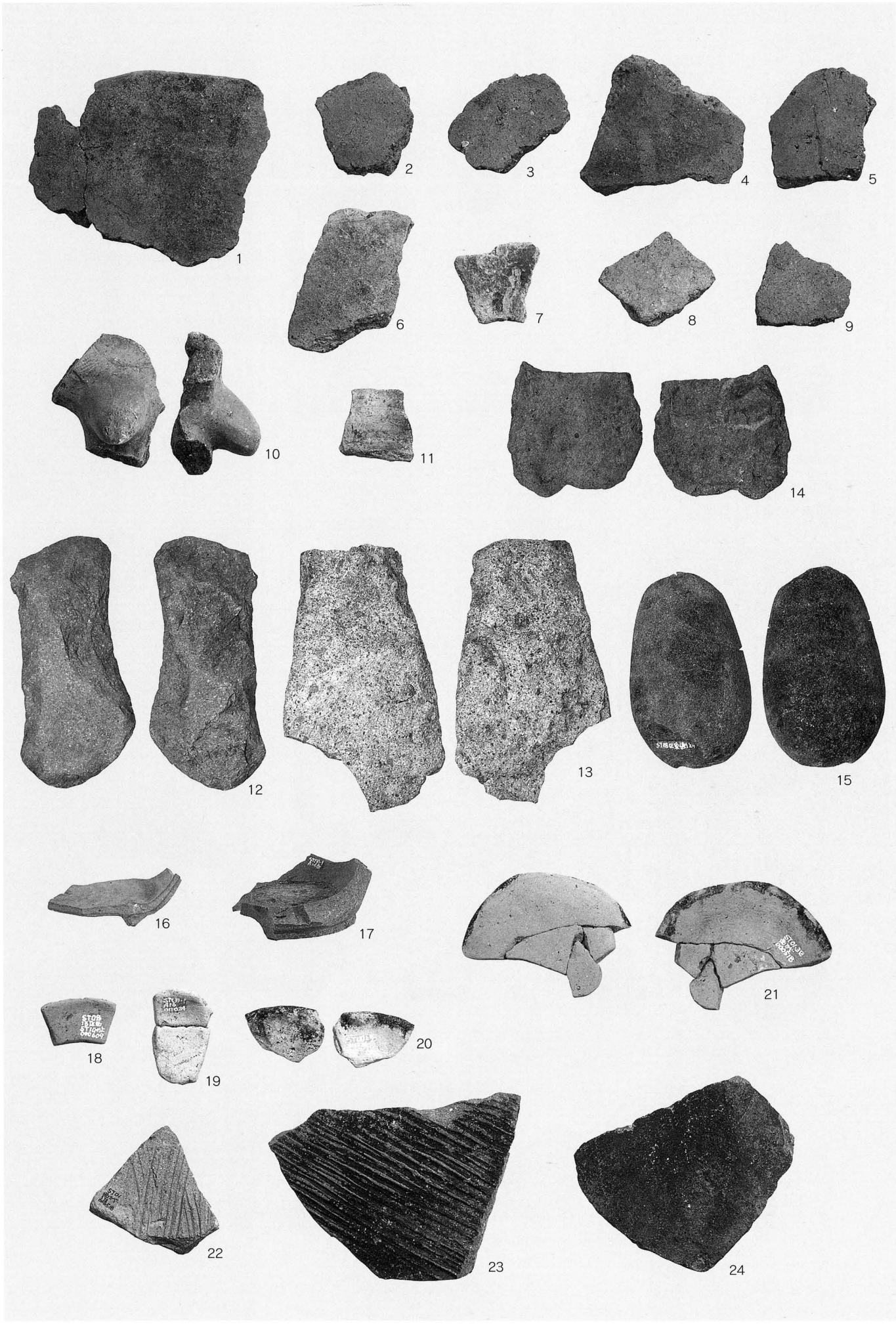
水田ST(1)７・８　検出（北から）

水田ST(1)８　掘り下げ（北から）

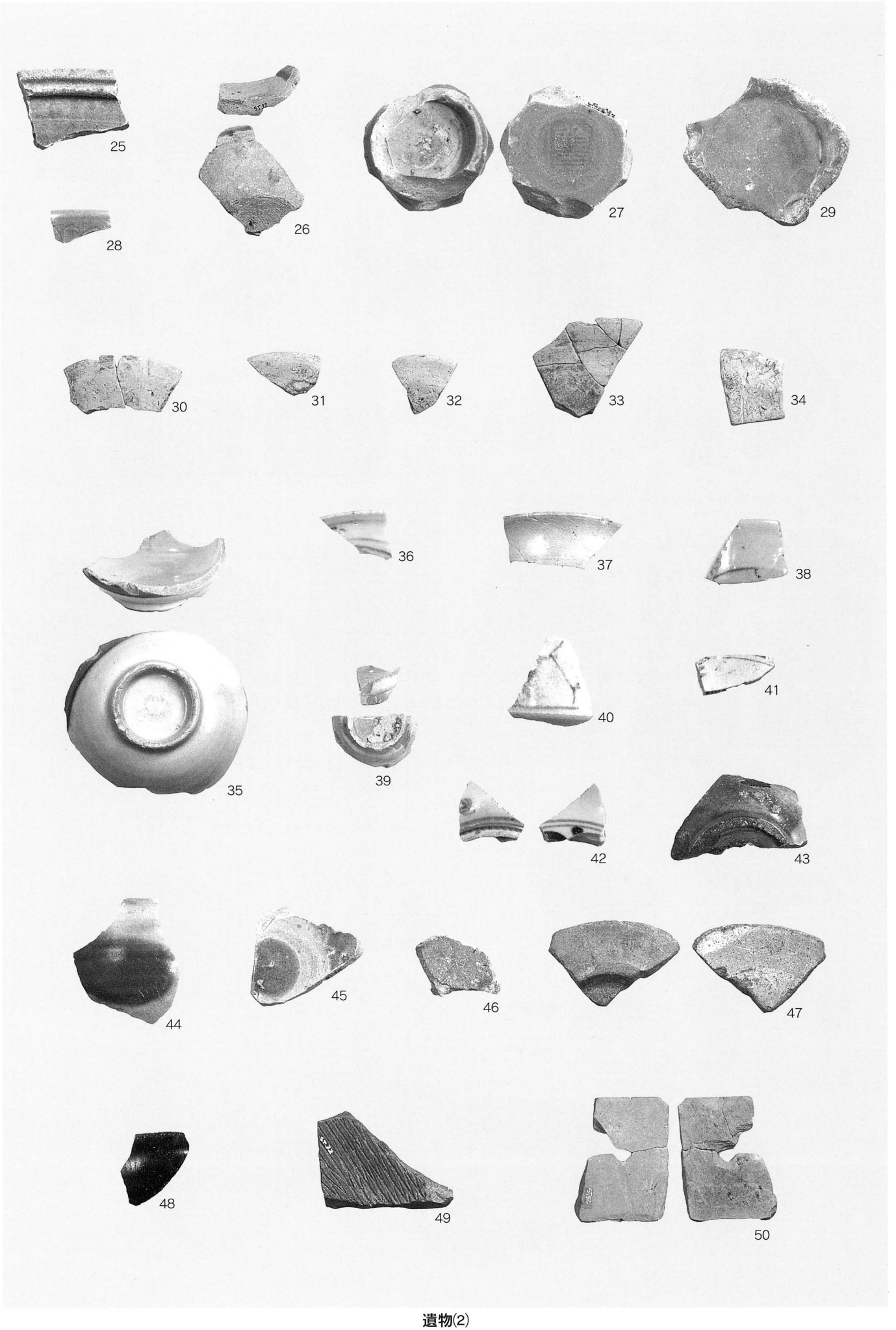


ST(1)平行溝群①（北から）

ST(1)平行溝群③（北から）



遺物(1)


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

報告書抄録

ふりがな	あわだいせき　さんのうあらみやいせき　さんのうとへいだごしいせき
書名	粟田遺跡　三納アラミヤ遺跡　三納トヘイダゴシ遺跡
副書名	野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	布尾　幸恵
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921-8510　石川県石川郡野々市町三納18街区1　　Tel：076－227－6122
発行機関	野々市町中南部土地区画整理組合・野々市町教育委員会
発行年月日	西暦　2006年3月30日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
粟田遺跡（アワダ）	野々市町（ノノイチマチ）粟田（アワダ）	17344	16008	36°30′30″	136°36′40″	19990927～20000114	2400	区画整理
三納アラミヤ遺跡（サンノウ）	野々市町（ノノイチマチ）字三納（アザサンノウ）	17344		36°30′50″	136°36′50″	20010709～20011116	1150	区画整理
						20020920～20021226	1800	
三納トヘイダゴシ遺跡（サンノウ）	野々市町（ノノイチマチ）字三納（アザサンノウ）	17344		36°30′45″	136°36′40″	20000509～20000803	3400	区画整理
						20010709～20011116	550	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
粟田遺跡	集落跡	縄文、古代、中世、近世	ピット、土坑、溝、竪穴建物	土器、石器、陶磁器	
三納アラミヤ遺跡	集落跡	縄文、古代	ピット、土坑、溝、掘立柱建物、竪穴建物	土器、石器、陶磁器	
三納トヘイダゴシ遺跡	集落跡	縄文、古代、中世	土坑、耕作地、河跡	土器、石器、陶磁器	土偶

要約

粟田遺跡では縄文時代晩期の短期的活動地点、古代の耕作地、中近世の集落跡などを確認した。中世集落は竪穴状遺構群により形成されている。近世集落は矩形に折れ曲がる溝が検出されており、溝の内部に居住施設が存在していたものと推測される。その遺物組成は肥前陶磁器を主として越前・越中瀬戸・瀬戸美濃・在地の陶磁器からなり、加賀地域の農村部の様相を知る貴重な資料である。

三納アラミヤ遺跡は縄文時代晩期の短期的活動地点、古代の集落跡と旧河川、近世以降の水利施設などを確認した。古代の集落は少数の竪穴建物・掘立柱建物と耕作痕跡とみられるピット群が、道路状遺構と旧河川で区画されていた。同様な遺構配置を見せる粟田遺跡や、より複雑化した遺構配置を示す上林・新庄遺跡群との関連が注目される。

三納トヘイダゴシ遺跡は、縄文時代後晩期の短期的活動地点と、古代以降の旧河川、中近世の耕作痕跡を確認した。

野々市町中南部土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書1

粟　田　遺　跡（第10次調査）
三納アラミヤ遺跡（第1・2次調査）
三納トヘイダゴシ遺跡（第1・3次調査）

発行日　平成18年3月30日
発行者　野々市町教育委員会
〒921-8510
石川県石川郡野々市町三納18街区1
電話　076－227－6122
bunka@town.nonoichi.ishikawa.jp
印　刷　高桑美術印刷㈱